
かぐや姫の月戦争

しんどうみずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かぐや姫の月戦争

【Nコード】

N4141V

【作者名】

しんどうみずき

【あらすじ】

隣国の突然の侵攻によって祖国を追われたかぐや姫は、地球に降り立つ。地球での使命は、特殊な力をもった勇者を見つけること。そして、月の国を救うための戦いに挑んでいく。だが、そこには様々な思惑が絡んでいて……。異時代ファンタジーものです。

プロローグ

けたたましいほどの赤い警報が鳴り響いている。

怒声。走り回る人々。泣き叫ぶ女の人の声。砲声。そして、耳をつんざくアラーム。

すべてがまるで静寂を破壊し尽くそうとするかのように激しくのたうちまわっている。そこにあるのは混乱と恐怖、そして崩壊。

兵士たちは不十分なまま隊形を組み、武器を持たぬ者は必死な形相で逃げ惑っている。いったい何を守ればいいのか。それが自分の命であることさえも忘れてしまったような顔つきを誰もがしていた。焦げ臭いにおいが鼻をつく。

きつと王城のどこかが焼かれたのだろう。脳裏に突き刺さる異臭のせいで立ちくらみがした。視界がぼんやりとかすみ出す。変転。意識が遠ざかっていく感覚を、ぼんやりと感じた。

誰かの肩がぶつかって、抵抗する気力もなく倒れこむ。

固い床にぶつけた体のあちこちが痛む。すぐ耳元で駆けていく足音が聞こえる。たくさんの、腰から提げられた剣が見えた。鮮やかな緑や青の刀身は、いまは収められているが、じきに振るわれることになるだろう。いや、その暇さえないかもしれない。

「第17隊、出撃！」

「23番守備隊、壊滅しました！」

「敵軍右翼、防衛線を突破します！」

無線を通した報告の音声があちこちから聞こえてくる。

指揮系統が滅茶苦茶に破壊されたせいで、軍隊はすでに秩序をなしていない。もはや烏合の衆と化した兵隊たちは、守るべき国とともに消滅の危機を迎えていた。

起き上がるだけの気力もなかったが、頭のなかでは「立て！　そして戦え！」という父の声がこだまして弾けそうだった。

「わかってるよ……そのくらい」

つぶやく声は騒乱にかき消され。

激しい頭痛が父の顔をぼんやりと覆い隠していく。長く、白いひげをたつぷりと垂らした厳めしい顔つきの父親。年齢以上に刻まれたしわと、あまり好きじゃなかった怒鳴りつけるような声が浮かんでくる。同時に思い出す、物ごころついたときから暗記するまで繰り返させられた予言の言葉。

『彼の国に渡った者共の遺物を従えし勇者たちが、其の国を導くであらう』

それは全体のほんの一部にすぎないけれど、すぐに運命を決めることになるだろうとは分かっていた。そのために今日まで無駄とも思える知識を詰め込まされたのだ。その前に死ななければ、だけど。

「姫様！　姫様！」

聞きなれた声がして、腕を力強く引つ張られた。

そのまま肩にもたれかかるようにして立ちあがる。ふらつく足とは裏腹に、意識はだんだんとはっきりしてきた。

がたいのいい強面の老兵士が体重を支えていた。ヘルメットからのぞく白髪が目立つが、いまは黒くすすけている。

丁寧なのにどこか荒々しい所作で、老兵士はゆっくりと歩きはじめる。どこに向かっているのか想像はついたがどうしても行きたくなかった。

「父上は……？」

かすれた声で尋ねる。

「陛下は前線で指揮をとっておられます。姫様を安全な場所まで御逃がしするのが某の役割ですから、余計な心配はなさらないでください」

口調は穏やかだが、その裏には無用なことを質問するなという無言の重圧がありありと見てとれる。戦局はだいぶ旗色が悪いのだろう、というのはすぐに想像がついた。

「そりゃ、首都まで攻め込まれちゃね……無理だよ、もう」

「なにを仰いますか！　陛下と姫様がいる限り、我が国はいつまで

も続きますぞ！　それがたとえ地下深く、空遠い場所であつたとしても！」

「空遠く、ね。ねえわたしもそこに追いやられるの？　祖国復興という旗印を無理やり背負わされ、今この場所で大切な民たちとともに果てることも許されない。それが一国の姫として正しい姿なのか？　なあ、そうなのか？」

「もちろんでございます。国とはいわば主があつてこそ成り立つもの。治める者がいなくなれば、国は自然と崩壊していく定め。姫様なくして我らの国はないのでございますから」

「違う！　お前たちはいつもそうやってわたしを言いくるめて、はぐらかす。わたしはこの場所でお前たちと一緒に死にたいのだ！　生まれ育つたこの場所で。じい、そうだろう？」

「……そういうふうと呼ばれたのも久方ぶりでございますな。姫様の幼きころがなつかしゅうございます——陛下、あなたの娘様はなんと立派に育つたことか」

「その口調、まさか」

じい、と呼ばれていた老兵士は一瞬ほほ笑んだかと思うと、太い石柱の影に巧妙に隠された扉をゆっくりと開いた。なかは薄暗く、背後にある扉からのみわずかな光が差し込んでいる。

意識のもうろうとした少女を静かにおろして壁にあつたくぼみを探ると老兵士は、入口に背を向けたまま壁に埋め込まれたスイッチを操作しはじめた。

無機質な機械音と、その動乱の声がいっしょくたになって届く。

「じい、答えろ！　父上はどうなったのだ！　じい！」

老兵士は応えない。

せわしなくパネルを操作しては、次々と文字を打ち込んでいく。それはかなり手慣れた手つきで、ほんのわずかも動作が中断されることはなかった。

ふらつく体を冷たい壁にもたせかけながら立ち上がる。

呼吸が荒い。心臓が千切れそうなくらい脈打っているのを感じた。

「わたしは戦うぞ！ この城で、臣下と共に最後の一兵になるまで戦うのだ！」

「お言葉ですが姫様」老兵士は動きを止めずに声だけを発した。「それは姫様の役割ではございません。この老骨こそ、落城のそのときまで戦い続けるべき人です。ですから、姫様は姫様の戦を勝ち抜いてくださいませ」

「そうはいくか！　じいや父上やみんなを見捨ててわたしだけ逃げるなど、決してあってはならぬ！」

「逃げるわけではございませぬ。姫様は別の場所で戦うのです。それはさぞかし辛い旅路になるでしょうが、某は姫様ならどんなに険しい道のりでも越えて行けると信じておりますゆえ、心配はしておりませぬ」

最後の操作を終えると石で作られた床が開き、その下からゆつくりと飛行船が姿をあらわした。人がひとり乗れるだけのスペースしかない。なかが透けて見える半透明の緑色に塗られたその機体は、流線形に翼をつけたようないでたちで、搭乗者さえいればすぐにも発進できる準備ができていた。

一度だけ、父に連れられて見たことがある。

あの時は古代の超技術にただただ感心しただけで、まさか本当に使わなければならないときがこようとは思ってもいなかった。うなるようにエンジンが駆動しはじめる。床からほんの少し浮きあがった飛行船から視線を離せずにいると、老兵士が強引に腕をとった。

「離せ！　はなせっ！」

声だけは威勢がいいが、体がまったく動かない。

それは城をさ迷っていた途中に吸ってしまった大量の煙のせいなのか、老兵士が万力のような力で腕を引っ張っているからなのか、どちらにせよずるずると引きずられるままに飛行船に押し込められる。

コックピットに入った瞬間、有無を言わずにドアが閉じ、緑色の船体が老兵士と少女とを隔てた。

「じい！」

怒鳴りつけ、力なく機体の壁面をたたくが、むなしいほど小さな音がこもるばかりだった。

白髪におおわれた屈強な老兵士はかすかにほほ笑むと、きびすを返して再びパネルの操作に戻った。今度はほんのわずかな時間で、天井が開き、飛行船の乗った床が上昇しはじめる。

上を見ると、青い巨星と無数の光がある。

そのとき、明らかに敵意の混じった怒鳴り声が出た。老兵士の表情が一気に引き締まる。腰にかけた剣のつかに手をのぼすと、緑色のビームをまとった刀身が具現する。

そのまま穏やかに、すべてを吐き出すように深く呼吸をしてから刀を上段にかまえる。

「じい、逃げる！ わたしのことなど構わず逃げろ！」

聞こえてないはずはなかった。

だが、老兵士は飛行船がせり上がっていく床を背にして振り返ろうとはしない。いくつもの怒鳴り声が大きくなり、そしてさほど広くない部屋中に反響した。

見たことのない赤い刀を構えた兵士たちが、鬼のような形相をして老兵士を取り囲む。

眼下に映る人影をとらえながら、老兵士が完全に包囲されていることを認識する。そんなことは関係ないのだろう。どうせ、逃げ出すつもりなんてないのだから。

「わたしだけを逃がすな！ 命を無駄にするでない、じい！」

敵軍の兵士たちはいまにも飛び出そうとする飛行船を見ると、血相を変えて襲いかかろうとした。だが、その瞬間、機先を制するようには老兵士が強烈な気合いの声を発する。

兵士たちはひるんだように動きを止めるが、すぐに正気を取り戻してじりじりと間合いを詰めていく。敵は大勢、どんなに奮闘したところで時間稼ぎにしかないのに。老兵士は目に見えぬ速さで、もっとも近くにいた兵士を切り捨てた。

啞然とする間にもうひとり。敵があわてて剣を構えなおしたときにはすでに三人目を斬り伏せていた。

それを見た兵士たちは呼吸を合わせて飛びかろうとする。その間にも飛行船は上昇し、エンジンのモーターが荒々しく回転しはじめた。

「じい！」

鮮血が飛び散る。

いくつもの剣に貫かれた身体は、それでもなお誰かを守ろうとするかのようにゆっくりと崩れ落ちていく。妙にスローに映るその光景は痛いほど網膜に焼きついた。

視界の端で敵の兵士たちがパネルを操作し、飛行船を止めようと四苦八苦している。だが、上手くいかないのか、破壊すれば止まると思ったのか、レーザーの剣で壁の機械を突き刺した。白い煙が上がる。それでも飛行船が止まることはない。

「じい！」

はるか下で死んだように動かない老兵士に向かって叫ぶ。

聞こえてるはずはない。聞こえてないはずはない。矛盾した二つの想いが交錯して、とめどなく涙となってあふれ出す。

エンジンが臨界に達したとき、強烈な衝撃を身体に感じた。

狭かった視界が一気に開ける。

目の前には巨大な青い惑星。そして背後には、いたるところから黒煙が上がっている慣れ親しんだ王城と、そのなかを動きまわる小粒な人間たち。

そして、城から少し離れた場所にある、巨大な砲身。

その照準は、発進したばかりの飛行船に向けられていた。

視界が真っ白になる。信じられない速度で飛行船が回転しているなかから、巨大すぎる砲弾を見たのだと気づくにはしばらくかかった。

目の前が正常に戻った時、広がっていたのは暗黒の空と、ひときわ大きさを増した青い星だった。涙が球体になって浮かんでいる。

体が空っぽになってしまったかのように軽い。

「じい……みんな」

嗚咽まじりに叫ぶ。

「わたしを――ひとりにしないでよ」

その声は、誰にも届くことはなく。

おいてきた故郷と呪われた自分の運命とが、徐々に離れていった。

プロローグ（後書き）

よかったらランキングをぽちっと思います。

竹取の翁

竹取の翁、と呼ばれている老人がいた。

彼はうっそうと茂る竹林に足をのぼしてはそれを刈り、様々な用途に使って暮らしていた。妻は翁がとって来た竹を加工しそれは見事な製品へと生まれ変わらせることができた。

そうして長いことふたりで慎ましいながらも平穩に暮らしていたのだが、この夫婦には子供がなかった。流産で子供をなくすことは珍しくないが竹取の夫妻にいたっては妊娠することさえなく、高齢となったいまではすっかり子供を抱くことなど諦めていた。

ある日翁がいつものように山の奥にある竹林に足を踏み入れると、うす暗い空間のなかにほんのりと光るものが見えた。訝しみながらそろりと近づいてみる。

まるで川の水を竹の葉で染めたような色をしている箱のなかで、奇妙な服を着た女子が眠っていた。粗末な麻の服でも、高貴な人々のまとうあでやかな着物でもないそれは、すすのようなもので薄汚れてはいたが高い値がつきそうだと思った。

「おーい、大丈夫かあ」

声をかけてみる。

というのも娘は眠っているのかぴくりとも動かないからだ。さらに額には乾いた血の跡が見える。

正体不明の箱は天から降って来たかのように周囲を陥没させている。昨夜、妙な音を聞いたと思ったのだが原因はこの奇妙な物体なのかもしれない。

「おーい」

再び呼びかけてみる。

やはり返事はない。仕方なく近づいてみることにする。竹を刈るためのみがかれた鎌を構えながら、距離を縮めていく。箱の表面に反射した自分の顔がうつっているのが見えた。

「死んでんのかあ？」

どうやら危険はなさそうだと判断しコツコツと鎌の先端で箱をたたきながら問いかける。

すると、とつぜん緑色の箱が光り輝きはじめた。炎よりもずっと明るく、白い光。まぶしくて目をおおっている間に、その箱は静かに開き、そして光は収束した。

「なんだあ、今のは」

これまで髪が真っ白になるまで長いこと生きながらえてきたがこのような奇怪なものとは遭遇したことがない。昔聞いたことのある鵄の伝説を思い出した。夜分にその鳴き声を聞くとたちまち凶事が起こるといふ獣。

幸運なことに翁はその姿も声も知らずにすんでいたが、隣村のなかには鵄を殺したというものもいるらしい。この緑色の箱もそういう不吉な予兆のひとつなのではないだろうか。

ひょっとすると箱のなかにはいつている娘は人間などではなくタヌキやキツネが化けているのかもしれない。そのために服がうまく模倣されていないのだ。翁は鎌を強く握りしめた。もし人間を化かそうとする獣だったらこの場で殺してやろう。

「おいってば、起きろ。タヌキだったらいますぐ叩き切ってやるから、さっさと正体をあらわせ」

鎌の柄でちょんちょんと小突く。

その拍子に娘の顔をおおっていた長い黒髪がはらりと揺れて、この世のものとは思えぬ美しさをまとった完璧な素顔があらわになった。

思わず息をのむ。なんという美しい女子であろうか。

絹のようにつややかな肌。薄黒くはなっているが少し洗えば戻るであろう透きとおるような白い頬。そして腰にまでかかる色めいた長髪が殊更に際立っていた。

これは良家の姫君にちがいないと思いなおし、すぐさま駆けよって肩を揺さぶる。

「姫様、姫様、大丈夫でございますか」

小さなうめき声をもらしながら娘が薄眼を開く。しばらく心配そうな翁の表情を見つめたあと、とりつかれた様に大きく瞳を開けた。
「じい！」

娘は間髪いれずに翁の体に抱きついた。驚いた翁は勢いそのままに地面に背中から倒れた。娘の髪が頬にあたってこそばゆい。

「生きていたのか！ そのようにうらぶれた姿になりおって——」
瞳を輝かせながらまくしたてる娘に向かって翁はあわてて制止の声をかける。

「お待ちください姫様、どなたかと勘違いをなさっているようで。あっしはただのしがない一農夫にすぎませぬ、姫様とはなんのお見知りもございません」

「じい……？」

娘は小首をかしげながら馬乗りになった状態で翁の全身をながめまわした。

「じい、ではないのか？」

真剣な表情で尋ねる。翁は恐縮しながらうなずいた。

「違います」

ぽたぽたと生温かいなにかが翁の頬を打った。

それが娘から流れ出た大粒の涙だと気づくのにそう時間はかからなかった。

「ひ、姫様、どこかお怪我でも——」

「じいでないのなら、何故わたしを姫様と呼ぶのだ！」

「どこか高貴な身分の方の姫君とお見受けしましたためにそうお呼びしていたのですが、なにかいけませんでしたでしょうか」

「赤の他人がわたしを姫様と軽々しく呼ぶな！」

「で、ではなんとお名前をお呼びすれば？」

娘はすこし考えたあと、いった。

「かぐやでいい。そう呼べ」

「わかりました——かぐや様。ところで、かぐや様はどちらのお家

の方で？」

翁が尋ねる。

かぐやは今更ながらに翁にまたがるようにして乗リかかっていたことを認識すると、体をどかし、悪びれもなくこたえた。

「わたしはラングネ国の第一皇女だ」

「らん……なんと仰いましたか？」

「ラングネ国だ」

語調を強めて返事をする。翁は目をぱちぱちと瞬かせた。

「その、こうじよ、とは」

「そんなことも知らぬのか――」

と言いかけて、かぐやはふと気付いたように白昼の空を見上げた。深緑の笹の葉の向こうから日差しがうつすらと差し込んでいる。

竹林の隙間に吹き込んだ風がいくつもの葉をさらさらとふるわせた。

「月はどこだ、どこにある！」

「いまはまだ昼間でございますから、夜になれば出てくるかと」

「なればここは地球か」

「ちきゅう、ではございますぬ。ここは三山村ですゆえ」

「ミヤマムラ？」

言葉は通じるのだが、会話がところどころ噛みあわない。翁はそれがかぐやと名乗った娘がどこか遠くからやって来たからだろうと推測した。都の貴族と話が合うはずがないのだ。

「三方を山に囲まれておりますから三山村でございます」

「地球ではないのか？」

「そのような場所は存じ上げませぬ。どこか違う場所でございますよう」

かぐやは足元に落ちていた枯れかけた笹の葉をつまみあげると興味深げに手のなかでまわした。今度は土をひとつかみすくいあげる。

「ひとつだけ確認する。ここは月ではないのだな」

「はあ、そうでございますが」

翁が不審そうな表情をして首を縦に振る。

かぐやは大きく息を吸い、そして深々とため息をついた。その愁いを帯びた仕草さえ、魅入ってしまうほど美しい。

「本当にわたしはひとりになってしまったのだな――」

よろよろと力なく立ち上がると、かぐやは半透明の緑の物体をのぞきこみにやら調べはじめた。見たことのない絵がたくさん描かれている。光っているところを見ると、もしかしたら火なのかもしれない。

翁はかぐやの背中に向かって問いかけた。

「もしかして、かぐや様は月からいらしたのでございますか？」

自分でもけったいな質問だとは思ったが、意外にもあっけなくかぐやは頷いた。

「そうだ。わたしは月からやって来た」

「――して、月とはどのような場所でございますか」

「戦ばかりの愛しきわが故郷だ。そして、わたしは月に帰らねばならぬ。祖国を救うために」

「さようでございますか」

翁があっけにとられたような顔をして言う。

月にはうさがいて餅をついているのだとは聞くが、人が住んでいるという話は初耳だった。それにこのような秀麗な姫君までいるのだから、月とはさぞかし楽しいところなのだろう。

かぐやは頬に残っていた一筋の涙をぬぐうと、翁にたずねる。

「物は相談だが、わたしはこれから地球の勇者を探さなければならぬ。国を救うためにはここにいるという勇者の力が必要不可欠なのだ。お主、なにか知っておるか？」

「勇者とは、村一番の力持ちのことでございますか。それとも都のお偉い貴族様のことでございましょうか」

翁が首をひねりながらこたえる。

あまりぱっとしない返事に、かぐやは浮かない表情をする。風がさらさらと吹いて長い黒髪を撫でていった。

「他にはいないのか？」

「恐れ多くも帝なら、そうかもしれませぬが……」

「何者だそれは」

「都でいちばん偉いかたでございます」

「ほう」とかぐやは目を細めて「ならその者を連れてまいれ。わたしはすぐにでも月に帰らねばならぬ」

「そうはおっしゃいまして」

翁はこまったように白髪の手をかいだ。

前頭部は髪が抜け落ちていたため、頭のうしろのほうにいくらか髪が残っているだけである。

「なにしろ高貴なお方でございますからわしら下々の者が簡単にお会いできるわけではないのです。都の貴族ですら、一生のうちにお目にかかれるかどうか……」

かぐやはふと思案に沈み、しばらく空を見上げていたが、やがて思い出したように半透明の箱の中身をのぞきこんだ。

唸るような声を出しながらそれを調べ終わると、かぐやは再び翁のほうへ向きなおった。

薄汚れてはいるが、その下からでも美しいとわかる絹のような肌。静かに開かれる唇は、ほどよく赤い。

「時間がないのだ」

かぐやはかみしめるようにつぶやいた。

「だが、調べてみたところこの船はもうエネルギー切れだ」

「えねるぎい、とはなんでございますか」

「つまりもう動かないのだ。わたしは月に帰ることができない。だが、それでは祖国を、みんなを救うことができない」

「では、どうするんです」

「歯がゆいがあちらから迎えが来るのを待つしかあるまい。地球にいては月に帰るための船は手に入らないのであろう」

「そのように突飛な船は聞いたことがありません」

「わたしがなくてはならないのはその間に勇者を探し出し、月へ帰る準備を整えることだ。勇者を見つけられなければ帰っても意味

がない――だから、力を貸せ」
かぐやはそこで、はじめて小さなほほ笑みを見せた。

翁の策略

翁の家はうらぶれた村にある、そまつな藁ぶきの小屋だった。全体的に汚れて黒ずんでいるその家はあちらこちらが傷み、いつ崩れ落ちてもおかしくない代物だ。その上、屋内はじめじめと湿気が多く、うす暗い印象を与えていた。

竹取を生業としていただけあって所どころに竹で作られた家具をうかがうことができるが、それ以外にはほとんど物がおいてない。食事をとるための粗末な食器と、いろいろのまわりにごさが敷いてあるだけだった。

翁がかぐやを連れて帰ると、
おうな

は目を丸くして驚き、しばらくは声を出せぬほどだった。

腰のぬけた嫗をすわらせ、かぐやと翁がかわるがわる事情を説明していくとようやく嫗は落ち着きを取り戻し、呼吸を鎮めるようにゆっくりと喋った。

「――つまり、月からいらしたのは勇者なるものを探すためでございますか」

「そうだ。そのためにこの家を拠点しようと思う。なにをするにしても家は必要だからな、見知らぬ土地ならなおさらだ」

「それでは、かぐや様は我が家にお泊りになられるということだ」

「そのつもりだ。構わないか」

「私どもは一向によろしいのですが……」

嫗が言いよどむ。かぐやが視線で促すと、翁が申し訳なさそうに口を開いた。

「なにしろ貧乏な村でありますゆえ、その日の食べものさえ手に入れられるかどうかという始末でありますから、月の国の姫君にそのようなひもじい想いをさせてしまうのは心苦しいんで……」

目を伏せながら翁は土の床に頭をこすりつけた。

同じように嫗も平伏の姿勢で謝っている。かぐやはふところから小さな丸い塊を取り出すと、それをふたりの老人の前に差し出した。「これは……？」

おずおずと面をあげながら翁が問う。

玉虫色に輝く小さな玉は光の具合がずれるたびに色を変え、鮮やかにきらめいている。手のひらにすっぽりと収まる程度の球体は翁と嫗の視線をくぎ付けにした。

「わたしがいざというときのために身につけている宝玉だ。売ればいくらか金の足しにもなろう。これで足りないというのなら他のものも考えるが、問題ないか？」

「こ、こんな大層なもの私めらには勿体のうございます。どうぞお納めくださいまし」

嫗が声を震わせながらかぐやに言うが、その視線はずっと七色に光る宝玉に向けられている。

うす暗い家の中でも、それは有り余るほどの光沢を放っていた。「気にするな。どうせこんなものは持っても仕方ないのだ。それに今は何より時間が惜しい。月から迎えが来るまえに勇者を見つけ出さなければならぬのだから、少しの時間も無駄にしたくない」

「ですが――」

「くだい。わたしが必要だというのだからお前たちは素直に売りさばいて来ればいいのだ。それで得た金で食料を確保し、勇者を探すための資金に充てればよからう」

そっけなく言い捨てる。

かぐやが無造作に宝玉を放り投げると、翁があわてて空中で捕まえる。ずっしりと重たい感触が伝わって来た。

「異論はないな」

「――わかりました」

うやうやしく翁と嫗が頭を下げる。

盗まれないようにと粗末な袋に宝玉を入れ、使い古した麻の服に

かくしておく。ほんとうは縫いつけておきたかったのだが、その糸すらも今は調達するのが難しい。

「ところで月からのお迎えとはいつになるのでございましょうか」
　　嫗が聞く。

　　かぐやは見えるはずのない故郷をながめるようにすすけた天井を見上げた。太陽の光は漏れて来ないが、雨のときはあちこちから水が滴ってくることだろう。

「わからぬ」

「ではどのように勇者を探すのでございますか」

「しらん」

「はあ……」

　　かぐやは苛立ったように端正な顔をそむける。

　　腰までかかる長い黒髪がまるで舞うように流れた。

「わたしにはなにもわからないのだ、この地で勇者を探し、ともに月へ帰り、そして祖国を救う。それだけのシンプルな目的ですらどうしたらいいのか見当がつかない。ひとりじゃなにもできないダメ皇女だ」

「しんぷる？」

「そのような些細なことはどうでもいい。とにかくわたしは勇者を見つけない、それだけだ」

　　顔を横に向けているのでわからないが、かぐやの声はうっすらと震えていた。

　　翁と嫗は顔を見合わせ、子供に語りかけるかけるように優しい口調でかぐやにいった。

「それでしたらぜひとも私どもをお使いください」

「――もとよりそのつもりだ」

「かぐや様はおひとりではございませぬ。姫君なのでしたらなんなりと家臣にお申し付けください。たかが農民の身分でかぐや様にお仕えするとは御無礼かもしれませぬが、私どもで出来ることならば何でもいたします」

かぐやはすこしの間まじまじと老夫婦の顔を見つめた。そして、思い出したようにあわてて自分の顔をそむける。

老夫婦がかぐやのまつげが濡れているのに気付かないはずもなかったが、あえてそれを口に出すことはしなかった。

「ならば知恵を出せ、勇者を搜索するための知恵を」

かぐやがつっけんどんに命令すると、翁はほんのりと口元をゆがませてこたえる。

「一計がございます。そのためにはかぐや様のご協力が不可欠なのですが……」

「よい。わたしはなんでもする。話してみろ」

「それでは、この竹取の翁、老いぼれが説明させていただきます」

翁の策略（後書き）

裏話など、活動報告に記しています。
よかったです。

5人の男

欠けていった月が再び丸くなり銀色の様相を取り戻してくる頃には、ちらほらと都から貴族たちの使いが来るようになっていた。使者はそれぞれに和歌をしたためた短冊をかぐ屋へ渡すついでに噂に聞く美麗な姿をのぞき見しようとしたが、用意されたついたての向こうにかくれたかぐやを確認することはできなかった。

三山村の村人たちも口々にかぐやに会いたいと懇願したが、翁と姫がそれを許さなかった。片方が家を離れるときは、必ず片方が家にいてかぐやを守っていた。

それもすべてかぐやの言う勇者を探し出すための計略である。布を水が濡らしていくように、かぐやの噂が都に浸透していくのを待っている間、月の姫はしきりにもどかしがったが、和歌の練習にこそしむことで感情を紛らわそうとした。

「――まだ帝は現れぬのか」

あてやかな着物に身を包んだかぐやが焦れた口調で翁にたずねる。姿を見せぬのだから重苦しい恰好は嫌だと言い張ったかぐやだったが、万が一の際に粗末な服を着ていては評判にかかわるということで翁に却下されていた。

ござの上に座ったかぐやのかたわらには都の有力者たちから送られて来た和歌の山が築かれている。かぐやは主に、貴族たちへの返歌を考えるのに一日の時間を費やしていた。

「まだでございます。近いうち、右大臣左大臣のような高官がやって来るでしょう。そうなれば時期は近いといえます」

「それまで待たねばならぬのか」

「ええ」

翁がちらりと目線をやって、かぐやをうながす。

うんうんと唸りながら月の姫君は震える手で和歌をしたためる。

翁は字が読めないのかぐやが声をあげて読むと、難しい顔をし

た。

ひと月もすれば少しは上達するかと考えていたが、かぐやの成長具合はかたつむりよりも遅かった。

あまりにもひどいので結局返歌のほとんどは翁が代案しているほどである。和歌はその人の魅力の半分以上を占めるから、それが下手というのは致命的な欠点であった。

どうやら月には和歌を詠むというような文化がないらしい。それにしても、才能がないというほかなかった。

「これらは無視した方がいいのではないか？ つれない女というのも魅力的だというぞ」

うらめしげに和歌の山を見つめながらかぐやが愚痴を漏らす。

「教養がないと思われてしまっはなりませぬゆえ」

「では、おまえがすべて書けばよいではないか。なにわたしがやる必要もなからう」

「いざという場合があります。それにかぐや様も他にすべきことがないのでございましょう」

「したくてもできないのだ」

苛立たしげに和紙を取り、すらすらと筆をすべらせていく。

翁はそれを受け取るとすぐさま大きなバツ印をつけた。

夜になるたび、かぐやはひとり月を見上げていた。

三山村の夜は暗い。そのためかぐやが外に出ている、誰かに姿を見られる心配はなかった。

半分だけの月が虚空に浮かんでいる。それは月から見る地球よりもずっと小さかったが、形は同じであった。地球はいつも半分が闇におおわれていた。

やんわりとため息をつく。

どんなに目を凝らしたところで、月の模様が見えるばかりで人も建物もわからなかった。翁はうさぎがもちをついている様子なのだ

と説明してくれたが、もちろんそんなはずはない。

地球の人々は月のことをさして重要なものだとは考えていないようだった。

空気や水と同じようにあたり前に浮かんでは消えていくものであり、減っては増えるものであるらしい。

こうしている間にも祖国ラングネはアリストスの猛攻を受けていることだろう。

そして多くの民が死んでいっているはずだ。奇跡でも起こらないかぎりには。

その奇跡が自分であることをかぐやはよくわかっていた。幼いころから暗唱された予言の言葉が脳裏によみがえってくる。遙か昔から運命づけられた数奇な人生は、はたしてどこまで運命にまもられているのだろうか。

いろんな思いが胸を駆け巡る。

気付くと、一粒の涙が流れ落ちていった。銀色の月が、ぼんやりとにじんで見えた。

それからさらに十日ばかりが経つ頃には、事態は進展を迎えていた。しびれを切らした貴族たちが自ら足を運んで来たのである。

豪勢な身なりの供をつれた彼らは、ほとんど自然のままである三山村に入るとひどく異質に映った。

翁の家の周りにはつねに多くの人が集まるようになっていた。それは村人の野次馬だったり貴族たちの連れてきた護衛の武人たちだったりしたが、人ごみが途絶えることはなかった。

なかでもひととき目立っていたのが金欄な装飾をほどこした駕籠である。

まるで黄金をまとうかのような絢爛であった。そこから顔を出す貴族たちもまた、あでやかな衣装に身を包んでいた。

それが始めは一日に数人ばかりだったのが、ついには三十を超え

る貴族たちが翁の家を訪れていた。前後に揺れながら駕籠が着くた
びに、翁のまわりだけが都になったような錯覚を覚える。

彼らはしきりにかぐやとの面会を迫ったが、

「かぐやはただいま病気の身でありますゆえ」

と、翁は慇懃に彼らの申し出を断った。

これはもちろん嘘であった。あくまで最終目標は帝のため、その
途中で妥協するわけにはいかなかったのである。

貴族たちのなかにはかぐやがちっとも姿を現わさないことにしび
れを切らし都へ帰ってしまうものも多かったが、ことさら熱心な五
人の若者がいた。その五人は毎日のように翁の家へ通い、贈り物を
しては名残惜しそうに去っていくのをくりかえしていた。

みな帝ほどではないにしろ、身分の高い者たちであった。

あまりに熱心なためにかぐやに合わせないための嘘をつきつづけ
るのも心苦しく感じた翁は、かぐやへ五人のことを相談した。

かぐやは怪訝そうな顔をして答える。

「そんな半端ものは放っておけばよいではないか。わたしたちの目
的は帝を呼び寄せることなのだぞ」

「たしかにかぐや様の言う通りではございますが……そうはいつて
も、どうにも断りづらいもので」

「どうしたのだ。賄賂でも贈られたか」

「とんでもない！　ただ、あのように熱意ある若者を見ているとつ
い」

「いくら身分が高いとはいえ、所詮は帝でないのだろう」

「帝の親族もいらっしやいますから、そう遠くはないでしょう。そ
れに勇者を見つけるという目的なら、ある程度身分の高いものも素
質があるかと」

「ならばどうする」

「私に一計がございます」

というと、翁は子どものように口元をゆがませた。

「彼らにかぐや様のいう宝物を探させて来るのでございます。噂に

聞く宝を結婚の条件にすれば、彼らは血眼になって探し出してくることでしょう。もしも彼らのなかに勇者がいるのであればおのずと宝も見つかるはず、もしできなければ縁がなかったということでございます」

「またおそろしいことを考えつくものだ」

かぐやは半分笑いながらいった。罪悪感の色はまったくなかった。「宝に見当はあるのか？」

「噂に聞く宝はいくつもございますが、なかでも有名なものがちようど五つございます」

翁はそれぞれ、仏の御石の鉢、蓬萊の玉の枝、火鼠の裘かわごろも

、龍の首の珠と燕の生んだ子安貝をあげて、かぐやに説明した。

どれもが風聞に浮かぶとりとめのない伝説である。

だが、そのなかに本物の宝がかくれていてもおかしくはなかった。貴族の力を使えば、たとえばるか唐の宝物でさえ手に入れることは可能だろう。

「ふむ。それならしばらく厄介払いができるな。うるさいのがいなくなつて静かになるものだ」

五人の高貴な若者たちは翁の家にやって来るとぼう大な贈り物だけでなく、笛を吹いたり歌ったりして懸命にかぐやの気を引こうと奮闘していた。

かぐやのまわりはいつもお祭りのような状態なのである。

「それに――」と、かぐやは渋い顔をした。「和歌も返さなくて済む」

「それが一番の目的でございますか」

「当たり前だ。なんであんな面倒なものを寄こしてくるのだ。それも毎日毎日、嫌がらせにしか思えぬぞ」

翁は健気な男子たちの虚しい努力のことを思つて、ささやかにため息をついた。願つてもかなわぬ恋愛ほど切ないものはない。

その日の夕暮のこと、翁の家の前に集まった五人の若者たちに、

翁はかぐやの言伝だといって宝探しの件を述べた。誰もが神妙に翁の話に耳を傾けている。

五人のほかにも、翁の家の前にはたくさん村人たちが群がっていた。農作業を終えると少しでもかぐやの姿をのぞき見ようとするのが彼らの日課になっていた。なかには壁に穴をあけたり、梯子をかけようとするものまであったので、必ず翁か嫗のどちらかが家のまわりを巡回しなければならなかった。

群衆に見守られながら、翁は少しも遠慮することなく声を張る。

「かぐや姫に会いたければ各々が宝物を持参なされい。ただの金銀ではかぐや姫は納得なされないぞ。それがかぐや姫からの言伝である」

「ちょっと待った」

と、口をはさんだのは五人のうちのひとり、石作皇子

いしづくりのみこ

である。

高級な着物をくずして着こなしている彼の風貌は、貴族というよりは遊び人のようだった。少し高い、かすれた声が印象的な男で、細長い体軀をしていた。眼は切れ長で、いわゆる美形のうちに入らう。

「本当にかぐやがそう言ったのかい？ 証拠を見せてほしいもんだねえ」

「信じる信じないは貴方の自由ですが、そのほかの者に出し抜かれてしまうやもしれませぬぞ」

「へえ、僕を挑発するのかい」

「どう解釈するかは貴方次第ですゆえ」

「農民風情が偉そうな口を聞くもんだねえ」

少しのあいだ、ふたりのあいだに火花の散るような睨みあいがあった。わされた。

相手がただの農民であることを考えれば、すぐさま乱暴な行為に出ることも充分選択肢にあったはずだが、ほかの貴族たちの目があ

るためにそれでもできず、石作皇子は静かに口元をひきつらせたただけだった。

「まあいい」

そう吐き捨てる、裾をひるがえして背を向ける。

続いて石作皇子の供のものたちが蟻のようにぞろぞろとあとを追っていく。

「僕は仏の御石の鉢をもらってくるよ。あてがあるからね」

耳につく声でそう言い残すと石作皇子はさっさと居なくなってしまう。

翁は残った四人を見渡した。誰もがすぐにでも行動に移りたくてうずうずしているようだった。

いちばん先に宝を持ってきたものがすべてを得るだろうというのが彼らの暗黙の了解である。ただし、かぐやが断ることもありえるだろうが。

「では皆様方、頑張ってくださいませ」

翁は深々とお辞儀をしてから、薄汚れた家のなかへ戻っていく。互いに熱い視線をぶつけあってから、四人の貴族たちはそれぞれの宝をもとめて旅立っていった。

家のなかへ入り、貴族たちの姿が見えなくなると、翁は大きくため息を吐きだした。

「大丈夫ですか」

心配したように嫗が声をかける。

強気の状態に出たはいいものの、実のところは長い人生のなかでもいちばん緊張していたほどだった。まだ心臓が激しく脈打っている。寿命が縮まりそうだ。

「ああ——これも、かぐや様のためだからな」

とうのかぐやは座敷の奥で眠っている。夜に起きて月を見上げるために、夕方になると仮眠をとるのだ。毎夜欠かすことのない憂愁たony習慣は、翁と嫗の心を痛めるものだった。

「ほんとうに良い方ですからね。はやく勇者様が見つかるといいの

ですが……」

「……そうだな」

「さあ、お疲れでしょう。今日はもうお休みくださいませ。あとは私がやっておきます」

「ああ。頼んだ」

翁はしきりに胃のあたりをなでながら、かぐやのとなりにござを敷いて寝転んだ。

実に美しい横顔だった。

ひと目見たときから、今までであったどんな女子よりも美しいと思っていた。村一番と呼ばれる娘とは比べるのも愚かしいくらい。都にさえもこれほど美しい娘はいないだろう。

起こしてしまわないよう、長い黒髪をやさしくなでる。絹のような感触が手のひらに広がる。

「かぐや……」

翁はそつと手を引っ込めると目をつぶり、反対側に向きなあって眠りについた。夕暮れは終わりを告げ闇夜が忍び寄っていた。

石作皇子

ひと月が経ち、最初に翁の家を訪れたのは石作皇子であった。

その頃になってもかぐやの人気は衰えず、訪問者の数はかえって増えているほどだった。村人たちは村を訪れる人々が金を落としていってくれるとあって、農作業もそこそこにお祭り騒ぎのような状態だった。

宝をもとめて旅に出ていった五人からは定期的に文が届いていたが、かぐやはほとんど読まずに放置していた。おかげで、貴重な和紙を焼いて捨ててしまう始末だった。

「やあ——お望み通り、仏の御石の鉢だ」

にやにやと笑みを浮かべている石作皇子は相変わらずの好色な男子といった感じで、その日は紫色の着物を着ていた。

黒い烏帽子がいやに高く見える。

「さて、約束は約束だ。さっそくかぐやに合わせてもらおうか」

自信満々に差し出された鉢は、透明にきらめいていて、まさに宝物と呼ぶべきものだった。

六角形の面に切り取られているガラス作りの鉢で、傷ひとつなく、表面は陽を受けてきらきら光っている。それはかぐやにもらった宝玉にも似た輝きを放っていた。

翁は鉢をしげしげと眺める。

「釈迦の使ったという仏の御石の鉢だ。はるばる唐の天竺にまで出向いて手に入れたものだからね、壊さないように気をつけてくれたまえよ」

嫌味っぽく言っただけ。

翁はしばらく無表情で鉢のなかを見つめていたが「少しお待ちください」といって古びた家屋のなかへ入っていった。

石作皇子を取り囲んだ野次馬たちにどよめきが走る。

いよいよ待望のかぐやが登場するのだろうかという期待から、そ

の場は異様な興奮に包まれはじめる。あれほど姿をあらわさぬのだからかぐやは翁の虚言だったのではないかと疑うものも少なからずいたのもあって、翁がふたたびもどって来るまでにどよめきは一層大きくなっていた。

しわの目立つ表情をきりりと引き締め、翁は高々と仏の御石の鉢を掲げた。

「この鉢は偽物である！」

よく響く声が三山村の空気をつらぬいた。

石作皇子を真正面からにらみつけながら続ける。

「これは唐の天竺のものなどではない。まったくの偽物である。よってかぐや様と面会することはかなわないどころか、お引き取り願おう」

「……言ってくれるじゃないか下民が。なんの証拠があつてはるばる釈迦の使つたという鉢を取りよせてないというんだい」

その声はかわらず高かったが、そのなかには戦慄を与えるような高圧的な色が混じっている。頬が小刻みに震え、耳は怒りのためか赤く染まっている。

「本物の仏の御石の鉢ならば光り輝くはずである。それが無いというのが偽物の証」

「その話こそ疑わしいね。かぐやと会わせたくなくて適当な出まかせを吐いているだけじゃないのかい。それとも会わせられない理由でもあるのか？」

「かぐや様は嘘吐きの悪人と面会されることはない」

「——いい加減にしろよ農民風情が！」

吠えるように石作皇子が翁を怒鳴りつける。聞いているだけで鳥肌が立つような迫力だった。今までかろうじて保ってきた冷淡な表情は見るともなく、ただただ憤怒に染まっている。

護衛の屈強な男たちが翁へ向けて槍を構える。突きつけられた先端はよく磨かれていて、たった一突きで翁のはかない命は簡単に奪われてしまふだろうというのはすぐにわかった。

「調子に乗っていられるのもここまでだ。即刻そこをどけ。かぐやを引き渡せば命だけは助けてやる」

痛いほどの静寂のなか、翁が口を開くまでのわずかな時間でさえとてつもなく長く感じられた。

「承知できませんぬ」

「これが最後だ。次はない」

何本もの槍が翁の喉元と細い体軀に突きつけられる。取り囲んだ群衆のなかからひつという悲鳴が漏れた。誰も翁を助けに行こうとはしなかった。

第一、農民の立場で都の上流階級の人々とまともに向かいあっていることからしておかしいのだ。いくらかぐやの保護者という立場にあるとはいえ、常軌を逸した行為であることは誰もが気づいていた。本当ならば無礼な口を聞いただけで殺されてもおかしくはない。そして、誰も殺されたくはなかった。下手をすれば三山村自体がなくなるかもしれないということさえ、薄うす思われた。

「できませんぬ」

「死にたいか」

「できませんぬ」

「老体に免じて苦しまないように殺してやる。やれ」

矛先鋭い槍が一齐に引かれたその瞬間「やめよ」という凜とした声が、その澄んだ響きとは不似合いなぼろの家から届いてきた。石作皇子の手下たちの動きが硬直したように止まり、なかから軀とともに現れた美しい女性に視線が釘付けになる。

流れるような黒髪と、透きとおるように白い肌。

誰もが息をのんでかぐやの登場を凝視していた。ゆっくりとした、だが気品のある動きでかぐやは翁のとなりに立った。

「武器を控えよ」

命令されるままにあわてて護衛たちは槍をおろし、石作皇子のもとへ帰っていく。その途中にもかぐやから目を離すことができないといったように、うしろを向きながら歩いていた。

「さて」

といって、かぐやは石作皇子へ向きなおった。

石作皇子は唇をきつく噛みしめながら、切れ長な眼を大きく見開いていた。

「このような見るに堪えぬ非礼、なにをもつてそうしたのか」

詰問するような口調でかぐやは、一步前へ進み出た。

先ほどとは違った意味での静寂があたりを包みこんでいる。普段は三方を囲む山から吹き下ろしている風さえもかぐやの壮麗さに息をひそめているかのように黙りこくっていた。

「こたえよ。我が恩人である翁にこのような非道の行為をしたこと、どのように詫びるつもりか」

「――美しい」

石作皇子は夢見るような口調で言った。

「実に美しい。今まで幾人もの女と出会っては来たが、これほどまでに美しい女ははじめてだ。素晴らしい。そして、ぜひとも手に入りたい」

「妄想は口先にとどめておけ」

かぐやが冷たく言い放つ。

「君はこれから僕の妻になるんだ。これ以上にうれしいことはないね。さあ、いっしょに行こうか」

「ふざけるな」

「大真面目だ。君こそ約束のものをもってきたわりには冷たすぎる態度じゃないか」

「それは偽物だ」

かぐやは翁からガラス製の鉢を取り上げると、山の稜線にかくれようとしている太陽に向かって差し出した。きらきらと光が反射する。

「本物ならば子のようなただの石でできた鉢であるはずがない。すくなくとも自ら光り輝くくらいのことはあるだろう――それに、貴様がこの鉢を手にしてなんの反応もなかったのであれば、わたしは

貴様に用はない」

「反応とは、どういう意味だい？」

「そのままの話だ。宝は持ち主を選ぶ。貴様はそれに値しない器量の小さな男だということだ」

「値しない？ 君は僕を誰だと思っている」

「女に求められた宝ひとつ満足にとつて来られぬ弱虫小僧であろう。それとも地位と身分にものを言わせて色欲にうつつをぬかすただの愚か者か。どちらにせよ、貴様などに興味はない」

「まさかここまで生意気な女がいるとはね」

石作皇子は、大きく息を吐きだした。

「仕方ない。僕の言うことが素直に聞けないというなら、強引にでも連れて帰ることにしよう。自分でも木の長いほうだとは思っていたがもう我慢できない。かぐや、君は僕のものだ」

「この大馬鹿が」

「何といわれようとかまわないさ。どちらにせよ、君は僕に屈することになる」

石作皇子の鋭い号令で、いままで呆けたようにかぐやをながめていた護衛の男たちがぞろぞろとかぐやのまわりを包囲する。さきほど翁を仕留めそなったことに腹を立てているのか鼻息が荒い。

かぐやは自分の周囲にはちらりとも目を向けず、ひとえに石作皇子の涼やかな瞳を睨みつけている。

口元にうすら笑いを浮かべたまま石作皇子はかぐやに背を向け、用意された絢爛な駕籠のなかへ乗りこんだ。

その横には、もうひとつ、無人の駕籠がおかれている。

「邪魔なやつらもないことだ。僕が最初に宝を見つけ、かぐやを京都に連れ帰った。宝と美しい姫君を狙った山賊にでも襲われたことにして村は壊滅、僕は心を痛ませるかぐやとともに暮らす。そんな筋書きで十分だろう」

石作皇子が駕籠から顔をのぞかせていった。

「ふざけるな」

「冗談でもなんでもない。武器もたない能なしの農民を殺すことくらいなんでもないんだからさ。――さて、逃げられても面倒だ。そろそろ始めようか」

「お待ちくだされ！」

一声とともにかぐやの前へ立ちふさがったのは翁だった。体が小刻みに震え、顔色は月夜のように青ざめている。翁は、膝を折ると、額をこれでもかというばかり地面にこすりつけた。

「この通りでございます。どうか村人とかぐや様だけはお助けください。この老体はどうなっても構いませぬ」

「私からも、どうか、お願いいたします」

嫗も同じように平伏しながら、ぽろぽろと涙を流している。

乾いた地面を大粒の涙が濡らしていった。

「僕はさっきも考慮の余地を与えた。それを断ったのは君たちだ。それなのにまだ許せというのかい？」

「――お願いします！」

ふたりの哀願は石作皇子の耳には届いたが、それまでだった。

「……自分の決断を恨みながら死ね」

「まて！」

声を張り上げたのはかぐやだった。首元には、いつの間にとりだしたのか自ら短刀を突き付けている。その刀は夕日に反射しており、なまくらではないことは明確だった。

「なりません、かぐや様！」

「この者たち、および村人に手を出せばわたしはここで首を掻っ切つて死んでやろう。貴様はせいぜいわたしの亡骸でも抱えて都に帰るがよい」

「そんな度胸があるのかい？」

挑発するように石作皇子はいったが、その声はこわばっていた。

「嘘だと思ふなら試してみればいい」

「……………」

「……………」

翁と姫のすすり泣く音だけが聞こえている。

石作皇子とかぐやが憎しみにも似た視線をぶつけあっている時間は、本来の何倍も長く感じられる。逃げ出さないように槍を向けられている三山村の村民たちでさえひとりも言葉を発しなかった。

「さあ、どうした。臆したのか」

仏の御石の鉢を片手に、もう片方の手には鋭利な刃物を持ち、かぐやは石作皇子のほうへ足を踏み出す。眼をそむけることなく静かに足を進めていく姿からは本気の決意がありありとうかがえた。

「そうだろうな。自分の手で宝を得ることもできず、適当な代品で済まそうという小汚い方法を使うような男にそのような度胸があるはずがない。わたしが欲しいのだったらそれなりの覚悟を示してみろ」

石作皇子までの距離はわずか十歩ほどにまで縮まる。

「わたしが探しているのはそのような軟弱なものではない。一国を救うことのできる勇者だ。その決意なきものならば即刻帰るがいい」

そして、石作皇子の目の前に顔をぐいと寄せた。

「どうする？」

「……ち」 枝を折ったような舌打ちをして、石作皇子は駕籠のすだれをおろし、「行け。こいつらには手をだすな」と大勢の供のものに指示した。

今かいまかと槍を構えていた屈強な男たちが、あわてて隊形を組みなおし石作皇子を中心にして都の方角へ動きはじめる。

餌に群がる蟻の行列のような速さで行列が去っていつてしまうと、ようやく緊張が解けたように三山村の住人たちからすすり泣きや歓声があふれ出た。彼らは翁の家にまわりに集まると、お祭り騒ぎのようにはしゃぎまわった。極度の緊張から解放された反動で、馬鹿みたいに踊っては歌い、だれが持ってきたのかとっておきの酒がふるまわれた。

「――大丈夫か」

かぐやが、腰のぬけた翁と嫗に優しく声をかける。嫗はまるで赤子のようにむせび泣いていた。

「無茶をしたものだ。しょせんは他人の命であろうに」

「わ、私などよりもかぐや様のほうが滅茶苦茶なことを……。もしものことがあったらどうなるかと、気が気でなりませんでした」

「あいつは根性無しだ。どうせなにもできやしないさ」

「そんなこといっても……」

「これ、年甲斐もなく泣くな。みっともないぞ」

翁が嫗をたしなめるが、自分の声がどうしようもなく震えているのをおさえられていなかった。

「ふたりとも無理をしすぎだ。今夜はゆっくり休むがいい」

「ですが、かぐや様は……」

「わたしは問題ない。これくらいのことでは国を救済することなどできぬからな。それに——」と、かぐやは酔っ払ったように浮かれている村人たちを見やる。「彼らをねぎらってやらなければならぬ。迷惑をかけたが、よく我慢してくれたものだ」

「そんなことまでなさるのですか」

翁が心底、感嘆した口調でうなるとかぐやは、

「当たり前だ。わたしは月の国の姫だぞ」

と胸を張ってこたえ、夜の空に上りはじめた銀色の月を見上げた。

石作皇子が三山村を退去してからふた月が経った。

次にかぐやのもとへやって来たのは車持皇子くらもちのみこだったが、かれの持ってきた蓬萊の珠の枝もまた偽物であった。東方海上にあるという蓬萊の珠の枝を、はるばる海を渡って発見したと車持皇子は説明した。

根は銀、莖が金で、実は真珠で構成されている木の枝は、たしかに一級品のようだった。

しかし、よく出来た贋作ではあったが、車持皇子が宝を手中にし

てもなんの変化も起こらないのと、偽物を作るために雇われていた職人たちが賃金を支払われていないということで訴えに来たことが決め手となって、かれはしつしつと三山村を去っていった。

かぐやは偽物を作らされた職人たちを憐れんで、車持皇子の代わりに報酬を払った。匠たちはかぐやの寛大な心遣いに感謝しながら自分たちの職場へと帰っていった。

唐の商人から購入したという火鼠の裘かわしろもを持参して来たのは右大臣である阿部御主人あべのうみしであった。

火鼠の裘は火をつけても燃えないという内容の宝物であったが、試しに燃やしてみたところあとかたもなく消し炭にかわってしまったため、大変に意気消沈して都へ帰還していった。

かぐやはひと言、「なんとも哀れなやつだな」とつぶやいたきり、何事もなかったように元の生活にもどった。

そんなある日、一枚の和歌が届いた。宛名を見ると、石作皇子と書いてあった。

「……なんと書いてあるのでございますか」

翁がなかば呆れながら尋ねる。かぐやはしばらく文字とにらめっこをしていたが、やがて腹をかかえて笑いだした。

「鉢を捨てても頼まるかな、だと」

「恥を、捨てたのでございましょう」

明るい笑い声が、粗末な小屋の中に響いた。

帝

秋も中ごろにさしかかろうかという季節に、それは突如として襲来した。

その年は例年以上の実りがあり、三山村の田んぼには重たそうに頭をもたげる黄金の稲穂がいくつも風に揺られながらまどろんでいた。収穫の季節である。

村人たちは本業である農業に専念し、赤や黄色のもみじが彩る山に分け入って栗やきのこを採集したり、たわわに実った稲を刈り取って乾燥させたりしている。粃殻とわらを分けると、いつにも増して大粒の米がぎっしりと詰まっていた。

まだ新しい、ほんのりとかぐわしい稲の匂いが村に満ちているなか、かぐやは村の中を散歩していた。隣には翁が連れ添って、あれこれと村の様子を解説している。

石作皇子の件で公に姿をあらわしてしまったため、もう隠れ住む必要もなくなったのである。

といっても翁の仕事は竹をとることであり、とくに秋の季節にする仕事でもないの、かぐやに地球のことを教えているのだ。無論、かぐやが月の姫であることは村人たちには内緒であった。

「こちらが弥助の田でございます。あいつはいつも寝てばかりで怠け者なのですが、今年はそれでも暮らしていけるくらいの収穫ですな」

「地球の一年というのはそんなに毎年違うものなのか」

「月ではそうでないのですか」

「ああ、決まったように暦が進み、決まった時期に作物を刈り入れる。地球のように暑くなったり寒くなったりすることはない、いつも同じ気温だ」

「雨が降ったりはしないのですか」

「ときおり降る。が、すぐに止む。わたしたちは水を地下から汲み

あげるからな、雨が降ろうがたいして変わりはない。水はいつだってあるものだ」

「うらやましい限りですな」

翁が感想を漏らす。三山村に限らず、どの村でも数年に一度は水不足に悩まされるのだ。それだけでなく伝染病や虫の被害にあらうことだって珍しくはない。

「そうでもないぞ。月の大地はほとんどが砂だ。地球のように土があるところは稀だ」

「そんなところで木や草は生えるのですか」

「地球ほどではないが、困らないくらいには生えている。色が違うがな、あちらでは褐色の葉や枝だ」

「砂に生えるから同じ色になったのでございましょうか」

「さあ。そういうことはわたしには分からぬ。ただ――」と、かぐやは空を見上げた。「空は青いほうがきれいだな。月では黒ばかりだ」

「いつも夜なのですね」

「太陽はある。空がないだけだ」

翁が難しい顔で考えこむ。おそらく、夜の闇に太陽が浮かんでいるところを想像しようとしているのだろう。

「あとは地球がいつも見える。青と緑の星だな」

「緑はわかりますが、青とは？」

「知らぬ。だがとにかく青いのだ」

「……それは、海かもしれませぬな」

「うみ？」

「ここよりもずっと広い場所に、塩辛い水がたっぷりと張られているのです。そのなかには魚や貝がいて、行けども行けども果てしなく広がっております。それを渡っていくと、はるか唐にたどり着くのです」

「なんともまあ、ご苦労なことだ」

かぐやは初めて魚が食卓に上ったとき、怪訝そうな顔をしてそれ

を見つめた。月では水辺がほとんどないのだという。三山村では時々海岸のほうからやって来る商人と山の幸を交換したりして手に入れたり、川で釣ったりするのでさほど珍しい食べ物ではない。

それゆえ、ほんのわずかにある、水の露出した場所は神聖な区域とされて入れないのだとかぐやはいった。

「宝物は唐にしかないのか」

「なにしろ大国でありますから。こちらで探すよりは、見つかりやすいのでございましょう」

「そうか」とかぐやは頷いた。「道理でいつまでたっても帰って来ないわけだ」

5人の求婚者のうち、まだふたりは三山村へ戻っていない。まだ宝を探している最中なのだろうが、あまりに時間がかかるのでかぐやはもどかしい想いをしていた。

「それにしても帝とやらはいつになったら迎えにくるのだ」

「さあ——いつになるのでございましょうか」

「いい加減に遅すぎる。こちらから出向いてやってはどうだ？」

「そんなことをしてもとり合ってはくださらぬでしょう。それよりも、地の利を生かしてあちらが来訪するのをじっくり待つ方が得策でございます」

「翁のいうことだから信じたくはあるが、しかし——」

いつまでも待ってはられない、と言いかけたのを、大きな鐘の音がさえぎった。

ガンガンと打ち鳴らされる鐘の轟音に、かぐやの足がすくむ。めまいがした。目の前に赤い景色が押し付けられたような錯覚。実際はそうでないとわかっているのに、体がいうことを聞かなかった。

「かぐや様！　大丈夫ですか」

「あ、ああ……」

翁が肩を貸しながらかぐやを起き上がらせようとするが、細い老体ではなかなか難しく、ふらついてしまう。危急を知らせる鐘の音はさらに激しくなっていた。

「なにか問題があったときにつかれる鐘でございます。火事か、賊がやって来たか——どちらにせよ、逃げなくてはなりません」

「逃げ、る？」

「山へ身を隠しておれば、じきに危険もさることでしょう。今は何よりかぐや様の安全が優先でございます」

「そうか……」

かぐやは荒い息をおさえながらふらふらと立ちあがった。少しでも気を緩めれば気を失いそうなくらいの目眩が襲ってくる。

鐘のある見張り台の方角から走って来る村人の姿が見えた。

「おうい！」

翁が声をかける。

呼びとめた若い村人は蒼白な顔をして、翁が質問する前にまくしたてた。

「真っ黒な軍勢が来やがったんだ。見た事ねえくらいの人数だ。みんな武器をもってる。ありやあ、石作皇子の比じゃねえ。どうしよう。逃げるにも、あんな多くちゃ逃げきれねえよ。かぐや様もはやくどうにかしなくちゃな。ああ！」

「すこし落ち着け。いったい誰の軍なんだ。賊じゃないのか」

「賊じゃねえ。あれは——」

「——ついに帝のお出ましか」

かぐやが不敵にほほ笑んだ。

警鐘が打ち鳴らされつづけるなか三山村の村人たちは中央にある村の広場に集まっていた。そうする以外に方法がなかったのである。いくら周囲の山々へかくれたところで、相手が相手だからどうしようもない。

そもそも帝の私兵がなんのために三山村へ向かって行軍しているのかすらわからないのだから、こうして身を寄せ合うのが最善の策であった。

「皆の者、耳をすまして聞け」

村の長老である、腰の曲がった小柄な老人がぼろぼろの杖をつき

ながらいった。いつもならば声を張り上げなければいけないところでは隣に喉自慢の若者がいて、長老の言葉を皆に伝えるのだが、その日は違っていた。

「じきにこの村へ大軍団がやって来る。数多くの兵だ。だが、恐れることはなにもない。彼らはわしらに危害を与えるようなことはせぬ。たしかに石作皇子の一件はあったかもしれないが、今度はおそらく」

「わたしを迎えに来た帝であろう」

長老の横に立ったかぐやが言葉を継いだ。

そのとなりにはかしこまるようにして翁と嫗が座っている。

「皆の者に迷惑はかけないつもりだ。わたしの目的は最初から帝を呼び寄せることだったのだから――これはまだ伝えていなかった。だが、わたしを快く村へ置いてくれたこと、感謝する」

村人たちからざわめきが起こるがかぐやが再び口を開くとすうつと引いていった。

「翁と嫗がわたしを長く家に閉じこめて秘密にしていたのもすべてはわたしのためなのだ。都人とはどんなに横柄なやつらかと思っていたが、実はそうでもなかったらしい。わたしはとんだ勘違いをしていた」

「わしらは都人などではないぞ」

長老がぼそりといった。

「この星に住まうものをわたしたちは都人と呼ぶのだ。たとえばこのような田舎であろうともな」

かぐやは着物をひるがえすと、村人たちに向かって叫んだ。

「さあ、これからが戦だ。わたしは、帝を手に入れる」

数人の供のものをつれて狩り装束をした男が、馬に乗って街道を走っていた。都から離れていくに従って道路はどんどん荒れ、人影もまばらになる。かわりに増えるのは雑草のしげる草原や、きつね

やたぬきの姿、そして胸の内に秘められた期待だ。

駿馬で知られるこの馬も、はやる心を満足させるほどではない。すぐ近くの景色は飛ぶように過ぎていったが遥か遠方に見える山の影はちつとも動かなかった。

「近ごろ都で評判の美しい女がいる」という噂を聞きつけたのは四半月ほど前のことだった。その類の話はたいして珍しいことではない。

それに宮中にはいくらでも、器量のある美しい妾たちが寵愛を得ようと待っている。どんなものでも手に入れないものはない、そう思っていた。

次から次へと用意されている女たちは、体ばかりをもとめてくる。帝との子どもを作れば、たちまちにときの権力者になれるからだ。それだけでない、一族の者たちを朝廷の要職につかせることで、その家族ごと隆盛を迎える。

たったひとりの子どもでも十分なのだ。そして今度は、その子どもを次の帝に即位させようと血塗られた権力闘争が待っている。幸運にも帝になった男は、あらゆる力を手中にする。

巷ではときおり、恋だのといって身分の離れたものと駆け落ちしたという話を聞く。それほどまでに結ばれたい相手がいるのかと思うと、よくわからない気分になる。理解できないのだ。恋というのが。

並大抵の公家であれば女に事欠くことはまずないだろう。むしろ女のほうからたかり寄ってくるくらいのものだ。

それがうわさ好きな臣下の口によると、幾人もの貴族たちをもてあそんでいる絶世の美女が片田舎の寂れた村にいる、らしい。そこまでは興味半分に聞いていたのだが、宝をもとめて旅立った五人の側近たちのことが話題に上った途端、気が変わった。

これほどまでに男を魅了するかぐやとはいったい何者なのか。なぜ田舎でくすぶっているのか。そしてなにより、どれほどの美しさなのか。

かぐやに関する疑問はとめどなくあふれ出した。昼夜とお構いなしにまだ見ぬ女の姿ばかり想像してしまう。そうしていてもたってもいられなくなったある日、帝はこっそりと宮中をぬけだした。

「三山村はまだか」

「もう少しでございます」

信頼のおける護衛ふたりだけを連れて、かぐやをのぞき見る計画だった。

以前はその姿さえ現わさなかったかぐやだがいまはしきりに村のなかを歩いてまわっているという。狩りを楽しむふりをして近づき、噂に聞く美貌をたしかめたらすぐに都へ帰るつもりだった。

どうせほんの興味本位な旅なのだ。

それに平安の都は大騒ぎになっているかもしれない。うまく面倒くさいことにならないよう始末をつけてくれていればいいが。収穫もなしに厄介事をもらいにいくのでは分があわない。

「あれが、三山村の入口にございます」

という護衛の声。

前方にはたしかに三方を山に囲まれた村落が見える。村のいちばん手前側には大人四人分ほどの大きさの楼閣があつて、青銅の大きな鐘がとりつけられている。そこにはふたりの見張り番らしき男たちが立っていて、こちらを見ているようだった。

「気付かれぬか？」

「昔ならともかく、いまは多くの貴族が四六時中出入りする村でございますから、この格好ならあやしまれることもないかと」

「よし。ならば速やかに行くぞ」

三頭の馬が馬蹄を響かせながら楼閣の横を通り過ぎていく。そして田のあぜ道に沿って馬を走らせていくと、山のふもとからいくぶん離れた場所に粗末な家々の群れが見えてきた。

しかし、どれがかぐやのいる家なのか見当がつかない。

「お前、近くのものにどこにかぐやがいるか尋ねてこい」

護衛のひとりに命令する。恭しく頭を下げてから、かれは村人を

探しに行った。

「今年はずいぶんと豊作のようだな」

帝がつぶやく。

田畑にはこぼれそうな稲穂がぎっしりと群生している。見渡す限りの黄金だった。馬の汗のにおいに混じって、稲藁の香りが漂ってくる。

「――なにか書くものはあるか」

「は。これに」

すぐさま筆とすずり、それから高級な和紙が渡される。帝は目を細めた。

「準備がいいな」

「陛下のことですからきつと和歌が詠みたくなるだろうと思ひまして」

「気の利いたやつだ。あとで褒美をやろう。――さて」

なんと詠もうか。目をつぶって考える。社交辞令で公家たちと催す歌会は退屈で仕方ないが、こうして自然のなかで和歌を詠むのは嫌いではなかった。

「たけとりの――」

そういえば、かぐやは光り輝く竹の中から出てきたというような噂も聞いたことがある。夢物語のように現実味のない噂だったが、和歌に組みこんだら面白いかもしれない。

そうだ。せっかくだからこの歌をかぐやの元へ残していこう。歌の腕前も一流のものだと聞き及んでいる。

「陛下、かぐやはあちらの家にいらいっしやるそうです」

道を探ねにいていた男が戻ってくる。指を指した先には、とても絶世の美女がすんでいるとは思えぬような古びた藁ぶき屋根の、年季が入った家があった。

距離はもうさほどない。

「馬を下りていくぞ。ここで待っておれ」

帝はひとり、脇に雑草の生えた細い道を歩いていく。大勢の人が

通ったためか土は固く荒れていた。かぐやがいるという家の軒下には短く切った青竹が干されていて、風が吹くとからからと音を立てる。

ほかにもいくつかの竹製品が見当たったので、おそろくいっしょに住んでいるという老人は竹取の職についているのだろう。そうであれば光り輝く竹の中からかぐやを見つけたというのにも納得がいく。

幸いなことに家の周りには誰もいなかった。

きつといまの時期は農作業で忙しいのだろう。垣根の隙間を見つけて、腰をおろしてかくれる。わずかに空いた隙間から家のなかをのぞきこむと、老夫婦がひたいを寄せ合って話していた。

「……いないのか？」

角度を変えてみようかと思った矢先、涼やかな女の声があった。老夫婦のうしろから、まるで絵にかいたような美女が話しかけている。つややかな長い黒髪も白い肌も、すべてが完璧だった。視線が釘付けになる。動かすことはできない。なにも考えられなかった。すべての仕草を見ていたかった。

——いったいどれほどが経過したのかわからない。気付けば、背後に護衛の者が立っていた。

「陛下、そろそろお戻りになる時間です」

「あ、ああ……」

ほんのわずかに視線をそらした間に、かぐやの姿はなくなっていた。

途端に心が、まるで大切なものを失ったかのように不安になる。

体の奥がぞくりとした。

帰路はまったく覚えていないが、何度か落馬しかけたらしい。和歌を置き忘れてきた、と気づいたのは、しばらくたってからだった。

勇者

「——とんでもないお転婆を拾ってきたようじゃな、竹取の。三山村の命運、もはやこの娘にあるといっても過言ではないぞ」

長老がなじるような口調でいった。

かぐやは平然としているが、翁の顔色はそれとわかるほどに血の気がなかった。

「これもなにかの定めでしょう。月が沈んでいくのと同じように、自然の理なのです」

「それで済ませてしまつては長老の面子が立たぬ。……かぐやどの、竹から生まれた娘よ」

長老はしばしばと目をまたたいてから質問する。

「お主をそこまで突き動かす欲望の源はなんじゃ。帝を手に入れようなどという大望をかなえようとする理由は」

「——いずれ、話そう」かぐやは申し訳なさそうにいった。「近いうちにそのときはくる」

「それまでに我らの命がなくなっていなければじゃがな」

長老はふう、と大きく息を吐きだした。そして、あらん限りの声を張り上げる。

「一世一代の機会じゃ。これを見逃すすべはないぞ」

怯えていた村人たちから不安の色が消えた。小さな子供さえ泣きやんで、じつと長老とかぐやを見つめている。

「相手は帝、なれどこちらにはかぐや殿がおられる。この村から天皇の妃が出れば、末永く安泰になることであろう。逆に怒りを買えば三山村など存在しなかったように抹消される。天国と地獄じゃ。皆の者、どうかかぐや殿に協力してやってくれ」

「おうよ！」

という野太い声が聞こえた。それに続いていろいろな人々の雄たけびのような歓声が響く。

「……これがわしらの返事じゃ。せいぜい、頑張ってくれ」

「ありがとう。あなたはよき指導者だ」

かぐやは小人のような身長の人に向かつて、優しくほほえみかけた。長老のぼろぼろになった前歯がきらりと光った。

兵士たちが黒い服を着用しているために、遠目からだときい塊のように見えたのだと気づける距離になった。石作皇子の私兵よりもいっそう屈強そうな足軽と立派な馬にまたがった騎兵が土煙を立てながら三山村のなかへ入って来る。

戦闘集団は村の内部を見渡すと、よく響く声で宣言した。

「帝のおなりである。住民は平伏してひかえよ！」

兵隊たちは左右に別れ翁の家の四周をかこみはじめる。まるで地理がわかっているように速やかな行動だった。だが、その間にも田畑の作物を荒らさないよう注意して足を進めているのが見て取れた。かぐやは仁王立ちにかまえて、迫りくる兵隊たちを堂々と正面から迎えている。

足音高くかぐやを何重にも散り囲むような隊形をとると、その奥からひとときわ立派な体格の馬に乗った男が静かに現れた。

清閑な顔つきに、絹で織られた黒い着物。あたまに乗せた烏帽子は今までの貴族のだれよりも高く、身につけているすべてのものが高級品だ。両脇にひかえる異様に目つきが鋭い男たちがあたりをぬかりなく警戒している。

「あれが――帝か」かぐやが小さくつぶやく。「なかなか強そうな男ではないか」

馬上の男は、馬から降りることなくゆっくりとかぐやのほうへ向かって近づいてくる。もともと上背のある男だったが、自然と空を見上げるような角度になる。

「はじめまして、かぐや姫」

腹の底に反響する、低い声だった。

「朕からしてみれば初めてではないのだがな」

「どういう意味だ？」

「すこし口のきき方に注意した方がいい。朕は――」

「帝であろう。そのくらいは知っている」かぐやは鼻で笑った。「大事なのはお前が勇者であるかどうかだ。一国の長たるものが凡人程度の器であるはずがあるまい」

「それは愉快だ。勇者でなかったら、どうだというのだ」

「お前に用はない。とんだ無駄骨だったということだ」

「あっはっはっは！」

痛快そうに腹をかかえて笑いだす帝を、かぐやは冷めた目で見つめていた。

「お前、宝をもっているか」

「石作皇子どもに宝を探させたという話は本当のようだな。宝なぞは腐るほどもっておるわ。だが、お前にやるためのものはひとつもない」

「なんだと？」

「貴様には一つもやらないといったのだ」

「ほう――わたしが欲しいのではないのか？」

「もちろんだ。貴様は朕のものになるのだから、所有物に所有物を与えてやるようなことはないだろう――違うか？」

「わたしはお前の物になるつもりは微塵もない。むしろお前をわたしの物にしようと思っっているくらいだ。まずはその妙な生き物から降りてもらおうか」

「馬を知らぬか。貴様、どこ生まれただ」

「わたしは――」とかぐやはいった。「月の国、ラングネの姫である。はるか昔に旅立った都人の末裔よ、お前は我が祖国の救世主となるか？」

「……あっはっはっは！」

帝はその日二度目の、心底愉快そうな大笑いをした。

「竹から生まれた姫君は、月の国からやってきたというか！ 大法螺を吹くのが上手なようだな」

「嘘ではない。わたしは月を救うための勇者を探しにこの地球を訪

れたのだ。出来なければわたしの存在意義がなくなってしまう。だから帝、お前を勇者として迎えようというのだ」

「立場が逆だ。貴様は朕のものになる」

「相手が着きの姫だと知ってもか」

「むしろ愛おしくなったほどだな」

帝は、下馬すると、かぐやの着物の襟をつかんでぐいと引き寄せた。吐息がわかるほどの距離。耳元でささやく。

「朕は他人の目など気にしない。朕が掟だ。それにここは月ではない。つまり貴様が何者であろうと関係ないということだ」

「宝を持て。されば勇者の証が現れることだろう」

「勇者となり、貴様の国を救ったとしよう。朕への報酬はどうなる。貴様の救った国を寄こすか、属国になるか。どちらにせよ貴様の国は朕のものになるう」

「……わたしの身をさし出そう。それで、どうだ」と、かぐやは血のにじむほど唇をかみしめる。目にはうっすらと涙が浮かんでいる。「それでいいだろう」

「何故だ？ もとより貴様は朕のものなのだから、そんなことをする必要はなからう」帝は嘲笑する。

「わたしには大義があるのだ。それを承知で、頼む」

「いまは無性に貴様が欲しいのだ。国を救っているような時間はない」

「――ならば、いますぐわたしを抱け。月からの迎えが来るまで、この身体好きにするがいい」

気丈にいつてのけるが、頬には一筋の涙が伝っている。それは次から次へと雨のようにとめどなあふれ出てきたが、かぐやは目頭をぬぐわなかった。帝から視線をそらしたくなかったのだ。ささやかな最後の抵抗だった。

突然、帝がかぐやを抱きしめた。

「これが、恋というものか」

「……約束は違えるなよ」

「朕の力をもつてすれば成し遂げられぬことはない。月へでもなんでもここにいる兵を送り込もう。足りぬのならもっと多くの兵を集めればいいだけの話だ。それだけの価値が、貴様にはある」

「――お待ちください」

消えるような声がした。

見ると、白髪の老夫婦が地面と一体化しようとしているかのように微動だにせず平伏していた。帝は明らかに気分を害したようにかぐやを突き放すと、翁と嫗に目を向けた。

「朕の邪魔をするお前たちは何者だ」

「かぐや様の臣下でございます。月の民ではありませんが、最初にかぐや様を見つけ出したのは私です」

「ほう。して、何のようだ」

「お願いでございます。どうか、どうか、かぐや様を泣かせないでください。この通りでございます」

「調子にのるなよ。かぐやの縁者だからといって褒美をやるようなことも、情けをかけることもせぬ。高い身分を得られると思ったら筋違いだな」

「滅相もございません。そのような不埒なことは少しも思っておりません。ただ、かぐや様の悲しむ顔が見たくないのでございます」

「翁、よい。わたしはこれで本望なのだ。ラングネを救えるならばこの身くらいいくらでも生贄にしよう」

「ですが……」

嗚咽ばかりが漏れて声にならない。帝はしばらく翁と嫗の様子をながめていたが、やがて馬にまたがると、三山村の出口に向かって動き出した。

片手を上げると、側近のふたりがそそくさと駆けつけてくる。

「あのふたりは殺しておけ。其のほかには手を出すな。かぐやの心残りがないように、いまこの場で殺してしまうのがよからう」

「御意」

「やめろ」

かぐやが大きく両手を広げて進路を遮る。男たちは丁寧な口調で「おどきください」といった。

「この者たちは関係ないだろう。わたしは帝について行く。それでいいだろう」

「陛下のご命令でございます。おどきくださいませ」

「いやだ！」

「……かぐや、貴様はまだ立場をわきまえていないようだな。どちらが上か、教えてやろうか」

「……だが！」

「くだい。それ以上は聞かぬ」

かぐやの制止を振り払って、ふたりの男たちは翁と嫗の横に立つ。腰にさした剣を引き抜くと、鋭利な刃が残酷にきらめいた。頭上高くふたつの刃が掲げられる。かぐやの絶叫にも似た声がむなしく響く。

だが、次の瞬間に聞こえてきたのは鈍い金属音であった。

「――あなたは」

刀を持った二人が大きく目を見開く。大男が素手で刀を受け止めていた。それなのに微傷すら負っていない。

「惚れた女を守るのが男ってもんだろ。それを泣かせてどうする」

「石上か」

帝が抑揚のない声でいった。

石上と呼ばれた浅黒い肌の大男は無精ひげをのぼし、もとは高価なものだったのだらう服もすり切れている。身長はかぐやの倍ほどもあり、筋骨隆々で、首から貝飾りを下げていた。

「なんのつもりだ」

「なにもどうも、しばらく宝をもとめてさまよっていたのが、とうとう見つかったから結婚しようと思って帰って来たところ、とんでもないことになっていたんで思わず助けちまったんですよ」

「その腕はどうした」

「ああ、これですか」

中納言石上麻呂はぱきぱきと関節を鳴らすと素手で二本の刃を握った。まるで柳の枝をつかんだように簡単に鉄をひん曲げる。二の腕の筋肉が山のように盛り上がっている。

「宝探しの旅の途中で鍛えられたんですかね、いつの間にかハチャメチャなくらい強くなってたんです。おかげで帰りが間に合ってたよかったです」

「ほう、それはご苦労なことだったな。だが無駄足だ。かぐやはこれから朕が連れて帰るのだからな」

「おっと。そうはさせませんぜ」

突然の事態におどろいてへたり込んでいるかぐやの元へつかつかと歩み寄ると石上は、帝と相對するように向き合った。

「朕と戦うつもりか、愚か者め」

「いまの俺になら出来る気がするんです。か弱い姫のひとりも守れなくてなにが男だ」

「この軍勢が見えないのか？」

「もちろん見えますよ、むかつくらいたくさんいやがりますね。」

まさかこの事態を想定していたわけではなからうに」

「念には念を入れてだ。もし朕に逆らうようなものがあれば排除しようと思つてな」

「それが俺ってわけですか」白っぽい貝を連ねた首飾りをぎゅっと握りしめる。「たしかに前の俺だったら素直に従っていたでしょう。でも、いまの俺には力がある。誰かを守ることのできる力か」

「朕に抗うということがどういふことだかわかっているのか」

「朝敵になり歴史に汚名を残す、それでも構いません。俺はあなたと戦う」

「なにがそこまでお前を駆り立てるのだ。地位も名誉も失ってまで戦う理由はなんだ」

「それはもちろん」石上は微笑した。「愛つてやつですよ。まだ片思いですけどね」

「そうか。ならば朕と同じだな。朕も愛のために戦おう」

「陛下、それはちがいますぜ。愛はそんな一方的なもんじゃねえ」
「ぬかせ」

帝は片手を天高くつきだした。

いつの間にか、村をぐるりと囲んだ帝の親衛隊たちが大きな弓をつがえている。幾本もの矢が、石上とかぐやを狙っていた。

「かぐやごと殺すつもりですか」

「お前のことだ、その女をかばって盾になるだろう。射的が終わればそこには針鼠の出来上がりというわけだ」

「……よくお分かりで」

「いくら超人的な力を得たとはいえ全身が鎧のように固いわけではあるまい。背中、腹、首、足、どこかしら弱点はあるだろう」

「……ほんとに憎らしいほどに御聡明ですね。まさに鬼謀ってやつです」

「さて——中納言の地位に免じて最期の言葉を聞いてやろう。いい残すことはあるか？」

「へ！ 俺は死なない、生きてかぐやを守る」

「やれ」

乾いた号令とともに、いっせいに凶暴な雨が牙をむいた。天を覆いつくさんばかりに上がった矢の嵐が、天頂に達して落ちはじめ。石上はその巨体でかぐやを抱きしめるようにして覆った。

「やっと見つけた」腕の中でかぐやがつぶやいた。「わたしの勇者」
「え？」

その瞬間、頭上で炎のはぜる音が轟いていた。背中に押し寄せる熱風を感じる。

「なんだ……？」

紅い龍がおどっていた。

炎の渦がとぐろをまきながらかぐやと石上の頭上を旋回している。紅龍は降りしきる矢を飲み込み、そのすべてを灰に変えていく。ぱらぱらと残った白い灰だけが、石上の背中に落ちた。

「奇術か！」

「その通りでございます、陛下」

凜とした声の主は、身なりの整った若い青年であった。両目を閉じているが端正な顔立ちをしており、美青年の部類に入るだろう。ただ、その両腕にかかるはずの着物はなぜか切り取られていた。

おおもものみゆき
「大伴御行、お前も朕に抗うというのか」

「そうせざるを得ないこと深くお詫びします」

「航海の果てに重病を患い都へ戻っていると聞いていたが――何故ここにいるのだ」

「陛下が三山村のほうへ大軍団を派遣したという話を小耳に挟みまして、もしかと思ひ駆けつけた次第でございます」

「それは朕のためか、それともかぐやのためか」

「私の心はたったいま決まりました。かぐや様をお守りすることが、私の生き方でございます」

うやうやしく一礼する。

帝は近くの兵士から大弓を奪い取ると、きりきりと弦を引き絞る。矢の直線状には両目を閉じた大伴御行が微動だにせず立っている。

「ならばこの瞬間から貴様も朕に仇名す敵だ。その選択を悔やむがいい」

弦がもどる音がした瞬間、一厘の迷いもなくつがえられた矢が大伴御行の眉間に向かって飛んでいく。あとわずかで当たろうかというとき、閉じていた両目が開き、袖のない両腕から炎が起った。

炎は帝のはなった矢を包みこむように焼きつくすと、再び大伴御行の腕へと収まっていく。

「貴様、その眼はいったいどうした」

帝が声を荒げる。

大伴御行の両目は、まるで夕ぐれの太陽を嵌めこんだように赤かった。充血しているのではない。まったく別のなにかに置き換わっているのである。それに炎を放った両腕にも、龍をあしらった紋章が浮かんでいる。

「かぐや様にいわれた宝を探しているうちに嵐に巻き込まれ少し船

が沈没しまして。そこで龍王さまと会った夢を見たのです。宝が欲しければ代償を払え、といわれました。私はすぐさま首を縦に振りました。両目に激痛が走り、気付いたときには船の残骸とともに海岸に漂着しておりました。私は盲目となる代わりに、龍の首の珠を授かったでございます」

「馬鹿が。それでは肝心の姿が見えないであろう」
帝があざけ笑うが、大伴御行は首を横にふった。

「たとお姿は見えなくとも、なんとなく感じるのでございます。これも龍の首の珠の効果ではありませんが、私は何の不自由もしておりませぬ。それに――」と、あつけにとられるかぐやにほほ笑みかける。「愛しき方のお声が聞けるだけで、私は満足ですので」
「まさか……ふたり目の勇者がいるとは」

「かぐや様、いまそちらへ参ります」

大伴御行はそう言うのと、ゆっくりとかぐやのところへ歩み寄る。その前に石上が声をかけた。

「大納言殿。あなたも……」

「ええ、同じでしょう。理由も同じなら目的も同じ。まるで兄弟のようです」

「では義兄弟の契りでも交わしましょう」

「それは名案です。が、少しあとにしましょうか」

「お前たち、事情は――」かぐやを喋りはじめるのを、大伴御行が制した。

「あとでゆるりとうかがいます。ひとまずこの苦境をくぐりぬけることが必要かと」

「まったくもってその通りだ。いくら力があるとはいえ、この人数が相手じゃ少々厳しいかもしれねえ」

石上があたりを見回す。村の入り口をはじめ、三方の山の中にも隙間がないほど旗が立っている。どこへ逃げ込んでも無事ではすまされないだろう。

「二千の軍だ。朕にあらがう輩どもよ」

「意外と少ねえな。もっと大層なものかと思ってたぜ」

「ひとり千人、いけますか」

「あたぼうよ」

かぐやをかぼうようにふたりの勇者は背中合わせになる。そして、にやりとほくそ笑んだ。

「――やれ」

帝が感情のない声で指示すると、雷鳴のような関とぎの声が三山村にこだました。二対二千の、無謀な戦の始まりであった。

戦い

「石上、かぐや様をかばいながら戦ってください。私が活路を開きます——あなたの弱点がどこだ知りませんが、その鎧のような体ならたいていのことは大丈夫でしょう」

大伴御行が紅い瞳を開眼する。

すると、龍の刺青が炎をまとい、ぱちぱちと爆ぜる音がした。

「村の作物に火をうつらせるな！　なるべく被害の少ないように戦え！」

かぐやが叫ぶ。

三山村の各所には収穫期ということもあって、非常に燃えやすい乾いたわらの束が天日干しにされている。それだけでない。まだ刈り終えていない稲穂に火の粉が降りかかれば、豊作だった黄金色があつという間に灰の山になってしまう。

家が燃えても大問題である。さらに風向き次第では、森の木々に引火するようなこともあるかもしれない。三つの山が火事にでもなれば三山村は水を絶たれた田と同意義であつた。すなわち、待っているのは終焉である。

「……ずいぶん戦にくい時期ですね」

夏場なら湿気があり火が移りにくいものだが、不運なことに可燃物が大量に周りにある今の季節は秋だった。冬でないだけまだましというものか。

それでも動きが制限されることには違いない。炎をあやつる大伴御行にとっては致命的な問題だった。

「俺が戦った方がいいんじゃないか」石上が声をかける。「防衛だけじゃ先は見えてるぜ」

「分かっている。だが——」

「村のなかで戦うのは圧倒的に不利でございます。寡兵で大軍に立ち向かうのなら奇襲と速攻しか手はないかと」

竹取の翁が、いつの間にか現れて意見を述べた。

精悍な顔つきをしている。覚悟を決めた表情だった。

「爺さん、いくらなんでもここは危ねえぜ。村人たちのなかに混じっていれば帝も狙わないだろう、はやいところ安全なところに逃げな」石上が軽くあしらう。

「私も戦います」と、翁はいった。「かぐや様をお守りしたいのは貴方様がただけではありませんせぬ。私どももかぐや様とともに行ききたいのでございます」

「そうはいつでもなあ――」

「よいのか？」

しぶる石上にかわってかぐやが翁に問うた。すぐさま力強くうなづく。そうか、とかぐやは大きく息を吐いた。

「ならば嫗だけでも先に逃がしてやってくれ。石上のいったように村人たちにまぎれておれば危害は加えられまい」

「そんな、私も」

嫗が声を荒げて抗議しようとするが、その肩を翁が掴んだ。

「お前は村に残れ」

「いやです！」

「我儘を言うな」じっと嫗の瞳をのぞきこむ。「かぐや様のことを考えるならそれがいちばんなのだ。わかってくれ」

悔しそうにうつむき、ぼたぼたと涙をこぼす嫗のせなかを、かぐやがやさしくさする。

「今までありがとう。あなたから受けた恩をわたしは忘れない」

「かぐや……」

様をつけずに嫗がかぐやをひしと抱きしめる。固い抱擁のあと嫗は目じりをぬぐって気丈に立ちあがった。

「私が道を作りましょう。その間に逃げてください」

大伴御行の両腕の炎がいつそう大きくなる。嫗を狙って飛来した何本かの矢をその場で焼き捨てた。

「気をつけて」

「ああ」

炎の渦に護衛されながら、姫が村人たちのほうへかけていく。得体のしれない奇術に恐れをなした兵士たちが四散した隙間をぬって、無事に村人の集団へ到着したのを見届けると、翁はひとつ武者ぶるいをした。

「怖いかな？」かぐやがたずねる。

「死地ならすでにくぐっております」翁がこたえる。

「――命を無駄にはするなよ」じいと呼んでいた老兵士の最期がよみがえってくる。体格はまるで違ったけれども、なぜか姿がだぶって見えた。

「策はございます。まず、敵の本陣――つまり帝にむかって突撃いたします。命を奪うわけではございません、あくまで奇襲をかけることに意味があるのです。防備を固めるぶん、包囲が手薄になりますから間髪いれずに引き返し、山のなかへ逃げ込みます」

「翁はどうするのだ。本陣に突っこむだけの体力はなからう」

「私は別行動でひと足早く動き出すことにします。落ち合う場所は、最初にかぐや様を見つけた竹林ということだ」

「わかった」

かぐやが返事をする間にも、すぐそばを矢の群れが通り過ぎていく。大伴御行が操作する炎のおかげで帝の兵士たちは近づけずにいたが、かわりに途切れることなく矢が射られている。ときおり炎の防御壁をくぐりぬけた矢があっても、石上がそれをたたき落とした。「大伴様の炎を先陣に突っ切って、石上様がかぐや様を抱きかかえながら突進すれば正面に対して陣形を整えることでしょう。その第一陣さえ崩せれば充分です、速やかにお引きください。少数精鋭なぶんだけこちらがはやく動けます。そこを十二分に利用するのです」「つまり一撃離脱ってわけか」石上がうんうんとうなずく。「馬でもありゃいいんだがな」

「無い物をねだってもしかたないでしょう」大伴御行が切り捨てた。「そうと決めたら早い方がいい。さっそくやりましょうか」

「おうよ」

石上がかぐやをひよいと持ち上げる。かぐやが顔を真っ赤にしているのを、大伴御行がすこし複雑そうな表情で見守る。

「では、御武運を」翁がそそくさと駆けだす。

「私たちもまいりましょう」

「ああ」

大伴御行は目が見えていないのをまるで感じさせない動きで帝のほうへ向かって走り出す。前方には巨大な炎の矛を展開させ、うしろから疾走してくる石上と付かず離れずの距離を保ちながら飛ばす速さは、常人のものではなかった。

どうやら特殊な能力だけでなく基本的な身体能力も上昇しているらしい。

「石上、お前はわたしとともに国を救ってくれるか」

熱い風を浴びながら、抱きあげられたかぐやが訊く。

「もちろんですよ」

「だが、最初に断っておくぞ。わたしは大男は好みではないのだ」

石上が体勢を崩して転びかける。すんでのところで持ち直して再び走り出したが、その足取りはふらふらと安定しない。

「すまぬ。気分を害したか」

「いえ——そんなことは」泣いている。かぐやは内心しまったと思った。最初に伝えておけば大丈夫かと考えていたが、予測が甘かったようだ。

「でも、もしおまえが頑張ればそういう男を好きになることもあるかも知れぬな」

「頑張らせていただきます！」

とたんに加速する。これで石上の扱い方はだいたいわかった。単純なやつでよかった。

帝まではあと百歩ほどの距離である。それをふつうの二倍近い速度でかけぬけていく。盾をもった兵士たちが、その隙間から槍を構えているのが見える。このまま突っ込めば確実に串刺しになるだろ

う。

だが、大伴御行の放った火炎は槍の柄を焼き切る。

それと同時にいくつかの盾に火が移ったらしく、騒然とする兵士たちを勢いに乗った石上が吹き飛ばす。声にならない悲鳴とともに、まるで木の枝を投げたかのように軽々と兵士たちが宙を舞う。

「これいけるんじゃないか」

押し寄せる兵士の群れと奮戦しながら石上がいう。

「なにがだ」かぐやも必死に武器の切っ先を交わしながら返事をする。

「帝を倒せるんじゃないかってことだ」

「やめておけ。翁の作戦をくずすことになる」

「敵の総大将を倒せばそれで勝ちだぜ」

「帝殺しにあればそれこそ大罪。三山村ごと消されるかもしれない。それに翁に智謀は本物だ、わたしはあれ以上の軍師を見たことがない。翁を信用しないわけにはいくまい」

「なるほどな——そういうわけで大納言殿、そろそろ撤収だ」

「ああ、わかっている」

豪華を得物のように振り回しながら大伴御行が山の方角へ逃走を開始する。石上も手近にいた兵士を殴りつけてから悠々と合流し、田のあぜ道をかけぬける。

帝の軍勢は翁のにらんだ通り、いったん軍をまとめることにしたらしく、山側にいた兵が撤退している。無人になった野山を駆け上がるんはさほど難しいことではなかった。

森の斜面を登っていく。

足元には色づいたもみじの葉や木の実が大量に敷き詰められていて、踏みつけるたびにさくさくと乾いた音を奏でた。ときおり狸や狐らしき小動物が驚いたように走り去っていく足音も聞こえてくる。

途中に、ちょうどいい具合の大木があったので、石上が木登りをして帝の動向を調べることにした。

三人分の太さはあろうかという腕からかぐやを降ろすとき、名残惜しそうなそぶりでなかなか放さないの、大伴御行が炎を見せて脅かしたところ、あきらめたように木を登っていった。

残された二人は近くにあった切り株に腰をおろした。

「石上は昔からああいいうやつなのか」

かぐやが呆れた口調で尋ねる。

同じ都に住む貴族同士ならお互いのこともよく知っているだろうと踏んだのだ。

「ええ、子供のころから気品のかけらもないやんちゃ坊主でしたね。腕っぷしはたしかに強かったですが、あそこまでの怪力ではありませんでした」

「燕の生んだ子安貝——といったか？」

「どこまで探しに行ったのやら分かりませんが、ついさっき帰って来たのですから相当遠いところにまで遠征していたのでしょう。それだけの価値はあったようです」

「大伴、お前は どうして そのように」奇怪な、といおうとして止めた。「一風変わった眼をもつことになったのだ？ 竜王と契約したとかいっておったが」

「その通りですよ。嵐に巻きこまれて船が難破し、海の中で龍王さまと契約したのです」

「まるで眼が見えているように振るまえるのだな」かぐやが感心する。

「本当になんとなくでございますが」と大伴は微笑する。「あたまの中に直接流れ込んでくる感覚があるといいましうか、うまく説明はできませんね」

「まあ、いい。大事なのはお前がわたしとともに戦ってくれるということなのだ」

「月の国ですか」

「聞こえていたのか、あの距離で」かぐやがすこし驚く。「てつきり知らぬものかと思っていた」

「光を失ったせいか他の感覚が妙に発達したようですね。音も、匂いも、以前よりずっと鋭敏にわかります」

そのとき、頭上から石上の声が降ってきた。

落葉のはじまった木の葉のあいだからあたまをのぞかせて麓のほうを見ている。

「どうやら軍を二手に分けているらしい。この山を包囲して挟撃するつもりみたいだ。けど陛下の手元にはけっこうな数の予備隊がいるなあ」

「いつごろ山狩りをはじめそうだ？」

大伴が質問する。

「山の向かい側に兵が到着したらはじまるだろうから、あと数刻つてとこだな」

「わかった。御苦労だな」

石上が猿のようにするすると降りてくる。

そして、着地するなりかぐやに手を差しのべた。

「なんだ？」

「さっそく続きを、と思ひまして」

「わたしはもうひとりで登れるから大丈夫だ。いままでご苦労だったな」

「……そんなあ」

がっくりとうなだれる石上をおいてかぐやと大伴御行はさっさと足を進めていく。気付いたときには見失いそうな距離まで離れていたの、石上はあわてて走り出した。

七合目あたりまで来ると、植物の群生が変わって、竹林が目立つようになる。ほんのりと稲穂色に染まった竹のあいだをぬって歩く。場所はよく覚えている。なんどか翁に連れてきてもらい、舟を調査

したからだ。

だが、どうやってもエネルギー切れなのは明白で、どうすれば地球で再充電できるのかというのはさっぱり分からなかった。そのほかにも使えそうな部品を剥がそうとしたり、なにか勇者の手がかりはないかと調べ回ったりしたのだが、結局何も得るものはなかった。舟を調べているあいだに翁は本業の竹を取りに行くことがあった。ひとりになると、無性に寂しくなって、舟から離れたくなった。

去り際に犠牲になった老兵士の顔が浮かんでくるのだ。

涙がこぼれそうになるのを必死にこらえたが、それでもあふれ出てくるものは抑えきれなかった。

舟が落ちた当初は大きな穴がぽっかりと開いていたところに、いまでは落ち葉や土がたまっている。その上に翁は腰をおろして待っていた。

かぐやたちの顔を見ると、翁の表情が明るくなった。

「ご無事で何よりでございます」

「翁もけがはなかったか」

「はい。そちらの作戦がうまくいったようで、なんの問題もございませんでした」

自分よりもはるかに地位の高い三人を前にして、翁はさらに腰が低くなっているようだった。それでも鋭くなった目つきはかわらない。

大伴御行はうす緑の船を発見すると、しゃがみこんで興味深そうに触りはじめた。

いっぽうの石上はそういったものにまったく関心がないらしく、さきほどからかぐやばかりをみつめている。そのせいか、歩く最中にもひっきりなしにつまづいていた。

「これが月の船でございますか」

「もう動きはしないがな」

「では」大伴御行はおもむろに立ちあがる。「どうやって月にお戻りになるのでございますか」

「……勇者を見つければおのずと手段もわかるのではないかと期待していたが、甘すぎる予測だったな。なれば手段は二つ。地球で舟を見つけるか、月からの迎えを待つか」

「こちらに舟があるのでございますか」

地球という概念はまだ説明していなかったが、文章から意味を悟ったのだろう大伴御行が訊く。

「お前たちが持っている宝と同様に、古代の人々が残した遺物があるかもしれぬ。それを見つければ、あるいは」

「古代の人々？」

「——お前たちには説明しなければならないことがたくさんあるな。だが、いまはやめておこう。事情はあとにして、どうにか月に帰る方法を考えるほうが先だ。帝の軍勢を相手にするのも、長時間はもつまい」

「月、か。そういえば、そろそろ中秋の名月の時期だな」

石上がのんびりといった。考えるのは最初からあきらめているようである。

「なんだそれは？」

かぐやが問い返す。

「この季節になると月がとてもきれいに見える満月の夜があるんだけど、しばらく旅に出てたから正確な日付がわからないんだよな」

「それならば、たしか三日後の夜だったはずだ」

大伴御行が指で数えながらたしかめる。翁が、皺の多い眉間をさらにしわくちやにさせながら難しい顔で考えこんでいた。

かぐやが空を見上げると、太陽は天頂をすぎて傾きはじめていた。まだ昼過ぎということだ。

「……偶然かもしれませぬが」と前置きして、翁が喋りはじめる。

「かぐや様がここに来られたときもちょうど満月の晩でございますした。私がかぐや様を見つけたのがその翌日ですから、間違いありません。ひよっとしたら月の人々がこちらへやって来るためには満月である必要があるのではございませぬか」

「その可能性に賭けるというのは、かなり危険だな」

かぐやが口をはさむ。こちら真剣な表情で悩んでいた。

「かぐや様、月の国では、月は欠けたりしないのでございましょう？」

「当たり前だ。ひと月のたびに消えたり現れたりしては生活ができぬ」

「どのような理屈かよくわかりませぬが、満月のときにだけ地球との道がつながるのではないのでしょうか。満月とは月本来の姿。なれば月と繋がる道理がないわけでもありますまい」

「――最近、耳にしたうわさがあります」大伴御行がこめかみに指をあてる。「天女に導かれて空のむこうに飛んでいったものがあるという話を、都にもどったときに聞きました。真意のほどはわかりませんが、もしかすると月からの迎えかもしれませんね」

「迎えを待つのであれば、この場所で待つのがよろしいかと。迷子のもといた場所にいるのが見つけやすといえますゆえ」

「……わかった」

かぐやは立ちあがり、いった。

「この場所に城を築き、籠城する。三日後の夜を待ち、迎えが来なければ脱出し他をあたる。それでいいな」

「かぐや様の決めたことならなんでもいいですよ」

と、まったく話に参加していなかった石上が同意する。翁と大伴御行も、異論ないといったように力強くうなずいた。

「今度こそ、わたしは戦う。戦って、月に帰るのだ」

小さな声でつぶやいた決意は、秋風にのって流れていった。

月の下

攻撃はその日の夕方にはじまった。

帝の指揮する兵隊たちは二分した軍をさらに分割して、完全な包囲網をしいている。主な方面としてはふもとの三山村から進軍する部隊、裏手に配備された部隊、そしてかぐやたちの陣取る山の両側の山々から攻撃する部隊の三つだ。

それぞれが魚をとる網を狭めていくようにじりじりと進み、かぐやたち三人を取り逃すまいと警戒してる。帝の手元にはまだ十分な数の予備隊が残っていたがそれでも足りないと思えたのか、都から食料や援軍を送る手筈もしているようだった。

相手が少数精鋭ということで、帝の軍は慎重に駒を進めている。

どこか一部でも隙があればそこを突破され、取り逃がしてしまうからだ。少人数であれば大軍よりもずっと逃げ足は速い。いちど見失うと搜索は困難になるのは必至だった。

じりじりと迫って来る不気味な黒い軍勢を、翁が見張り台の上ですわって注視している。

見張り台は周囲の竹や木を石上がへし折って組み立てただけの簡単なものだが、ところどころ大伴御行が炎を使って穴をあけたり、翁が手伝って竹を加工したりして、強度は十分に保障されている。

それから石上を中心に資材を集めては、すいすいと築城の準備にかかる。

城というよりは砦に近いだろう。簡単な防御柵を四方にならべただけの、ただの野戦陣地だ。

中央に翁のいる見張り台をすえ、なるべく見晴らしのいいように付近の竹を刈り取って行く。周囲が鮮明な方が対応しやすいからだ。敵を待ちかまえる身としては、敵の隠れ場は少ないほうがいい。

石上と大伴御行がせっせと働いているあいだに、かぐやは自分を地球に運んできた舟をふたたび調べていた。なにか月に関する手が

かりが得られるかもしれないという考えだ。

「――予言、か」

子どものころから覚えこまれた石版の文字。

それは国が滅びそうなとき、地球に渡って勇者を見つければ、その国は救われるだろうという内容なのだが、肝心な手段が書いていない。

月から地球に渡るために用意されていたのが、老兵士が最期を迎えた空間であり、そこに格納されていた飛行船なのだ。だがこれは、おそらく緊急避難用の船だったにちがいない。地球までの片道だけで力尽きてしまうような船を、古代の人々が造るはずはないからだ。「勇者は見つけたんだけどな」

運命はいつから決められていたのだろうかと思う。

いや、きつとそれは最初から決められていたものじゃなくて、たまたま自分の代にやってきてしまっただけなのだ。

ひょっとすれば父親や、そのまた父親のときにだって予言の文句を履行しなければいけない機会が訪れたかもしれないし、はるか先の子孫が自分と同じ目にあっていたかもしれない。

偶然の中の必然なのか、あるいは必然の中の偶然のか。

どちらでもいい気がした。けれど、もしこれが運命のだとしたら、死んでいったラングネの人々はどうなるのだろう。死という逆らえない運命を背負わされた彼らを放って、自分は生き延びている。それが何よりも辛かった。

「なんと調べてもエネルギー切れか」

月を見上げるたびに目を凝らして、どうなっているのか探ろうとしてしまう。見えるはずがないのはわかっているけれども、見ずにはいられなかった。

舟の内部にはいろいろなランプや計器が取り付けられていたけれども、どれも働いていない。手当たり次第にスイッチのようなものらしき部分を押してみたが反応はかえったこなかった。

こんどは側面部を調べてみることにする。

滑らかな曲線美をえがく船体には、地球に來た時についたのだらう微細な傷と、焦げたような黒い跡がある。それらは緑色の表面のなかでよく目立った。

「かぐや様、柵の設置がすみしました」

「ああ、御苦労」

大伴御行の報告にうなづく。

「しかし、これだけの大軍となると私の炎だけでは矢を防ぎきれぬかもしれませんね。進軍速度からいって、ここにたどり着くのは夕時になるでしょうが、それまでに対策を考えねば」

「翁はなにか言っていなかったか？」

「いえ、陛下の軍の配置を見ているばかりで、なにも」

「そうか」かぐやは大伴御行の両腕に視線を落とした。「お前の能力は火を操ることみたいだな」

「それがなにか？」

「限界でどの程度まで操れるのだ？　たとえば、この場から炎を放って帝を焼くことができるか」

「無理ですね。私が都にいる際にいろいろと試みてみたところ、炎を出せる総量は決まっているようなのです。近くであれば大量の火を使えますが、遠くなるほど制御にも量にも難が出てくるので」

「――大軍を相手には少々心もとないか」

かぐやのつぶやきを、大伴御行は聞き逃さなかった。

「今回のように防衛戦であれば、効果的な個所を守ることができま
す」

「雨の日は？」

「大丈夫です」

「水のなかは？」

「……おそらく」

「ところで、月の人は炎を浴びてもやけどしないって知ってた？」

「……………ほんとうですか？」

「まあ、嘘だけど。向こうに帰ったらきっちり働いてもらうから」

「かぐや様」

「なに？」

「もしも辛くなって堪えられない時があるなら、いつでも私がそばにいますから」

「いまは恋愛とかそういうものに興味ないから」かぐやは緑色の船に背を向ける。「これから先、待っているのは戦争だよ」

「どちらも同じことです。――どちらも」

大伴御行は素早く振りかえると、柵の向こう側に一陣の火を放った。

木立の中から複数の悲鳴が聞こえる。続いて、どたどたと山を駆け下って行く足音。

「これで居場所が敵にばれましたね」

「もとよりそのつもりだ」

不意に、体を震えが走る。武者震いですね、と大伴御行が笑った。それから数刻ばかりはにらみ合いが続いた。

帝はかぐやたちが一ヶ所にかたまっているのを確認すると、予備隊も投入して何重にもかぐやの築いた砦の周りを包囲した。

こちらにも視界をよくするために木々を切り倒している。

しばらくすると見渡す限りの人の群れがひしめき合う光景に様変わりしていた。

「かぐや様」

見張り台から降りてきた翁が声をかける。

「ここはいちど、先手を取って討って出るのがよろしいかと。このまま待っていても敵の準備が整うだけです」

「作戦はないのか？」

「石上様を単騎突入させればよろしいかと」

「おい、ちょっと待ってくれ爺さん」

石上が抗議の声を上げる。

「なんでございましょう」

「俺に恨みでもあるのか？」

「いえ、なにも」

「だったらどうしてこんな無茶な作戦なんだ。っていうか作戦にもなってないだろ」

「敵は密集して身動きができない状況です。そこを石上様がひつきまわしてやれば、大混乱に陥るか」と

「そうはいつでもなあ」

「勇猛果敢な戦士は素敵かもしれぬぞ、石上」

かぐやがそっぽを向いてうそぶく。

「やりましょう。やらせてください」

「では、日が暮れる前にお戻りください。夜になっては危険です」「了解だ！」

石上は全速力で走って行くと、そのまま柵を飛び越えて单身、敵のなかへ突っ込んでいった。遠くの方で声が聞こえる。どうやら頑張っているらしい。

「こちらは石上様の留守を狙われないよう、しっかりと防備を固めておきましょう。戦力を分散するということは、同時に危険をはらむものですから」

翁が提案する。

かぐやと大伴御行は大きくうなずいて、石上がもどって来るまでの時間を警戒してすごした。

その夜はとても静かだった。

石上が不意を突いて敵の最前線を叩いたせいで、敵陣は昼間よりもずっと後方に下がっていた。どうやら逃げられはしないだろうと察したのか積極的な攻撃は仕掛けてこない。はじめには弓矢を射かけたりしていたのだが、大伴御行の炎によって無効化されてしまうと悟ると、それ以上は無暗に矢が飛んでくることはなかった。

かぐやは、はしごを登って見張り台の上の楼閣から夜空を見上げる。

降るような星の中央に、ほとんど完全な円形の月が腰をおろしている。風に乗って流れてくるうすい雲が時々気まぐれのように月を隠した。

下方に目を向けると、星よりも大きな明かりがいくつも揺らめいている。

見渡す限りのかがり火だ。月にいたころはこのような光景を見ることはなかった。明かりはいつだって城のなかに灯っているものであり、それは電気の光だったから。

「——かぐや様」

「翁か」

月明かりに照らされる翁の顔はいつもよりいっそう青白く見える。暗闇の下では年相応の老人であった。

「こんな夜分に足元の不安定なところにいては危ないですよ」

「どうせ敵は攻めてこないのだろう。ならば大丈夫だ」

「ええ——無理に夜襲をかけて逃げられる方が嫌でしょうから」

翁はよっころしょ、と言いながらかぐやの隣に腰をおろす。即席の木の床がみしりと音を立てた。

「あと二日の辛抱でございますね」月を見上げながら翁がいった。

「前々から不思議に思っていたのだが」かぐやが顔を横へ向ける。

「翁のその智謀はどこから湧いてくるのだ？　とても一介の農民とは思えぬぞ」

「……かぐや様にならお話ししましょう。私は、昔はそれなりに名の知れた武将だったのでございます」

「それは初耳だな」

かぐやが静かにおどろく。

月夜の下では、あまり大げさな身振りをするのもおかしい感じがした。それに、不思議と心が休まる。月を直接見ってしまうと不安がこみ上げるが、暗闇に身を染めているだけならば、むしろ安心した。

「昔のことでございますから。それに、私は自分の命を優先して逃げた臆病者です」

翁は、ははは、と軽く笑った。

「敵は圧倒的な数でございました。とはいえ、それは理由になりませぬ。私は戦に敗れたのでございます。私は命からがらこの村へ逃げ込みました。指揮官がこの体たらくでございますから、軍はまったく散り散りになってしまいました。敵が私の首をあまり重視していなかったのが幸いしてどうにかこの村で暮らしていくことができましたが、親から引き継いだ田畑もない私は山へ入って竹を取るくらいのことしかできなかったのでございます。三山村の人々は落武者の私をあたたかく迎えてくださいました。そうして月日は流れ、すっかり昔のことなど忘れかけていたところにかぐや様がいらっしやったのです」

「道理で妙に言葉遣いがうまいわけだ」

かぐやは二、三度こくこくと頷いた。

「一農民にしては言葉遣いが完璧すぎる。もっと砕けた口調になっていてもおかしくはないはずだ」

「そうでございましたか」

翁が苦笑する。

「それに――」とかぐやはつけ加える。「勇者のことを最初に口にしたとき、翁はいやに反応を示した。それも昔の栄光を思い出しているのか」

「……はい」

長い沈黙のあと、翁がこたえた。

「申し訳ございませぬ」

「なぜ謝るのだ。そのような事情があったならば仕方があるまい」

「私は昔の失敗も認められない卑怯者なのでございます」

「それは違う」強い語調で否定する。「だれでも昔の失敗や後悔を取り消したいと願っているはずだ。それでも、どんなに願ってもかなわない夢だからあとになって苦しみ続けることになる。わたしだってそうだ。王城から逃げ出したことはいまでも夢に見る。あのと残って戦っていればよかった、そうすれば助かった命もあるので

はないかと。だからわたしはこうして戦っている。過去の選択をどうにかよい方向へ転じさせるために。それは翁も同じだ。敗戦という事実を、どうにかして上塗りしたいのだ。だから戦う道を選んだ、違うか？」

「……すべて、お見透かしのようでございますね」

「わたしも同様の立場だからな。気持ちは分かるつもりだ」

「ですが、すこしちがうこともございます」翁はかぐやの瞳をのぞきこむ。「いまは、自分のためでなく、あなたのために戦いたいと思っている」

「――もしや」

思い当たる節のあるかぐやがさっと身を引く。

翁はかぐやの様子に一瞬きよんとしたが、すぐに理解して快活な笑い声を立てた。

「大伴様や石上様のような感情ではございません」

「では、なんだ」かぐやは警戒を解く。

「こういっては失礼かもしれませぬが――その、私たち夫婦には子供がおりませぬもので。だから、村の子供などを見ているとつい、うらやましくなる時もあるというか」

「わたしを孫とでも思っているのか」

「孫というよりは――ええ、子どものようなものでございます」観念した翁が認める。

「ならばよかった。翁までわたしに求婚したいなどと言い出したらどうしようかと悩んだぞ」

「このような老いばれにそんな体力は残っておりませぬ」ふたたび笑う。「むしろ、あのふたりには引き渡したくないくらいでございます。娘をやりたくない父親の心境というのは、どんな時代も変わる場合がございますませぬえ」

「父親、か」

「――辛いお気持ちはわかります。ですがかぐや様のお父上はきつと立派に王としての役割を果たされたのでございましょう。それに

なによりかぐや様が生きていらっしやる。それだけでも希望を抱いたまま死ねるといふものでございます。自分の子どもが祖国を復興してくれる、そういう願いをもっていられるというのは、実に幸福なものではないでしょうか」

「……そうだといいいんだがな」

威厳たつぷりの口髭をたくわえたラングネ国の国王だった父は、いったいどんなことを考えていたんだろう。想像しようとする、涙がこぼれてきそうだったので、やめた。いまはその時期じゃないのだ。

強い秋風が吹いて、長い黒髪とたわむれていった。

「親は子を想うものでございます。――私がそうであるように」

翁は優しそうな微笑みを、かぐやへ向けた。

「さあ、もう寝ましよう。明日は朝から戦いっぱなしの日になりますから」

「わかった。翁も、ゆっくり休んでくれ」

「私は大丈夫でございます。お足もとに気をつけて」

頭上にある月が、ゆっくりゆっくり地平線に沈んでいった。

あたまの奥に響きそうなほら貝の音が、朝早くから吹きならされた。両側に広がる山の側面に反響した木霊がかえってくる。

「雄鶏の鳴き声にしては少し大きすぎますね」大伴御行が冗談を言った。

かれはすでに戦の準備をすっかり整えていて、絶えまなく周囲に注意を払っていた。四方から兵士たちの雄たけびが聞こえる。

鎧の打ち鳴らす金属音ががちやがちやと響く。

「うるさすぎる鶏には罰を与えてやらなくちゃな」

石上が腕まくりをすると血管の浮き出た筋肉が盛り上がった。首には小さな子安貝の連なった首飾りを下げている。それがなくなったら石上はどんな容姿になるのだろう、とかぐやは少しだけ興味をもった。

砦にたてこもる四人は作戦会議を行っていた。

作戦の立案は主に翁が行うが、ときどき大伴御行も口をはさむ。眼は見えなくとも敵の位置はすっかり把握しているようだった。その横で真剣に聞き入っているかぐやとは対照的に石上はあくびを連発していた。

地面には翁によって山の地形図が描かれている。

竹取を生業にしているうちに自然と覚えていった寸分たがわぬ地図の上に、いくつかの小石がおかれている。これは敵軍をかたどったもので、石の大きさによって兵の量を示している。

かぐやたちの近くにはもちろん、三山村の名前の由来となったほかのふたつの山の頂と、村の入口にも大きな石が配置されており、帝のいる隣山の頂上には赤い石がおかれている。

「どうせ周りは敵ばかりなんだろう、こんなもの意味あるのかよ」
退屈そうに石上が愚痴をこぼす。

作戦会議に参加していないかれは話題を共有することができず、大人の会話に混ぜてもらえない子どものように手持無沙汰だった。

かぐやは細い眉をひそめて、石上の脇腹を小突く。

「お前は黙って翁の言う通りにすればいいのだ。なんなら散歩がてらそのへんを一人でうろついて返り討ちになってくれてもいいのだぞ」

「俺は強いから大丈夫ですよ」どんと胸を張る。かぐやが黙って股間を蹴りあげると、顔色を変えて悶絶しはじめた。

「……ずいぶんと手荒いことをなさりますね」

大伴御行がなんとなく内股になりながら感嘆の声を漏らす。ふん、とかぐやは舌打ちをして

「あやつとて不死身ではあるまい。それを証明しただけだ」

「これからの戦いに差し支えがないようにお願いしますよ」

「案ずるな、大伴にそのようなことをするつもりはない。してほしいというのなら別だが、そのときは縁を切るぞ？」

「けっこうです」

大伴はきっぱりと断った。

「かぐや様、籠城において最も大事なことはなんだと思われますか」
翁が尋ねる。

「城門を破られないことではないのか」

即答するが、翁は首を横に振った。

「そうではございませぬ。城にこもるうえで大切なもの、それは生命を直接左右するもの、つまり食料と水なのです。この二つがなければどんなに強固な城でも、屈強な兵士がいても内側から崩壊してしまいます。幸い、それは長期戦においてのことですが、私どもの手元には一切の食料がございませぬ。食べ物だけならまだしも水がないのは致命的です。当面の課題は水と食料を手に入れることになります」

「して、どうするのだ」

「雨を待つという消極的な方法もございしますがどうやら数日中に振りそうな気配もありませぬゆえ、なにかしら行動を起こす必要がありますでしょう。川へ水を取りに行くか、井戸を掘るか――」

「このあたりに川はないのではなかったか？」かぐやが首をひねる。
この山には何度か連れてきてもらっているのである程度の地理は知っている。記憶が間違っていなければもつと下に降りていかなければ水源はなかったはずだ。

「仰るとおりです。それに井戸を掘るというのも現実的ではございません。いくら石上様が怪力の持ち主とはいえ地面を掘り下げていくのは至難な技ですし、地下に水脈があるとも限りませんから。それに貴重な戦力を労働力に回すのももったいない」

翁はそこで言葉を切ると、大伴御行に視線をむけた。

「多少強引な手段ですが試してみる価値のある作戦がございます。それには大伴様の力が必要です」

「私にできることならななりと」

「――では」

翁が耳打ちする。

神妙に作戦を聞いていた大伴は、話を聞き終えると怪訝そうな顔

をした。

「それでうまくいくのか？」

「一か八かの賭けでございます。あとは、天のみぞ知る、ということとで」

翁はにやりと笑った。

翁の計略

「おらあつ！」

翁の作戦は、さほど難解なものであることはない。

あまり複雑にしすぎると各自の行動が制限され、有事の際にかえって機能しなくなる可能性が高いからだ。少人数であるならばさらに各自の判断が尊重されることになるため、変に作戦を限定するよりも目的のみを与えてしまったほうがやりやすいという背景もある。とはいえなにも考えず闇雲に攻撃を仕掛けても無駄なので、やはり機先を制してかぐやたちは出陣した。

敵はかぐやに対してでも攻撃の手を緩めることはない。上からの指示でそうなっているのだろうが、かぐやを攻撃しても石上か大伴御行が守るだろうと想定しているのだ。

むろんそれは正しい推測で、石上がかぐやを抱きかかえながら戦闘をすることになる。

これが却って石上のやる気を促すことになるとは計算外だったが、とにかく勇者の名にふさわしい獅子奮迅の働きで活路を開いていく様は圧巻だった。

石上が作った道を大伴御行が疾走する。

目的地までは一直線だ。急勾配の斜面をかけ下り、ときには飛んでくる矢を身をひるがえしてかわしながら両腕に神経を集中させる。うしろのことは石上に任せておけば大丈夫だろう。色々不安なところはあるがかぐやを守るという志においてはなんの心配も抱かない。たとえかぐやと自分の命のどちらを取ると聞かれても、確実にかぐやを優先できるようなやつなのだ。

「……あれか」

目が見えないのにまったく困らないのはなぜだろう、と思う。

たしかに目の前に広がっているのは暗闇ばかりなのだが、なぜか風景の輪郭が浮かび上がって来るようにわかる。それに自分を狙っ

ている視線や殺気も痛いほど感じられる。だから避けることは問題なかった。

——ただ、一事において。

かぐやの顔が見られないのが残念ではあったが。

それも彼女を守る力を得たと考えれば悲しむようなことではない。横から槍が繰り出される予感がする。

当てずっぽうでしかないが盲目になってからこの手の勘が外れたことは一度もない。ひょっとしたらこれも力の一部なのかもしれない、と思う。

「どけ！」

胴をなぎ払おうとのびてきた槍の穂先を跳躍して回避する。

足元のずっと下方を風が横切っていくのを感じる。そうして降り立った先には大量の切りだされた木材が保管されており、太い丸太が何本も積み重なっている。

周囲に兵士の気配はない。

こんな場所を警戒する必要はまったくないからだ。食糧にもならなければ武器になるわけでもない、ただ空き地があったからそこに邪魔な資材をおいていたというだけの話だ。

「木を、燃やしてください」と翁はいった。「この時期の木材はよく燃えることでしょうから、いったん火をつければ燃え広がってきます。そうしたらすぐに撤退いたしてください。あとは神か仏が好きなように決めることです」

「何故だ？」と大伴御行は聞く。それと水を得ることはまったく反対の事柄であり、関係性があるように思えない。

「山火事のあとにはよく雨が降ります。それと同じでございます。木を燃やせば煙が空へ昇り、それが雲となって雨を降らすのです。うまくいくかどうかはお天道様のご機嫌次第ではありますが、試してみる価値はあるでしょう。それに二つ目の狙いとしては敵軍の混乱を誘うことができます。山火事ともなれば全滅は必至、その間は攻撃を仕掛けてくることもありますまい。加えて大伴様の能力がい

にこの戦場で脅威となるかを知らしめることができます」

「……そんなことまで」

「敵に弱点をさらすことなく行動するのは兵法の基本でございます。裏の裏をかくのが戦いというもののなのです」

という翁の眼光は、まるで現役の武将のようにするどかった。

大火力で足元の丸太を包む。

すぐに小枝や枯れかけた葉が赤くなり始めるが、肝心の本体に引火しなければ火はすぐに消えてしまう。焦ることはない。この作業をしているとき大伴御行は無防備になるのだが、その隙を気づかせないために石上が奮闘している。

やがて、焦げ臭いにおいが風に乗って立ちこめはじめる。

見ると黒くなった樹皮の奥で赤い塊がくすぶっている。今日は風が強い。このまま放っておいても勝手に燃え広がっていくだろう。

大伴御行は両腕の龍の刺青に炎を治めると、ひらりと丸太の山から降り立った。

ようやく異変を感じとったらしい兵士が顔をのぞかせ、驚いた表情をする。

大伴御行は目くらまし程度に炎を展開すると、素早く山の斜面にとりかかった。余計な殺生をすることはない、どうせ何人倒したところで大勢は変わらないのだ。

獰猛なクマのように唸りながら力まかせに戦っている石上の姿が見えた。

かぐやを腕のなかに抱きながらの戦いではあるがまったくそれを感じさせない俊敏な動きをしている。ある兵士の突き出した槍が石上の二の腕に命中するが、まったくの無傷のままその矛先をはね返し、振り向きざまに鋭いけりを繰り出す。

格闘家のように無駄がない動きでは決していない。

それを有り余る筋肉で補うことによって、回避不能の速さを生み出しているのだ。

「作戦完了だ。戻るぞ」

敵兵の背後をぬって進み、石上に声をかける。

大納言と中納言という身分の差があるので、大伴が石上に敬語を使うことは少ない。かぐやの面前では丁寧な言葉で話すのを心がけているので穏やかな口調になるが、戦場にあっても冷静な言葉遣いでいるというのはなかなか難しい。

石上は大伴御行を認識すると、くると反転して木立のなかを頂上のほうへ走りはじめた。山肌がめくれあがって下にいる兵士たちに降りそそぐ。意図はしていないだろうが、結果的にそれが目くらましになっていた。

急ぐのには理由がある。

頂上の砦には翁が残っているのだ。

物影に隠れているとはいえ敵に気づかれる可能性も充分に考えられる。翁はこの作戦を提示したとき、自分の身にもっとも危険が降りかかることを承知していたのだろう。

もちろん算段がないわけではない。

敵の目的はあくまでかぐやの捕縛と石上、大伴御行の抹殺であり、砦を奪取することではない。実際、あの場所には戦略的にほとんど価値がないといっていだろう。

たしかに敵より高い位置を確保しておくのは有利だが、それは軍隊同士の衝突の場合であって、寡兵で戦うときにはほとんど意味をなさない。むしろ自分たちの居場所を公言しているぶん不利だともいえるくらいだ。

下るときには疾風の如く目的地にたどりつけたが、登りとなると勝手が違ってくる。

高所にいるほうが敵を迎え討ちやすい。つまり帰還にはより大きな労力が必要だということだ。

「……急がなければな」

角度的に敵を跳躍してかわすというのは不可能だ。そんなことをすれば空中で串刺しになるのは明らかで、仕方なく炎をまともにも人の壁を崩すことはできなかった。

そのとき、頂上から歓声が聞こえてきた。

さっと石上と視線を合わせる。緊急事態かもしれない。

かぐやがそれを察しないはずがない。視線はすでに翁のいる砦に向けられている。

「石上！　すぐに戻れ！」

「それができたら！　苦労しない！」

足が止まっているあいだにも標的を見つけた蜂のように敵がぞろぞろと集まって来る。一瞬でも気を抜けば命はない。

「はやく！」

かぐやがしきりに石上を急かすが、足場が不安定なせいもあって思うように身動きが取れない。

横一直線に大伴御行が走り抜けると、石上の腕をつかんだ。

「私を投げろ」

「はい？」

「このままじゃ全滅だ。私を出来る限り遠くへ投げろ、そうすれば状況を打開できる」

「石上、やれ！」

かぐやが怒鳴りつける。

「肩が抜けても知らねえからな」

大伴御行の腕をつかむとぐるぐると回転し、その勢いが頂点に達したとき、天高く大伴御行が打ち上げられた。最初は雷のような速さで放たれた大伴御行だが、次第に勢いを失い落下をはじめる。

眼下の枝葉で落ちる衝撃を和らげながら着地したが、肩に激痛が走った。

「……石上の言った通りか」

空中から突如として現れた大伴に啞然としている兵士たちの間隙をついて猛然と頂上へ向かう。予想以上に石上が距離を稼いでくれたおかげで、翁がいるはずの場所まではあと百歩ほどになっていた。状況は芳しくない。

こちらの戦力がいないことを見てとった敵軍は翁の期待に反して

攻め入っていた。といっても、戦う相手が誰もいないのだから足を進めたという方が近いだろうか。

幸いまだ翁は発見されていないようだが、砦の内部のあちこちに敵兵が散在しており、見つかるのも時間の問題だった。

「――やるしかないか」

炎の渦を自身の周囲を包むように広げる。

まるで紅い繭のような物体。違うのは尋常でない熱気を放っていることだ。

「……なんだ、あれは」

茫然と敵兵がつぶやく。

もはや奇術の域を凌駕している。炎を自在に操るだけなら狐の化けたものでもできると聞いたことがあるが、人間が操る力としては異常だ。

「手加減をしている余裕はない。すまないが死にたくなかったらどいてくれ」

巨大な火球は砦の中央に向かってものすごい勢いで突撃してくる。帝の兵士たちは、いくら精鋭ぞろいとはいえ、その圧倒的な能力の前に次々と道をあけていく。

炎の球に槍を繰り出そうという猛者がいても、その周囲の熱気に妨害されて思うように近づけない。大伴御行の通ったあとには小さな火種がいくつも残された。

自分たちで作った柵さえ焼き捨て、見張り台の付近に向かって走る。これが健常者であれば視界がなくて困るところなのだろうが、盲目の大伴御行にはまったく不都合なく、攻守一体の火の球を支えていた。

「翁！」

かがんでいた老人の小さな気配を感じ取る。

それと同時に。翁をまきこんでしまわないよう火球を解除する。

「大丈夫ですか？」

「こうなることくらいは予想しておりましたから。ここまで来たら

もう、たとえ私がいなくても大丈夫でしょう。明日の夜まで持ちこたえるのはそう難しいことではございますまい」

「なにをいうんですか。あなたがいなければかぐや様が悲しまれます。それでいいのですか」

「……正直を言うと、私は少し怖いのでございます。この大軍を相手に、いったいどうやって戦っていけばいいのか、これ以上の策も思い浮かびません。私は、自分が死ぬ以上に、かぐや様が死ぬ姿を見てしまうのではないかと恐れているのです。この老体がどうなってもかまいませんが、かぐや様まで失ってしまったては私の生きていく価値は微塵もございません。どうか、私の身はどうなっても構いませんから、かぐや様をお助けに行ってください」

「かぐや様には石上がついています。彼なら心配ありませんよ」大伴御行がやさしく諭す。

翁の眼からはぽろぽろと大粒の涙がこぼれだしていた。乾いた老人の肌を伝っていく涙は、ひどくゆっくりだった。

「あとはかぐや様をお守りしながらこの場を守り抜けば、月からの迎えがやって来ることでございましょう。そうなれば私の役割はお終いでございます」

「――翁は月へいらっしゃらないのか」

おどろいた口調の大伴御行。

「かぐや様がお探ししているのは勇者でございます。この落ちばれた男ではございません。私は、月の国には参れないのです」

「それはら、なおさら生きるべきです。生きて、かぐや様をお見送りするべきでしょう」

「――それだけじゃない。私は負けるのも怖い。普通に考えれば四人で二千の大軍に立ち向かうなどというのが無理な話なのでございます」

「昨日までの勢いはどうされたのですか。この戦に負けたところで、逃避行に出ればいいだけのことでしょう、そんなに悲観的になることはありません」

「……実質、逃げてもその先に待っているのは死よりも辛いものになりましょう。地球に舟があったとしてもどうやってそれを見つけ出すのでしょうか、見つけたとしても使える保証もありませぬ。不確実なものを探し続けるのは、心が堪えられないものでございます。それに、時間が経ち過ぎてかぐや様もどられたときには手遅れだったということになっては本末転倒、それこそ生き地獄でございます」

大伴御行は、翁の言い分をしずかに聞き届けると、翁の肩に手をかけた。

細い、骨ばった肩だ。余分な贅肉などは一切なく、いままで質素な暮らしをしてきたのだろうと察せられた。

「未来が怖ろしいから死を選ぶなどというのは愚者の所業です。生きていさえすれば、どのように暗い未来でも挽回する機会がおとずれます。現にかぐや様もそうでしょう、いちどは月の国を追われながらも必死に自分のすべきことを成し遂げようとする、それをあなたが先に諦めてしまっただけなんですか？」

「――それは」

言葉に詰まる。

大伴御行の理屈はまったくの正論だった。それでも体の震えはとまらない。本能的な恐怖が戦場には満ちている。

「あなたもかぐや様を想う一人であるならば、最後まであきらめてはいけません。私たちはたったの四人しかいないのですから」

そうでしょう、と。

大伴御行は肩にかけていた手を、翁の右手にすっと差し出した。

ほんのわずかな逡巡のあと、翁が力強く握り返した。

「指示は？」

「まずはこの砦の内部にいる敵を追いかえすことが必要です――が、そろそろ頃合いでございます」

翁は石上たちが戦っている方角へ視線をやった。その先には大伴御行が火を放ってきた丸太置き場があり、黒い煙をもくもくと立ち

昇らせていた。

焦げ臭い木の匂いが鼻をつく。

そのとき、背中越しにほら貝の音が響いてきた。朝方聞こえてきたものと同じほら貝ではあったが、音がまったく違っていた。銅鑼太鼓も打ち鳴らされているようで、帝がいるはずの場所から等間隔の信号が伝達される。

「火攻めだ！」

と、敵軍の将校らしき立派な鎧をまとった騎馬兵が怒声をとばす。あわててそこら中にたむろしている雑兵たちが槍をかかえて自陣へと撤退をはじめ、みるみるうちに人影が消えた。

「山火事にでもなれば密集した敵の全滅は確実。いまはその危険性に気づいたのでございましょう。もしかすると山一面の木を切り落とすようなこともあるかもしれないませぬ——三山村のみなには申し訳ないが、かぐや様のためでございますから」

「翁もなかなかの親馬鹿ですね」

大伴御行が苦笑する。

「聞いていたのですか？」

「聞こえてしまうんですよ。感覚が鋭敏になり過ぎているようでして」

「なんともお恥ずかしい限りございます」

翁は顔を赤らめた。秘密裏の会話が他人に聞かれていたとなると、どのような年齢になっても照れくさいものだ。

しばらく騒音のような敵軍の指揮系統がせわしく機能して、潮が引いて行くように敵軍は視界からいなくなってしまった。かぐやを抱えた石上が不思議そうな表情をしてもどって来る。

「いったいなにがあったんだ？ 急にいなくなっちゃった」

いつの間に上裸になったのか石上は服をはだけさせ、岩のように固い胸襟に汗がしたたっていた。こちらにまで熱気の伝わってきそうな暑苦しさだ。

「その前に離せ石上！ これ以上は堪えられない！」

かぐやがじたばたともがき、石上の腕から脱出する。彼女のあでやかな着物には石上の汗がぐっしりとしみこみ、変色していた。露骨に顔をしかめるかぐや。

「これも翁の策略のうちです。敵はしばらく攻撃を仕掛けてこないでしょう」

大きなため息をつくかぐやを憐れみながら大伴御行が説明する。

石上はかぐやの様子な気に留めるそぶりもなく、がさつに笑いながら空を見上げた。まだ雲はない。秋特有の、薄い青空が広がっているだけだ。

「そりゃあよかった。かぐや様にも格好いいところを見せられたし、俺は満足だ」

そういつて地面に仰向けに寝転がる。眼をつぶったかと思うと雷鳴に負けず劣らずうるさいいびきをかきはじめた。かぐやは再び大げさに嘆息する。

「どうにかならぬのか？」

「昔から貴族らしからぬ男でしたが、最近はさらに悪化しているようです。こればかりは本人の問題ですから私にはどうしようもありませんが」

大伴御行もやれやれと気苦労のつまった言葉を吐きだす。

大男は気持ちよさそうに晴天の下で寝転びながら、幸せな夢でも見ているのだろう。口元がいやらしく歪んでいた。

戦う者、戦えぬ者

「私どもの有利な点は、相手方に今夜までという期日を知られていないことにごさいます。帝の性格からしておそらく今日にでも一斉攻撃を仕掛けてくることでしょう……それさえしのげば、月からの迎えを待つことができます」

「かぐや様、月の国の使者というのはどのような形で現れるのでしょうか。それだけでも分かれば対処もしやすいかと」

大伴御行が質問するが、かぐやは首をひねった。

「わたしにも分からぬ。おそらくはあのような舟で」と、地球にやって来たとき搭乗していた緑色の飛行船をあごで指し示す。「迎えにくるはずだ。あれよりは大きいとは思うがな」

「どうしてですか？」

「わたしが使ったものはあくまで緊急脱出用の船だったから、一人が乗れて地球まで安全にたどり着けばいいだけの性能しかなかった。だが月にもどるとなると、予言にしたがって勇者を同伴するだけのゆとりと、それなりの装備が必要になってくる。中型の舟でなければそのようなことはできない」

かぐやの言う中型の船がどのくらいの規模なのか見当はつかないが、それは些細な問題だった。月から迎えが来てくれれば万事解決なのだ、あとのことは考えなくともいい。

昨日の火計が功をそうして帝の軍勢は後退を続け、いまでは山の中腹にまで陣を下げている。

かぐやひとりをとらえるために大勢の被害が出たとなれば、物理的な面だけでなく、その指揮官の名声をも下げることになってしまう。

帝が望んでいるのは完べきな勝利であり、かぐやだった。

「どちらにせよ今夜になればわかることだ」

そういつてかぐやは空を見上げた。

翁の予想通り、大伴御行の放った火はまるで生き物のように山を飲み込みかけたが、帝の兵士たちによる必死の消火活動によって半日後には消し止められた。

黒い山肌の露出している部分を視認できるほどの火災であったから、煙がそのまま雲になったように、その夜にはひとしきり雨が降った。秋の雨は冷たかったが、大伴御行が火をだしたので暖をとることはできた。

「今宵は満月にございます。どうか月の加護が、皆さまに与えられますように……」

翁が、天に祈った。

激しい戦いだった。

それは本来、戦になるはずもない戦い。

多数の力をもった者たちが、弱者を一方的になぶるべきものだったのだ。勝負は最初あら決しているはずであり、勝敗がひっくりかえることなどありえない。

いくら超人的な力を有した男たちがいるとはいえ、彼らには守るべき人がいた。

彼ら一人ならば圧倒的な力の前から身をひるがえして逃げ隠れることもできただろう。それはすなわち敗北だった。だが、刀を交わしたところで結果が変わるわけではない。

敗北が近くなるだけだ。

それを最も感じているのは、当の本人たちだった。

早朝からいつ果てるとも知れぬ数の大群を相手に、休む間もなく命を賭して戦わなければならない。常に死線がすぐそばにひかえているという極度の精神状況が、肉体だけでなく心をも蝕む。一瞬の油断が、敗北に直結する。

戦う力のないものたちにとって、戦場はもっとも苦しい。

自分たちが足手まといになっていることを痛感せずにはいられない

いからだ。戦いたいと思う気持ちとは裏腹に、いなくなってしまうという強い願望が顔をのぞかせる。

なにも役割の与えられない、ただの人形。

血の匂いや、肉の裂ける音がするたび、それが自分に降りかかっているかのような錯覚に陥る。いつそうなってもおかしくはない状況が奇妙な意識を生み、死にかけているだれかと同化し、まるで我がことであるかのように思ってしまう。

武器さえあれば、と願うが、それすらもかなわない。

たとえ月の国の最新鋭の武器を手にしていたところで戦力になれるとも限らない――人を殺す感触を、かぐやはまだ知らなかった。

石上はその怪力と傷の付かない強靱な肉体で敵の群れに攻撃を仕掛けてはまるで子供をいなすようにあしらい、屈強な兵士たちを威圧する。大伴はその類稀な能力で攻守万能の紅蓮の炎を操り、戦場の端から端までを支配下に置く。

その戦いぶりは一騎当千などという比ではなく、阿修羅のごとく顔をゆがめながらがむしゃらに動きまわっている。そのなかでかぐやと翁は、必死に敵の目をかいくぐりながら身を隠そうとした。

翁の鋭い観察眼によって割り出されるかくれ場所は、それなりに時間を稼ぐことはできたが、それも一時的な対処に過ぎない。どうあがいたところで四千の瞳をかいくぐり続けることは不可能だった。「かぐや様――ご無事ですか！」

血で染まった着物をまとった大伴御行がかぐやに声をかける。

あたりは血のような夕暮れに染められ、大伴御行の服とさほど変わらぬ色が地面を彩った。彼の両目は赤よりも紅く、しきりに動いている。

「……なんとかな」

荒い息をしながらかぐやがこたえる。

物影にかくれていられるのはほんのわずかな時間だけだ。翁の指示する影から影へ、太陽を恐れるかのように逃げまどうあいだ、敵の眼前に身をさらしている瞬間は生きている心地がしなかった。

「じきに夜になります。あとすこしの辛抱です」

大伴御行がかぐやを励ます。

敵はあふれた河の水のように大地をおおっている。竹取を生業とする翁は普段から山を登っているためかかぐやよりは消耗していなかったが、それでも年齢と長時間の緊張状態から来る疲労はかくしきれない。

「翁、この攻撃はいつ終わるのだ？」

「――おそらくは、日が暮ればいちど撤退するものかと。敵の被害も微小ではございませんゆえ」

肩で息をする翁の様子からは、限界が近そうだと見てとれる。

だが、その瞳はいまだに敵軍を間断なくにらみつけており、あきらめた色はまったくなかった。

「頑張りましょう。あとわずかでございます」

「ああ――」かぐやはそつと物影をでる。「死ぬなよ」

「月の国に行かないことには、死んでも死にきれませんから」

そういうと、大伴御行は囀となるため派手に炎を振り回しながらかぐやたちと反対方向へ飛び出し、そのまま駆け去っていく。かぐやと翁は敵の注意がそれる隙について、鼠のように山の斜面を移動する。

足を踏み出すたび、枯れ葉の乾いた破裂音がする。

それさえも戦場では命運を分ける作用になる。かぐやの額には汗がにじんでいた。

山の稜線に半分ほど身をかくした太陽が、ゆっくりと夜を迎えている。断末魔のような赤い日差しがようやく消えると、突如として強い風が吹荒れた。

「翁！」

顔をかばいながらかぐやが叫ぶ。

木の葉や小枝が雨のように降りかかって来る。名前を呼ばれた老人は、かぐやの小さな手をしっかりと握りしめた。

「戻りましょう。あの場所へ」

遠方からほら貝の大きな音色が響いてくる。撤退を知らせる合図は、子守唄のように聞こえた。

潮が引くように敵兵が計画的に陣地へ戻っていく。追撃するだけの気力は、もうどこにも残っていなかった。

ふらつく足に鞭打って、頂上の砦に帰還する。

そこには上半身を返り血と汗で濡らした石上がどっかりと胡坐をかいて坐っていた。眼をつぶって瞑想を行っているらしい。

「石上、けがはないか」

かぐやが倒れこむように腰をおろして尋ねる。石上は口だけを動かしてこたえた。

「かぐや様こそ、平気ですか」

「わたしは大丈夫だ――少々、疲れはしたがな」かぐやは無造作に垂れる黒髪をうしろへまとめた。

「ならよかった」

「瞑想などお前らしくないではないか。いったいどんな心変わりだ？」

「人の命を奪うってことは、そいつらの人生に責任を取らなくちゃいけないってことだからな。おれはその決意もないままに戦いをはじめちゃった――だから、こうして気持ちを鎮めてんだよ。死んでいったやつらの分まで、戦ってやらなきゃ失礼だ」

かぐやは石上の言葉を聞くと、みずからも足を組み、ひとつ大きな深呼吸をした。

「それはわたしも同じだ。わたしのために犠牲になった者たち、わたしを信じて最後まで戦ってくれた者たち、そしてお前たちの殺した兵士たち――そのすべてを、わたしは背負おう。月の姫として」

「なかなか立派な心がけじゃねえか」
そういつて、石上は小さく笑った。

しばらくすると大伴御行が帰って来た。ふたりして瞑想にふけっているかぐやたちを見ると、すぐに事情を察して、終わるまで声をかけなかった。

「敵は死傷者を回収しているようです。おそらく、それが済めばいまいちど大きな攻撃が来るものかと」

「夜襲か」

石上がつぶやく。

「その見込みは高いでしょう。帝としてもそろそろ決着をつけてしまいたいはずです。長期戦になればなるほど相手の損害は増えていくばかりでございますから、短期決戦で一気に勝負を決めてしまいたいと考えるのが普通でしょう」

翁が冷静な意見を述べる。

かぐやが空を見上げると、そこには太陽をなくして暗い空と、ようやく姿をあらわしはじめた満月が、ゆっくりと動き始めているところだった。

月がのぼるころ

翁の予想したとおり敵軍は日が暮れてから目に見えて慌ただしくなった。うすい赤色の松明の光がしきりに揺れ、伝令のための騎馬が山のあいだを行き来する蹄の音がよく聞こえてくる。

これで決着にするつもりなのだろう。もはや戦の予兆をかくそうとはしていなかった。

前線に槍を構えた兵士たちが規則正しく並び、逃げ場のないように頂上にある砦の周囲をぐるりと包囲する。何層にも隊列を組んだ陣形のどこにも隙は存在していない。

兵士たちのうしろには騎馬に乗った男たちが控えていて、背に弓をたずさえ、馬の背をなでている。

満月の夜は足元が見えるくらいには明るく、火がなくとも移動に不便することはない。

かぐやたちは見張り台の上で寄り添い、敵の様子をながめていた。「――向こうも本気のようにですね」

松やにの焼ける焦げたにおいを敏感に嗅ぎとりながら大伴御行がつぶやく。

血に濡れていた着物はすっかり乾いたが、痛々しいまでのまだら模様は消えることなく染みついていた。

「怖いかな？」

かぐやがたずねる。

誰もこたえようとはしなかった。

言葉を発するのさえためらわれるような静寂が秋の夜を包みこみ、風が静かにかぐやの髪を撫でた。

銅鑼太鼓の激しい音が山のむこうから鳴り立ててきたのは、それから間もなくのことだった。鉄の足音が音楽のように間隔をそろえて近づいてくる。

「さてと、ちよっくらやってきますか」

いちばんに石上が飛び出していく。敵もひるむ様子はない。力と力がぶつかり合い、はじけた。

「私も行きましょう」

大伴御行がけん制するように龍の形をした炎を召喚し、敵軍の頭上を旋回させる。ぱらぱらと火の粉の落ちる様はまるで光る雪のようだった。

「かぐや様、私どもは楼閣の上に居りましょう」

「逃げなくてもいいのか？」

「大將があまりこそそしては士気にかかわるというものです。月の国から迎えが来るまでのあいだまでなら、ここに座っていても大丈夫でございます」

「万が一のことがあった場合は、そこでお終いか」

「いいえ」翁が強く否定する。「たとえどのようなことがあったとしても、かぐや様は生きて、御自分のすべきことを成し遂げてくださいます。そのためならこの老いばれはどんなことでもいたします」「そうか」振り向いたかぐやの眼は赤く充血していた。「ならば、翁、お前は生きろ。わたしにどのようなことがあったとしても、生きてくれ。もしお前まで死ぬようなことがあってはわたしは堪えられなくなってしまう。死なないでくれ、お願いだから。わたしをひとりにはしないでくれ……」

翁は、緊張が解けたように優しくほほえんでかぐやの頭をなでた。そして、恋人がするのとは種類の違う抱擁をした。

「あのお二方がかぐや様には付いております。私の力などではなく、かぐや様自らが勝ち取った心でございます。かぐや様は、きっと、月の国の姫にふさわしいお人になることでございましょう。私は、それをこの村から見守っております。約束いたしましょう」

「……ああ」

かぐやはゆっくりと翁の細い胸からはなれ、目じりをごしごとぬぐった。余計な服は邪魔になるので着ていない。身にまとっているのは最低限の着物だけだった。

石上の怒鳴り声が聞こえる。

見ると、数百人も兵士を相手取って戦っていた。正面の敵に注意を払っていると、すぐさまそのほかの方角から槍が突き出される。いくら丈夫な皮膚をしているとはいえ、幾度となく繰り返される攻撃を受け、血が滲みはじめる。

「石上――」

徐々に傷ついていく。

それはまるでなぶり殺しにされていくかのように。

「かぐや様……」

「目を逸らしてはならないのは分かってる。だが、辛い、ものだな」
絞り出すように言葉を紡ぐ。

背後では大伴御行のあやつる火龍が縦横無尽に駆け回っているが、それだけですべての攻撃を避けきれぬわけではない。数に任せて間隙をついた数名の兵士たちが接近し、槍を繰り出す。

大伴御行は攻撃の気配を鋭敏に感じ取り、強化された身体能力によって武器の切っ先をかわす。だが、大伴御行の注意がそれた瞬間に敵の兵がどっと流れ込み、次々と大伴御行を包囲した。

もはや炎を動かしている余裕はなく、回避に専念する。

しかしそれもすべてを見切れずに右肩を刺された。どっと血が噴き出す。かぐやが小さく悲鳴を上げた。大伴御行の足元にはぼたぼたと赤いしずくが伝い落ちていく。

「このくらいの傷で倒れているようでは、月で戦えるはずもないです」

口の中でちいさくつぶやく。

そして、肩を突き刺した兵士を槍ごと火柱で包みこんだ。吐き気をもよおす、人体の焼ける匂い。もう嗅ぎ慣れてしまった。

「かぐや様、これが戦争というものでございます。たくさんの人々が傷つき、殺し合い、命を賭して戦う」

翁がきびきびとした口調で告げる。

「ですが、戦いの先に待っているのは希望でございます。人は、希

望のために戦うのです。希望のない戦争はただの虐殺にしかありませんが、かぐや様は希望のために戦うのです」

月に取り残されているラングネの民、勝利を収めることなく死んでいった兵士たち、王族、じい、父上、その無念を晴らすためにもかぐやはきつ、と夜空を見上げた。

そこにはまだ、待ち望む舟の姿はない。

「あっ」

石上の脇腹に、折れた槍の穂先が深々と貫通していた。

呼吸が荒くなる。敵兵だけでなく、痛みとも戦っているのだ。体が動いたたびに、刺さったままの槍の柄もいっしょに動き、それが肉体を傷つけていく。多くはないが血がこぼれている。槍を抜けば、大量に出血するのは明らかだった。

その時だった。

石上の脇を一隊の兵士たちがすり抜け、かぐやたちのいる見張り台のほうへかけてくる。翁がさっと身がまえた。手元にあるのは、竹を尖らせて作っただけの簡単な竹やり。

これでどうにかなるはずもなかった。

事態に気づいた大伴御行があわてて戻ろうとするが、人の壁に遮られてかなわない。五、六人の男たちは楼閣につながるはしごをのぼってくる。

翁が頭をにゅっと出して、はしごに取りついた先頭の小柄な男に槍を突き出した。

男はとっさにかわそうとして体勢を崩し、地面へ叩きつけられたが、すぐさま次の兵がとりついてくる。三人目の男は翁の槍をつかみ取ると、そのまま思い切り引っ張った。

手を離すのが遅れた翁の軽いからだだが、地面へ落下していく。そうして、先ほど落ちて気絶していた兵士の上に覆いかぶさるようにぶつかった。ピクリとも動かない。

兵士たちは翁などには目もくれず、かぐやにむかって殺到してくる。

懸命にのぼって来る男たちの顔面を蹴飛ばしたりして反抗するかぐやだったが、それもわずかな時間稼ぎにしかならなかった。

ひとりがかぐやの背後に回り込み、有無を言わさず羽交い絞めにする。

「離せ！」

むき出しになっている脛のあたりを思い切り蹴りつけるが、男は手を緩めない。続いてやってきた男たちに四肢をつかまれ、まったく身動きが取れなくなった。

男たちはひもで手足を縛りつけようとする。

あらん限りの大声を出して、かぐやは抵抗した。が、屈強な男たちにかなうはずもなく。

あつけないほど簡単に拘束され、担がれたまま梯子を下りていく。
「離せ！ 離さぬか！」

かぐやの右足を押さえつけている兵が舌打ちをしてこぶしを振り上げたが、それを大男が静止した。

「やめろ。傷を付けてもしたら手柄どころか死ぬことになるぞ」

「……」

それを聞いて、殴りつけようとした兵士は口元を醜く歪めた。かぐやを帝に献上したときの褒美のことを想像してにやついているのは、誰の目にも明らかだった。

「それにしても、本当にいい女だな」

大男がかぐやの髪をなでる。

必死に頭をふって逃げようとするが、男の手は確実にかぐやの髪をすいていく。

「陛下でなくったってこんな女が手に入るならなんだってするぜ。そんだけ上等な女だ」

「伍長、ちょっと楽しみませんか？」

先ほどこぶしを振り上げた男が口をはさむ。大男は少しだけあごに手をあてて考えた。

「――傷をつけないまでも、すこしばかりあそんでやるのも悪くね

えな。要はばれなければいいんだ。それに」いやらしい笑みを浮かべる。「こんな女は二度とお目にかかれるもんじゃねえしな」

「じゃあ、さっそく」

件の男がかぐやの服に手をのばしかけたとき、背後から大きな叫び声が聞こえ、男の胸から竹の先端が突きだした。

「――え？」

自分を殺したのがだれであるか確認することもできずに、男がひざから崩れ落ちていく。右足を持っていた男がいなくなったせいで、かぐやは大きく体勢を崩した。

「……はあ、はあ」

ゆっくりと翁が竹槍を引き抜く。

残っているのは大男を含めた三人のみだったが、そのうちのひとりが逆上したかのように打ちかかって来る。翁はそれを読んでいたような槍筋でいなすと、柄で顔を殴りつけた。

「爺さん、おれの大切な部下をやってくれるじゃねえか」

残りのふたりがかぐやを放置していつせいに襲いかかって来る。

翁にそれを回避するだけの俊敏さは残っておらず、大男の剣をふとももに浴びてしまった。

「わたしのことは構わず逃げろ！」

かぐやはじたばたしながら叫ぶが、手足を結んだ紐がほどけずその場を動くことはおろか、上体を起こすことさえできない。

翁も足を切られ、座りこんでしまった。

「翁！」

その瞬間、翁が最後の力を振り絞ってなげつけた竹の槍が男の首をつらぬいた。唯一生き残った大男はずかずかと翁へ歩み寄ると、武器を持たない老人の首をしめ上げた。

「やろう……！」

「やめろ！ やめなければわたしは舌を噛み切って自決するぞ！」

「知るか！ このクソ爺を殺さねえことには気がおさまんねえんだよ！」

翁の顔色が見る見るうちに青白くに変色していく。最初はもがいていた手足も、動かなくなる。

「やめろ！」

「うるせえ！」

「頼むから、やめてくれ！」

かぐやの哀願に大男が耳を貸すことはなく、手に込めた力を増していく。

喉が枯れるほど叫ぶ。

目の前が暗くなりはじめ。月明かりの下で行われる殺戮は、あまりにもむごたらしかった。

——そのときであった。

一筋の光線が、大男の背中に命中した。大男は翁の上に覆いかぶさるように崩れ込む。

「翁！」

芋虫のようにはいつくばりながら翁のもとへ行き、大男をどかす。翁は矮小な呼吸ではあったが、しっかりと息を吸い込むことができていた。

「よかった……」

そして、うしろをふりかえる。

戦場にいるだれもがその船体に目を向けていた。

家ほどもある大きさの青い物体はすべてが流線形で、ひとつだけ船主の下方に突起を備えていた。ほかは曲線の表面をしており、月光を受けて白く反射していた。

地面から人ひとりぶんほどの高さで浮遊している。船内をうかがうことはできなかったが、空気の漏れる音ともに、なめらかな表面に亀裂が入った。

亀裂は大きくなり、内部から光が漏れだす。

その光を遮るようにして、ひとりの女性が出てきた。彼女もまたかぐやと同じように美しい容姿をしていたが、翁が最初にかぐ屋を発見した時と同じ、見慣れない衣装をまとっていた。

女はかぐやを見つけると、すべるように船体を下り、かぐやの手足を拘束している縄をほどいた。そして、両目に涙をあふれんばかりにためて、かぐやの前にひれ伏す。

「――ようやく」かぐやは立ちあがって、夜空を見上げた。「ようやくだ」

満月は、天頂に位置していた。

月の使者

「たいへん遅くなってしまう申し訳ありませんルア様、敵の監視の目をかいくぐるのに予想以上に手間取ってしまいました。ラングネのみんなもルア様を今かいまかとお待ちしております」

平伏したまま女が口上を述べる。髪は短く、身長はかぐやと同じように小柄で、ほんのりと青みがかった洋服をきている。

かぐやは、弱った翁の腕を肩にまわして体重を支えながら、その小さな女性に声をかけた。

「クレアか？」

「もしかして、あたしの顔を忘れてしまったんですかルア様。あんなに仲良くしてたのに……」

しくしくと泣きはじめる。

地球に来てから半年余りが経って、長らく会っていなかったものだから少し自信がなかったのだが、いまのやり取りで確信した。この性格は変わっていない。

「――なにをしに来たのだ」

「なに、って、それはあんまりですよ。あたし死にそうな目に遭いながら地球まで来たんですからね。この船を操縦するの大変なんですよ」

「わかったわかった。愚痴はあとで聞こう。それより今は勇者たちを助けてやってくれ」

もっと適任な人材がいたのではないかと思うが、ケチをつけていられる場合ではない。巨大な飛行船が到着したことで誰もが啞然としていたが石上と大伴は負傷しているし、翁も自力で歩けない。とにかく今は一刻も早く戦場を離脱するのが最優先だった。

「え？　勇者ってひとりじゃないんですか？」

クレアが目を丸くする。

「――困ったなあ」

「なにか問題があるのか？」

「ルア様、勇者様って何人いるんですか？」

「ふたりだ、いちおうな」

「この船、四人乗りなんです。どうしよう、あたしとルア様と、勇者様たちを乗せたら、定員オーバーになっちゃいます。月まで帰れないですよ」

「お前をおいていけばよろう」

「そんなあ。あんまりですよ、わざわざ地球まで来たのにルア様と離ればなれになるなんて、そんなにあたしのことが嫌いですか」

「……はあ」

やはり人選ミスだ。とにかく、大伴御行と石上を救出しなければならぬ。大伴御行は舟がやってきた隙をついてこちらへ向かっているが、石上は敵と一緒に啞然としているようだった。

「クレア、その船に武器はどれだけ装備されている」

「えーと――さっきあの大男に使った小銃だけです。基本的に戦うための船じゃないから。それに、地球人ってみんな大きいんですね、勇者様はもっと背が高いんですか」

無駄口は叩いてられない。

かぐやは大声で石上に呼びかけると、翁を船内へ運び込もうとした。背中、小さなうめき声がある。

「離してくださいませ……」

「あまり無理に喋るな。体に障る」

「話は聞いておりました。私はここへおいていただく。いまは大伴様と石上様を月へお連れするのが先決にございます」

「そんな無理が通るか。この場に放っておくことなどできるわけがない」

「かぐや様」翁が強い口調になる。「この老いぼれを置いていくのと、月の人々を助けに行くのでは、どちらが多く命を救えると思いますか。目の前の小事にこだわってはいけません、ときには大局的な考え方をするのも必要なのでございます」

「いやだ。わたしはそんなことは認めない」

「いけません、このまま議論をしている時間がもったいのうございます」

「やだ」

「かぐや様！」

翁が珍しく語気を荒げると、かぐやは耳をふさいで首を横に振った。

「わたしはいったはずだ、死ぬなど。約束した。それを破るつもりか！」

「――申し訳ございませんぬ」

翁がうなだれる。かぐやは力が抜け、放心したように座り込んでしまった。地面に接する翁の脚からは、先ほど大男に刺されたせいで出血が起きている。

「ひとりで歩けぬようなものを連れていく余裕はございません。どうか置いていってくださいませ」

「あの……」

クレアがオレンジ色のカプセルを差し出した。小指の爪ほどの大きさのカプセルが二錠、手のひらで転がる。

「本当はルア様になにかあったときのために使おうと思っていたんですけど、よかったらこれ、飲んでください」

そういつて強引に翁の右手に握りこませる。

翁は不思議なものを見るようにしげしげと蛍光色のカプセルを観察し、クレアの顔を見上げた。

「これは……？」

「薬です。あなたが何様か知りませんが、ルア様の大事な人なら、あたしの大事な人ってことです。だから使ってください。これを飲めばたいいの傷は治りますから。貴重なんですよ、これ」

「クレア、この薬は？」かぐやが問いかける。

「舟に備蓄されていたものです。といってもこの二錠だけなんですけどね。月人の誰かがけがをしたときのために用意されていたみた

いですけど、地球人が使っても大丈夫ですよ」

「そうか。ありがとう」

「やだなあ、ルア様とあたしの仲じゃないですか。もっと頼ってくれちゃっていいんですよ」

なれなれしげに肩を叩いてくるクレア。なぜだか今はすごく頼もしく見えた。

翁は薬を飲むのをためらっているようなので、翁の手からカプセルを奪い取って無理矢理口のなかに押し込む。うっ、といったん吐き出しそうになるのをこらえて、飲みこんでしまうと、翁は荒い息を吐いた。

「数週間もあれば完治して歩けるようになりますよ。それまでちょっと痛いかもしれないけど、まあ死ぬようなことにはならないと思います」

クレアが補足説明をする。

翁は驚いたようにクレアのことを見つめていたが、目からぼろぼろと涙がこぼれはじめた。

「え、ちよつと、なにに。やっぱり副作用があった？」

「かぐや様を、よろしくお願いいたします」

「え？」

あっけにとられるクレアをよそにかぐやは翁を担ぎあげ、船内に連れていく。大伴御行も追いついて来て、転がりこむように飛行船へ乗りこんだ。体中に切り傷や刺し傷があふれている。致命傷はないようだったが、戦うのは相当辛かったにちがいない。

飛行船の内部にはいくつも機器があり、ランプから光を放っていた。前後二席ずつの構成で、前の方の座席はコックピットになっており、操縦桿やスピードメーターも搭載されている。船体は透明ではなかったが、内部からは外の様子がのぞき見ることができる。

「定員オーバーになっちゃいますよ」

クレアが苦言を呈しながら操縦桿を操作し、船体がふわりと浮きあがりはじめた。

地上から弓が数本ばらばらと飛んできたが表面に傷をつけるだけでたいした威力にはならなかった。船体の横にあるドアがゆっくりとしまっていく。

「ルア様、もう一人の勇者様はどうするんですか？」

「石上を救出しつつ安全な場所にまで飛ぶことはできるか」

「あまり遠くにはいくことが出来ません、せいぜいこの山を降りるくらいが限度です」

「それで十分。石上を途中で拾ってから翁を三山村に搬送し、そのまま月に向かうぞ。クレア、やってくれるな」

「ちよっとばかり乱暴な手段になりますけど――それでよかったら、行きますよ。つかまっててください」

舟が浮上をはじめる。

同時に下方向へ引っ張られるような力を感じ、舟のむこうの景色が小さくなっていく。翁は息をのんでその光景を見守っていたが、舟が動きだすと座席の端をぎゅっとつかんだ。

「これは沈んだりはないのでございますか」

「壊れれば沈む。だがまあ、地球の兵器ならば大丈夫だろう。都人の科学力は信頼できるからな」

「はあ」

頭では理解しても本能的な恐怖はなかなかぬぐい去ることができず、翁は落ち着かなさそうにしきりに足を前後させている。同じ地球人の大伴御行は外の景色を観賞しているような余裕はなく、小さく荒い息をしながら椅子にもたれかかっていた。

その様子を見かねたかぐやがうしろから声をかける。

「大丈夫か」

「死ぬような傷ではありません、それに多少は常人よりも丈夫になっているようですから、手当をしなくとも平気です。それよりも早く石上を助けてやってください。わたしよりもずっと体にこたえる戦い方をしているはずですから」

「ルア様、勇者様ってあの大きな人ですか？」

木の高さほどの上空から石上を視認したクレアがかぐやに向かつて尋ねる。

全身に傷を負った大男は舟が到着したのを見ると、ぼんやりとそれを見上げていたせいで敵のなかに取り残されている。しきりに伝令のためのほら貝の音が鳴り響いている、敵も異常を感じ取ったのだろう。急がなければいけないようだった。

大伴とかぐやという標的を失った敵は、石上に集中している。

彼のまわりには人しかなかった。隙間という隙間から槍が繰り出されているのを、どうにかしてかわしているのが現状である。

「そうだ。どうやって助けるつもりだ？」

「フックを引っ掛けます。ちょっと荒っぽいですけど、見たところ頑丈な人みたいですし、すこしくらいなら大丈夫ですよね」

「ああ、遠慮なくやってくれ」

「それでは――」飛行船はのろのろとした速度で石上のほうへ近づいていく。クレアがなにか操作をすると舟の下方にかぎ状の突起が飛び出し、地面に垂れさがった。

「ほんととは地上のものをサルベージするための装置なんですけど。うまくいくかなあ」

などと不安になるようなことをつぶやきながらクレアは舟を進めていく。月光を遮るように飛行船の影が視界に入ると、敵兵はみな一様に上空を見上げて唾然とした。

これにはようやく石上も状況を把握して、ひとりの兵士の肩に飛び乗ってフックをつかむ。その拍子に船体が大きく揺れたが、どうにか持ち直して飛行を続けた。

フックを船内へ引き上げる。

魚釣りのように石上と一緒に船内へ転がり込んだ。生々しい血のあとが壁のあちこちに付着する。それを見たクレアが眉間にしわを寄せた。

「ちょっと、汚さないでくださいよ」

「――すげえな、ここは。まるで天国にいるみたいだ」

「ちょっと人の話聞いてるんですか。勇者様とはいえ今のあなたはお荷物なんですからちょっとは自重してくださいよ」

「雲に乗っているのか。いや、ひょっとしたらおれは死んでいるのかもしれないな」

「ちよっと!」

「すこし放っておいてやってください。死線をくぐりぬけて興奮してるんです。もともと頭の足りない部分が多々ある男ですから、混乱しているでしょう」

「それにしてはあなたは冷静なんですね」

「考えることくらいしかすることがありませんからね。これから私が翁の代わりになって行かなくてはなりません、すこしは頭を使っ

てやらないと」

ふう、と大きく息を吐きだす。

「かぐや様にお怪我はありませんか」

「かすり傷だ、心配するな」
先ほど手足を縛られたときにうけた擦過傷があるが、じゃっかんひりひりするくらいの痛みで、まったく問題はない。それよりも翁のほうがずっと重症だった。

着物をさいてふとももを圧迫し止血を行う。だが、包帯がわりの着物はすぐに赤く染まってしまう。

「薬は利いているのか?」

かぐやが焦りながら聞く。

舟は緩やかに山の斜面に沿って下降しはじめている。村までは数分とかからずに到着するだろう。うしろから敵兵もおってきてはい

るが、空を飛ぶ相手をつかまえることなど不可能だ。
「即効性のタイプじゃありませんから、ちよっと時間がかかります。あたしの見立てだとそれまではもつでしょうね。痛いとは思いますが、我慢してくださいな」

「そのくらいは堪えられます。なに、すこし足をくじいたようなものです」

翁が強がりをいう。額に浮かんだ汗が引いて来ている。死ぬ傷ではない、という安心感が体を包んでいた。

「では、これから月へ向かうのですね」

三山村へ戻り、つかの間だが月の船を着地させる。村のなかにいたはずの兵士たちは総攻撃にそなえて山中へ移動していたようで、いまは村人たちの姿しかない。

豊作だった稲穂は戦がはじまってから大急ぎで刈りいれられ村の端にある木造の倉庫のなかに押し込んである。そのため田畑は少しさびしげな、うす茶色をした稲の茎が水面に顔を出しているばかりだ。村は閑散とした殺風景な田園になっていたが、村人たちには怪我もなく、略奪も行われていないようだった。

翁を船からおろし、嫗に介抱をまかせる。

他の村人たちは月の船を見かけてぞろぞろと家から出てきたが、手には各自こん棒などの粗末な武器を持っており、なんだか物々しい雰囲気醸し出していた。

「そうだ。いままで世話になったな」

かぐやが嫗に礼を言う。

敵が山の斜面を下っている足音が聞こえてくる。残された時間はさほどないようだった。

大伴御行と石上は舟のなかに残ったままで、クレアが従者としてかぐやの近くに待機している。興味深そうに地球の景色をながめたり人を観察したりして、あまり役には立っていなかった。

「かぐや様が来てからというものの、とても楽しい時間でございました。まあ、大変なこともございましたが、それ以上に私どもにとっては嬉しいことばかりで——こんな話は失礼かもしれませんが、まるで我が子を見ているような心持ちになっておりました。その子どもが、大志のために旅立つのだから、これより喜ばしいことはございません。どうかお氣をつけて」

涙を浮かべ、嫗が別れの言葉を告げた。その横で嫗の肩につかまりながら、翁も片足立ちでかぐやの顔を優しげに見つめている。

翁とのあいさつはもう済ませたつもりだったが、去り際になるとどうしても足りないような気がしてきてしまって、自然と足が重たくなる。

「ふたりとも、このような厄介者の世話をして大変だっただろう。月の民でもないあなたたちを利用してしまったこと、すまなく思っている」

「滅相もございません。かぐや様に助力したのは私どもがしたくてやったことでございますから、お気になさることはございません」

「だが、なんども命の危機に迫りやってしまった。それは私の責任だ」

「この年齢になってようやく誰かの役に立てたのでございますから、これでなんの悔いもなく寿命を迎えられるというものです。かぐや様との思い出は、死んでも忘れることはございません」

嫗は、着物の袖から大切そうに小さな赤色の袋を取りだした。

かぐやの手のひらに収まる程度の大きさで、表面にはなんの刺繍もされていない。

「御守でございます。神社にもいけなかったので御利益はうすいかもしれませんが、どうか――」

「ありがとうございます。わたしからはなにも渡せないのが口惜しいな、クレア、なにか持っていないか？」

「えー、さっきあげた薬くらいしか持ってませんよ。こう見えても余計なものを用意してくる余裕なんてなかったんですから」

クレアが唇をとがらせる。

かぐやはすまなそうに嫗からもらったお守りをふところにしまった。

山の中腹から怒声が聞こえてくる。帝の軍隊が山を下っているのだろう。昇り旗がいくつも揺れながら移動しているのが見えた。

「そろそろ行かなくてはならないようだな」

「遅れないうちに、お早く」

「ああ」

クレアに催促されてかぐやは舟に乗りこんだ。

船内から見る景色は、地上からのものと変わりはなかったけれど壁一枚を隔てただけでどこか違う世界に来てしまったような錯覚に陥る。

「もうお別れはよいのですか」

大伴御行が声をかけた。

相変わらず傷だらけだが、辛くはなさそうだった。

「お前たちこそもう地球には帰って来られぬのかもしれないのだぞ。名残惜しくはないのか」

「かぐや様のいらっしやるところが私の居場所ですから。どこかへ旅立つのもかぐや様と一緒になんてことはありません」

「そうか――」かぐやは赤いお守りを握りしめる。「だれも死ななくてよかった」

「……ルア様、発進いたします」

「わかった」

ゆつくりと目の前の光景が下へ消えていく。かわりに大きな満月をかかえた夜空が近付いてくる。浮上すると、山のあちこちにかがり火の焚かれているのが見えた。

火がとくに集まっているのが帝の居場所だろう。かぐやは眼下をのぞきこむように視線をやった。

「なあ、石上」

「なんですか」

「帝とはどのようなやつだったのだ？」

「……おれには想像のつかないくらい孤独な人だ。だからああやって不器用に人を求めることになっちまう、自分から行動を起こしたのなんて初めてなんじゃないのか。それだけあんたがすごいってことさ」

「そうか……」

脅迫もされ、一度は屈服もした。

だが、どうしても憎む気にはなれない人だった。勇者かもしれないという期待を長く抱きつづけたせいかもしれない。どうであれ、もう出会うこともないだろう。そう考えるとひどく残酷な仕打ちも色あせた。

地表が小さくなっていく。

鬼火のような光が徐々に遠ざかり、山の輪郭さえもおぼろげになる。月光に照らされた地上は暗かったが、あちこちに人の痕跡である火の色が確認できる。

「すげえもんだな」

石上が感心しながら、圧倒的な景色に見入っている。

まるで子供のように無邪気な口調だ。

「どのようなのですか、鳥の目線というものは」

盲目の同伴御行が少々、物悲しそうな声色で誰ともなくたずねた。周囲の気配を感じることはできても、鮮明な映像を感知できるわけではない。石上がしきりに歓声を漏らすのを聞くことしかできないのだ。

かぐやはほの白い月の光から目をそらすと、同伴御行の横顔を見る。

紅いふたつの目が、まるで生きているように動いている。

「寂しいものだな」

「だから、地上に舞い降りるのでしょうか」

「そうかもしれないな。鳥になど、なりたくないものだ」

さらに山肌が離れていく。

湖のようなものが見えはじめる。琵琶のような形をしていて、ほんのりと光を反射していた。

「――となると、京の都はあのへんだな。たしかに明るいや。おれの家は見えねえか」

「ほとんど光が見えないな、どこでもそうなのか？」

「都の近くでもなけりゃ、そんなに栄えてるところはねえよ。みんな

なああの村みたいなものだ」

「月とは大違いだな」

「そんなに繁栄したところなのか、月ってのは」

「少なくとも、地球よりはな」

巨大な湖が小さくなり、いくつかの島々があらわれ出る。大きく分けて四つだが、そのころになるとほとんど闇に包まれてしまい詳細なことは分からなくなる。

そこまではあまりになめらかで、うっとり光景に見とれていられたが、黒ばかりが視界に広がるようになって様々な考えが頭をめぐります。

「ルア様、お腹すいてませんか」クレアが操縦桿を握りながらいった。「オートパイロットになったので手があくんです。簡単なお食事くらいなら用意できますけど」

「おお！ 腹が減って仕方なかったところだ！」

石上が歓喜の声を上げる。

「あんたにはいってない——ルア様、この人ホントに勇者様なんですか。気品みたいなのがまったく感じられないんですけど」

「失礼な！ おれ様は真正正銘の選ばれし勇者だ！——どういうわけだかよくわかんないんだけどな」

「クレア、あんたも同じくらいのレベルだと思ってるから」

「そんなあ」

クレアはコックピットから離れると、舟の後部にある壁面を操作する。いくつかボタンを押すと、壁の表面が割れて棚が出現した。なかにはいくつかの銀色のチューブがはいっている。

おもむろに人数分を手にとると、クレアは一人ずつチューブを配る。適度に冷えた感触が、心地よかった。

「どうやって食うんだ？」

石上が不思議そうにチューブをながめる。

「ふたを開けて飲んでください。ほら、かぐや様みたいに」

すでに慣れた手つきでチューブを口にくわえている。中身は半液

体のジュエルのようなもので、甘ったるい味がした。大伴御行とクレアもその味を楽しんでいる。

石上だけが最後まで苦戦していたが、クレアにチューブをあけさせて美味しそうにありついた。

「月に到着するまではどのくらいかかるのですか」

大伴御行が質問する。

チューブはすぐに中身が空になってしまったが、不思議と空腹感
は薄れた。

「だいたい半日くらいです。何事もなければ」

「では、その時間にいくつか聞いておきたいことがあります。月の国について、そして、かぐや様のことについて――」

クレアが、ちらりとかぐやのほうを見る。

かぐやはしつかりとうなずきかえした。

「わたしは、ラングネ国の第一皇女、かぐや・ミリーナ・ルアとして生まれた――」

かぐや姫の生い立ち

父親は厳格な人で、母は幼いころに病気で死んでしまったと聞かされている。とてもきれいな人だったということは覚えているけれど、記憶に残っているのはたつぷりと髭を貯えた父親の姿ばかりで、母のことはあまりよく思い出せない。きっと優しい母親だったのだろう。

白い、長いひげを自慢げに整えていた父親は、ラングネ国の国王として長い間子供をのぞまれていたが、壮年になってようやく授かった第一子がかぐやであった。かぐやが生まれて数年後に后妃が死んでしまったため、かぐや姫に万が一のことがなければつぎの女王になるのは確定のはずだった。ラングネ国では女が王になることも珍しくはない、むしろ男の王よりも国がよく治まるという話さえあった。

平和な世の中であるから、無駄な権力争いが起こるよりも、誰がつぎの王になるのかわかっている方が明快でいいというのが民の総意だった。ラングネ国の長い歴史にあっても最近の動乱はいつも王族内の権力闘争が引き金になっていた。

かぐやの世話を受け持ったのが、じいと呼ばれる老兵であった。老年ながらも国王からの信頼も厚く、なにより子ども好きということでなくなった后妃の代わりによくかぐやの面倒を見た。家庭教師としてラングネ国の歴史を教え、つぎの王として国民との付き合い方を教え、そして皇女としてのあり方を教えた。長年かけて培ってきた知識は豊富で、ひとりで家庭教師をこなすことができたほどだ。たった一人の世継ぎということでも可愛がられていたが、じいのかぐやを特別扱いはしなかった。あくまでひとりの皇女として必要なことを伝えたのである。大きな愛情と、それなりの厳しさを持つて。

勉強の時間は一日のなかでいちばん嫌いだった。

はやく遊びや食事の時間にならないかなあなど思っているのに叱られるし、なぜか勉強のときばかりは時間がゆっくりと進んでいるように感じられた。

なかでも長ったらしい予言の暗記は厄介で、物心がつくまえから読み聞かされ、文字が読めるようになると思えば覚えたばかりで、まるで歌でも聞くように、意味がわかる前から記憶に刻まれた。

序文は記憶を失うことになっても忘れないだろう。自分の名前よりも強く印象に残っている、あの一文は。『彼の国に渡った者共の遺物を従えし勇者たちが、其の国を導くであろう』

彼の国とは地球のことだ。そして其の国とはラングネ国のことだと聞いた。予言はもっと長く、あとになるほど重要度も低くなるから、ときどき最後のほうを思い出せなくなることはある。それでもこの一文だけは決して忘れることはなかった。

父親もじいも、そして母も子守唄の変わりによく歌っていた。意味のわかる前から聞かされていた言の葉のリズムは、不思議と安心することができた。

月の国には現在、ラングネ国とアリストス国のふたつの国があり、長いあいだ細々とした国境争いはあったもののかなり平穏に暮らしてきた。

国土的にはアリストス国の方が大きかったが、土地の豊穡さではラングネ国のほうがまさっていた。人口はちょうど同じくらいであり、国力がほぼ拮抗していたため大規模な戦争が起こらなかったのだ。どちらかが本格的に侵略戦争を行えば、共倒れになる。

ふたつの国のあいだに敵対心はあったがそれは微細なもので、民族に違いもなく、使う言語に差異もなかった。体面的な国があっただけで、民衆が団結するためのはりぼてのようなものだったのである。

それが突然、崩れた。

アリストス国の奇襲によってラングネ国の防衛隊は壊滅、またた

たく間に首都の付近を制圧され、反撃の機会もないままに王城への侵攻を許した。

ひとつには長い平和による油断があったが、それ以上に決定的な差だったのが、兵器だった。

アリストス国は今まで見たことのない巨大なレーザー砲を用意していたのだ。その圧倒的な破壊力の前にラングネ軍は対抗するすべを持たず、王城でさえも崩れ落ちた。

月の国には、すこし複雑な歴史がある。そのために兵器の生産はある意味で運次第というようなところもあった。

「ちょっとルア様、あたしのこととか説明してくれないんですか」

「あとでいつてやるから、すこし黙っておれ」

「本当ですか？ 約束ですよ」

「わかってる」

月の国はむかし、ひとつの超大国によって成り立っていた。彼らは優れた科学力を持ち、月の全土を支配していた。宇宙を飛び回る舟も、大量に人を殺すことのできる兵器も、天気を作用できる機械でさえ、開発することができた。

彼らは月に生まれてからというものの、ただ一直線に進歩の道を歩んできたが、その先に待っていたのは破滅だった。

土壌は汚れ、空気はよどみ、空は濁った。

水は飲めず、食べるものさえまもなく、すべてが汚染されていた。

「もうここには住めない」

と言い出したのは自然な流れだっただろう。

目の前にある大きな青い惑星には無尽蔵の自然が広がっていた。彼らは地球に手を出すことをタブーとしていた。神の住む国、そう

いう言い伝えがあつたためである。

だが背に腹は代えられず、彼らは地球へ移住することを決意した。それだけの技術力はあつたし、あとは心さえ決まればよかったのである。だが一部の人間はそれに反対した。故郷を捨てるのはしのびないという人々が少なからずいたのである。

昔人は長く話し合ったが、ついに決裂しかないという結論に至つた。彼らはある約束を交わして別れた。

彼らの多くは船団とともにまだ自然の残る地球へと旅立っていった。そして残つた人々は月で素朴な生活をはじめた。

彼らの取り交わした約束は「科学力を破棄する」というものだった。地球に渡つた者たちは言葉通り、自分たちの技術を捨て、裸の生活をはじめた。

一方で月の国に残つた人々は、科学の知識を継承しないという方法をとつた。

使用者がいなければどんな優れた機械も無用の長物と化す。一代をへればあれほど盛んだつた科学力のすいでさえあとかたもなくなつたように消えてしまう。そうして彼らは今まで築いてきたものを、まるで砂の城を壊すように失つた。

機械の多くは砂に埋もれ、人々は再び一からの生活を得た。その過程で自然はだんだんと浄化されついには人が安心して暮らせるほどになった。だが長い年月と引き換えに科学力へ対する恐怖心は薄れ、彼らは地面から発掘した古代の遺物を次第に使うようになっていった。

まずはスイッチを押すだけの簡単なもの。

そうして使い方を学ぶと、次はそれを応用して使用方法を模索する。次第に技術は発達していき、もとの科学力とまではいかないがずいぶんと生活が便利になるほどになった。人びとは競って発掘を行つた。途方もない宝物が出てくることもあれば、使い道のわからない謎の物体が出てくることもあったが、おおがねそれらは暮らしに役立つものばかりだった。

そのなかには兵器もあり、兵士の使用する武器の大半は発掘によって得られたものを修復したり、見よう見まねで開発したものだった。兵士たちのビームサーベルはすべてが発掘されたものだ。赤や緑の色がついた光をまとった剣は、触れただけでものを切断することができるとができる。

銃は数は少ないながら発見されていたが、ごく少数だったために戦力にはならず、兵装はビームサーベルが主流だった。

そのなかでアリストス国が見つけたレーザー砲である。

兵器の圧倒的な差は、覆すことができない。ラングネ国は、崩壊を迎えた。

襲う光線

「ちなみに、クレアはわたしの侍女。月の国の事情はざっとこんなものかしらね」

「ルア様あんまりじゃないですか。せっかくはるばる地球にまで迎えに来てあげたっていうのに」

クレアが抗議するが、かぐやは涼しい顔で無視を決めこんでいる。月への道のりはもう半ばを過ぎており、黄金に輝く円形の大きさはかなり大きく見えた。目を凝らせば街のひとつでも見えそうなくらいである。

「私たちはかぐや様と同じ祖先を持つということなのでしょうか」
大伴御行が訊いた。先ほどから口をはさむことなく静かにかぐやの話を聞いていたのだが、身を乗り出して興味深そうにうなずいている。

「地球にも先住民がいたという話だ。血は薄まっているだろうが、そうかもしれない」

「遠い親戚ってわけか。嬉しいな！」

がははと石上が哄笑する。

クレアは露骨に顔をしかめた。

「あたしなんだか嫌です」

「安心しろ、わたしもさほど嬉しいとは思わない」

がっかりして使い物にならなくなるのは明らかなので石上の耳に入らないようこっそりと話す。当の石上は氣にとめることもなく上機嫌に笑っている。

「わたしたちは地球に渡った者たちのことを都人と呼んでいる。というよりも、地球の人々はみな都人だな——尊敬と畏怖との気持ちを含めてな」

「なんだか不思議な感覚ですね。預かりしれぬ遠いどこかでつながっているというものは」

「勇者に選ばれたのだ、中途半端ではない縁があるのであろう——それに、勇者の素質を持つものは月人の血が濃いのかもしれぬな。その宝物も過去に月から渡ったものだ」

「かぐや様に惹かれる理由も、そのあたりにあるのかもしれませんね」

大伴御行が平然と言つてのける。

かぐやはすこし顔を赤らめてそっぽを向いた。

「どさくさにまぎれて変なことを言うな」

「私はもともとから申していたことですが」

「面と向かつていうなということだ。なんだか気恥かしい」

「そうですよ。かぐや様は渡さないんだから」

クレアがかぐやに抱きつきながらべえと舌を出す。侍女と皇女という立場にはまったく見えないが、大伴御行はあえてつつこまないことにした。おそらくクレアという人間が特殊なのだ。

「でも、ルア様はやっぱりすごいですよね。たったの三日で勇者様をふたりも見つけちゃうんだから」

「三日？」

かぐやが眉をひそめる。

地球では半年以上が経過していたはずだ。一日の長さは月でも地球でもさして変わらなかった。

「そうですよ。あたしがアジトに逃げてから、敵の隙をつくりだすまでにそれだけかかったんですから」

「……月と地球では時の流れ方が違うのかもしれませんね」

大伴御行があごに手をあてて考えこむ。地球の常識は、月では通用しないと思っていたほうがいいのかもしれない。

クレアは白い船内の天井を見上げる。

「えー、でもちゃんと三日で来たはずなんだけどなあ」

「だが、それは朗報だ。わたしが月を離れて三日しか経過していないというのなら、まだ挽回の余地はいくらでもある。——クレア」

「はい？」

かぐやはいくらかためらったあと、口を開いた。

「――月の様子は、いま、どうなっている？」

「……………」

クレアは答えず、伏し目がちに視線をそらした。わたしはいい、構わずに言えとかぐやがうながすと、重たげにクレアは言葉を發した。

「国王様は、御崩御されました。現在は軍部副隊長のサント様が指揮をとり、地下にこもってゲリラ的な戦いをくりかえしているところです。敵は王城を占拠し、残党狩りに全精力を傾けているところです――が、本当の目的はそこではなく」

「わたし、か」

かぐやが大きく息を吐き出しながらつぶやく。クレアが小さな頭を下げると、黒いショートヘアがふわりと宙に浮きあがった。地球の重力圏を抜け出して、無重力状態になっているのだと、今更になって気が付いた。丸い粒になった涙がクレアの頬のあたりをふわふわと漂う。

「ごめんなさい」

「なぜおまえが謝るのだ。国を守るのは我ら王族の使命、おまえたちが気にすることではない。アリストス国の侵略を防げなかったわたしこそ責めを負うべきなのだ。――それは、父上も同じこと」

「王城が占領されていくなかであたしはなにも出来ませんでした。たくさんの人がつかまって、あたしもなんども殺されそうになったけれど、本当に偶然逃げのびることはできた。でも、それだけなんです。逃げただけで、誰も助けられなかった」

「クレアはわたしを迎えに来てくれたではないか。それで十分だ」

「わたしどうしてもルア様の力になりたくて、地球に行くくらいしか出来なかったからみんなの反対を押し切って宇宙船に乗ったんです。だけど、それしかできない」

「――クレア」

かぐやが優しい口調で呼びかけ、ぽんぽんとクレアの頭をなでた。

髪の毛のやわらかい感触。

「侍女というのはどんな職業だ」

「え？」

「おまえの役割はわたしを支えることだろう。それだけでいい。生きて、わたしのそばにいてくれるだけで心強いのだ」

「……はい」

「生きてくれてありがとう、クレア」

「はい」

かぐやが子どもをあやすように胸のなかへクレアを抱きいれると、クレアは声を上げて泣きはじめた。月の姫は目をつぶって静かに侍女の髪をなでつける。その光景を見ていた石上の目にも大粒の涙が浮かんでは、とめどなく空中に透明のしずくを生み出していく。

静寂の時間だった。

いくつかのすすり泣く声だけが、孤独な黒い宇宙を進む舟のなかに満ちていた。

——耳をつんざくようなアラームの音と、赤い警戒色が突如として船内を覆った。かぐやの体がびくつとこわばる。王城が陥落したときと同じ警報音。

自然と足がすくみだす。

クレアは素早く身をひるがえすと空になっていた操縦席に飛びつき、操縦桿を握った。眼前の大きなガラスには視界いっぱい広がる月が映し出されている。

「席についてください。急いで！」

クレアのせきたてるような言葉に反応してふたりの勇者と姫君は各自の座席にもどると、安全装置をがっちり固定した。クレアの額には冷や汗がにじんでいる。

「急にどうしたんだ」

クレアのただならぬ様子に真面目な口調になった石上が尋ねる。手早くパネルのボタンを操作しながらクレアが声を上ずらせこたえる。

「レーザー砲がきます。自動操縦じゃ回避不可能なので、手動に切り替えますけど、ちょっと気をたしかにもっててくださいね」

言うが早いや、船体がぐんと揺れ動いた。

クレアが操縦桿を両手で握りしめる。じつとりと手の平がしめっている。心臓が激しく鼓動を刻んだ。

操縦桿を左へ切ると、強烈な負荷が横向きにおそってくる。

「大丈夫ですか」

大伴御行が声をかける。かぐやの呼吸は病気の患者のように荒くなっていた。

顔色も青ざめており、正常な状態ではない。

だが、かぐやは片手を大伴御行に押しやって制止した。

「案ずるな、なにも問題はない」

「……ですが」

「前を向け。わたしに構うな」

きっぱりと否定する。

大伴御行はすこしのあいだ逡巡していたが、やがて諦めたように自分の席へ戻った。それ以上不安定な体勢のままでは舟のなかを転げまわることになりそうだった。

クレアの操縦する宇宙船は取舵をいっぱいに切り、どうにか進路を逸らそうとあがいていた。

だが危険を知らせる赤いアラームは鳴りやまずかぐやの心をむしばみ続ける。それと呼応するようにかぐやの動悸も激しくなっていた。

「レーザー砲ってなんだ？」

石上が椅子につかまりながら聞く。

「巨大な光線です。あたったらひとたまりもありませんよ。骨も残らず溶けてしまいます」

「そりゃ大変だな」

「人ごとみたいに言わないでください。死ぬときはあなたも巻き添えですよ」

「なに？ そりゃ駄目だ！ どうにかしろ！」

「だったら黙っててください！ 今忙しいんです！」

「——なにか策はあるのですか？」

石上にかわって大伴御行がクレアに質問する。クレアは月面の一部を睨みつけながら返事をよこす。

「ブースターがあります。これを使えば敵の予測以上の速度が出せますから、レーザー砲をかわすことができます。——けど」

「それを使う瞬間がわからない、ですか」

「敵がレーザーを打ってからじゃ遅いんです。あれは自動発射だから、少なくともその数秒前に察知していないと。でもあまり早すぎると軌道修正されて直撃コース。そこが難しいんです」

「……私になんとかしましょう」

「そんなこといったって、どうするんですか」

叫ぶようにクレアがいう。大伴御行は紅い瞳をぎょろりと月面の方角へ向けた。

「強力な気が集まっているのを感じます。それが限界までたまったときが、おそらく期限でしょう。その直前に私があなたにお知らせしますから、しっかり操作をしてください」

「そんなことできるんですか——さすが勇者様ですね」

いくらか安心したのか、クレアが小さく笑みを見せる。

大伴御行は深呼吸をして呼吸を整えると両目を大きく見開き、一点を凝視しはじめる。視線の先にはかすかに光るものが見える。大伴御行の瞳と同じように赤い光だ。それはかすかにだが、巨大化しているようだった。

徐々に月が面積を増す。

それと同じように赤いレーザーの熾猛な光も近づいてくる。大伴御行の号令に即座に反応できるよう、クレアは両目を閉じていた。

大伴御行の合図はまだない。

緊張したまま月に接近して行く。月の地表がはっきりと視認できるようになる。凹凸の多い地形。ところどころ黒っぽい影のような

ところもある。そのほかの部分は黄金色に輝いていた。

ふと気付くと、体が重さを取り戻しはじめていた。月に近づくほど自分の体重を感じるようになる。

「……………」

かぐやの呼吸。

舟の駆動音。

アラム。

つんざくような静寂だった。

「——今です！」

大伴御行が突然、叫んだ。

その瞬間クレアは操縦桿を思い切り左に倒すと同時にブーストのボタンをありったけの力で叩いた。腹の奥が引っ張られるような感覚とともに舟の前に広がる光景が移動する。

舟の後方では空を落ちていくような轟音が響いていた。

突如、視界が強烈な光で埋め尽くされる。

なにかのはじけ飛んだ鈍い音がした。

アラムの種類が変わり、音声が警告を示す。

『機体破損、機体破損、右翼部に異常が見られます。緊急の不時着をいたします。振り返します、機体破損——』

遭遇

どのくらいの時間が経過したのだろう。

安全装置を装着してさえ舟をつき破って外へ放り出されてしまい
そんな衝撃を受けて、しばらく気を失っていたようだった。ゆっく
りと頭を持ち上げる。かるい頭痛がした。

そのほかにはなんの異常も痛みもないので怪我を負ってはいな
いらしい、と確認する。

どこからか風が吹きこみ、かぐやの黒い髪を揺らした。見ると舟
の右翼部が吹き飛び、翼のつけ根である側面に大きな穴が貫通して
いた。よく無事だったものだと思う。

「——おい、大丈夫か」

隣で気絶している大伴御行の肩を揺さぶる。

前方ではクレアと石上がぐったりしていたが、どちらも呼吸をし
ているようなのでおそらく心配はないだろう。とくに石上は。

「う……」

不時着したときどこかへ打ちつけたのか右肩をおさえながら大伴
御行が顔を上げ、息を深く吸い込む。

「かぐや様ですか」

「それ以外に誰に聞こえる。動けるか」

「ええ、大丈夫です——っ」

安全装置のとめがねをはず起きあがろうとすると、大伴御行は痛
そうにうめいて右肩をおさえた。ふだん冷静沈着であまり表情を変
えない彼が脂汗を浮かべているのであるから、少なくとも脱臼、わ
るければ複雑骨折しているかも知れない。

クレアもかぐやにも応急治療を出来るような知識はない。早急に
どこか手当のできる場所に運ばなければならなかった。

「無理をするな。動くと怪我が悪化する」

「これしきのこと——」

無理に立ち上がろうとするが、体勢を崩して不自然な形で転んでしまう。その拍子に肩をしたたかに床にぶつけ、柄にもなく大きな声でうめいた。

かぐやは大伴御行を座らせると、クレアのほうへむかいながらいった。

「そこでじっとしている。怪我人は安静にしているのが一番だ」

クレアと石上はいくら肩を叩いても目をさまसानかったので少し不安になったが、後頭部をはたいてやるとようやく寝ぼけ眼で意識を取り戻した。そういえばクレアの寝起きが悪いのは昔からだった。かぐやの想像通りふたりとも目立った外傷はなく、クレアが肘にかすり傷を負っているくらいのものであった。石上は墜落する前と同じようにぴんぴんしている。

そうはいつでも地球を離陸する直前の激戦でふたりの勇者たちは身体のうちここに傷をかかえていたので、どこか安全な場所で治療をする必要性はじゅうぶんにあった。

「石上、大伴を背負ってやれるか」

「かぐや様なら大歓迎なんだけどな、男を守るのはそんなに趣味じゃねえや」

「無駄口をたたくな、私だってお前の背中になどおぶわれたくはないのです。ですが、これが最善の処置だというならおとなしく従うほかないでしょう」

「ちえっ」

口ではしぶしぶといった様子だが、石上はきびきびと大伴御行を持ち上げると舟のそとへ出て、見渡すかぎりには広がっている広大な大地を目の当たりにした。

「すげえ……」

黒い空が悠然と広がっている。

「……懐かしい光景だな」

かぐやがあとから続き、感慨深げに空を見上げた。

果てしなく深い闇のなかに星の光が頼りなく浮かんでいる。太陽

は地球から見るとさほど大きさも形も変わらなかったが、空が青色ではなく雲もないためか、どこかとげとげしいような印象を与えた。

地球とはまったく違う、別世界だった。

最後に舟から出てきたクレアは両手を思いきり伸ばして深呼吸をした。

「ううん——やっぱりこっちの空気のほうがなじみますね、ルア様」
「地球のものも悪くはなかった。が、故郷の空気はまた別格というものだ」一転、かぐやは目つきを厳しくした。「クレア、抵抗軍のアジトはどこにある。ここら辺になにもないということは城からだいぶ離れたところに着地してしたようだが、大伴たちの怪我の治療もせねばならぬことだ、すぐにこの場所を離れたほうがいい。あまりもたたしているのアリストス軍の追手がくるだろうからな」

「ここからだといっこうありますよ。徒歩なら三日はかかりますね、かくれながら進むのなら七日は覚悟していた方がいいかもしれません」

「なにか乗るものがあればいいのだが——この船はもう使い物にならぬようだしな」

古代人の科学力によって生み出された半透明で緑色の宇宙船は、片方の翼がもげてあとかたもなくなっているうえ、着地の衝撃であちこちが破損していた。

右翼部分はレーザー砲にもっていかれたのだろう。今ごろは宇宙空間のどこかを漂っているか、それともすべて溶かされたかのどちらかだ。

もしあれが直撃していたら、と想像すると背筋を悪寒が走る。

大伴御行の協力がなかったらレーザー砲の発射タイミングを予測するなどという神業は不可能だった。偶然にしてはうまく行き過ぎている、そう考えると見えない何かの力によって守られているような気がして、少し心強い。

「クレア、なんとか直せないものか？」

「無茶言わないでくださいよ。こんなボロボロになったものをどうやって飛ばせっていうんですか。それに月と地球を往復するだけのエネルギーしか積みこんでませんから、もとの状態に修理したところで動きはしませんよ」

「ずいぶんと危ない橋を渡ったものだな」

「もともと余力が少なかったところにあのレーザー砲を二度もかいぐぐらなきゃいけなかったんですから、当然ですよ。こっちを出るときはまだ援護があったからよかったけど、さっきのはホントに間一髪でしたもん」

となると、舟の線は完全にあきらめるほかない。

かぐやは周囲にしばらく建物などの人工物がないのを見て取ると、頭の中にラングネ国の地図をえがいた。王都までの最短ルートはどこか近くの街道に出ることだが、どう考えてもアリストス側の警備が敷かれているだろう。

たとえ万全の状態の同伴御行と石上の力をもってしても地球のときのように嚴重な警戒を突破できるとは限らない。おまけに片方はほぼ戦闘不能の危機に立たされているわけだから、わざわざ敵のまんに飛び込むのは愚の骨頂だ。

そうはいっても近隣の街を見つけたところでそこにもアリストスの魔手が迫っているのは確実で、へたに発見されて街の人々に迷惑をかけるのも避けたかった。彼らはまだラングネ国の国民なのだ。

「急ぐぞ。ぐずぐずしている暇はない」

地理に明るいかぐやが先陣を切って歩きだす。

「アジトは王都の近くか」

「すこし離れた場所にあります、ただすこしへんぴなところになりますけど」

クレアがかぐやのあとに続きながら返事をする。

自国の歴史はもちろん、地理などもじいに教え込まれたからかぐやは常人よりもずっと詳しい。最後尾をついてくる石上に視線をちらりとやってから、いまさらになって思い出したように痛みはじ

めた擦過傷を軽くなでる。

あの大男に縄で縛られたときに負った傷だったが、無暗に腹がたつた。

「――抵抗軍というのは、どのようなものなのだ」

腹立ちと、いくらかの寂しさを紛らわすために話しかける。

クレアから現状を教えてもらうのはこれからの方針を立てる上で重要なことであつたし、ひよつとすると抵抗軍のアジトよりも治療に適した場所があるかもしれない。いまは情報が必要だつた。

「軍部副隊長サント様を中心とするゲリラ部隊です。サント様は場内に残っていた勢力をまとめあげて、地下行動を通して用意されていたアジトへ籠城しています。幸いなことにまだアジトの居場所は知られていないので、そこから市街地に打ってでては敵軍に被害を与えつつ、情報収集に努めているところです。その過程であちこちに散っている残兵をとりこみ数を増してきてはいますが――すでに多くが捕虜となつていますので、正直なところかぐや様に期待するほかないという感じですね」

「数は？」

「およそ五百。食料もあちこちから集めてはいますが、さほど長い時間はもたないでしょうね。負傷兵も多く、ルア様が生きているという希望だけで保っている状態です。もしここでかぐや様が囚われたという情報でも流れたら」

「ラングネ国は、終焉を迎える、か」

「でも大丈夫ですよ、この通りルア様がもどって来たんですから。ラングネ国の復興も間近つてものです」

クレアが明るくいう。

月の国の気候は、暑すぎず寒すぎずといった感じで、さほど気温が気になるというようなことはなく、湿度も低いので歩くには適した環境だった。それでも太陽の照りつけを遮るものは少なく、しばらく歩いていると徐々に気温が上昇してきた。

どうやら不時着したのは夜が明けてすぐだったらしい。

「長いこと地球にいたから忘れていたな」

いくら生まれ育った月とはいえ半年もほかの星で暮らしていたためか、故郷の感覚を忘れてしまっている。この空気も、一日もたてば慣れるだろう。

地平線のむこうへ視線をこらす。舟が墜落した場所はすぐさま敵方へ知らされたことだろうから、いつどこからアリストス軍の斥候が現れてもおかしくはない。遮蔽物がないというのは敵を発見しやすい利点はあるが、敵からも見つかりやすいという致命的な欠点もある。

こちらの戦力は実質、石上ひとりという状況で、その石上もいつ倒れても不思議ではない重傷だ。

「ルア様、ルア様」

うしろから声がかかる。

「どうした」

「ご飯どうでしょうか」

「――腹でも減ったのか、こんなときに」

「と、石上様が申しております」

「まったく困ったやつだな」

わざわざこのタイミングでいわなくてもいいだろうと思うが、食料が危急の問題になっているのも事実だ。三山村で籠城戦をおこなっているあいだもろくな食事をとっていない。

とはいえさきほど食べたばかりではなかっただろうか。

「我慢しろ、と伝えておけ」

「でもあたしあの人と話すのあんまり好きじゃないんですけど」

「気持ちちは分かるが辛抱してくれ。わたしなど求婚されているのだぞ」

「おなじ勇者様でも大伴様のほうがずっといい人ですよ。あたし結婚するなら大伴様みたいに優しくて礼儀正しい人がいいな、石上様はがさつだし乱暴だし、それにちょっと大きすぎます」

「地球人はみなわたしたちよりも背が高いし、体格もしっかりして

いるからな。わたしも地球へ行って驚いた」

「あ、そういえば」と、クレアは自分の二の腕をつねった。「あたし太りましたか？」

「そんなことはないと思うぞ、むしろ痩せたのではないか」

「ですよねえ」

首をひねるクレア。

「地球に行ったとき気のせいか体重が重くなった気がしたんですよ。緊張していたせいかもしれないですけど」

「——ともすれば、そうかもしれないな」

地球と月とでは物理法則が違ってもおかしくはないだろう。

あちらとこちらとではまるで別世界なのだから。

しばらく誰も口をきかずに足を進めていく。足場はまったく舗装されていないため砂利やこぶし大の石が散乱しており、歩いているうちに足が痛くなった。

小高く盛り上がった丘のむこうにようやく植物の群生する茂みらしいものが見えた。かぐやたちはいったん腰を落ち着けると、大伴御行の容体をたしかめ、少し休憩してからまたすぐに出発した。

いくら月が地球よりも小さいとはいえ、大地はどこまでも続いている。

ときどき思い出したように人工物らしいものの残骸が砂に埋もれて頭を出していたが、それ以外に人の気配を感じさせるものはなにもなかった。

半日の半分ほどが経過した頃、最初に音を上げたのは石上だった。「腹が減ってもう歩けねえや。このまま歩いてくんじゃ、おれたち基地とやらにたどり着くまえに骸骨になっちまうぜ、そんなのまっぴらごめんだね」

どかりと地面の腰をおろしてしまう。まるで駄々っ子がぐずついているようなありさまだった。

「好きにしろといたいところだが、あいにくおまえはわが国を救う運命を背負っているのだ。ここで置いて行くわけにはいくまい、

立て」

「いい加減飯を食わせてもらわねえと、大伴様を喰っちまうぜ。おれは腹が減って仕方ねえんだ」

「やせ細った狼のようなことを言うな、苦しいのはお前だけではないのだぞ。なんなら貴様を大伴に焼いてもらってみんなで食してもいいが、どうする」

「……わかったよ。行けばいいんだろ」

「最初からそうしていればいいのだ」

苦々しい顔で先を急ごうとするかぐやの腹の虫がぐうう、となさけない音をならす。クレアは必死に咳払いをしたりして聞こえないふりをしたが、石上はにやにやと笑いながらかぐやのうしろ髪をながめていた。

さらに歩いて行くと、ようやく道のようなものに出会うことができた。

道とはいっても自然のままではないといったほうが近い代物で、せいぜい大きな砂利が見当たらない程度の細々としたラインが延々と続いていた。

「この道の先は街につながっている……が、敵もそこを通って来るだろうな」

かぐやがつぶやく。

この道を使えば街までは最短距離でたどり着くことができるだろうが、アリストス軍に遭遇するのは必至だ。いままでの道のりもそうだったがいかにかに人目につかないようにして歩を進めていくかというのが課題だった。

日はちょうど天頂に達し、気温も朝に比べるとずっと高くなっていた。

太陽の光がじかに降り注ぐこの見晴らしのいい丘ではどこにも身を隠せるような場所はない。

「どうするんだ？」

石上が追いついて声をかける。

はだかの上半身には張りつくように汗が浮かんでいて背中に隠れた大伴御行の姿が見えないほどだ。体力に関しては心配していないが、地球での戦いも含めてしばらく動きっぱなしであるから、そう樂觀ばかりもしていられないだろう。

「クレア、味方の迎えは期待できないのか。敵の隙をついて乗り物を使うことができればだいぶ楽になるぞ」

「――ルア様の御帰還はもちろん知っているでしょうけど、サント様は慎重なお方ですから敵の待ち伏せを警戒されているかも知れません。直線距離でいえば敵のほうがずっと近いことですしこのあたりに警戒網を張っていれば抵抗軍の全滅は避けられないかと」

「わたしを助けるのに甚大な被害を払ってしまつては無意味だな、だが……」

正直なところ、体力の限界が近づいていた。

食べ物だけでなく徒歩の疲労も、緊張しっぱなしだったことによる精神的な消耗も、かなりピークに近い。石上も平気な表情をしているがおそらくかなり参っているはずだ。

合流してからまだ間もないがクレアだって戦火をくぐりぬけてから地球への強行軍だったのだから、一介の侍女に過ぎない彼女にとつては相当な負担になっていることだろう。

「ここで待ち伏せをするというのはどうだ」

かぐやが思いつきを提案する。なかなか魅力的な作戦に思えた。

「アリストス軍の先鋒を返り討ちにして装備や乗り物を奪い、抵抗軍の基地まで戻る、これなら時間も短縮できるし抵抗軍の手助けにもなる」

「――それは、いいません」

石上の背中から力のない声が聞こえてきた。

「なぜだ、大伴」

「――斥候とはいえ、敵も大軍を送り込んでくることでしょう。いまの石上と私では撃退するだけの体力は残っていません、なによりこちらの居場所を明かすことになるのはいただけません。逃げて、

敵の包囲網が手薄になったところを叩くのならともかく、密集を倒すのはまず無理だと思われます」

「他に手はないのか」

「……私の体調が万全なら良かったのですが……申し訳ありません」
「仕方のないことだ、気にするな。それよりも今はこの道を進むほがあるまい。敵が大勢なら、こちらの方が早く姿をとらえられるだろう」

だが、その瞬間だった。

遠方から津波のように押し寄せてくる軍勢の影を最初に見とめたのはクレアだった。飛行機こそないが、車の荷台に兵士を詰め込んだアリストス軍が道を埋め尽くすように疾走して来たのだ。

車は色も形も様々だったが、どれも一様にアリストスの国旗である赤と黄色のシンボルマークが大きく刻み込まれている。

エンジン音はまだ聞こえなかったが、巨人の足音のようにゆっくりと近づいてくる恐怖感は痛いほどに伝わった。

「ルア様、逃げましょう。ここで戦って万が一のことがあってはいけません」

「――いやだ」

迫りくるアリストス軍の車両の群れから視線をはずさずかぐやが首を横に振る。

クレアは強引にかぐやの腕をつかむと、

「なに言ってるんですか、ここは身を隠すのが先決です」

「いやだといったのが聞こえなかったか」

「ルア様！」

「わたしはここで戦う、戦って父上のかたきを討つ」

かぐやの眼には涙によるものではない充血の赤さが浸透していた。大伴御行のものとも違う、憎しみに染まった赤色だった。

「ご自分の立場を理解してください、ルア様」

「うるさい、離せ！」

クレアの手を振り払い、道の中央に仁王立ちになってアリストス

軍を睨みつける。かぐやたちのいる場所まで来るのには十分もかからないくらいだろう、一刻も早く逃げなければ見つかるのは明らかだった。

だがかぐやは地面に根が張ったように動こうとしない。

クレアがむなしい説得を試みるが「いやだ」といつてかたくなに耳を貸そうとしなかった。

「逃げてどうなるというのだ、逃げたからといって事態がよくなるわけではなからう、それなら戦った方がましではないか」

「どうして負けるのが前提なんですか、ルア様はラングネ国を復興させるんじゃないかなかったですか！」

「戦わなければそれも叶わない」

「でも！」

「くどい」

クレアは困ったように石上の方を顧みるが怪我人を背負った大男は力なく首を振るばかりで、動きを起こそうとはしなかった。

「どうして……」

「それが皇女としての務めだからだ」

「そんなの、絶対おかしいです。どうしちゃったんですか、地球でなにかあったんですか、ルア様まるで別人みたいになって」

「国自体が平常ではないのだ、わたしが変わらなくてどうする」

アリストス軍の近づいてくる音が聞こえる距離にまで迫ってきた。敵軍の動きがにわかに慌ただしくなっている、こちらの存在に気づいたのだろうか。

「……石上、大伴をおろしてやってくれ。戦いになったら敵の武器を奪ってわたしに渡せ、あれならわたしでも戦える。なに、心配するな。剣のことならじいに多少の手ほどきは受けている」

臂力がなくとも熱と光の力で敵を焼き切るレーザーの刃。

赤色に光るあの剣さえあれば、地球のときのような無力感にさいなまなくても済む。

「クレア、大伴のことは頼んだぞ。」

「――私はかぐや様の護衛ですからね、戦わずして逃げ出すようなことがあっては面目が立ちません」

よろよろと苦しそうに立ちあがる。

肩をつらぬく激痛にたえながらなんとか微笑を作り上げた。

「無理をさせるぞ」

「かまいませんよ、あなた様のためなら」

「礼はこの戦いが終わってからいくらでも言おう。それまでは絶対に死んでくれるなよ」

「もちろんですとも」

「石上も同じだ、お前が死ぬようなところは想像もできんがな」

「あたりまえじゃねえか、なんのためにはるばる月の国まで来たと
思ってたんだよ」

どんと分厚い胸襟をたたいて力強さをアピールする。

「クレアはどこかに隠れていてくれ、わたしたちが敵の装備を奪つたらすぐに迎えに行く。その時は運転をたのむぞ」

言葉は優しかったがかぐやの口調はほとんど命令のものと同じくらい厳しかった。しばらく茫然とクレアは立ちつくしていたが、思い出したようにそばの物影へ姿を隠した。

かぐやと勇者ふたりは細い道をふさぐように敵軍を待ちかまえる隊形になる。遠くから近付いてくるアリストス軍が手のひらほどの大きさになったとき、大伴御行が地球で見せたときと同じ炎の龍を両腕から召喚し、先頭を走ってくる車の一台に命中させた。

大勢の怒鳴り声がする。

そしてつぎの瞬間には、兵士を積んだジープは巨大な火柱を立てて爆発した。周囲の人間もいっしょにまきこまれてはじき飛ばされ、小さな道をふさぐ結果となる。

相手が障害物にもたついているうちに、かぐやと石上は悠然とアリストス軍にむかって突進し、ジープの残骸を乗り越えてきた兵士たちに喰いかかっていく。

最初に石上が右手を振り上げ、自分の腹ほどの身長をした兵士を

ふつとぼした。

「石上、武器を奪うのだ！ 忘れるなよ！」

「わかってるよ！」

つづいて近くにいた兵士の腕をつかむと、力まかせにひねり上げた。耳をふさぎたくなるような悲鳴とともに、あり得ない方向に折れ曲がった骨がぼきりと乾いた音を立てる。

地獄の底でもものぞきこんでいるかのように叫び続ける兵士が落とした剣を拾いあげる。どうやら持ち主が手を離すと光の剣は消えらしく、石上がふたたび剣を手にとると赤い刃が姿をあらわした。

「ここまで投げろ！」

かぐやが両手を振り上げて合図をしている。

石上は手首のスナップだけで剣の柄を放り投げたが、意に反してかぐやよりも遠くへ行ってしまった。それに先ほどから妙に体が軽く感じる。勇者の力が増しているためかわからなかったが、きっとそうだろうと自分で納得してこぶしを繰り返すと、地球のときよりもはるかに速く敵の胴体をとらえた。

「石上、狙いはわかっていますか」

うしろから大伴御行の声がかかる。

前線は石上に任せて、うしろから援護をしようという作戦だ。いまの大伴御行に敵の攻撃を回避しきるだけの余力はない。

「あん？ こいつらを倒せばいいんじゃないのか」

「乗り物を奪うんです。私の炎を使うとどうやら爆発してしまうようなのであなたが中の人間を引きずり出して、かぐや様を誘導してあげてください。それまでは私が時間を稼ぎます」

「肝心の姫様の姿が見当たらねえじゃねえか」

「あなたが適当なところに武器を投げつけるからでしょう、そうでなければもっと早く作戦を移行できたのに」

「ああそうかい、悪かったな」

アリストス軍は石上の怪力を警戒してか、不用意に近づいて来なくなった。そのおかげで大伴御行とゆっくり会話できるのだが、餌

に群がるアリのように敵の兵士は石上を何重にも囲む。

石上の息はすでに荒くなりはじめている。

「要は時間を稼げばいいんだろ。だったら好都合じゃねえか」

敵軍とにらみ合ったまま仏像のように動かない。かぐやに渡したものと同じ武器を敵の兵士たちは持っている。あれに触れれば地球のときのようにかすり傷だけでは済まないだろうということとは、なんとなく察しがついた。

敵の一部隊が大伴御行の方へ向かっていくのをはた目にとらえる。炎使いの横を剣を持ったかぐやが走り抜けてくると、戦闘が再開されたのはほぼ同時だった。

「どけえ！」

敵は石上と大伴御行、そしてかぐやを分断しようとそれぞれのあいだに人の壁をつくり、行く手を阻む。敵兵が密集したところへ大伴御行の火炎の龍がおそいかかり、海を裂くようにかぐやの前方に道が生まれた。

アリストス軍の兵士はジープによって次々と補給され、際限がない。もっとも前線に近いジープを見つけ出すと石上は人の波をかきわけて接近し、ドアがあかないのを見て取ると強引に窓ガラスを割ってなかにいたふたりの兵士の襟首をつかんでそとへ投げ飛ばした。首から下げた首飾りの宝がいがぶつかりあって儚げな音を立てる。かぐやのほうを振り返ると、大伴御行の炎にまもられながら懸命に前進してくるところだった。

「こっちだ！」

「わかっている、石上、運転はできないのか！」

「どうやってやるんだ」

「まずハンドルを握ってだな、アクセルを踏み込むのだ。そうすれば動きだす、だが隣にあるブレーキを踏んではならぬぞ、それでは進むどころか止まってしまうからな、あとは――」

「ああ、頭がこんがらがりそうだ、さっさとこっちへ来てくれ」と石上が叫んだ。

「わかつている。わたしが着くまでそこを死守しているよ」

大伴御行の援護を受け、かぐやはゆっくりと石上の守るジープに近づいてくる。「車を渡すな、死守せよ」というアリストス側の司令官の怒声がする。

「ちくしょう、なんだってんだよ」

戦いにくい足場で石上が奮闘する。

そのとき、不意にかぐやを守っていた炎が途絶えた。大伴御行のまわりにアリストスの兵士が集まり、剣を振りかかっていた。

かぐやはすぐさま石上からもらった剣の柄を握り、下段にかまえる。大声を上げながら石上の待つジープに向かって駆けだすと、進路を阻むようにアリストス軍がかぐやへ向かってきた。

だれの目も殺気立っている。

かぐやさえ捕えることができれば報償は莫大なものになり、一生を保証された金額だけでなく、国の英雄としての名誉も得ることができる。兵士という身分にとって敵の大將をとらえることは一気に階段を駆け上るための手段なのだ。

それだけでなく、戦争を終わらせることもできる。家族を持っているものにとっては一刻も早く戦争が終結することも大切だった。

その想いはかぐやにもわかる。

だが、譲れないものがある。同じ月の国の民とはいえ、一方的な侵略をしかけてきた彼らに加減をすることはできなかった。

押し出されるようにして最前面に立っていた男に切りつける。肉の焼ける嫌なにおいがした。手ごたえはまったくなかった、人を切るのはひどくあっけない感触だった。

まさか一国の姫が反撃してくるとは思ってなかったのだろう。敵は一瞬ひるんだようだった。間隙について石上のもとへ猛然とダッシュする。

石上もなんとかまとわりついていた兵士たちを振り払うと、かぐやに向かって手をのばした。

力強い右手が届こうかという瞬間、一筋の光がかぐやと石上のあ

いだを一閃した。

「っ！」

驚いたように石上が手を引っ込める。

指が何本か、なくなっていた。切断面は焼かれて凝固しており、血こそ流れ出ていなかったが不気味にどす黒く変色していた。

「はずしたか。しくじったな」

舌舐めずりしながら剣を構えているのは目の鋭くたった、痩せぎすの男だった。頬は痩せこけ、髪はほとんどが脱色し白くなっている。角ばった骨のすぐ上に張りつめた筋肉がこびり付いていた。

男は両手に赤い刀を持ち、アリストスの黒と赤をかたどった軍服をまとっている。

彼の周りには避けているかのように人がいない。他の密集した部分と比べて、音この付近だけは不自然な空気が漂っていた。

「——おめえ、そこらへんの雑魚どもとは腕が格段に違うな。立ち居ふるまいからして尋常じゃねえ、いったいどんな訓練したらそんなまがましい殺気を出せるようになるってんだ」

男から立ちのぼる異様なオーラは、感覚の鋭敏な大伴御行でなくとも充分に感じる事ができた。人を殺すことにためらいのない、むしろ愉しんでいる瞳が、オーラを増幅させているようだった。

二刀流を戦場で使う者などほとんどいない。自分の身を守れなくなるためだ。

だが、己の命をなんとも思わないのであれば二刀流はおそろしい殺傷力を持つことになる。攻撃に特化したスタイル、それが二本の刀を持った男の思想をあらわしていた。

「なに、簡単なことさ。好きなだけ人を殺せばいい。そうすれば自然と殺し屋としての気配が備わって来る。あんた勇者なんだから。そのわりに大したことのない目をしてるじゃないか。もっとたくさん殺せよ。戦争ってやつはな、殺せば殺すだけ勇者になれるんだぜ」

「アリストスの馬鹿どもはいったい何を考えているというのだ——よりによってこんな奴を戦場に送り出すとは」

歯ざしりしながらかぐやが石上のもとへゆつくりと歩み寄る。

「おい、こいつらはオレの獲物だからな。手出ししたら殺すぞ」

怪物を見るような恐ろしげな目つきで兵士たちがじりじりと包囲円を広げ、後ずさっていく。だれもがこんなイカレタやつに巻き込まれて死ぬのはごめんだというような表情をしていた。

石上はジープの運転席から降りると、かぐやの前に進みでた。

「こいつは危なすぎる、下がってな」

「そんなことは百も承知だ、馬鹿もの。長い歴史のなかでもこやつほどの重罪人はおるまいと噂されている男だぞ。何十人もの人々を虐殺し、アリストスの牢に入れられていると聞いていたが――保釈されたのか利用されているのか」

「勇者様とやらを警戒してオレを解き放ってくれたんだ、雇い主様にはたくさん感謝しなきゃなんねーな。それにひとついいことを教えてやるぜ、おれが殺したのは何十人って単位じゃねえ。それ以上だ」

「どのような卑劣な契約を結んだのだ、ジアド・レム」

「シンプルな約束だったぜ」ジアドは言った。「勇者をひとり殺せば無罪放免、ふたり殺せば遊んでくれるだけの金をくれるって話だ。オレはそんなものいらねえけどよ、牢屋に繋がれたまんまじや誰の命も奪えないから退屈してたんだ。あっちの兄ちゃんが殺される前に、さっさとデカブツのあんたを殺しておかないとな、獲物が減ったらつまんねえもんなあ」

「この場で最も会いたくなかった男だな――石上、ジープはいつでも運転可能だぞ」かぐやが運転席に乗り込んでいった。

「どうせ逃げられはしないんだ、だったらここで勝負をつけちまった方がいいだろ。こんな狂人が生きてたんじゃ一般人も危ねえしな」

「その指は平気なのか」

「ちくちく痛むくらいだ、心配ねえよ」石上はこぶしを握り締める。

「それに、殴るのに差し支えはねえ」

「このオレと素手でやり合おうってんなら笑い者だぜ。剣の勝負は

触れたら終い、どっちが先に首をはねるかで決まるんだからなあ。
そのでかい拳じゃ、オレに届くまえに斬られるぜ」

「地球にはな、肉を切られて骨を断つという言葉があるんだ」

石上は不敵に笑いながら、狂人ジアーダの剣の射程に入らない距離に立つ。それを見て、ジアーダも腰を落とした。

「侮るなよ、そやつの剣の腕は本物だ。一対一ではまともに勝負になつたものはいないと聞く」

「よく知ってますねえ姫さんよ。あんたは殺さずに捕まえれば懸賞金が倍になるんだが、ラングネの姫を切り捨てていうのはどんな感覚か、楽しみでなんねえんだ。そこから動くんじゃないぞ」

「それより先に、てめえを排除するだけだ」

石上が、首に下げたネックレスをさわる。

かぐやを手に入れるために探した宝は、いまやかぐやを守るための力になっている。石上を本物の勇者に仕立てあげている子安貝に触れていれば少しでも力を分け与えてもらえるような気がした。
ざらついた感触が指さきに伝わる。

焼き切られた右手の指の数本は、もうどこにもない。火傷のあとのように固まった傷口がひどく傷んだが、石上はさして気にならなかった。いまは目の前の敵に集中しなければ。いままでの雑兵とは違って一瞬でも油断すれば死に直結する。

全力を出しても勝てるかどうかかわからない相手だ。せめて大伴御行なら相性がよかったのかもしれないが、石上の敵としては最悪の部類に入るだろう。

「さあ、少しは愉しませてくれよ、勇者様よお！」

一気に二本の刀でうちかかって来る。

石上は巨体からは想像もできないスピードで身をひるがえし、鼻先をかすめていく切っ先をかわす。狂人ジアーダは鴉を思わせるような声で甲高く笑いながら、次からつぎへと石上の身体めがけて剣を振りおろし、ときには剣先を突き出す。

決して大ぶりの構えではない。

一撃の威力が必要ないため、手数が多い戦法が主流なのだろうと石上は判断する。すこしでも隙が生まれたところに強烈な一撃をかまそうと考えていたがそれすらも難しくなった。

「避けてるばかりじゃ勝負になんねえぞ」

体重と同様に軽いフットワークでジアードは石上を包囲網のすみへ追いやっていく。勇者がアリストス軍の兵士に接触しそうになると、おのずと兵士のほうから死に物狂いで石上の進路をあけた。ジアードの機嫌をそねたら殺されるというのは、誰もが理解し、感じていた恐怖だった。

ジアードが鋭くつきだした剣を横つとびにかわす。すぐうしろにいたアリストスの兵卒は石上の巨体によって死角になっていたところからジアードの剣が現れたのを回避することができず、胸元に赤い刃をくらった。

「あーあ、関係ないやつ巻きこんじまったなあ。ラングネのやつらはいくら殺してもいいって話だったが、味方を殺しちゃいけないなあ。また逮捕されたら人殺せなくなるから、気をつけなくちゃー」

まだ意識のある兵士の胸元から、無情に剣を振り上げる。

目を覆いたくなるほど凄惨な光景だった。かぐやは、思わずジアードに向かってどなった。

「貴様、それでも人の子か！」

「神の子だったらいくら殺してもつかまんねえんだけどなあ、残念だがあんたの言う通りなんだよ」

「石上——こやつにだけは負けてくれるなよ。想像したくもないがこやつに殺されたラングネの民や兵は十の指で足りないくらいだ、なんの罪もない人々をこうして無残に殺すのがジアード・レムのやり口だからな」

「それだけで済むと思ってんのか？　ここは戦場なんだぜ、殺せば殺すだけ褒められる無法地帯だ、そんな場所でオレが遠慮なんかするはずねえだろ」

「貴様……」

思わずかぐやが剣を片手に血相を変えてジープから降りて来ようとするのを、石上が鋭い声で制した。

「来ちゃいけねえ、いいたかないがあんたを守って戦えるだけの余裕はねえんだ。そこにいてくれた方が、助かる」

悔しげに唇をかみしめながらかぐやはジープの運転席にもどった。

「わたしを待たせるな、必ず勝つのだぞ」

「おうよ」

言い終るが早いやジアードの双剣がふたたび石上の周囲の空気を切り裂いていく。間断なく繰り出される剣劇。かわしそこなった剣先が腕の肌をかすり、肉が少しだけ焦げ付く。

ジアードは石上をいたぶるのを楽しむかのようにフットワークを使つて隅に追い込んだでは、石上が体勢をかえる隙を狙つて着実にダメージを重ねていく。

最初は腕、次はわき腹、そして足のつけ根へ。

これ以上手傷を負えば勝負どころか、動くことさえままならなくなる。しかし狡猾なジアードはその動揺を逃すことなく、精神的にも肉体的にもすこしずつ石上をえぐり取る。

戦つていて気付いたことがある。

ジアードはただの殺し狂ではない。

構えこそ二刀流という独学ではあるが、その実対峙してみると攻撃を最大限に生かすことによつて防御を補っているのだ。触れれば終いという武器の特性を活用した、実に合理的なスタイル。それに加えて異常に鍛え上げられたフットワークによつて相手に反撃の余地を与えていない。

性格さえまともだったら武術家として月の国中に名を馳せていたことだろう。

だが、なにより厄介な殺人狂の血が、ジアードの最後の一ピースとして最凶の剣士をつくり上げていた。

「おらよ」

ジアドは石上の足元を払い、体勢を崩す。

思わず地面についた右手に激痛が走った。――次の瞬間には、ジアドが背筋が寒くなるほどに凶悪な笑みを浮かべて剣を持った腕を引いていた。

殺される、そう確信した。

ジアドの赤い剣が石上の喉元につきたてられる。鮮血が飛び散った――ように、かぐやの眼には映った。

「石上！」

「……なんだ？」

ジアドの身体が一瞬硬直し、間合いを散り直すためにうしろへジャンプする。

巨大な貝の盾が、石上の首元を守るようにジアドの剣を阻んでいた。うすい白色の貝殻は鮮やかな模様を描いており、重厚な存在感とともに圧倒的なまでの神々しさを放っていた。

石上が恐るおそる貝の盾に触れると、まぶしいほどに輝きながら石上の手の甲にうまく収まるように変形し、拳の関節部分を覆うようにして防具となった。

それぞれ、右の手と左の手に一つずつ。

右手のほうには虎の爪のように鋭利なとげが付いており、左手のものは腕全体を守るように硬質な鎧となっている。石上の首にかざってあったはずのネックレスからは、いくつかの宝貝が抜け落ちていた。

「奇妙なもんを隠してやがるじゃねえか、勇者がこんなにひ弱じゃあ倒しがいがねえと思ってたんだ。大事な指をなくす前に切り札を出しときゃよかったのになあ」

挑発するようにジアドが目を輝かせる。

石上は自分の身に起こった異変が信じられないといったように手元の装備を見つめていたが、ひとつ大きな深呼吸をすると、ジアドに真正面から向きなおった。使い方は、自然と分かっている気がした。

「行くぜえ！」

ジアードが先ほどよりも数段早くなった剣筋を、左手の腕当てでガードする。剣同士でなければ受け止められるはずのなかったジアードの剣は、石上の二の腕を貫通することなくとまった。

間髪をいれず石上の右フックがジアードのあごを狙う。

バク転しながら間一髪で石上の拳をさけたジアードは薬物に汚染されているかのようにタガの外れた笑い声をあげて、石上に打ちかかってきた。さきほどまでのようにどこか洗練された太刀筋は影を潜め、いまはただ凶暴な本能だけで剣をふるっているかのように滅茶苦茶だった。

だが、それだけに早い。

目視できなくなりそうなくつも残像をくぐり抜けながら、石上は反撃に出る。左手は防御に、右手は攻撃に。ジアードの痩せた体軀には、一撃だけで十分だ。

「死ねえっ！」

思い切り突きของぼしたジアードの剣を受け止めるのではなく受け流し、続いて襲い来る赤い剣を強引にふり払う。触れ合いそうなくらいの距離でジアードの身体にぽっかりと無防備な部分が露出した。あらん限りの力と思いを込めて、右の拳を振りぬく。

ジアードの身体に届こうかという瞬間——背中にいやな気配を覚えた石上は、とっさの判断でしゃがみこんだ。標的を失った拳は本来とらえるはずだった胴体を大きくそれて、ジアードの脚の骨を砕く乾いた音がした。

「石上、上だ！」

かぐやの声に反応して左手を頭上にかざす。

ジアードが最後の力を振りしぼって繰り出した一撃は、石上を傷つけることはなかった。ジアードの泣き叫ぶ声をしり目に石上は立ち上がるとすぐさまかぐやの元へ駆けつけた。

「しっかりつかまっているよ」

石上がかぐやの横へ乗りこむと同時にアクセルを全開に踏み込み、

ジープを急発進させる。ジアドの敗北に恐れをなしたのか士気を完全に喪失したアリストス軍の兵士たちは、かぐやの進路を阻もうとはせず、わが身を守るために進み来るジープから離れていった。

「大伴、つかまれ！」

運転席のドアから差し出された石上の手を、大伴御行がしっかりとつかむ。紅蓮の魔術師はひどく消耗した様子で、いまにも倒れこみそうなくらいだった。

大伴御行のまわりにいた兵士たちを蹴散らしつつ、クレアが身を隠しているはずの丘のふもとにジープを走らせる。だが、そこに探し求める姿はなかった。

「クレア——」

ジープを降りてクレアをさがしたい強い衝動にかられる。

どこを見回しても、転がっているのは小石ばかりで、クレアの小さな背中はどこにもない。地面にいくつもの足跡が残っているのを認めると、かぐやは即座にすべてを悟った。

——クレアはアリストス軍に捕まったのだ。

おそらく、三人が戦っている最中に背後をとろうとした敵の一隊がクレアを発見し、ここぞとばかりに捕虜としたのだろう。血痕が残っていないということは死んでいないにちがいない。それだけがわずかな希望の光だった。

いやだ。

これ以上誰の死ぬのも見たくはない。クレアを救出するためにアリストス軍の本営に向かってジープを発車させようとすると、大伴御行が息も絶えだえに、ハンドルを握るかぐやの腕をつかんだ。

「駄目です」

「クレアまで見捨てろというのか、大伴っ」

「ここで引き返してはなりません。私どもにもう戦うだけの力は残っておらず、敵軍の士気が落ち込んでいる今こそ逃げる好機です。この機をみすみす放棄して敵軍のまん中に突入することがあれば、せっかく拾った命をどぶに捨てることになります」

「さっきはわたしのいうことに従ったではないか、なぜ今度は反対するのだ」

「私はかぐや様を守るために動いているのです。あの場では、逃げるのは得策ではなかった。万に一つに賭けに挑むしかなかった。勝負に勝ったいま、わざわざ敗北に直進するのはいくらかぐや様の意思に反していようとも賛成することはできません。どうか逃げてくだ
さい」

「――だが」

「あなたがいなければ先ほどの狂った男のようなものに殺される一般人がたくさん出ることでしょう。戦に敗れた国の民がまともな扱いを受けられるはずがありません。奴隷となり、むごい仕打ちの果てに堪え切れず命を落とすものだっているはずです。かぐや様、あなたの望む未来はそんなもののですか。かぐや姫としての使命は、どこへ行ったのですか」

ハンドルを握りしめる両手がわなわなと震える。あたたかい涙がぽつぽつと雨のようにこぼれていく。嗚咽を漏らしながら、かぐやはジープを発進させた。抵抗軍の待つ、クレアがおしえてくれた基地へ向かって。

包囲

ジープの運転席、かぐやの隣には大伴御行がひとりで座っている。石上は身体が大きすぎるためにサイズが合わず、後方の荷台に移った。その石上は大きなびきをかいて眠っている。戦いでよほど消耗したのだろう。それは大伴御行においても同じことで、かぐやが車を操っているあいだ、あまり口を利こうとはしなかった。

アリストス軍と交戦してから二時間ばかりが経過していた。

天頂にあった太陽は次第に傾きはじめ、黒い空にもだんだんと星の色が増える。月においては、夜になると姿をあらわすものは地球だった。このまま順調にいけば、青い星が上るころには基地へたどり着くことができるだろう。

基地は王城のある場所からかなり離れた郊外にかくされている。

付近に大きな町はないが、そのかわりに広大な荒れ地が広がっており、細々と植物が群生しているような場所だ。幸い飛行船の墜落した場所が基地とさほど離れていなかったため、車で一直線に向かえばそれほど長い時間はかからないはずだった。

道なき道を走るジープは最高速に達している。

アクセルを踏み込むだけの単調な作業は辟易としたが、ときどき地形の関係によってハンドルを切らなければいけないようなこともあり、大伴御行はその時にだけ言葉を発して警告した。

盲目で道は見えていないはずだが、超能力と呼ぶべき勘のするどさで事前に危機を察知できるのだ。かぐやは月の黄金色の大地を見つめながら、ひたすらジープを前へ進めた。

舗装されていない地面を疾走すると、そこら中に転がっている小石や凹凸に引っかけたジープがはずむように上下する。いましがたひとつ大きなこぶの上を通過して、ジープは兎のように跳ねた。

石上は振り落とされていないかどうかとうしろを確認する。

叩きつけるほどの衝撃にも関係なく、石上はやはり寝たままだっ

た。ひよっとしたら頭を打って気絶しているのかもしれないが、かぐやは前に視線をやってハンドルをふたたび握りしめる。

「――かぐや様」

めずらしく大伴御行が声を発した。

「なんだ」

「先ほどの私の言葉を――覚えていますか」

「忘れるはずがなろう、あれほどまでに説教をされたのは子どもの時にじいからされて以来だ」

「すこし辛辣なことを言ってしまったかもしれませんが。かぐや様にもかぐや様なりに考えがあったことでしょう。私はそれを無理に捻じ曲げてしまった」

「……地球にいるあいだ、わたしはずっと月に帰りたくてたまらなかった。アリストスに国を侵略されて、ろくに戦うこともできずに大切な人の死を見せつけられ地球に逃がされた自分がひどく情けなかった。勇者をさがすためだと言いつ聞かせはしたが、そんなものは所詮なぐさめにしかない。わたしはみんなと一緒に戦いたかった」

かぐやはなるべく抑揚をおさえ、感情が表に出ないように話した。ジープの駆動音のなかでも、その声ははっきりと聞き取れた。

「わたしは皇女として民を守りたかった。逃げてばかりの権力者になどなり下がりがりたくなかった。だがな、城を離れる前に、父はこう言っていた」

立て、そして戦え。

「わたしは立ち上がるためにお前たちを見つけ、月へ帰還した。次は戦う番だと、そう思った。それは違っていたのだな、大伴」

返事はない。かぐやは続けた。

「翁は教えてくれた。親がどれほど子を大切に思っているのか、どれほど愛情を注いでいるのか。子どもの死を望む親などいない。父は戦えといったけれども、それはたぶんアリストス軍とではない。自分の運命と戦えと言ったのだらうな。予言に束縛された自分の運

命と」

「戦うということは、必ずしもいいことばかりではありません。大切な人を失うこともある。誰かを傷つけることもある――その覚悟が、ありますか？」

「クレアやお前たちがそばにいてくれるならば、わたしはどんなつらい仕打ちにも堪えてみせよう。お前たちが傷つき、わたしの代わりに戦うのを、目をそらさずに見つめよう。それが皇女たるものの役目だ」

かぐやはしっかりと大伴御行の紅い目を見据えた。口調は静かだったが、その奥にはゆるぎない決意が固まっていた。

「……クレアさんのこと、謝らなければいけません。私がいちばん近くにいたのに守ることができませんでした」

「それはわたしの責任でもあることだ。クレアも一緒に連れていくべきだった。――そうすれば、あのようなことにはならなかった」

「ひとつ、明るい可能性はあります」と大伴御行は言った。「クレアさんは殺されてはいません。戦いの真っ最中だったのでしかとは聞き取れませんでしたが、つかまえて収容所に放り込めという指示があったように思います。ひとまずはそこに捕縛され、なにかしらのことをするならばそのあとでしょう」

「クレアは生きているということか」

「少なくとも、しばしの間は」

「――よかった」

安堵のため息をつく暇は、なかった。

大伴御行の表情がいきなり険しいものに変わる。大声で石上の名を呼び、それでも起きないとわかると小さな火の球を召喚して鼻先にちらつかせる。

「熱いじゃねえか馬鹿野郎、悪戯にもほどがあるぜ」

怒鳴りこんでくる抗議を無視し、大伴御行は丘のむこうを指さす。

「かぐや様、あのあたりの地理はどうなっていますか」

「まわりを丘に囲まれた盆地だ。――なにかあるのか」

「兵が伏せられています。それも、かなりの数が」大伴御行は声をひそめる。「おそらく待ち伏せされたのかと」

「てめえ、裏切りやがったな」

石上が大伴御行に殴りかかろうとするのを、かぐやが横目で制止した。

「なにをしているか、この阿呆」

「待ち伏せされてたってことはどこからか情報が漏れてたんだろ。」

おれじゃねえならこいつしかいねえじゃねえかよ」

「私だってそんなことはしていない。基地の居場所も知られていないのなら私たちが向かう先が分かるはずはなし、それに敵兵の斥候の気配もなかった。おまえが密通していたのではないかと思ったが」

大伴御行も反論する。

「……うかつだったな」

かぐやが舌打ちをする。

「このジープは敵から奪ったものだ。なにかしら居場所を特定する機械が取り付けられていたとしても不思議ではない——アリストスめ、そんな技術を隠し持っていたとはな」

「そんなことができんのかよ」石上が目を丸くした。「旗もなにもないのに」

「月の国ならばそのくらいは朝飯前なのだろう——それよりも、ここをどう切り抜けるかです」

前方に広がるこんもりとした丘のむこうは窪んでいるため、直接敵兵の姿を確認することはできない。だが大伴御行のいうことには、だれも疑心を抱いてはいなかった。

この先にはふたたび、アリストス軍が待ちうけている。

「さきほどの連中はかぐや様を生け捕りにしようと躍起になっていましたが、今度はそうもいかないでしょう。いちど鼻の先を明かされた以上は向こうも生死をいとわないという態度でかかってくるはずです。地球のときのほうが、まだ楽というものでしょう、本気で

命を狙って来る戦いというのは、生け捕りよりも数倍苛烈です」

「ま、いっつも本気で命のやり取りをしているおれたちには関係ないけどな」

「だから頭が足りないといわれるのですよ。かぐや様ごと殺しにかかるということは、手段を選ばなくなるということです。なにか一撃で私たちをしとめられるような、破壊力のある武器が敵にあればいっかんの終わりということになりますね」

「破壊力があるって、もしかして月にくるときにやられたあの巨大な光か」

「味方がいる以上、レーザー砲を持ちだしてくることはないだろうが——いずれにせよ、分の悪い戦いになりそうだな」

「この車で一気に突っ走ればいいじゃねえかよ、炎で前方を守れば向こうのほうから避けてくれるぜ」

「生身の人が相手ならばそれでいいのですが」 大伴御行がいった。

「相手も同じように車を置いていたとしたら、無暗に突っこんでも粉々になってお互いに碎け散るのが関の山でしょう」

「じゃあどうするんだよ」

「——敵は丘の四方に伏兵を配置しています。それに予備隊が動きはじめているようです——背後をとるつもりでしょう。盆地に誘い込み、せん滅する作戦かと」

「あの丘を迂回して進むというのはどうだ」 かぐやの提案に、大伴御行は首を横に振った。

「敵はすでにこちらの動きを補足しています。逃げるとすれば、そうとうに大回りをしなくてはなりません」

かぐやはジープに残っているエネルギーを確認する。もうほとんど残量はなかった。これでは敵から逃げおおせるところか抵抗軍の基地までたどり着けるかどうかも怪しい。

車内には予備の電源も見あたらない。

おそらくどこかの基地でバッテリーを充電するタイプの車なのだろう。

「ならば、中央突破か」

「それも危険です。みすみす死に行くようなものでしょう」

「石上を車の前方に張り付けておけば、多少の攻撃は防げるのではないか」

「おいおい冗談がきついぜお姫様。いくら新しい力を手に入れたとはいえ、こいつはそんなに万能じゃねえんだ。守れる部位も限られているしな」

「大伴、なにか策はないのか」

かぐやの問いに大伴御行はこたえることができずあごに手をあてたまま黙り込んでいる。かぐやはジープの速度をいくらか落として、考える時間を稼ごうとした。

ゆるやかな丘の斜面はじりじりと砂時計が時を刻むように近づいてくる。うしろをふりかえると、遠くの方に退路を断っているアリストス軍の遊軍が砂塵を立てているのが見えた。

「もう思案する時間はないぞ、どうする」

「――敵の誘いに乗りましょう。その上で、力づくで包囲網を破るしか手立てはありません」

「……そうか。おまえがそういうのなら、ほかに良い案もないのだろう」

「私の力が及ばないばかりに申し訳ありません――竹取の翁ならば驚天動地の策略を編み出すことができたかもしれませんが、私にはそこまでの鬼謀はないようです」

「おれはいい作戦だと思うぜ。簡単でいい」

石上が大口をあけてがさつな笑い声を発する。かぐやはハンドルを握った手ににじんだ汗を、服の袖でぬぐった。

「それが生きる道ならば、わたしはなんだってしよう」

「我々も命を賭してかぐや様の命をお守りいたしましょう」大伴御行は言った。

「おれがどこまでも運んで行ってやるからよ、心配はしなくていいぜ」と石上が言った。

ジープが傾きながら坂道をのぼり、ごつごつとした足場を走り終えると、目の前の視界が一気にひらけた。巨大な盆地をとりまくようにアリストス軍のジープや兵隊たちがぎっしりと何層にもなっており、並んでいる。

目下の窪地は急斜面が切り立ち、底面には広大な平地が広がっている。

そこにアリストス軍の姿はなかったが、かわりにジープの動きを妨げるような巨大な岩が散乱していた。おそらく周囲から集めたものを、盆地のなかへころげ落したのだろう。

両側面にはレーザー砲とまではいかないが、個人を標的にするには十分すぎるほどの攻撃力を持ったいくつかの砲門がおかれている。盆地へ逃げ込めば、両側から砲弾が襲いかかって来るという算段だ。そして正面には強行突破を警戒したのであろう何台ものジープがバリケードとして折り重なるように道をふさいでいる。

「……アリストスのやつら、いつの間にこんな数の車を手に入れたのだ。すこし前まではこんなに軍備は整っていなかったぞ」

かぐやがつぶやきを漏らす。

「すげえ数だな。陛下の私兵よりも多いんじゃないか」

ジープから身を乗り出して石上が感嘆の声を上げた。

「すくなくとも装備は地球とは格段に違うな」

「地球のようにはうまくいかねえってわけか」石上は武者ぶるいをひとつした。「でもよ、傷だらけのわりに身体は軽いんだよな。力がみなぎってる感じだぜ」

「よい兆候だ。——大伴、体調は平気か」

飛行船が不時着したときの怪我に加えて、石上のように体が丈夫ではない大伴御行も全身に傷を負っている。ジープで進んでいる最中も、ときおり肩が痛むのかちいさなうめき声をあげていた。

「ここで死んでは元も子もありませんからね、痛かろうとなんだらうと頑張るだけのことです」

「勇者の心意気だな——行くぞ」

かぐやは目いっぱいアクセルを踏み込むと崖を下るような勢いで盆地の斜面を下っていく。アリストス軍はジープが完全に下部へ移動し終わるまで待つつもりらしく、まだ砲撃を仕掛けてはこない。だが、挟撃するように配置された何門もの黒い砲台は、じりじりとその照準を合わせている。

「飛び降りてください!」

大伴御行のかけ声とともに、石上に抱えられたかぐやともう一人の勇者がハイスピードで疾走するジープを乗り捨て、ごつごつとした地面に飛び退く。

想像を絶するような衝撃が大伴御行の全身をつらぬいた。

落馬したときなどとは比べ物にならないほどの痛みに、気を失いそうになる。だが、ふらつく頭を強引に働かせ、すぐさまその場から離れる。

「大丈夫か」

砂塵の舞い上がるなかで石上が腕の中のかぐやにたずねた。両腕には、さきほど会得したばかりの防具ががちりとはめられ、石上とかぐやを守っている。

「ああ、助かった」

運転手を失った空っぽのジープはそのまま直進して行き、進路妨害のためにおかれた大岩に激突すると、激しい炎を立てて炎上した。それをながめる暇もなく嵐のような砲弾が浴びせかけられる。

「あれを喰らったらひとたまりもないな」

わずか数秒で金属片となったジープを驚愕の目で見つめる。

石上とかぐやのところへ、大伴御行が小走りにかけてきた。

「岩をうまく盾にして行きましょう。なまじ大きいですから、少しは攻撃に耐えられるはずです」

「わかった」

三人はいっせいに走り出した。

横側からアリストス軍の歩兵がかけ下って来るのが見える。まだ距離はあるが、数は膨大だった。

「……追いつかれる前に突破せねばならぬな」

かぐやが苦しそうにつぶやくが、そのそばから砲撃が目の前をかすめていく。あわてて岩の影に隠れると、巨大な砲弾が岩肌をえぐり、パラパラと細かいかけらが降った。

「これじゃろくろく進めねえよ」

石上が愚痴を漏らす。

弾丸を放つ豪快な音が絶えず響いている。空気の振動が肌にもピリピリと伝わった。

「おそらくは歩兵が到着するまでの時間稼ぎにすぎないでしょうが、そうと信じて無暗に突っ切っていくのも危険すぎます。まあ、どちらにせよ彼らがたどり着けば、さらに身動きが取れなくなることでしょうが」

「どちらに転んでもまずいのなら一か八か、行くしかないな」

言うが早いやかぐやが先陣を切って次の岩場へと急ぐ。

身をかめて少しでも被害を少なくしようとするが、斜め前方にはずれた砲弾の破片が肩口をおそう。「お姫様があんまり無茶するんじゃないよ」

石上がかぐやをかばうように立ちはだかっていた。

「まったく、わたしはお前たちにまもられてばかりだな」

「お礼はたっぷりしてもらうぜ」

「いっておくが、わたしは下衆な男は嫌いだ」

「おれには関係ないな」

「馬鹿な男も嫌いだ」

ふたりで岩かけにかけ込む。

一拍おいて、大伴御行が合流する。

「炎でなんとかならない敵というのは、まったく厄介なものですね」

「月では火よりも恐ろしいものがあるからな」

「かぐや様の剣をうまく使えばいいのですが。触ったものを溶かすという能力はとても便利ですからね」

「わたしの剣の腕がもう少し良ければ砲弾を切って捨てることもで

きるのだがな」

「その剣、私に使わせていただけませんか」

「……いまはダメだ。わたしも戦うのだからな」

ふたたびかぐやを先頭に一行はつぎの影へと飛び込む。

しかし、二回、三回とそれをくりかえしているうちに、敵兵は着実に接近していた。

「かぐや様、伏せてください」

大伴御行が業火をあやつって、かぐやの後方に来ようとしていた兵士を焼きつくす。肉の焦げる匂いがした。

「……そろそろ砲撃がやむことでしょう。そうしたら、三人で固まって走ります。方向はわかりますね」

「ああ、問題ない」

「遅れるんじゃないぞ」

大伴御行の推測どおり、敵の兵士たちが近付いてくるとあれほど降り注いでいた砲弾の雨がぴたりとおさまった。かぐやたちは稲妻のように岩かげから飛び出し、石上を筆頭に活路を開いて行く。

生身の人が相手ならば、大伴御行の炎が通用する。

そうはいつでも海の波のように次々と押し寄せてくる敵兵は、もはや命さえも覚悟をしているようだった。先ほどよりも一層気迫をましている。

石上にはじき飛ばされ、大伴御行の炎に包まれながらも、徐々にその距離をつめてくる。

苦しい戦い。

消耗戦ではない、一方的な攻撃。

激しい動きに、ふさがっていた傷口が開き、肌を細い血が伝う。

「――はあっはあっ」

大伴御行の体力はもはや限界だった。

能力を使うのも、息を吸うように簡単にできるというわけではない。

視力と引き換えに手に入れた鋭敏な神経を活用することでしょうや

く成しえる、繊細な作業なのである。その炎を維持するだけの集中力はもう残っていない。

間合いを詰められ過ぎた兵士の剣が、服の袖を切り裂く。

もう炎を出すことはできない。かわすのが精いっぱいだった。

「大伴、気を抜くな！」

真正面から振りかぶられていた剣に反応が遅れた。

かぐやが飛び出して割って入る。剣をせり合う隙に、大伴御行が腹部へ蹴りをたたきこんだ。

「馬鹿もの、なにをしている」

「迂闊でした——申し訳ありません」

「……大伴、もうなにも感じていないのではないか」

「なに、かぐや様の気にすることではありません」

「真っ暗闇の世界では、心細かろう」

かぐやは大伴御行の手をとると、片手に剣を構えて敵と向かい合う。

大伴御行は驚いたように振り向いた。

「なにをなさって——」

「せめてこの手を握っている。わたしはもう誰も孤独にはさせない——それに、ラングネを救うにも、わたしが生き延びるにも、大伴が必要なのだ」

「——わかりました」

力強く手を握り返す。

あたたかい感触が、盲目の視界のなかでも、はっきりと伝わった。

「おい、ずるいじゃねえか、ひとりだけ抜け駆けしやがって」

石上が目ざとくそれを見つけて、敵兵をはじき飛ばしながら寄ってくる。

「せっかくだ、石上の肩にでも乗って戦うか」

「それも気に食わねえ」

「これが終わったらわたし自ら手当をしてやる。それでどうだ」

「おお！ ずんずんやる気が出てきたぜ」

自分自身に言い聞かせるように石上が大声で叫ぶ。

なんども折れそうになる心を保つには、そうやって鼓舞しなければならぬほど、追いつめられていた。地球で戦ったときには、救いが来るという希望があった。

だが、いまは無限に湧いてくる敵しか目に入らない。

絶望も、次第に消えていく。頭のなかはまっ白になり、夢中で戦うほかに手段はなかった。

一瞬とも、永遠ともわからない時間が過ぎた。

大伴御行がひざをつき、倒れこむ。

すかさずとどめを刺しにきた剣をかぐやが受けるが、顔をしたたかに蹴られて地面に突っ伏した。血の生臭い味がする。石上が獣のような声を上げてかばいに入る。その背中を、二筋の剣が切り捨てた。

「あっ」

焼けつくような激痛が石上を貫通した。

巨体は、ゆっくりと崩れ落ちると、動かなくなった。

「大伴、石上！」

動けるのはかぐやだけだった。

蹴られた顔を赤く腫らし、切れた唇から血が流れ出ている。そのまわりを、無数の剣がおおった。

——その時だった。

「ルア様！」

男の声がして、突然、周囲の人間がばたばたと倒れた。

アリストス軍の恰好をした兵士が、味方を切り捨てていた。混乱した頭で考える。いったい、なにが起こったのか。

「ルア様、サントでございます。ただいまお迎えに上がりました」

男はかぐやの前にひざまずくと赤い兜を脱いだ。

細身の体に鋭い眼つきをした、初老の男がそこに立っていた。身体は無駄なく鍛え上げられ、実年齢よりもずっと若く見えるその人は、かぐやもよく見知っている人物だった。

「……サントか？」

「そうでございます。ルア様、よくぞご無事で……」

「——いったい何が起こっているのだ、わたしは夢でも見ているのか」

「とんでもない、夢などではございませぬ——ですが、ルア様にこのような怪我を負わせてしまったこと、悔やんでも悔やみきれません」

「どういふことだ。なぜお前がアリストスの服を着ている」

かぐやが困惑しながら尋ねる。まだ現実だと頭が受け入れていなかった。

「それはあとでお話しいたしましょう。それよりも」サントは立ち上がると、ピクリとも動かないふたりの勇者に視線をやった。「こちらの方々は」

「サント、急ぎ治療を施してやってくれ。わたしなど構わなくていい、この者たちはラングネを救う勇者たちだ。失うようなことになつては復興はありえぬぞ」

「彼らが予言の勇者でございますか——重症です、すぐさま搬送しましょう」

「間に合うか」

「敵はもうすぐ撤退いたしますゆえ」

サントがさっと手を上げると、アリストス兵が石上と大伴御行の身体をかかえ、近くの岩場へと運びはじめた。それと同時に、丘の上では噴煙が上がっていた。

「なにが起こっているのだ」

「奇襲をかけました。敵が警戒していた方角とは違うところへ迂回していたため時間はかかりましたが——おい、こっちだ」

数台のジープがサントのもとへ近寄って来ると、なかから幾人もの兵士たちが現れ、慎重な手つきで石上と大伴御行をジープのなかへ運び入れていった。彼らはラングネの紋章のはいった軍服をまとっており、衛生兵も混じっているようだった。

サントはかぐやの腕をとると、腫れあがった顔をじっと見つめた。

「ほんとうに、ルア様なのですね」

「夢ではないといったのはお前の方だぞ」

「よかった……本当によかった」

サントはかぐやとともに、ジープのなかへ乗りこんだ。

丘の上からはアリストス軍の姿が消え、代わりにラングネ軍の印をつけた兵隊たちが大歓声を上げている。盆地にたまっていたアリストス軍はなにが起こったかわからないままに同士討ちをし、逃げ惑うものもラングネ軍の兵士によって掃討されていった。

ジープの進む方向はクレアの教えてくれた通りの方角だった。おそらく抵抗軍の基地へ行くのだろう。かぐやは、ふと意識が遠のいて行くのを感じた。視界が、真っ暗になった。

レジスタンス

気付けば固いベッドに寝かされていて、薄汚れた灰色の天井に埋め込まれた電灯の白い光が視界に飛び込んできた。

薬品のおいが鼻をつく。

起き上がろうとすると、ベッドに横に座っていた衛生兵が静かな声で寝ているようにといい、ほかの医者呼びに部屋を出ていった。かぐやは衛生兵がいなくなるのを確認すると、上半身を起こして部屋を見まわした。蹴られたせいなのだろう、左目には眼帯が巻かれていてうまく像の焦点を結ぶことができなかった。

医務室のような小部屋にはかぐやの他に誰の姿もない。かぐやの寝ているベッドが一つと、先ほどまで衛生兵がすわっていた椅子に小さな机が置かれているだけだ。抵抗軍の地下基地といえたいした部屋数もないだろうから、自分のために特別に部屋を要したいのだろうと推測はついたが、どこか申し訳ない気持ちと腹立ちが湧きあがってきた。

だいたい顔を切ったくらいで大げさなのだ。

怪我人は他にもたくさんいるはずで、いちいち特別待遇をしなくてもいいのに。

それよりも大伴御行と石上の安否が気にかかった。ここには十分な薬も医療器具もないかもしれない。たとえ処置を施したとしても助かるという確信はなかった。

医者がもどってきたらすぐに尋ねよう。そうしなければ心が落ちていきそうにない。

もう見るものがないと分かるとかぐやはゆっくりと枕に頭をおいた。ベッドと同じように固い枕だ。そして、どこかほこり臭かった。「……ここまで来たか」

感慨はなかった。

滝に流されたみたいにあっという間の出来事で、いまままだ夢を

見ているのではないかと疑ってしまうほどにすべてがせわしく変転していた。

戦いに次ぐ戦いをようやく切り抜けたのだと思うと、いまさらになって鳥肌が立った。いつ死んでもおかしくない場面ばかりだった。地球でのことも、月にもどってからのことも、ふたりの勇者がいなければ何もできずに終わっていただろう。

その彼らがそばにいない。

自分でも滑稽なほど不安になるのを感じた。わたしは、いつからこんなに弱くなったのだろう。いや、最初から強くなかったのだ。じいを失ったときも、翁と別れたときも、クレアを連れ去られたときも、わたしはいつだって不安だった。

「失礼します」

サントと供に数名の白衣を着た医者が入室した。

王宮直属の優秀な医師たちだ。戦火をくぐり抜けいまは抵抗軍に協力しているのだろう。だが、それ以上の人数がアリストス軍に捕まったにちがいない。

医師らはかぐやの顔の傷をはじめ、体調やほかに痛む箇所はないかといくつかの質問をして、おおかた問題なしという結論を出した。すこし疲労がたまっているため数日間安静にすればいつもとかわらぬ生活を送れるようになるだろうと伝える。

「つまりわたしは寝ているだけでいいのだな」

「基本的には」医者のひとりがこたえた。「無理は禁物です」

「ならばわたしをほかの患者と同じ部屋へ移せ。このような空間の無駄遣いをしている余裕はなからう、寝ているだけならば廊下でだってできる」

「しかし、ルア様にはストレスのない環境で静養をさせていただかなければ」

「こんなところにいたほうが精神的に参る。わたしだけを特別扱いしている場合ではなからう。さあ、わかったら早くほかの病室へ連れて行け」

「そうはいいまして——」

かぐやにつめ寄せられた医者たちは助けを求めるようにサントの方を顧みだが、軍部副隊長はかぐやの表情が本気なのを感じ取ると、「ルア様を後ほど別の病室にお連れしろ。この部屋はもとの用途通りに使う」

「もとはなんだったのだ、ここは」

かぐやがサントに尋ねる。

「もとは備品置き場だったものを片づけたのでございます。かぐや様をお連れした後、荷物を戻させましょう」

「そうしてくれ」

かぐやはふうと息をつく、ふたたび身体を起こしてサントと向き合った。

白い短髪をした老人は昔よりもやつれてはいたが目の輝きを失ってはいなかった。アリストス軍が突如として侵略を開始してから軍をひきいて各地を転戦していたのが、今度は抵抗軍の指揮をとっている男は、あくまで武骨で、物静かな軍人だ。

慎重な性格のサントだったからこそ抵抗軍の勢力を温存しつつ戦うことができたのだろう。

軍部隊長は国王とともに最前線で戦っていた。勇猛で知られた武人だったが、サントが指揮をとっているということは捕虜になったか、命を落としたかのどちらかだ。彼の性格からして敵の手に落ちることを許しはしなかったことだろう——親しかった人は周りからどんどん消えてしまう。

「その前にいくつかお話しねばならないがございます。それに、ルア様から話してもらわなければいけないことも」

「分かっている——だが、その前に聞かせてくれ。大伴と石上の容体はどうだ」

「おふたりの勇者様はただいま集中的に治療を施しているところですよ。背の低い方は身体的な衰弱が激しく、肩の骨も折れてはいませんが命に別条はありません。ルア様よりも時間はかかるでしょうがし

ばらく安静にしていれば完治します」

「石上はどうなのだ」

サントは質問に答えるのを少しためらっていたが、かぐやの表情をちらりとうかがい見てから、低い声で言葉を発した。

「……大変危険な状態です。指の損傷はさほどでもありませんが背中に受けた傷が重傷で、いまは医師を総動員して手術をしております。それに加えて栄養失調が激しく、衰弱の度合いはもう一方と同じくらいかと」

栄養失調。

石上が「腹が減った」といって駄々をこねていたことを思い出す。あのときは厳しい言葉で叱責し行軍を続けたが、思い返せばあのときにはもう限界が近づいていたのかもしれない。体が丈夫だということでなんでもかんでも平気だろうと樂觀していた。それは間違っていたのだ。ひどい仕打ちをしてしまったと後悔の念が湧いてくる。

「助かる見込みは」

「……正直、厳しいかと」サントはうつむきながら言った。

「そうか」

かぐやはなんのためらいもなくベッドから降りると出口の方へ歩きはじめた。あわててサントが呼びとめる。

「どこへ行かれるのですか」

「見舞いだ。あやつの看病をしてやるというのが約束でな、破るわけにもいかないだろう」

「それは医者にお任せくださいませ」

「あやつらはわたしに惚れているのでな、見舞いに行つてやれば元気も出るだろう」

惚れているというかぐやの言葉にサントは驚いた様子だったが、まったくベッドに戻る気配のない姫君を見て「身体の調子が悪くなったらすぐに仰ってください」とくぎを刺してから石上のいる病室へ案内をはじめた。

地下基地というだけあって窓はひとつもなく灰色の冷たいコンクリートの廊下が複雑に入り組んでいる。廊下の両側にある小部屋にはそれぞれ標識が取り付けられ、そこがなんのための部屋なのかを示していた。

人影はまばらだったがすれ違うどの兵士もかぐやの姿を見かけると直立不動で敬礼をし、涙を浮かべる。

数分ほど無言で冷やかな電灯の下を歩いて行くと、無機質なドアのまえにたどり着く。そのわきには「集中治療室」というプレートがはめられており、なかからは慌ただしい声が聞こえた。

かぐやがノブを握ると、金属の冷たい感触が手のひらを伝った。

「ここにいるのか」

「まだ治療が続いています。邪魔にならぬよう、気をつけてください」

「ああ」

ドアを開ける瞬間は緊張した。

石上は緑色の台の上に寝かされていた。腕や口のあちこちから管がのび、液体の入った袋につながっている。大きな身体のまわりを何人もの医師が囲み、とまることなく手を動かし、指示を飛ばす。まるで怒声のような指示からは、余裕がまったく感じられなかった。

「石上……」

大きすぎるために二台のベッドを連結し使っている。

その上に横たわる巨体はかすかに肺を上下させていたが、そこにいつものような快活さは残っていない。まるで機械のようだ、とかぐやは思った。電力を供給されるだけの機械。

「ルア様、どうしてこちらへ」

治療にあたっていたひとりが目を丸くする。

サントは医者に事情を説明すると、かぐやを石上のそばへ導いた。「どうか声をかけてあげてくださいませ。この方はラングネ国の救世主、ならばここで死ぬはずのない男でございます。ルア様の力で、

捻じ曲げられた運命を矯正するのです」

「こいつは単純なやつだからな、わたしがひと言声をかければすぐにでも目をさますさ」

石上の大きな手を握る。

冷たい手だった。

両手で包みこむように温めながら声をかける。

「石上、お前と大伴のおかげでわたしは生き延びることができた。地球でお前たちと出会ってから、わたしは助けられてばかりだ。そしてこれからも、そうなるだろうと思う。わたしがお前たちに恩返しをできるとすれば戦争がすべて終わり、ラングネ国を無事に復興させてからになる。だからそれまで生きてもらわなければ困るのだ、なあ、そうだろう」

石上に反応はない。

目をつぶったまま、点滴を受け入れている。

「せっかく月にまで来たのだ、こんなところで果てるような器の小さい男ではなからう。わたしにはまだお前の力が必要なのだ。この大きな腕と、力と、なによりお前自身が。わたしはこれ以上誰も失いたくはない、だから目をさましてくれ」

かぐやの声は、涙を帯びていた。

「食べ物なら好きなだけ食べさせてやろう。わたしでいいのならいつでも話し相手になろう。手を握ってほしければ握ろう。だから生きろ、生きて、わたしを喜ばせてくれ」

涙がひとすじ、こぼれ落ちた。

「頼むから――目を覚まして」

石上の胸にかざられていたネックスが光り出したかと思うと、それは意思を持ったように石上の顔へと移動し、額の上へ乗った。た。

誰もが手をとめてその不思議な光景を見つめていた。

そして、小さな貝殻の集まりは徐々に光を弱めていくと、また何事もなかったように沈黙した。

「笑っておりますな」

サントがつぶやく。

石上の口元は、いつのまにか、微笑をたたえていた。

「これがお前の返事なのか――石上」

ほんのわずかに、握った手が、押し返されたような気がした。

自分の病室に戻る途中、大伴御行の眠っている部屋にも立ち寄ったが、まるで死んだように眠っているだけで、話しかけてもなんの反応もなかった。

近くで見ると、端正な顔のあちこちに傷がある。

石上のように丈夫なわけでもなく、光のない感覚で戦い続けることはさぞかし心細いことだっただろう。命に別条はない、その言葉が何よりも頼もしく、嬉しかった。

「ルア様、クレアのやつはどういたしましたか。ルア様を迎えにやっただけです」

うす暗い廊下で、サントが訊く。

かぐやは表情をこわばらせて、蛍光灯を見上げた。

「アリストス軍に捕まった。お前たちが助けにくる前の戦いで」

「……そうでございますか」

「クレアはまだ生きている。それにラングネの兵士の多くが捕虜になっているだろう。彼らを一刻も早く助けだしてやらねばならないな」

「そのことなのですが」とサントは前置きして「これからの作戦を立てるためにもルア様には一部始終をお話ししなければなりません。お疲れのところにも長話になりますでしょうが、よろしいですか」

「ああ、もちろんだ。わたしからも話さなければいけないことがある」

かぐやの体力面を気づかってベッドは移さず、話が終わってから病室をかえることにした。

ふたりきりで打ち明けたこともいくつかあったし、その方が気も楽だろう。サントがこれから語ろうとしていることは決して明るいことばかりではないはずだ。

固いベッドに腰を下ろす。

病室はいやに静かで、身にしみるようだった。

「さて、なにかからお話したいしましょう」サントはふう、とため息をついてからいった。「ルア様が月を離れてからのこと、今回のアリストス軍の侵略について分かったこと、それから……」

「父上のことも、だ」

きっぱりと言つてのける。

サントは覚悟を決めたようにうなずくと、しゃがれた声で喋りはじめた。

「アリストス軍が突然の侵略を開始したのはわずかひと月前のことでした。もちろんルア様も覚えてのことでしょう、昔から国境争いはありましたがそれも細々としたもので、この数年はなにもなく平穏な状況でありました。その均衡が破られたのは、あの巨大な兵器を用意してきたためでした」

「レーザー砲か」

「それだけではありません、我々の想定をはるかに上回るほどの軍備を整えてきたのです。まるでこの数年を戦争の準備に費やしてきたかのように。警備の手薄だった国境はまたたく間に防衛線を突破され、その勢いを止めることも叶わず反撃の態勢ができたところにはすでに領内の半分ほどがアリストスの手に渡っておりまして。軍が緩みきっていたといえばそうなのかもしれないが、たとえ万全の準備をほどこしていたとしてもあの兵器と装備には勝てたか怪しいものです」

「あの大量のジープのように」

「そうです。一連の侵略は、その辺に理由があるのではないかと睨んでおります」

「どういうことだ」

「アリストス側は発掘調査中に古代人の軍事基地のようなものを発見したのではないでしょうか。この場所もそうですが、いまだこの星には無限の技術品が土をかぶったまま眠っております。そのほとんどは生活を便利にさせるため活用されておりますが、あまりに強大な力を手にしまったゆえに、あらぬ気を起したのかもしれない」

「月を統一しようというのか、馬鹿者め。都人たちがなぜ月を捨てたと思っているのだ。発達しすぎた技術力が自分たちの手に余るようになったからだぞ、軍事兵器などその筆頭ではないか」

「アリストスは周到に計画を立て、発掘した兵器を調査し、なんの懸念もなく使いこなせるようになるまで訓練をこなしたことでしょう、表面上は平生と変わらぬふりを装って」

「その予兆は、まったく感じられなかったな」

「よほど用意周到かつ秘密裏に決行されたことなのでございましょう。なにせひとつの星を支配するかどうかという瀬戸際の話ですから、計画は綿密さを極めたくなるものです」

「それで、アリストス軍は？」

「我々の拠点を次々と攻略しつつ、王城にまで迫ってまいりました。そのころになるともう総力戦でした。こちらは予備隊も含めてありったけの兵を送りましたが、敵の勢いと装備をくずすことができず、じりじりと防衛線は後退して行きました。そしてあの総攻撃の日に、隊長と国王様とともに前線に立っております」

「父上が死んだのだろうとはいいから聞かされている。遠慮はしなくたっていいぞ」

「――はい。国王様は一隊を自ら率いて善戦なされましたがそれもむなしく、最後は軍隊を分断され、まさに死に物狂いとなって戦っておられました。そして最期の間際というときに、残った兵をまとめて抵抗軍を結成し、ルア様の御帰還を待つようにと指示をされたのです。国王様は、あのジアードという男にとどめを刺されました」

「……あいつが……」

唇を切れるほどにかみしめる。

せめて命を散らすときだけでも苦痛なく逝ってほしかった。ジードの手にかかったのならまっとうな死に方はできなかったにちがいない、そう思うと無念がこみ上げて来て、怒りに拳が震えた。

「ジードは同時に隊長をも切り捨てました。国王様の言いつけどおり城内の一般人と兵たちを誘導して、秘密の通路を使いこの基地にまで案内しました。ふだんから訓練の一環としてこの場所は想定しておりましたが、まさか本当に役に立つ日が来るとは思っておりませんでした」

「あの城には妙な仕掛けがたくさんあるからな」

ラングネ国、アリストス国ともに王城は古代人の遺物で、城のあちこちに失われた技術が残されているのだ。かぐやが地球に逃避したときの宇宙船もその一つだった。

そのスイッチがどこにあるのかは王族と軍部の最高機密であり、一般人が知り得ることはない。

もちろん敵が探すことも不可能だろう。

「王城が占拠されたと聞いたのはそれからすぐのことでした。我々は敵に居場所を知られないよう細心の注意を払いながら、各地に点在する残兵を吸収し、ときにはアリストス軍の一隊を奇襲したりして、ルア様の帰還をまっております。ですが三日目になったとき、クレアがどうしてもルア様を迎えに行きたいというものですから、いつかはその必要もあることですし、少々不安ではありましたが彼女を使者として派遣することにいたしました」

「たしかこの基地にも一隻、宇宙船が配備されていたな」

「そうです。ですがアリストス軍のレーザー砲が空中への警戒を怠っていませんでしたから、飛び出したところですぐさま撃墜されてしまうのは目に見えておりました。ですから陽動作戦を行ったのです。王城に夜襲をかけるのは骨がおりましたが、ひとまず敵の注意をそらしたところでクレアの乗った宇宙船を出立させました。レーザー砲は命中しなかったようですが、そのかわりにかなりの損害を受けました」

「クレアがわたしのもとへ来た時、すでに半年以上が経過していた。月と地球では時間の流れが違うのかもしれないという話になったな」

「そのようなことが」サントは表情にださず驚いて見せた。

「理屈がどうであれわたしにとっては好都合だった。ふたりの勇者をさがし出すこともできたし、気持ちの整理をすることもできたかな。それに、素晴らしい人たちと出会うこともできた。わたしに生きる大切さを教えてくれたのは、間違いなく彼らだ」

「おふたりの勇者様は、どのようなかたなのでございますか。その、惚れているとか、なんとか」

「ああ、お前の言うとおりで。地球で勇者をさがすとき一芝居を打ってな、そのときわたしに惚れた男たちというのがあやつらだ。他にも数人いたのだが、どうもこいつも骨のない男たちだった」

「……さようでございますか」

箱入り娘として育てられたはずのかぐやが、ここまでひょうひょうと男を扱っていることにサントは驚愕した。いくらもとからお転婆だったとはいえ、地球でいったい何があったのだろうと心配になる気持ちを押さえつける。

「予言によると、勇者様はなにかしらの宝を有していたはずですが」
「石上は先ほどのネックレスがそうだ。大伴のほうは、奇妙なことだが瞳の代わりに紅の玉が眼窩に収まっている。そのせいで視力は失ったが、そのほかの感覚が鋭敏になっているから生活も戦闘も困らないそうだ」

「なんとも不思議なことでございますね」サントが感嘆の声を上げた。「都人が地球へと持ち運んだ古代技術の結晶が、あの宝の正体なのでしょう。ほかにもあったのではないですか」

「見つけるのは至難の業だ。あやつらふたりも死にそうな目であつて入手したものらしい」

「なるほど」

サントは二度、三度とうなずいた。

それから壁にかけられた時計に目をやると、席を立った。

「そろそろお時間でございます。ほかの病室へ移りましょう」

「抵抗軍はこれからどうするのだ」

「——ルア様に指揮をとっていただきたいと思っております。そのためにもルア様の一刻も早い回復と、勇者様の復活が不可欠かと」
「そうか、そうだな」

かぐやはなにか意を決したようにベッドから立ち上がると、サントのあとに続いて病室を出た。ここからすべてがはじまる、まだスタートラインに立ったばかりなのだと自分に言い聞かせながら。

勇者の目覚め

それから数日は平穏に時が過ぎていった。

かぐやは一般兵と同じ病室に移動したが、そのときの騒ぎようにいったらまるで年に一度開かれるお祭りのようだった。本来、ラングネでは平民が王族を見ることがするのはその祭りのときだけで、それ以外には格式ばった儀式のさいにほんの少し姿を拝見できるくらいだ。

そのためラングネ兵たちにとって王族は手に届かないような高貴な存在であり、それがすぐそばにやって来たのだから、嬉しいやら信じられないやらで涙するものも多かった。

かぐやはそんな彼らの様子を煙たがることもなくむしろ積極的に関わろうとしていた。

ひとりひとりの士気を高めることは戦闘に大いに役立つし、なによりラングネの民と触れ合っている時間がかげがえのない大切なものに思えたからだ。

クレアやサントと再会して、ラングネを愛する気持ちはますます強靱なものになっていった。

「ルア様、朗報でございます」

ひとりの看護師がかぐやのいる病室にやってきて、そう告げた。

「大伴様が目を覚まされました」

「ほんとうか」

かぐやは飛び起きると石上がいたはずの病室に小走りで向かっていった。

この数日というものの、暇を見つけては基地のあちこちを歩き回っていたのでだいたいの構造はわかっていた。

医者には止められたが、軽い散歩だといってきかなかったのだ。

「お久しぶりです、かぐや様」

意識がなかったせいで食事をとれず、点滴に頼っていた大伴は以

前よりもさらに細くなっているようだった。こけた頬に微笑を浮かべ、声も弱々しかったが、それでもたしかに生きていた。

「まったく心配をかけおつて。わたしにどれだけ心労をかけるつもりだ」

「それはそれは申し訳ありません。すこし夢を見ていましたものでいつものようなからかい気味の口調で大伴御行が言い訳をする。

「ほう、どんな夢だ」

「私がかぐや様をめとり、幾人もの子供に囲まれて幸せそうに暮らしている夢でございます。召使には石上を使って、クレアさんが子守りをしているような、そんな光景でした」

「――それは正夢になるのか？」

「さあ、これから次第でございましょう。どちらにせよ私が動けるようにならないと未来は明るいものになりません。まだ少々、体が痛みますので」

「ゆっくり休んで幸せな夢でも見ている」

かぐやもようやく大伴御行の冗談に馴れてきたのか表情を変えることなく応酬すると、いまだに石上が意識を取り戻していないことを告げた。

そうですか、と言ったきり、大伴御行は黙りこくった。

「死んではいけない。それにわたしも声をかけ励ました。これで起きなかったら石上らしくないだろう」

「すこし疲れて眠っているだけでしょう、あいつも無茶をする男ですから」

そう言うと、大伴御行はまた沈黙してしまった。しばらく待っているとすやすや寝息を立てはじめたので、かぐやは彼の手を握ってから病室を後にした。

生きている人間のぬくもりがした。

サントはかぐやが完全に回復するまで抵抗軍の指揮をとり続けて

いた。

元気なものを選びすぐっては自ら偵察に赴き、何時間かすると帰って来る。ときには百人近い人数を率いて遠征することもあった。

それでも一日と間をあげずに基地へ戻ってきたし、そのたびにかぐやの元へ駆けつけては見聞きしたことを報告した。

先の戦いで打撃を与えたことが響いているのかアリストス軍の姿はほとんど見当たらなかったこと、情報統制を敷いてはいるがかぐやの帰還はすでにほとんどの国民に伝わっていること、それから各地でもレジスタンスが蜂起し、反乱をおこしていることなどがめばしいニュースだった。

かぐやはサントの報告を聞いたたびに表情を硬くした。

「――行動を急がねばならないな」

「早ければ早いほどいいのですが――勇者のおふたりが回復しなければ身動きがとれません。もどかしいですな」

石上はまだ昏睡状態でいまま懸命の治療を行っている。かぐやもまめに足を運んだが、あのとき以来ネックレスがなんらかのメッセージを示すこともなく、声をかけるだけにとどまった。

大伴もダメージが激しく、本人はかくしていたようだが相当の傷を負っていた。回復にはもうしばらくかかるだろう、というのが医師の判断だった。

「あやつらが戦えるようにならなければ勇者の予言がなんの意味もなさなくなる。それまではアリストスを敵に回すことはできないな」

「せめて片方だけでも回復すればいいのですが」

「アリストス軍は動静をひそめているのだろう、ならばじっくりと身をひそめ、待つしかあるまい」

「しかし、各地の暴動も時間が経てば鎮圧されてしまいます。時を移さずして一斉に立ち上がってこそ効果があるのです」

「勇者の替え玉を立てるといふのはどうだ」

「代役を出すのですか？」とサントが聞きかえす。

「体格のいいものと細いものを選んで服を着せれば、遠目には分か

るまい。本物の勇者はいるわけだし、時間を有効に活用するためにも勇者を仕立てあげてみたらいいのではないか」

かぐやがまくしたてるが、サントは浮かない表情だった。

「石上様ほどの大男はこの軍にはいませんゆえ」

「ならば二人羽織をすればよい」

「炎はどういたしましょう」

「小細工を仕掛ければ何とかなるだろう」

「そう、うまくいくものでございましょうか……」

「サントは慎重すぎるのだ。ここで機を逃せばラングネ国の勝利はありえないぞ」

「それはわかっておりますが――」

「ならばさっそく選抜をはじめてくれ。なんならわたしがやってもよいぞ」

はやるかぐやをサントが両手で制す。

不満げに眉間にしわを寄せながらかぐやは立ちどまった。

「なんだ？」

「いくらラングネ国のためとはいえ国民をだますのはよろしくないかと。このような非常時にこそ人民は結束しなければなりません。その旗印たるルア様が嘘については、人々の信用を失い、ラングネの復興など夢に終わるでしょう」

「――だが」

「なりません。誰かを信じることも、ときには必要なのです――」

――非常事態を知らせる警報が悲鳴のような勢いで鳴り響いた。

サントとかぐやは目つきをかえて立ち上がると、地上の見張りからの報告を受ける指令室へと走った。廊下ではどの兵士も慌てふためきながら戦いの準備をしている。まさか地下基地が攻撃を受けるなどとは想定していなかったのだ。

わずかな無線のつないである指令室には人があふれかえっていた。サントは奪い取るようにして無線の通信機を手にとると、怒声のような報告を受ける。焦っているためか舌のまわらない兵士の声は

上ずっていて、聞きとりづらい。それに加えて通信機のもこう側では爆発音が絶えず炸裂していた。

それでもなんとか見張り番の報告を理解すると、サントの首筋を冷や汗が伝った。

「こちらの居場所が敵に知られていたようです。完全な包囲網を敷き、大軍が押し寄せているとのこと。もはや逃げることは不可能でございましょう」

「数は？」

「およそ主力の八割ほど。わが軍の数十から数百倍はあります」
「――これまで動静が穏やかだったのはこの軍隊を集結させるためか。アリストスめ、小癪な真似を」

「ルア様、ここは籠城戦を挑むほかないでしょう。幸いなことにまだ王城からの抜け道は知られておりません。入り口は一ヶ所だけでそこからそこに全兵力を集中させ、徹底防戦をいたしましょう」

「せめて大伴御行が回復するまでのあいだ持ちこたえれば勝機はあるな」

「ええ、ルア様の御帰還によって兵の士気は高く、少数とはいえ数日は持ちこたえることができました。ですが、それまでに大伴様が戦える状態にならなければ――」

「余計な心配はあとでしろ。いまは敵に防衛線をくずされる前に防衛網を敷くのだ、いいな」

「わかりました」

サントは無線をあやつって兵の配置を指揮しはじめる。

かぐやには専門的なことはわからないので、それ以上その場においても邪魔になるだけだと思い、大伴御行の眠っている病室へ足を運んだ。

室内は誰もが出払っているためか無人で、大伴御行だけがひとりベッドから起き上がろうと悪戦苦闘していた。

「なにをしているのだ、馬鹿者」

あわててかぐやが炎使いの勇者を押し戻す。

抵抗する力もなくふたたびベッドに伏した大伴御行は、くやしそうに表情をゆがめた。

「こんな怪我さえないなければかぐや様とともに戦えるというのに、肝心な時に戦闘不能ではただの足手まといです。それがなにより悔しくて仕方ないのです」

「おまえの役割は傷を一刻も早くいやし、まともに戦える状態にまで持っていくことだ。中途半端なものはいらん、敵を一掃できるよな、そのくらいの状態でなければいけないのだ。石上に期待できない今、お前の回復にすべてあがかっていっているといっても過言ではない。だからいまは静養に勤めてくれ」

「……せめて、私を前線へだしてはくださいませぬか。すこしばかりの手助けはできるかと思いますが」

「駄目だ」

とかぐやはきっぱり否定する。

「兵たちは勇者の戦いぶりを見ていないから、お前たちに対する期待は凄まじいものに膨れ上がっている。そこで半端な状態をさらしてしまつては士気に大きくかわって来るぞ。お前たちという希望があるからこそ戦えるのだ。援軍なき籠城戦のいま、すぐれるものは予言の勇者とわたしだけだ」

「……わかりました。私は全力を持ってこの傷を治すことにいたします。それまでは必ず、持ちこたえてください」

「いわれなくともそのつもりだ」

大伴御行が静かになつたのを確認してからかぐやは今度は石上の病室へと回った。

この数日間で重傷の手当てはほとんど終わり、いまは点滴に繋がれたまま目をさますことなく静かに眠っている。右手の指さきに巻かれた白い包帯が痛々しかった。

背中に受けた傷がもつとも重傷だということであつてうつぶせになつて看護されているため石上の表情をうかがうことはできない。たとえ見ることができたにしろ無感情に意識を失っているのだから関係な

いだろうとは思ったが、それでもやはりすこし寂しいものがあつた。いつもと同じように一方的な声をかけてから、かぐやは再度サントの陣取る指令室へ戻った。

「防備体制はすでに整っております。人数が少ないぶん、迅速に動けました」

「敵はどうなっている？」

「大勢の利を生かせず、入口付近でとどまっております。砲撃も用意しているようですが古代人のつくった地下基地ですから滅多なことでは破壊されないでしょう——あのレーザー砲ならば話は別かも知れませぬが」

「アリストスはどうしてあれを持ちだして来ないのだ。我らをせん滅するにはうってつけの武器であろう」

「おそらく途中で奇襲されることを嫌ったのでございましょう。万が一にもあれが敵の手に渡れば王城を取り戻されるどころか、本国にまで攻め込まれかねない。それほどまでに影響のある兵器でございますから」

「つまり、完全に包囲した後で安全な道を運んでくるということか」
「さほど猶予はないことでしょうが——それまでに敵兵を撃退し、なんとかして鹵獲できればわが軍は大いに優勢を築くことができます」

「最終目標はそれでいい。だが、いまはひたすら耐えるのだ」

「わかっております」

サントはしばらくそこで指揮をしたあと、自らも防具をまとって前線に赴いた。

かぐやのいる地下基地の内部にもその喧騒は届いてくる。けっして前線へは出てこないようにと強く言い含められていたので、かぐやは無線から入って来る報告をかたい表情で聞き及んでいた。

指令室には数人だけが残り、ときおり前線の兵士と連絡をとりあっている。

そこから基地の入口までは走っても十分ほどでたどり着く。それ

に戦域が小さいためあまり連絡というものは必要なかった。

より深刻なのは次々と運び込まれて来る負傷者への対応だった。基地内に残っていた医師たちが全力でバックアップにあたっているが数は足りておらず、またたく間に病室は血なまぐさい匂いでいっぱいになった。

大伴御行は余計なストレスをかけてはいけないということで、本人は嫌がったが、基地の深部のほうへ移動させられた。そこには外部の怒鳴り声も、戦闘の音も、届かない。

「こう言ってはなんだが、わたしにできることというのは存外に少ないものだな」

周りの人間はそれぞれに明確な役割を与えられて働いているのに、かぐやにはそれがなかった。せめて大伴御行のベッドを運ばせてくれと志願したのだが、ものの数分で終わってしまう簡単な仕事だ。退屈のような疎外感をぬぐうことができない。

「それは私も同じことです。実際に戦っている方が無駄なことを考える余裕がなくていいものだと思いますね」

「わたしが王城を離れる前は実感がわからなかったが、実戦を経験するとまったく違って見える。ひとつひとつの命の重さも、くつがえしようなない戦況のもどかしさも、ずっと重たくのしかかる」

「押し潰されそうですか？」

「――正直なところ、動いてないとそうだ。おまえたちがいなければわたしはまったくの無力で、ただの木偶の棒でしかない」

「人にはそれぞれ天命というものがあります」大伴御行は諭すような口調で言った。「生まれながらにして職人になるべきもの、農民になるべきもの、貴族であるべきもの、そして人の上に立つべきでもあるもの。かぐや様は最後のそれなのです」

「だが、権力者が先頭に立って戦わなければなにも救えないではないか」

「そういうものでもありません」

大伴御行はゆっくりと首を横に振った。

「たとえば、軍師という職業があります。竹取の翁はまさしく生まれながらにして軍師でございました。自分は先頭に立つことはないながらも、彼がいなければ勝利などありえなかった。それとは逆に石上のような考える頭はないにしろ武のたつものもあります。そういう人は軍師の指示に従って勇猛果敢に戦場を駆けまわらなければいけません。ですが、戦に勝つにはそれだけでも足りないのです。軍師も兵士もまとめあげる存在が必要です。それがかぐや様なのですよ」

「……わたしにその器があるのか？」

「もっと自分を信じてみてはいかがですか、私も石上も、かぐや様を慕ってはるばる月にまで同行したのですから」

かぐやは答えない。

自分の考えをまとめるために沈黙が必要だったのだ。

どれだけ理論的に説明されたところで実感がわかなければどんな言葉も価値を持つことはない。大伴御行との間にはこうして沈黙が舞い降りることが多くあったが、そのどれもが不快なものではなく、なんらかの意味をもった静寂だった。

「……わたしは戦いたいと思った。いま戦っている兵たちに混じって、剣をふるいたい」

長い無言のあとに、かぐやは口を開いた。

「それはなんのためですか」

「ラングネを救うためだ」

「かぐや様自身が戦うことによって、それは成し遂げられるのでしょうか。さきほどまでは戦えるものが少なかったからかぐや様も含めて戦場に立たなければなりませんでしたが、いまは数百の兵がおります。そのなかにかぐや様がいることに価値はありますか？」

遠慮のない、鋭い詰問。

かぐやは真っ向から大伴御行を見すえ、それに返答していく。

「わたしが戦えば誰かの命を救うことができます」

「月全体のことを考えれば同じだけの命が奪われます。それにかぐ

や様が実際に戦われるよりも、もっと効果的に犠牲者を少なくする方法はいくらでも存在します。それでも剣をとって戦うというのですか」

「待っているばかりではなににもできない、ならばわたしは戦いたい」「……かぐや様は、優しいお人です。ですから他人が傷つくところを見ていたくない、ですから自分が戦いたい。それではいけないのです。あなたはもっと冷酷にならなければならない。結果のためなら手段をいとわない、そのような人にならないなければならない」

「それではアリストスと変わらないではないか！」

「違います」と大伴御行はいった。「違います」

「なにが違うというのだ、わたしに人の心をなくせというのか、民を見捨てろと」

「信じるのです。あなたのために死んでもいいと思っている人がいるということ。かぐや様が戦場に出てしまっただけはどうしても後方の守りを固めなければならない。兵力の劣る我々にとってそれは致命的な弱点になりかねません」

「それらなばお前たちが守ればいいではないか」

と口に出した瞬間、石上の瀕死の姿が脳裏に浮かんできて、かぐやは嗚咽を上げた。

そうだ、そういうことなのだ。

「わたしは——馬鹿だな」

「優しさは、時としてもろさにもなります。ですがそれを恥じることはありません。かぐや様は立派ですよ」

「わたしが我儘だからお前たちを傷つけてしまう。お前たちだけでなくいろんな人を」

じいもクレアも、かぐやのためにアリストスの手にかかった。

自分が何をすべきなのか、いま、わかった。

「ありがとう、大伴」

「私はなにもししていません。かぐや様がご自分で気付かれたことです——ですが、感謝してもらえるのなら、ひとつ欲しいものがあり

ます」

「めずらしいな、なんだ？」

「……その」

「照れなくてもいい、素直にいつてみろ」

大伴御行は、彼にしてはめずらしく言いよどんだ。かぐやが耳を寄せてみると、消え入りそうな小さな声で、

「抱きしめてください」

「は？」

「ほんの少しでいいですから——その、抱擁してほしいのです」

「急にどうしたのだ」

「いえ、やはり無茶なお願いでした。やめにしま——」

かぐやは小さな腕で大伴御行をそっと抱きしめた。傷にこたえないうよう強くはしない。大伴御行の身体は細かったが、かたくて、そして温かかった。

「——ありがとうございます」

「お前にとっての世界は暗くて、寂しいかもしれない。もし耐えられなくなったらいつもわたしがそばにしよう。……そうだな」

「はい」

「いまはこれだけだ」といって、かぐやは腕を離れた。「早く治すのだぞ。おまえの体調次第でラングネ国の未来が変わる」

「私だけでなく、信頼できる人はいくらでもあります。そのことをお忘れなく」

かぐやは大伴御行のいる病室を後にすると、数名の兵士が待機している指令室へと戻った。そして、もう被害の報告から耳をそむけることなく、戦況をしずかに見守った。

サント

サントの実力は本物だった。

もともと攻撃よりも防御においての才能を認められて軍部副隊長へと抜擢された男であるから、どんな大軍が相手であろうとも数百の策を講じ、入り口を死守していた。

それに加えてかぐやの存在は士気に大きく好影響を与えている。守るべき対象ができたことだけでなく、頼ることのできる旗印が控えていることによって決死の覚悟を固めることができたためだ。敵は大軍であるがために身動きが取れなくなっており、狭い入口以外に進入経路を見つけられないでいるアリストス軍はその有利を十分に生かし切れていない。

もともとこの地下基地は古代人が王城から逃げ出したときのためにつくられた非常用の基地であり、防御と隠匿に特化しているという特性を兼ね備える。

それでも怪我人は徐々に数をましていき、兵士たちは昼夜を問わずに戦線へと駆り出された。

かぐやは一日の大半を指令室に座って過ごしていたが、ときおり入口の後方に姿を現しては激励の言葉をかけ、兵士たちを鼓舞した。それだけで戦線は活性化しアリストス軍の勢いをそぐことができた。「サント、状況はどうだ」

二日目の夜、サントはかぐやのいる指令室へと戻ってきた。

アリストス軍の猛攻がはじまるまえよりもさらにやつれていたが、目の輝きだけは失っていなかった。

「なんとかこらえております——が、交代の兵も負傷によって減ってきておりますから、もうほとんど一日中戦っているような状況です」

「……まずいな」

「せめて倍の兵がいればもっと粘れるのですが、あまりに少なすぎ

ます。このままでは長く持ちません」

「いったいどれほどだ」

「どんなに良くても三日が限度かと」

「――三日か」

大伴御行の体調は通常よりも早いペースで回復してきてはいたが、それでも戦闘を行うにはまだ遠く及ばない。

命を危機を脱した石上はすでに医者の手を借りなくても大丈夫な状態になった。目が覚めるのはいつになるか予測もつかないが、おそらくこの戦いには間に合わないだろう。

「その状況は？」

「入口が封鎖されておりますから敵の情報を得ることはまったくできません。目の前の敵をあしらうので精一杯です」

「――そうか」

予想できていたことだが、やはり外部と遮断されると不利な立場に立たされる。情報を得られないということは水を断たれたにも等しいのだ。

「休みに来たのであろう。サントなくしてはこの軍は成り立たない、ゆっくりしていけ」

「申し訳ありません」

サントは壁にもたれかかったまますぐさま寝息を立てはじめた。軍人は訓練の一環としてどのような場所でも休息がとれるように訓練されている。サントも例外ではない。

いまはサントの代わりに部下の一人が指揮をとっている。

戦線は膠着しており、事前にやるべきことを伝えておけばある程度の才覚を有したものであればサントと同様の戦果を上げることができるだろう。しかし、逆にいえばそれ以上のことは期待できない。

この戦いに一発逆転の手は、たった一つしか見えなかった。すなわち大伴御行を待つことしか出来ないのだ。

「かぐや様」

と、背後から声がかかった。

振り向くとそこには大伴御行が杖をつきながら立っていた。

「もう歩けるのか」

目を丸くしながらたずねる。まだ立ち上げられる体調ではないはずだった。

「こうして体を動かさないといざというときに役に立ちませんか

——お氣になさらず」

「無理をしているのではないか」

「いえ、そんなことは」といいかけて、大伴御行は不意に膝から力が抜け落ちたように体勢を崩し、かぐやがあわてて体を支えた。

「無茶をするな、すぐ病室に戻れ」

「——ちよつとふらついただけです。数日あれば元通りになります」
「嘘をつくでない。おまえの調子が悪いことくらい赤ん坊でもわかる」

かぐやは大伴御行に肩を貸すと、指令室を離れて病室へとゆっくり歩きだした。軽い身体はさほど負担にはならなかったが、大伴御行は申し訳なさそうにうなだれていた。

「はやる気持ちは分かるが、それをおさえろと言ったのは大伴のほうだぞ。らしくないな」

「すみません」

「とにかくこちらのことはわたしとサントに任せておけ。おまえの役割はしっかり傷をいやすこと、そうだろう」

「——それで本当に間に合うのなら私はいくらでも目を閉じて静かに寝床で横になっていましょう。戦況はかなり良くないのではないですか」

「お前には関係ないことだ」

「寝ておりますといやでも情報が耳に入ってきますものです。これでは居ても立ってもいられないということで起きてきましたが、やはりそうなのですね」

「……お前を投入するのはギリギリまで足掻いてからのことだ。それまでは寝ている」

「現実問題としてたかが数日でいったいどれほど回復できるものでしょうか。ならば兵力が壊滅しないうちに私が出ていったほうがいいのではないかと考えたのです。いくら抵抗軍とはいえ、この状況を覆したあとにも行動できなければ意味がありません」

「だが、まともに動くこともできない体でどうするというのは」

「寝たきりの状態で、戦いましょう」

「なんだと？」

大伴御行の突飛な提案にかぐやは眉をひそめた。

びたり、と廊下を行く足を止める。

「どうということだ」

「私の力――炎を使うには多大な集中力を要します。そのために余計な動作、たとえば敵の攻撃を回避するなどのことをしては充分に威力を発揮することができませんでした。しかしいまならば、寝ながらでも戦うことはできます。必要なのは精神力と集中力ですから、体への負担はありません」

「しかし疲れることには疲れるだろう」

「ひとりで気を病むのも戦場で炎をあやつるのも大差はありません」

かぐやは大伴御行のアイデアに思案を巡らせていた。

もしも彼のいう通り寝ながらも戦うことができるのなら大いに兵を勇気づけることができるだろう。とくに密集地帯での大伴御行の能力は敵にとって脅威になる。そうして時間を稼ぐことができるれば大伴御行自身も回復することができるし、運が良ければ石上も目覚めてくれるかもしれない。

それだけでない。敵の主戦力をこの場に引きつけておくことで、各地の反乱軍を手助けすることにもなるのだ。いまは情報を遮断されどうなっているかまったく知ることができないが、以前のサントの報告によればかぐやの帰還によってかなりの数が参加しているらしい。

メリットは大きい。

が、リスクも計り知れない。

「もし何らかの拍子に敵の接近を許すようなことがあったら、おまえはどうなる」

かぐやは最大の懸念を質問した。

「……近づくまえに焼き払います」

「そういう意味ではない。万が一のことがあったとき、お前は逃げられるかと聞いているのだ」

大伴御行はごまかすように微笑を浮かべてかぐやに返答する。

禅僧のように達観した声だった。

「そのときは、覚悟を決めるほかありませんでしょう。戦場では常に死が隣り合っているものです」

「逃げないというのか」

「ええ、逃げません。私もかぐや様と同じです」

「——まいったな」と、かぐやは小さく笑った。「そういわれてしまつては許さないわけにいかない」

「それでは準備をいたしましょう」

大伴御行が苦笑しながら意気込むと、かぐやはそれを片手で制した。

「サントが起きてからだ、それまでは休んでいてくれ。サントでなければお前を効果的な場所へ配置することはできないからな」

その軍部副隊長はいまさつき仮眠をとりはじめたばかりだ。

大伴御行はしっかりとうなずくと、自分の病室まで戻り、服装や防具を整えた。そして忘れてはならない炎の練習も欠かさない。

「感覚は鈍っていないようだな」

炎の小鳥をあやつって部屋の中をぐるぐると旋回させている大伴御行に向かって声をかける。

もう、不安はなかった。

「ええ」と大伴御行はいった。「それでもかぐや様をお守りする勇者ですから」

防衛戦

そこはいままで経験してきた戦場とはまったく異質の場所であった。

攻城戦、籠城戦、野戦、奇襲戦などの違いによって特性が完全に違うのは知っていたが、ここにあるのは本物の防御戦だった。

三山村の頂上で、簡易的な砦を形成して帝を相手にしたときとは比べ物にならないほど、今回はしっかりした防御網が敷かれていた。大伴御行は前線のやや後方、兵士たちの列のなかほどにベッドを置いて横になっていた。

そうはいっても常に彼の注意は前方へ向けられ、味方に損害を与えないように気を配りながら炎をあやつっている。その時の感覚は絵を描くのにも似ており、毛筆でなめらかな線を引いて行くようなものだった。

視界は完全な暗闇。そのなかにいくつもの物体が輪郭を浮かび上がらせている。

人の身体、熱をともなった剣、壁や扉、そして大量の殺気に人の気配。どれもが景色を見るのと同じように脳へ飛び込んでくる。

敵か味方かは、動きとまがましい殺気がどちらへ向けていられているのかで判別することができる。敵意のある人間というのはすぐにわかる。まるで刃物を喉元へ突きつけられているような圧迫感がひしひしと伝わってくるからだ。

「大伴様の射程距離はどれほどでございますか」

と事前にサントに質問されたとき、大伴御行はだいたい百歩ほどの距離だと答えた。その日の調子によっても大きく変わってくるが、今日はそれが限界だ。

炎をあやつるとき、絵具の残量のようなものを感じることができる。

近い距離ならばふんだんに材料を使って好きな絵を描くことがで

きるが、遠くになればなるほど筆がかすれ、思い通りにいなくなる。そして離れ過ぎてしまったときは、ぷつりと糸が切れるように炎がどこかへ行ってしまふのだ。

サントは限界の八割ほどの場所に敵兵が来るよう、大伴御行を配置した。

「ここならば繊細な作業をともしなうことなく、敵からも狙われない距離になります。大伴様はただ敵に脅威を与えていただければ、それで十分でございます」

サントの命令は的確で、自分のなすべきことをすぐに把握できるよう考えられていた。

優秀な指揮官だ、と大伴御行は思う。

考えることが少ないほど兵士は各自の死後血に専念することができる。その点でいえば、サントは綿密すぎるほどに指示を与えていた。

「敵が退いたときは休んでください。そして再び押し寄せたときは炎を展開させ、出足を鈍らせる。後続と最前線を分断することができます、すこしずつ敵の戦力をそぐことができます」

実際、アリストス軍はサントの推測通り、大伴御行の登場によって一度撤退し、その間に兵士たちはわずかな休息をとることができた。誰もがつかれており、食事をとるひまもなかったなかでの休憩は非常に大きな意味を持っていた。

アリストス軍は押し出されるように退いた後、遠距離砲撃による攻撃を試みたが、地下基地の厚い防御に阻まれて損害を出すことはできなかった。

しばらく無駄打ちが続きそれが意味をなさないと気付くとふたたびもつとも有効的な手段――大人数によるごり押しでラングネ軍を攻めたてはじめると、見計らったように大伴御行の炎が届いた。

「局地的な戦果ですか、わが軍のほうが有利に戦いを進められます」

伝令兵がサントに報告する。

副隊長は同伴御行よりも後方に腰を据えていたが、その声は十分聞きとることができた。

「そうか。よい兆候だな」

樂觀的な言葉とは裏腹にサントの声は浮かないものだった。一抹の不安が頭のすみに引つ掛かって素直に喜べないのだといったような感じだ。

伝令兵はサントがそれ以上なにもいわないのを確認すると、一礼してふたたび前線へと駆けて行った。本部と前線の距離が近いこともあって、彼は三十分一度くらいの頻度でサントのところへ来る。

「――やはり兵が少なすぎる、か」

サントと伝令兵の会話を聞いていた同伴御行がぼそりと呟いた。盗み聞きをしたわけではなく、自然と聞こえてきてしまうのだ。

「私ひとりでは限界がある――石上の力が必要だ。敵を追いつて、反撃に転ずるだけの力が」

いまのままでは防御に徹することはできても勝利の可能性はない。つまりサントが得意とするのは「負けない」戦い方であって、軍を勝利へと導くためにはほかの戦力が必要不可欠だった。

いまは同伴御行がその役割を担わなければならないのだが、皮肉なことにはこの能力は本来、前線で戦うのには向いていないものだ。人数が極端に少ないかぐやとの同行の途中では仕方なしに敵のまんな中へ飛び出さなければいけなかった。しかし、同伴御行が真価を発揮できるのはいまのように防御の心配がない場所で後方から支援しているときだ。

いわば弓兵のようなものである。

援護射撃にふさわしい能力――それが同伴御行のあやつる炎であった。

「力がほしい――守るための力が」
拳を握りしめる。

石上は先の戦いで馬鹿力だけでなく、光の剣を防ぐ力を身につけた。それは彼になかったはずの守る力だ。ならば同伴御行にはない、

新しい力を手に入れることも不可能ではないはずだ。

両目に埋まるこの宝玉を、いまだ使いこなせているとは思えない。かぐやに申しつけられた宝を探す旅の途中、大伴御行は竜王となる存在に出会い、炎をあやつる力を手に入れることができた。それだけでない、鋭敏に研ぎ澄まされた感覚、説明しようのない直感の精度、それらも同時に得たのだ、光を代償にして。

その時のことは今でも鮮明に思い出せる。

突如として全身に神経が行きわたったような、敏感すぎる世界。

同時に感じたのは圧倒的な力だった。

「だが、まだ足りない」

絵を描く、赤い絵の具で。

それではいけない。それでは紙を突き破ることはできない。すべてをつらぬく針のような力が、なににも増して欲しいと願った。

「……そう簡単にはいかぬか」

大伴御行のなかに流れる力の脈になんの変化もあらわれはしない。微々たるものながらもたしかに生まれはじめた戦果とは裏腹に、寝ているときよりも強い焦燥感が生まれた。

疲労は絶頂に達していた。

サントをふくめたラングネの抵抗軍は、想像以上の戦果を上げること成功していた。防御戦線は戦が始まったときから寸分も後退していない。機をつかめばもっと押し上げることができただろうがサントはその選択をしなかった。

いまは耐えるべき時間であると判断したからだ。

下手に反撃を加えれば、餌に食いつく昆虫のように巣からおびき出され一網打尽にされる危険性をはらんでいる。

地下基地の入り口付近はもっとも防御の厚い場所だ。そこで戦っている限りは、どんな大量の敵でも防ぐことは不可能でない。

「サント様、そろそろ交代の時間でございます」

伝令兵が時を告げた。

前線で戦う兵士たちは疲労が蓄積しやすいため、時間をきめて後方に下げ、代わりに休んでいた一隊を投入するという戦法をサントは採用していた。

幸いなことに地下基地の入り口はせまく、少数の兵でも充分に戦うことができるため数日の間は有効に働いていたがやがて負傷者が増えてくるにつれて交代の期間も短くなり、一日中気を抜けない状況が発生していた。

そろそろ方針をかえなければならない。

いくら大伴御行の力が絶大だとはいえ、戦力の大部分を担うのはその他大勢の兵士たちなのだ。

「――もう一時間、交代を遅くしろ」

「了解しました」

短い返事とともに伝令兵は去っていく。彼もそうとう働きづめのはずだ。

抵抗軍を結成するときでさえ伝令兵は貴重で、ほとんど集めることができなかった。その上各地を転戦している際に敵の攻撃に会い、さらにその数を減らしてしまっているのだ。

「……辛い思いをさせるな」

やるべきことはやりつくした。

あとは精神力と運の勝負だ。

小さな部屋のなかに負傷兵がぎっしりと詰め込まれている。

かぐやはひとりひとりに声をかけながら、石上の眠るベッドへと足を進めた。大伴御行を戦線へ投入してから数日が経過していた。

その甲斐あってか戦況はだいぶ盛り返してはいたがやはり圧倒的な数には抵抗もむなく、アリストス軍が新鮮な兵を次々と供給してくるのに対して抵抗軍は満身創痍の兵士を使いまわさなければならない。

そんな状況で拠点を維持できているだけでも奇跡的と呼べるほどだった。

「さあ、そろそろお前の出番だぞ、石上」

かぐやは子どもに話しかけるような優しい口調で石上の手を握った。

あたたかく、脈打っているのがたしかに感じられる。一時の死んだような様子はどこにもなく、肌も土気色から健康的なものへと戻ってきている。

「このままでは大伴にいいところをすべて持っていかれてしまうが、それでもいいのか。大きく差をつけられることになるのだぞ」

室内の兵士たちはかぐやに気をつかって痛みをこらえ、物音をたてないようにしている。なかには静かに涙を流しているものさえいた。

「お前の使命はラングネを救うことだろう。いまこそ絶好のチャンスではないか、なあ」

石上の返事はない。

かぐやはふっと力を抜いて笑いかけると、あちこちに包帯をまいた傷だらけの兵士たちに向かって語りはじめた。

「この男は勇者だが、少々根が怠け者だな。わたしがこうやって鞭を入れてやらんといつまでも眠っているのだ。お前たちも氣に病むことなくゆっくり体を休めてくれ。その怪我を誇りに思うのだ。ラングネのためともに戦うことを、わたしは嬉しく思うぞ」

それはかぐやなりの感謝の気持ちであることは誰の目にも明らかだった。

怪我をした兵士は自分が戦えず足手まといになっていることをストレスに感じ、気分も沈みがちになる。なにより情けなくなってくるのかぐやは理解しているのだ。

「ルア様、至急指令室へ！」

医者の一とりが血相を変えて飛び込んできた。

かぐやはわき目もふらず駆けだすと、廊下の角を通過するたびに

転びそうになりながらも指令室へと急いだ。

「どうしたのだ」

「防衛線が突破されました。これより第二防衛線へと移行し、隊形を立て直します」

「……それは本当か」

恐れていた事態がついに訪れてしまった。

終末へのカウントダウンが始まったことを全身が感じ取っている。

「大伴はどうなっている、あやつは大丈夫なのか」

怪我のために敵の攻撃を防御するだけの体力が残っていない大伴御行は、敵兵が押し寄せれば赤ん坊よりも簡単にひねりつぶされてしまう。そういう意味で彼はまったくの無力であった。

「大伴様はサント様が無事に後退させ、いまは第二防衛線付近で戦っていらつしゃいます」

ほっと胸をなでおろすのもつかの間、かぐやは立て続けに質問をした。

「敵の勢いはどうだ」

「雪崩をうって基地内に侵入してきております。サント様がうまく勢いを止めてはいますが、場合によっては第三防衛線まで後退することもあるかと」

「それではほとんど攻略されたも同然ではないか」

かぐやが叫ぶ。

サントの想定していた防衛線は第四まで用意されているが第三防衛線から第四防衛線までの距離はほとんどなく、実質そこまでアリストス軍が迫ってくるとあとは時間の問題だった。

加えて本来ならば第一防衛線を死守するプランだったのだ。

そこそが最も戦闘に向いた地域であり、ほかの場所では防御力に劣ることになる。

「報告は以上です」

かぐやを指令室まで案内してきた医者らは深々と頭を下げると急いで病室へと駆けもどっていった。

サントは前線で休む間もなく指揮をとっていることだろう。

いま苛烈を極める戦場に赴いたところで足手まといにしかならな
い。かぐやは両の拳を握りしめると、その場にどかっと座りこんだ。

「……わたしは逃げぬぞ。これ以上、逃げてたまるものか」

決意の言葉は誰に届くこともなく。

ただ時間ばかりが刻々と過ぎていった。

窮地

敵が第三防衛線にまで迫ってきたというニュースはすぐさまかぐやの耳にも伝わってきた。もはや後退できるだけのスペースはない。ここを落とせば一縷の望みさえも、竹を折るようにポキリと乾いた音を立てて消え去ってしまう。

もはや指令室にたてこもっていても仕方ないと判断し、サントのいる作戦本部まで足をのばそうと決める。

その前に石上の寝ている病室へ向かい、最後になるかもしれない声をかける。奇跡を信じるには、石上の様子はあまりにも頼りないものだった。

病室にいたはずの患者はとくに重傷なものをのぞいてすべて戦場へ駆り出されている。ここで負ければどちらにせよ命はないのだ。

医者たちは自分で動くこともできないような重症者を率いて地下基地の最深部に身を潜めていた。ここまで敵が到達するようなことがあっても、戦えるものがいなければ命を奪われることはないだろう。

三人がかりで石上の眠るベッドが運ばれていく。かぐやは無表情にそれを見送ると、サントの元へと急いだ。

「ルア様、ここは危険でございます。後方へお下がってください」

サントはかぐやの姿を見るといさめるような言葉を吐いたが、それも本気ではないようだった。彼も状況を理解できていないわけではない、形式だけの制止だった。

「これより後ろはどことも同じようなものだ。それよりも正直なところを話してくれ。この軍は持ち直せるのか」

「――申し訳ありません」

「はつきり申せ」

かぐやが苛立った口調で詰問する。

「ここまで来てしまっただけはもう、時間の問題かと」

「勝利はありえぬのか」

「……残念ながら」

「そうか。ならば仕方ないな」

かぐやは腰の剣を抜くと、しげしげとそれをながめながらサントへいった。

「軍をまとめるのだ。一塊になって外へ脱出するぞ」

軍部副隊長は顔色を変えて首を横に振る。

「不可能でございます。この基地の構造上、敵中を突破して行くな
らば全滅も辞さない覚悟が必要です」

「ならばこのまま勝ち目のない抗戦を続け、勝てる見込みはどのく
らいあるのだ」

「それは……」

「よく聞くのだ、わたしはなにも死に急いでいるわけではない。わ
たし自身が生き延び、ラングネ国を再建できる最善の手段を探して
いるのだ。たとえそれが修羅の道だったとしてもわたしは臆するこ
となくその道を進んで見せる」

サントの両目をじっとのぞきこむ。

「さあ、決めてくれ。わたしとともに地獄のふちまで供をするか、
それともこの場で死を選ぶか」

すっと身を引き片膝をついてかしまるとサントは、はるか昔か
ら伝わる騎士の作法にのっとり、自らの主に忠誠を誓った。

最後に剣を高々と掲げて、かぐやの名を猛々しく叫ぶ。その声が
こだまのようにラングネ軍の兵士たちに伝播し、ルア様、ルア様、
という大合唱が異様なまでの雰囲気包まれて響き渡った。

「この身が朽ち果てるまでルア様について行きましょう」

「おまえの命、このわたしがしかと預かった」

かぐやはすぐさまサントの周囲にいた兵士たちを呼び集めると、
それぞれに指示を与えて自らも前線へ向かって駆けだした。そして
目的の相伴御行の近くまでやって来ると、耳元に口を寄せてささや
く。

「いまから決死隊を結成し、敵中突破を図る。そのためにはおまえの力が欠かせぬのだ」

「地球にいるときからずっとそうでしたからね、強引な作戦にはもう慣れましたよ」

減らず口をたたく大伴御行は疲れた様子も見せず、冗談をかます。かぐやは勇者の頬を小突いてから、

「力強い限りだな」

「ええ、なにせ勇者ですから」

ふたたび後方へ戻る。

作戦はすでに頭のなかに浮かんでいた。守るときのアイデアはサントのほうがるかに多く有しているが、攻めるときのバリエーションならばかぐやも引けを取らない。

ひとそれぞれに得意な分野があり、かぐやにおいては攻撃こそがもつとも性にあっているようであった。

「ワンパターンかもしれぬが作戦は単純だ。大伴御行の炎によって活路を開き、そのうしろから一気にたたみかけて突破する。敵を切り捨てる必要はない。ただ駆け抜けるのだ」

「全員にそのように伝えましょう」

アリストス軍に作戦が漏れないよう、伝令兵がひとりひとりに声をかけてまわっていく。その作業が終わったときこそ、作戦開始のときだ。

「合図は大伴の炎によって示す。ひたすら直進しからないだろうが、スタートの合図だけは統一するぞ」

「最終目標はどこにいたしましょう」

「――包囲網をつきぬける。その後は各地の反乱軍に合流し、戦力が整うまでまともにぶつからないよう気をつけよう」

「壮絶な旅路でございますな」

すでに覚悟を決めたサントが苦笑しながらつぶやく。

この勝負が成立するかと聞かれれば、賭博師のほとんどはアリストス軍が勝利するほうへ賭けるだろう。もしもラングネ軍が勝利を

収めるようなことがあれば、大穴をねらった真の勝負師だけが途方もない金額を手にすることになる。

「石上は心苦しいがここへ置いて行く。いまあやつを連れていくだけの余裕はないからな。途中で目覚めるようなことがあれば、牢を破ってでもわたしを追いかけてくるはずだ」

「大伴様はどういたすのですか」

「すまないが誰かが背負って移動してやってくれ。本当ならば石上の仕事なのだが、眠っているのでは仕方ないからな」

大伴御行が聞いたら嫌がりそうな提案だ、とかぐやと思う。

ひょうひょうとしていているようにプライドの高い男であるから、石上に背負われることでさえ相当の恥辱を感じていたはずだ。それを理性で押さえこんで最善の手段を選べるのは、さすがというほかない。

「……では、そろそろ参りましょうか」

「ああ。――後悔はするなよ」

「もちろんでございます」

合図は突然だった。

大伴御行が絶妙なタイミングで、それまで敵を分断するために使っていた炎を突撃隊の前方へ張りつけ、アリストス軍が散開したところを一気に走り抜ける。

当然ただで通させてもらえるはずもなく、側面から無数の剣が命を刈り取ろうと触手を伸ばし、ラングネ軍はそれを避けつつ進む。途中で身体を切られた兵士が絶叫しながら脱落する。それを振り返っている暇さえない。ほとんどの兵士が涙を流しながら叫んでいた。かぐやもあらん限りの大声を上げながら走る。足がもつれそうになるのを必死にこらえる。目の前を赤い閃光がよぎるが、とっさに剣を正面に構えて受け流す。

反撃に転じることはできない。

先ほどの剣はすでに後方にある。かわりに誰かが切られているのかもしれないなどと考える余裕は塵ほども残されていない。

「ルア様、あまり離れすぎないようになさってください！」
すぐ前方を走るサントが忠告する。

相次ぐ攻撃によって少人数の突撃隊といえど一人ひとりの距離が離れはじめている。突破力とは団体だからこそ発揮されるものであり、個々に分割されてしまっただけはなんの意味も持たない。

すぐさま囲みこまれせん滅されるのがただ一つ用意された未来だ。

「大伴は無事か！」

かぐやが叫びかえす。

前方の炎はまだ消えていない。

「ここにいますよ」

どこからか声が聞こえてくる。

大伴御行は補助に専念するためかぐやとは離れた位置で兵士におぶわれながら移動している。かぐやを守ることは、いまの彼の仕事ではなかった。

「火力を最大限にするのだ！ このままでは包みこまれるぞ」

「先頭が離れすぎててうまく調整できないのです、もう少し近づいてくれれば可能です」

「ならば走れ、道を切り開くのだ」

無茶な要求だとはわかっていたが、もとをただせばこの作戦自体が絶望的なまでに無茶なものなのだ。その上で多少のわがままを言ったところで大差ないだろう。

大伴御行を乗せた兵士は、鞭を入れられた馬のように速度を上げ、あらん限りに叫びながら全力で走っている。ラングネ軍でも特に足の速い、屈強な兵士だが、その額には滝のような汗が流れていた。

「もうすぐ入口を突破します」

サントが大声をあげて伝える。

「まだそんなものか！」

見渡すと当初の兵士たちの姿はほとんどなく、風にちぎられた雲のように小さな塊へと変貌していた。まわりにいるのはわずかに数十人。もはや敵と味方の区別をするまでもない。

「ここから敵はもっと増えますぞ」

「こうなれば百も千も同じことだ、誰が気にするものか」
もうやけくそだった。

人間は死のふちに追いやられると逆に冷静さが増してくるものらしく、いつになく敵の小さなしぐさまでよく見えている。剣がどのタイミングでおそってくるのか、本能的に感じるができる。

周囲のものがスローモーションで流れているのに自分だけは素早く、まるで風にでもなったかのように感じる。もうなにも考えられない。ただ走り抜けることしか頭に浮かばなかった。

走れ。

生きろ。

短い単語があらわれては消えていく。

ふと大伴御行と石上の顔を思い出す。それからクレアとじい、続いて父親と母親。

笑っているわけでも、怒っているわけでもない、自然な表情。かぐやが剣をふるうと残像とともにアリストス兵が倒れこんだ。

目の前にいた味方の兵士が崩れ落ちる。

遺骸を飛び越え、走る。

先は見えない。人の壁が果てしなく広がっていた。

「うあっ！」

大伴御行を背負っていた兵士が、右足を切りつけられ、激しく転倒する。

その勢いで、鳥が飛ぶように浮き上がった大伴御行の身体は、ゆっくりと地面へ近づいて行く。

「拾えっ、サント！」

「ずいぶんと——よく跳ねるものですな」

満身創痍の身体が地面にたたきつけられようかというとき、サントの両手が大伴御行の服をつかんだ。かぐやたちを導いていた炎はもう消えてしまっている。

巨大な壁に激突したかのように兵士たちの足が止まった。一度止

まってしまった勢いを、再び戻すのは困難だった。

「……ルア様」

サントとかぐやは背中合わせに包囲網を見つめる。

ラングネ軍の兵士はわずかに数人を残すばかりだ。耳鳴りのような怒号が飛び交っている。大勢の足音が聞こえてきた。

「どうした、サント」

「……いえ。なんでもございません」

「そうか」

言いたいことはわかりきっていた。

それを口にだしてしまえば、もう奇跡を起こすことはできないだろう。だが、不思議とかぐやの頭に絶望の色はまったくなかった。

「大伴、生きているか」

「ええ。いまのところは」

アリストス軍は最後の詰めとばかりにじりじりと距離をつめてきている。隙間などは存在しない。飛び出したところで幾多の剣をかわすことはできず、無残に殺されるだけだろう。

死が怖いのか、と聞かれれば迷いなく「いいえ」と答えることができるな、とかぐやは思った。それほどまでに心は落ち着いていた。

——それは一種、あきらめの感情にも似ていた。

その時、かぐやの目に映った光景は、まるで夢を見ているように実感を伴っていなかった。

「——え？」

それは見慣れたラングネ国の鎧。

途方もない数の兵士たちが、ラングネの旗印を掲げて、戦場をかき割っていた。

「——どこかで見たような光景だな」

かぐやがつぶやく。

サントも信じられないといった様子で目の前に起こっていることを見つめていた。盲目の勇者が、にやりとほほ笑む。

「力強い味方ですね」

「おまえ、気付いていたのか」

「基地のそとへ出たときに、多すぎる気配を感じましたもので。ひたすら味方らしきもののいる方へ先導していましたが、うまい具合に合流できましたね」

「油断も隙もあったものではないな」

かぐやは、ふう、と大きくため息を吐きだした。

途端に足の力が抜けて、膝が震え出す。体力の限界を超えていたためか、それとも恐怖のためなのかは、判別がつかなかった。

どちらにせよひとつだけ確実な現実がある。

「ルア様は、正真正銘の奇跡を起こす姫様でございますね」

サントが、まだ信じられないといったように茫然とした口調でいう。わずかに残っていた抵抗軍の兵士をかぐやの周りに配置すると、自らも地面に座りこんでしまった。

「どうやらわたしは悪運が強いらしいな」

「運も実力のうちといえますから。起きるべくして起こった奇跡ですよ」

と、大伴御行が笑った。

休息

先の戦いでとらえたアリストス軍の捕虜を尋問したところ、いくつかの有益な情報を得ることができた。すべての発端はかぐやたちが乗ったジープに取り付けられていた位置特定電波が逐一、アリストス軍に居場所を伝えていたことから始まっていた。

サントの予測したようにアリストス軍の軍備が整ったのはここ数年のことで、にわかには信じられないほど潤沢な軍備が揃えられていた。兵士たちも追加募集され、近年に類を見ない大規模な軍隊を結成することができたという。

しかし、それがラングネ国の侵略のためだとはだれも気づいてはいなかったのだ。

あくまで表向きは戦力均衡のための軍備が拡張だとされており、国境付近のいざこざを解決する有効な手段になるものだと思っていた国民も少なくなかった。

アリストス軍の秘密兵器であるレーザー砲の存在は、上層部にしか知らされていなかったらしく、それが圧倒的な破壊力でラングネ軍の防衛拠点を蹂躪したときは戦慄を感じたという。怪物、と誰かが呼びはじめたのをきっかけに、そのレーザー砲の呼び名は「モンスター」となった。

殺戮兵器モンスターの威力はすべての条件を覆すほどのもので、最初はいぶかっていたアリストス軍の兵士たちも快進撃を経るにつれて侵略の疑問を忘れ去り、ただ一心不乱にラングネ国の王城を目指した。

その行程があまりに順調に進みすぎるため、ラングネ軍はまともに刃を交わす前に四散してしまった。そのことが結果的に反乱軍を助長することになるとはだれも予想していなかった。

破竹の勢いでラングネ国王を討ち、王城も制圧したが、完全勝利のためにはまだ足りないピースがあった。次期女王と見込まれてい

たかぐやが忽然と姿を消していたからだ。

予言のことはアリストス軍も知るところだったので、地球からの勇者を恐れてアリストス軍はかぐやの搜索を開始した。同時に、サント率いる抵抗軍の足取りも調べたが、どちらも痕跡をつかむことさえできなかった。

そんな折、偶然にもかぐや一行がジープを奪って逃走したという報告が入ってきたのである。

ここぞとばかりに完ぺきな包囲網を敷き、かぐやを捕えようとしたはずのアリストス軍だったがサントの奇襲によって失敗する。それでも、かぐやたちの乗っていたジープがそれまで動いてきた軌跡から、抵抗軍の地下基地の居場所を特定したのである。

今度こそ失敗は許されないと、ラングネ国内の兵力のほとんどを結集し、何重にも基地を包囲した。これで勝利は決したと、誰もが思っていたが、抵抗軍の必死に反撃によって予想以上に時間を喰ってしまった。

それでもどうにか地下基地へ侵入し、あとは時間の問題となったときにかぐやたちの決死隊が突撃したのである。これが一連の出来事の顛末であった。

「まったく、誰もかれも見計らったようにギリギリの間際で援軍にくるのは止めてほしいものだ。おかげでわたしは寿命が三十年は縮まったぞ」

抵抗軍の地下基地はラングネ軍の兵士であふれかえっていた。

各地で反乱を起こしていた残兵たちが一堂に結集し、アリストス軍を攻撃したのである。その采配の見事さは、まるで神業のようだった。

「寿命がなくなるよりはずいぶんマシというものでしょう」

大伴御行が笑いながら返事をする。

ふたりは並んだベッドにそれぞれ仰向けになっていた。かぐやも勇者も相当無理をしたために身体のアちこちを負傷し、療養にあたっているのである。

さすがに危機を脱したとあって、ゆっくり休めるようにと一般兵が入れない部屋にふたりきりという状況だ。サントも怪我をしていたが別室で忙しく指揮にあたっているところである。

「もう少しはやく到着しておればこのような傷も負わずにすんだのだ。まったく、遅いとしか言いようがない」

「助かったのですから、そうおっしゃらずに。あまりカツカしていると回復が遅くなりますよ——まあ、私にとっては好都合ですが」

「貴様、さてはむつつりスケベだな。城内にもそういうやつがいたものだ。平気で女など興味の無いような顔をして侍女やら宮仕えのものをたぶらかしておった男がな。即刻解雇してやったが、しょうもない人間だったぞ」

「私はかぐや様一筋ですから。そのような浮気男といっしょになさるぬよう」

「どこでそんな齒の浮くようなセリフを覚えたのだ。京の都というやつは好色の貴族ばかりしかおらぬのか」

「娯楽といえば権力争いと歌会と、それから女を囲うくらいしかありませんでしたからね。あとはタカ狩りくらいのものですが私はあまり好きではありません」

「ほう、石上などは好んで行きそうなものだがな」

「あいつは元から貴族離れたやんちゃ坊主でしたから、勘当されなかったのが不思議なくらいです。都でも有名な暴れん坊ですよ」

「想像に易いな——大伴、おまえはどうなのだ。当代一の変態貴族とでも呼ばれていたか」

「どうもかぐや様は私をそのように不名誉な称号を与えたいようですね。残念ながら、さほど面白いものではありませんよ。歌詠みに関してだけは少々高名を拝したものです」

「和歌か——わたしも翁と一緒に特訓したものだ」

へえ、と大伴御行が興味しんしんといった気配をかぐやに向ける。月の姫はそこにはない筆と紙を持つふりをしながら、当時の苦勞をしのんだ。

「わたしの詠む歌はすべて大きなバツ印をつけられてな、ひとつも認めてはくれなかったものだ。天皇をおびき出すのに必要だといっておったが無駄な練習であつたな」

「ぜひともかぐや様の和歌を聞きたいものですね」

大伴御行がベッドから身を乗り出して、かぐやを催促する。まくらにのせた頭を大伴御行とは反対の方向へむけながらかぐやは顔を赤らめた。

「いやだ」

「すこしくらいいいではないですか。和歌は女性の魅力の半分を占めるといつても過言ではありません。これからかぐや様と同行するのにも、ここでひとつ歌の実力を知っていたほうがいいというものです」

「いやだ」

「さあさあ、恥ずかしがることはありません。ここには私しかないのですから」

まるであくどい商人が気の弱い人に高額商品を売り付けているかのように強気で、大伴御行がまくしたてる。

かぐやは耳をふさいでかたくなに拒否したが、あまりにも勇者がしつこいので、そろりそろりと両手を離れた。

「笑わないと誓うか？」

「ええ、もちろんですとも」

「馬鹿にしないか？」

「あたりまえです」

「――実はな、とっておきの句があるのだが、特別にそれを聞かせてやろう」

「ありがたく拝聴させていただきます」

大伴御行がベッドの上で正座する。その表情は真剣そのものだ。

こほん、とかぐやは小さな咳払いをして

「はるばると 月に帰って 来てみたら 周りはびっくり するこ
とだらけ」

と、わずかに鼻の穴をふくらませながら大伴御行の反応をうかがった。彼は相変わらず無表情だったが、頬のあたりがすこし窪んでいた。

それが笑いをこらえるために口内を嚙んでいるのだとは、かぐやは気付かない。

「どうだ感想は？」

「――とても、よい詩だと、思い、ます」

とぎれとぎれの言葉はあまりに不自然だったが照れくささと会心の作を披露できた満足感から、かぐやはとても良い気分でまぶたを閉じた。

「わたしは眠るぞ。くれぐれも変なことをするなよ」

「わかって、います」

「うむ」

やがてすやすやとかわいらしい寝息が聞こえてくると大伴御行はようやく枕に顔をうずめて、となりで眠る姫君に聞こえないように声をおさえながら気のすむまで笑った。しばらくは笑いすぎて腹筋が痛むほどだった。

レンリル

幸いにも手術を要するような大怪我は負っていなかったのかぐやは数日もすればふたたび基地を歩き回れるようになった。それまでのあいだに部隊の編成がおこなわれており、抵抗軍と反乱軍があわさって新たな戦力として復活しようとしていた。

だが、その前に重要な人物と面会しなければならない。

かぐやは会場として用意された小さな部屋におもむく。なかには顔に包帯をまいたサントと、もうひとり若い男がすでに座っていた。「待たせたな」

そういつて席に着くとかぐやは男を鋭く観察するように上から下まで眺めまわした。背は平均よりも高くすらりと伸びるスタイルの良い体型をしている。細身だったが頼りない印象はまったくなく、精悍な顔つきが逆に力強さを感じさせた。

年齢はかぐやよりも上だがまだサントの半分くらいのものだろう。それにしても年齢に不似合いなほどの沈着さを兼ね備えていた。

ぼさぼさで癖のかかった髪はどこかだらしない雰囲気をもっていたが、前髪の下からのぞく油断ならぬ眼がその印象をぬぐい払っている。平和な時代には必要とされないであろう人材。そしてひとたび乱世になればたちまち頭角をあらわし名乗りを上げるだろう男は、ラングネ軍の騎士団に所属していた。

「おまえがレンリルか」

「はい」

実直にその男――レンリルはこたえる。

「こたびの反乱軍をまとめあげ、援軍に駆けつけたのはおまえの功績だそうだな。礼を言うぞ」

「はい」

「そう固くならなくともよい。もっと気楽にしてくれ」

「はい」

レンリルは機械のように同じ言葉をくりかえす。かぐやが感じ取った雰囲気とはちぐはぐなイメージを与えていた。

「騎士団にいたそうだが、お前ほどの器量の持ち主がなぜ下っ端に甘んじていたのだ。指揮官としての才能、戦略、戦術、求心力。どれをとっても一流以上だと聞いているが」

「お褒めにあずかるのは光栄ですが、それは言い過ぎかと」

サントがレンリルに代わって言葉を述べる。ちらちらとレンリルの様子を横目でうかがっているのが見て取れた。

「わが軍を危機一髪のところまで救ったという点ではサント、お前と同じくらいの手柄を立てたのだぞ。それを褒めなくしてどうするのだろうか」

「ですが……」

弁解を言いよどむ。

サントもレンリルの功績の大きさがわかっていないわけではないだろうが、本人同様にかしこまってしまっているいつもの覇気が感じられない。まるで親に叱られるのを恐れている子どものようなのだ。

「加えてアリストス軍のレーザー砲搬入を阻止したのもお前だったそうだな。いったいどこでなにをしていたのか、詳しく教えてほしいものだ。ほぼ確定事項だろうが、レンリルを部隊長に任命することになるからな」

「はい」

「たまには『はい』以外の言葉も発してみたらどうだ。まさかそれしか単語を知らないというわけではあるまい」

かぐやはじつとレンリルの瞳をのぞきこんだ。

パーマのかかった前髪のもうこうに隠れている彼の瞳は、生真面目な様子で微動だにせずかぐやを見返していたが、突然目じりがピクリと動いたかと思うと、腹をかかえて笑いはじめた。

快活な笑い声。

間違いない、これこそが本当の姿だ。

「レンリル！」

「すみませんサント副隊長——でも、こればかりは、どうしてもたえられなくて……。こっちが必死で我慢しているってのに、にらめっこみたいに見つめてくるから、なんだか可笑しいんですよ。それに隠したところでいずればバレたことですし」

「申し訳ございません！」

サントはレンリルの後頭部をひつつかむと勢いよくテーブルに額を打ちつけそうな勢いで頭を下げた。レンリルの笑い声はそれでもとまることがなく、サントに睨みつけられている。

「ずいぶんと楽しそうなことだな」

冷やかな声でかぐやがいう。

実のところ怒ってもなんでもいなかった。ただ少々、驚いていただけだ。

「お姫様をこんな間近で見ただけでもハッピーなのにこう見つめられちゃあ、ニヤニヤが止まらないってもんですよ。副隊長もいつもみたいな感じじゃなくておどおどしてるし、オレじゃなくても笑ってましたって」

「ルア様に失礼であろう、この馬鹿者！　口を慎まんか！」

サントが顔を真っ赤にして、唾を飛ばしそうな勢いで叱責する。

かぐやは右手をのばしてサントをなだめると、レンリルという男のほうへ顔を向けた。

「普段からこのような性格なのか？」

「ええ、おかげでサント副隊長にはいつも説教を喰らってばかりです。いまだって『ルア様がいらっしやるのだから、失礼のないようにお前はい、とだけ喋るのだ、いいな』なんて無理なことを命令してくるんですよ。まったく、どれだけ人を信頼していないんだか」

「まるで直っていないではないか！　ルア様にその口のきき方はなんだ、いますぐ廊下で腕立て伏せを千回やってこい」

「オレが普通にしてるとすぐこれだから困るんですよ。おかげで二の腕ばかり発達しちゃって」

「目を離すとすぐにサボって休んでいるだろう」

「げ、知ってたんですか」

「当たり前だ。第一お前は根性がなさすぎる――」

「説教ならあとにしてくれ、サント。いまはこの者の話が聞きたいのだ」

かぐやが視線で促すと、レンリルははてなと首をひねった。

「どこからお話ししましょうかね。ああそうだ、生まれたところですよね。オレの名前は親父とお袋が考えてくれたもんでね、もし女の子だったレイナって名前にしようと思っていればいいです。でもまあ、この通り元気に男の子が生まれてきたもんで、レンリルってことに」

「そこからは結構だ。おまえがレジスタンスたちを指揮した経緯を聞きたい」

ちえ、と軽く舌打ちをするレンリル。

すぐさまサントが後頭部をはたいた。

「いったいなあ、もう――話しますってば。恥ずかしい話、オレはこの戦争に勝ち目がないのを知ってさっさと近くの街に逃げだしたんですわ。ラングネなんかいたらアリストスのやつらに殺されかねないんでね。仲間も何人かいたから、そいつらと一緒に平和そうな郊外の街で新しい人生をはじめようかなんて考えてたら、ついに王城が落ちたってニュースが耳に入ってきましたね。どうせ時間の問題でしたからね、よく持った方だと思いますよ」

レンリルは髪の毛を指に巻きつけ、いじりながら喋る。それが彼の癖らしかった。

「でもルア様は逃げ出したっていったんで、こりやまだチャンスがあるんじゃないかと、ピーンと確信しましてね。いっしょに逃げた仲間を集めて武器やらなんやらを調達したんですよ。街のやつらもラングネがあっさり滅んじまったもんだから、どうにか抗ってほしいってことで協力的なもんでした。オレはせめて国が戻ったときにボーナスでも出ればいいなくらいの気持ちだったんですけどね。」

形勢が悪くなったらすぐに武器を手放して、平凡な町民として生きていくつもりでした」

手をヒラヒラを振りながらつづける。

「ルア様が帰還したって情報を聞きつけたときには、レジスタンスも大きくなっていったばしの勢力くらいはありました。オレがいう通りにアリストス軍を叩けば、たいていのことは成功するんで、連戦連勝なんですね。その噂をどこで聞きつけたかほとんどラングネの兵士たちが集まって来るもんで話を聞くと、まともに戦えなかったのが悔しいから遅れながらもちゃんと兵士としての務めを全うしたっていうんですよ。まったく生真面目なやつばかりでビックリしたが、オレの指示にはちゃんと従ってくれるもんで、戦闘に関しては有能だったな。敵もこっちの全体像を把握できていないみたいだったから、ヒット&アウェイでなんとかなるもんですよ」

レンリルは天気の話でもするように淡々と話すが、その過程は決して簡単なものではないはずだ。それをあっけなくやってのけてしまふ彼は、やはり天才なのかもしれないかった。

「そしたら今度は副隊長がルア様を救出して、おまけにアリストス軍も蹴散らしたっていうじゃないですか。オレってば柄にもなく嬉しくなっちゃってそれを各地にふれてまわったんですわ。その途中にも軍は大きくなっていくし、そろそろ合流しなくちゃいけないな、なんて思ってたら今度は地下基地が包囲されてるって話だ。サント副隊長のことだからしばらくは持ちこたえるだろうが長くは続くまい、すぐに助けに行こうって意見をおさえて、オレはレーザー砲を奪取しようと試みたわけです。あれさえ奪っちまえばアリストスの戦力は半減、おまけに地下基地の周囲の敵なんてあつという間に倒せますからね。だが、まあ、予想以上に敵さんはビビってたらしく、こっちが仕掛けていくとすぐに撤退しちまったんですよ。仕方ないから伏兵をおいて、地下基地を救援に向かいました。背後からまたレーザー砲がやってきたら厄介なんですね。それまではうじゃうじゃいた敵さんの姿がちっとも見えないから、基地の周りに戦力を集中

させているのはすぐにわかりましたよ。で、優勢になって油断しているところを待って、奇襲と」

「――機をうかがっていたというのか、あの状況で」

「敵は大軍ですし。こっちは多いといってもたかが知れている。戦いで重要なのは、結局のところどこにどのタイミングでなにをぶつけるかってことです。それさえ上手くいけば、どんな大軍でも打ち倒せる」

平然と持論を述べるレンリルを、かぐやは驚愕のまなざしで見つめていた。

それまで一介の兵士に過ぎなかったレンリルが、さも当然のように軍隊をあやつり、勝利を収める。実戦経験すらほとんどないだろうというのに、いったいどこで戦術などを覚えたというのか。

「子どものころからゲームが好きなもんでね。駒を動かしてあれこれ想像していたら、なんとなく出来るようになってたんですわ」

「――優秀なのはこちらでも分かっていたのですが、いかんせん言動がこのように失礼千万なものでして。レンリルが上司となっては部下に示しがつかないと根性をたたき直してからしかるべき地位につかせるつもりだったのでございます」

サントが補足説明する。

レンリルはリラックスした表情で、上官の肩を叩いた。

「そんなことって痛めつけてただけじゃないですか。オレだって筋肉野郎になりたいわけじゃないんですよ」

「残念ながら上手くはいかなかったようですが」

「あの、聞いてます?」

「今日という日に間に合わなかったことは大変申し訳なく思っております」

「副隊長ってば、こうやってよくオレのことを無視するんですよ。まったく寂しいったらありやしないんだから」

気さくに肩を組むレンリルとそれを払いのけようとするサントはまるで気心のしれた友人同士のようなだったが、それもレンリルの持

つ不思議な魅力のせいなのかもしれない。

「――率直に尋ねよう。レンリル、わが軍の形勢をどう読み解く。この軍備で勝つことはできるのか」

「そいつは難しい問題ですね」

レンリルはわざとらしく腕を組んだ。

「第一にアリストス側の目的がはっきりしないですから。ただの侵略目的だしたら、なぜ今になってはじめたのか不可解ですし。レーザー砲を掘り出したからかもしれないですけど、それだけで動くもんですかね」

「分からねのか」

「いえ。副隊長から勇者様のことは聞いていますけど、この目で見てみないとどれほど役に立つものなのか計りようがありませんから。ふつうに正攻法でいったら間違いなく蹴散らされるでしょうね。そこをどう工夫するかがポイントです」

「大伴と石上の力ならば心配しなくともいい。まさに一騎当千の活躍だ」

「……ルア様のいうことを信じるならば、おそらく勝機はあります」
「ほんとうか！」

かぐやが身を乗り出して問い返す。

レンリルは難しい表情をしながらゆっくりうなずいた。

「副隊長、地図を持って来てくれませんか。説明するにはそっちの方が都合がいいもんで」

「――まったく、上官をパシリに使うといい度胸をしているな」

「こんなときじゃないと恐れ多くてできませんよ」

サントは、かぐやがレンリルの無礼をさほど気にしていないのを見て安心したのか、苦笑しながら部屋を出ていった。実直な男がこんなふうには談笑するのをかぐやは初めて目の当たりにした。

ふたりきりの部屋を一瞬、沈黙がおおった。

だがそれは不快な沈黙ではなかった。

「こうして面と向かってみると、以前と雰囲気さがらっと変わります」

したね。昔はもっと気弱そうで、儂い感じのお姫様ってふうに思ってたよ」

「おまえは戦争が起ころうがちっとも変わることがなさそうだな」「そんなことないっすよ——」とレンリルは軽く笑った。「オレにだってひとつやふたつ、成長したところがあるんですから」

「ほう。ぜひとも聞きたいものだな」

といいかけたところで、サントが地図と駒を持って戻ってきた。

レンリルとの会話を続けたという願望はあったが、それはあともできるだろう。机上に広げられた地図はわざわざ見るまでもなく、ラングネ国の全土が記されてあった。

「敵の戦力は主に分けて三つ。アリストス本国に駐留しているものと、前線基地である国境付近のエリス砦に陣取っているもの、それからラングネ国を制圧している部隊です。このうち当面の敵は——」
「最後のものだな」

「ええ。どういうわけか、アリストス国王は本国へかなりの兵力を残しています。それだけレーザー砲が凄まじいって分かってたってわけです。それにエリス砦は言わずと知れた難攻不落の要塞」

国境付近にそびえたつ巨大な要塞、エリス砦はラングネ国中に知れわたるほどの鉄壁を誇る古代人の遺産である。それがためにラングネ国は侵攻などということを考えず、専守防衛に徹してきた。

これが長年にわたる時代背景の、ひとつの理由だ。

「こいつらが援軍に出てくると厄介です。決着をつけるには短期決戦で、一気に王城から敵を追いだしてしまっほかにありません」

レンリルはラングネ城の上に置かれた駒を、指ではじきとばす。

からからと音を立てて駒は机から落ちていった。

「寡兵が大軍を倒すには、奇襲しか方法はありません。とにかく相手の意表をついて、戦意を喪失させることによって敗走させる。打撃を与える必要はないんです、追い出すことができれば上々です」

「レーザー砲によって陥落したとはいえ、首都の備えが薄いはずはあるまい。城壁や障害はいまだ健在であろう」

一度や二度の侵略で破壊しつくされるような、やわな建造物ではないのだ。レーザー砲によって巨大な穴をうがたれ、なだれ込むように侵入を許したが、そこにも当然手は打ってあるだろう。

地下基地の駒を持ち上げると、レンリルは片方を王城の前へ、もう片方を城内へとぶつけた。

「戦の要はタイミングだといいました。正確に機会をつかむためには相手よりも多くの情報を知っている必要があります。いまオレたちが知っていて、アリストスの知らないことが、ひとつだけあります。決定的な情報が」

「――通路か」

かぐやがつぶやく。

レンリルは首を縦に振った。

「その通りです。地下基地から王城へ直接のびる通路を使って、奇襲をかけます」

「敵も城内の防備を怠っているはずはないぞ」

サントが口をはさむ。レンリルは地図上の駒をトントンと叩いた。

「だったらおびき出せばいいんです」

「どうやってだ？」

「副隊長、敵が目の前に出てきたらどうしますか」

レンリルが訊く。

「それはもちろん、迎え撃つしかあるまい」

「自分の方が優勢だったらどうしますか」

「逆に攻撃するだろうな」

「そうなれば城内の警備は――」

ラングネ王城に置かれていた駒が、城壁のそとへ出ていく。

かぐやがアツと息をのんだ。

「空っぽになる」

「囹の部隊を使うというのか」

「ザツツライト。城の前に軍隊をちらつかされたら、おもちゃを目の前にした子どもみたいに喰いついてきますよ。そしたらタイミン

グよく城内へ突撃、敵将を討って、高々に宣言するんです。『ラングネ国が姫、ただ今王城に帰還した!』ってね」

「そんなに上手くいくものか」

地下基地の通路を伝って奇襲をかけるという案は、思い浮かんでいなかったわけではない。兵数が少なすぎるのと、城内の敵兵を駆逐しきれないというリスクがあったために不採用となっていたのだ。まだ秘密通路の存在は知られていないが、これが敵の耳に入ったら、もうどうすることもできない。

「もちろん念には念を入れておきます。ふたりの勇者様とルア様の影武者を立て、指揮は副隊長に取ってもらいます。副隊長ならうまく損害を出さずに逃げ回ってくれるでしょ」

「おまえはどうするのだ、レンリル」

「オレは城内に突入しますよ。いざというときに臨機応変に頭を回せるやつがいなけりゃ、奇襲なんざ成功しませんからね」

影武者。

かぐやはレンリルがやってくる前にも影武者を立てたほうがいいと提案したことがあった。だが、同じものでも使い方によってここまで変わって来るものなのか。

「人数は？」

「少数精鋭で行きます。目標は敵将だけ。そのためにも勇者様の力が必要不可欠です。この作戦で大事なのはチームワークよりも個人的な技量ですから」

レンリルは片目をつぶってウインクした。

サントが真面目な顔をして地図上の駒を動かす。

「それで、無事に敵将を討伐した後は」

「敵はもんどりかえって逃げていくでしょうから、そこを追撃してください。深追いはしすぎないように。けど派手にやってくださいな。これは戦勝のアピールです、ラングネのみんなに強烈な勝利をプレゼントしてやらなくちゃいけない」

「……聞いたところでは、穴もなさそうだな」

「最悪のプランは敵に途中で勘づかれることですが、それは、まあ大丈夫でしょう。もっと気がかりなのはふたりの勇者様がいつ戦えるようになるかってことであ」

「――そればかりは分からぬからな、とくに石上は。いつ起きるかさえ定かではない」

「三日だけ待ちましょう」

とレンリルは三本の指を立てた。

「それでダメなようなら別の作戦を考えます。以上」

「わかった。それでいいな、サント」

「ルア様がよろしいのなら、それで結構でございます」

「副隊長はもっと自分の意見をプッシュしけ行かなきゃだめですよ。いまが出世の大チャンスなんだから」

「そんなよこしまな気持ちで戦うものではない」

サントが説教をはじめようとすると「じゃ、オレはこれで」といつてさっさと退室してしまう。かぐやとサントは顔を見合わせて、苦笑いしたのだった。

実力

かぐやが戦闘の練習をしたいといいだしたのはレンリルとの会談が終わってすぐのことだった。

地下基地の地上部分——見晴らしの良い荒れ地が広がっている——が、ちょうどいい練習場所だった。見張りを立てておけば敵の接近をすぐに感知できるし、なにより広大なスペースがあるのでいくら剣を振り回しても大丈夫だ。

かぐやはサントの推薦した兵士をとまって、剣を握っていた。とはいえ実戦用の剣ではなく、訓練時に使う木製の重い剣だ。

「いくぞ」

鋭い掛け声とともに、剣を打ちこんでいく。

ガン、ガン、と鈍い衝撃が両手に伝わってくる。じいとの訓練の思い出がよみがえってくる。ちゃんばらくらいにしかならなかったかぐやの腕を、騎士団の兵士とそんな色ないレベルまで引き上げてくれた。

じいとはとにかく実践を重視し、型の練習などはしなかった。

おそらく独自のスタイルをみがきあげていたのだろう。ジアードと同じ、自分の生き方に見合った剣技を。

「はあ！」

剣はすべるように空気を裂き、相手の急所を狙っていく。

じいの理論は簡明だった。敵を一刀両断する必要はない。わずかな傷をつけることによって隙をつくりだし、その間にとどめを刺せばいいというものだ。

敵を一撃でしとめようとすると、どうしても大ぶりになってしまう。

不特定多数を相手にする戦場ではわずかな油断が命取りになる。かまいたちが傷をつけていくように、風のように、剣をあやつるのだ。

「――へえ、ルア様もなかなかやるじゃないですか」

ひとしきり汗をかいたところにレンリルがヒラヒラと手を振りながらやってきた。かぐやは一度剣をおくと、大きく息を吸った。

「並みの人間よりは上手くやれるつもりだが――おまえもするか？」

「いいんですか」

「ああ、遠慮しなくともいい」

「オレかなり強いですよ」

ニヤリと笑うレンリル。かぐやは練習用の木刀を手渡すと、剣を正眼に構えた。

これがじいが好んで使っていた構え方である。攻守ともにバランスがいいということで、かぐやが採用しているのももっぱらこの中段の構えであった。

対するレンリルは剣を右手一本で持っている。

「さすがは騎士団員というところだな。見かけ以上に腕力もあるらしい」

「サント副隊長に鍛えられましたからね――主に罰という意味で」かぐやは短くかけ声を発すると、勢いよくレンリルに突っこんでいった。なんにおいても基本的には先手をとった方が強い。それは剣道においても同じことだ。

木刀が風を切ってうなる。

レンリルは半歩だけ後ろにさがると悠々かぐやの太刀筋を見切り、返す刀が来るまえに右手のみを振りかざす。

――速い。

片手で剣をあやつるためには相当な腕力が必要だけでなく、スピードが落ちるというデメリットもある。だがレンリルはその欠点を微塵も感じさせないほどの速さを兼ね備えていた。

とっさに剣を引いて避ける。

腕がしびれるほどの衝撃。このまま二撃目を喰らったら剣をはじかれると直感して、かぐやは間合いをとうとうと足を動かした。

その刹那、レンリルは地面をけり出し、かぐやの体に隣接する。

驚いて反射的にのばした腕を、あいた左腕でつかまれ、首元にすつと木刀を突きつけられる。

「……まいった」

「いやー、ルア様もけっこう強いですねえ。ちょっとヒヤリとしましたよ」

笑いながらレンリルが剣を下げる。

「まったく奇妙なものだな。片手で剣を持つなどというやつは初めてだ」

「こうすりやもう片方の手を使えるじゃないですか。今みたいに相手の懐へもぐりこんでしまえば体術も使えるし、余計な動きも少なくなるし」

「独学か、それは」

「まあ、そうです。騎士団に入ってから副隊長たちに矯正されましたからちゃんとしたのも出来ますけど、ありや実戦向きじゃないですね。ルア様のほうがよっぽど上手いですよ」

「負けた身でいうのもなんだが――」とかぐやはいった。「二刀流にはしないのか？ それならばもっと強くなるだろうに」

「――それだけはしないって心に誓ったんです」

レンリルは自分の持っている木刀をまじまじと見つめながらいった。

「オレの大嫌いなやつが二刀流だったんで、オレは絶対に二刀流にはしないって。たとえ死ぬことがあってもこれだけは変えちゃいけないんです」

「そうか、いらぬことを言ったな」

かぐやは再び木刀をかまえると、レンリルに切っ先を向けた。

それに応じて若き軍人も剣を構える。誰かに剣を教えてもらうのは久しぶりだな、とかぐやは思った。これほど強い男も珍しいものだ。

「もう一度、手合わせ願おうか」

「ルア様の気のすむまで、お付き合いますよ」

木刀の打ち鳴らされる乾いた音は、荒れた大地をどこまでも駆け抜けていった。日が暮れ、剣が見えなくなるまで、ふたりは息が上がるほど剣を交えていた。

決戦前夜

石上が目をさましたという朗報を聞きつけると、かぐやはすぐさま大伴御行をともなつて病室に向かった。点滴を腕に繋がれたままの大男は、自分のおかれた環境を不思議そうに眺めていたが、かぐやが来たのを見ると子どものように笑顔になった。

「遅いぞ、馬鹿者」

「ここの寝心地が良すぎるのが悪いんだよ。どうも、ずいぶん長い間眠っちゃってたみたいだが、ここはどこなんだ？」

かぐやはひとしきり、石上が気を失ってからのことを話した。

聞き終えると、勇者はもうひとりの勇者へ喰ってかかった。

「いいとこぼっかり持っていきやがって、ずるいんじゃないの」

「貴様が目を覚まさなかったのが悪いのだろう。おかげでこちらはかぐや様となかを深めることができましたが」

「それがずるいってんだよ——あ、でも、夢のなかで会ってた気がするんだよな。よく覚えてねえが、たぶんそうだったはずだ。かぐや」と石上はかぐやの名前を呼び捨てにして、「言わなくてもきちり気持ちは伝わってるぜ」

「なにを馬鹿なことを。おまえが勝手に夢で見ただけだろう」

「本当にかぐや様の夢を見たのですか？」

大伴御行が尋ねると、石上は鼻の穴をふくらませてうなずいた。

「嘘なんかついちゃいねえよ」

「たかが夢ごとき、大したことでもなかろう」

かぐやがいうと、石上も大伴御行もきょとした表情になった。これまでも何度か経験したことのある顔だったので、かぐやはすぐさま原因に思い当たった。

「地球では夢がなにか意味を持っているのか？」

「ええ——ですが、知らないならそれで結構です」

大伴御行がはぐらかそうとするが、石上がそれを許さなかった。

つばを飛ばしそうな勢いでまくしたてる。

「誰かを好きになってるときは、相手の夢のなかに自分が出てくるんだよ。だからかぐやがおれの夢に出てきたってことは、おれのことが好きってわけだ」

「ならばその考えは改めなければならぬ。わたしはお前のことを心配こそしたが、好きになったことなど一度もない」

「照れてるところも悪くねえな」

「——かぐや様、石上にはもう一度眠ってもらいましょう。そうしましょう」

大伴御行が真剣な口調で提案する。

かぐやはうなずきかけたが、思いとどまって、

「それはあとでもいいだろう。ところで石上、お前はもう動けるか。見たところは元気なようだが」

「背中がちくちく痛むくらいであとは全然問題ねえからな。大丈夫だろ」

石上の身体についていた傷のほとんどはもうふさがり、痕跡もわからないほど綺麗になっていた。かぐやは医者を呼びつけると、石上の体調の具合を尋ねる。

その返答によれば石上は人並み外れた回復力をしていたらしく、もう動くことには動けるだろうとのことだった。戦えるかどうかは本人次第だと、医師は最後に付け加えた。

「二日後にはまた戦場に戻ってもらうことになるが——それでもいいな」

「なんなら今からでも戦いたいくらいだぜ」

石上はうつぶせになっていたベッドから起き上がると、なまっただ体の関節をパキパキと鳴らしはじめた。楽器のような響きを聞きながらかぐやが問う。

「力は以前のように使えるのか」

「ああ、これか」

石上が首飾りに手を触れると、貝の防具があらわれる。腕に装着

したそれを叩いてみると心地よい音がした。

「問題ないようだな。実は、おまえは覚えていないかもしれないがこの首飾りが自然と動いたことがあってだな——まるで意思を持っているかのように」

「へえ、そんなことが」

しげしげと子安貝のネックレスをながめる。

石上が傷を負う以前と何ら変わりのない、地球の宝物がそこにあった。

「あとでサントとレンリル会っておいてくれ。予定はわたしがとりつけておく。今後の作戦なども聞いておかなければならないからな」
「そりゃどんな作戦なんだ」

「おまえが大暴れできる作戦だ」とかぐやは言った。「そしてわたしもな」

ふたりの勇者とかぐやは、それぞれが作戦に備えて体を動かしたり、自分の能力を高めたりしようと奮闘していた。それと同時にサントによる軍事訓練が行われ、抵抗軍と合流した反乱軍がスムーズに行軍できるよう、指示系統を明らかにする。

参謀役のレンリルはかぐやたちとともにラングネ城内に突入するため、実権はすべてサントがにぎることとなる。かぐやの影武者として用意された女性は、髪形を整え、遠くからでは見分けがつかないような服装である。

同じようにふたりの勇者の代役も着々と準備され、レンリルの提案した作戦がはじまるまでの間に、すべてが動きだしていた。

そして決戦前夜、かぐやは地下基地の地上にいた。

眼下には大勢のラングネ兵が規律正しく並んでいる。夜風がすこし寒いくらいに吹きつけていた。

「いままでよく戦ってくれた。アリストスの攻撃にたえ、生き延びることのできたあなたたちは、なにも恥じることはない。むしろ今

こうしてわたしとともにラングネ復興のために戦えることを嬉しく思ってたほしい」

かぐやのとなりにはふたりの勇者とサント、それからレンリルが控えている。

しんと静まり返った空気のなかにかぐやの凛々しい声が通る。

「いよいよ明日はアリストスを相手に反撃を開始するときだ。この作戦はレンリルの編みだしたものだ——わたしはレンリルの才能を確信している。わたしたちが負けることはない。そして、必ず生きて帰るのだ」

長い黒髪がなびく。

黒い空のなかに、青い地球が浮かんでいる。

「ラングネの勇敢なる兵士たちよ、命令はたった一つ——ラングネを、祖国を再び取り戻すぞ！」

かぐやが右腕を突き上げると、兵士たちの大歓声が雷鳴のようにとどろきわたった。サントと大伴御行が拍手を送る。石上が獣のような雄たけびを上げるのを、レンリルがにこやかに見守った。

兵士たちの歓声はやむことを知らなかった。

まるで自分たちを鼓舞するかのように吐き出される感情は、勝利を信じる声であった。

トンネル

サントが軍勢を率いて基地を出発したのは早朝のことだった。基地のなかにはかぐやたちと、選りすぐられた腕の立つ兵士たち数十名が残っているだけだ。

大軍が移動するには時間がかかるので、本隊と別働隊はすこし時間をずらして出発する手はずになっている。

めっきり人の少なくなった基地内はなんだか寂しげな哀愁を漂わせていた。

備品や装備はサントの部隊がすべて持っていつてしまっているの
で、もうほとんど何も残っていない状況だ。かぐやは数少ない携帯
食事をとりながら、ふたりの勇者たちと打ち合わせをしていた。

そのそばにはレンリルもあり、ほかの兵士たちは別室で待機して
いる。

「おまえたちに王城の見取り図を説明しなければならぬ。まず、
地下基地の通路は王城の地下――主に倉庫として使われているところ
ろだが――そこに通じている。わたしたちはここから侵入して、最
上階にある玉座を狙いに行くのだ。途中には入り組んだ廊下なども
あるが、少人数ならばあまり問題でないだろう。もともと大軍を阻
止するためにつくられたものだからな。敵将は玉座にいるだろうが、
ここに行くのに小細工は通用しない。敵を正面突破するしかないの
だ」

「上等じゃねえか」

石上が相槌を入れた。

「途中の敵は、なるべくならあまり交戦したくないところだ。この
作戦の肝は、敵将を討つまでの迅速さだからな。あまり雑魚にかま
っている暇はない」

「では、放っておきますか」

大伴御行がきく。レンリルは首を横に振った。

「最後の最後で背後をとられたりしたら厄介だからな、あんまり無視しないでほしいもんです。気取られないところまでは少しづつ数を減らしていったら、喉元まで迫ったら一気に討ちとるのがベストだな」

「レンリルの言う通りにしよう。地下に敵はいないだろうが、各階層の敵を一人ずつ討ちとっていき、本格的に遭遇したら突破し、敵将を討つ。そのときはふたりとも、頼むぞ」

「おうよ」

「お任せください」

ふたりの勇者たちは力強くうなずいた。

「それまで石上は、後方でなるべく見つからないよう物影に隠れていてくれ。おまえがいると色々と潜入作戦をしづらいのぞな」

「ちえ、おれだけ仲間はずれかよ」

「そういうわけでもないですよ」とレンリルが石上をなだめる。「殿が頼れるからこそ、安心して進めますからね。それに最後の突入では主役になってもらいますんで、そのつもりで」

「それならいいんだ、この石上様に任しておけ！」

どんと胸を張る石上を、かぐやは冷たい視線で見つめる。まったく単純な男だ。それだけに信頼できるのではあるが。

「大伴は最前線に立って、敵がどこにいるか探知してくれ。戦いは二の次でもいい、とにかく敵の居場所を把握することが最優先だ」

「――わかりました。そのようにしましょう」

「案ずるな。最後にはおまえにも活躍してもらうことになる」

大伴御行はここ数日、ひとりでなにやら特訓をしているらしかった。その成果を見てみたい気はするが使いどころを間違っただけはない。大伴御行の能力はやや特殊なため、それを最大限に生かすためにはレンリルの知恵が不可欠だった。

かぐやは三人の男たちの顔を見まわすと、机に乘せられた地図を丸めた。これで作戦会議はお終いだ。

「そろそろ時間だな」

「さて、行きますか」

レンリルが立ち上がる。

別室に待機していた兵士たちを呼び集めると、基地の深部にあるドアの前へ集結する。

「覚悟はいいな」

とかぐやは聞いて、ノブをひねった。

地下通路を見るのは初めてだった。細々とした蛍光灯がトンネルのずっと奥にまで並んでいる。電気の供給源はおそらく地上にあるのだろうと推測する。古代人の技術はやはりすごいものだ、と改めて感心した。

暗い通路はひんやりと肌に触れてきた。

人を三人並べられるくらいの横幅の通路が、果てしなく続いている。どのくらい奥までこの無機質な空間を行けば王城にたどり着けるのだろう。

サントたちがこの道を通って戦火から逃げて来た時のことを想像する。きっと心が折れそうになっていたにちがいない。地球も太陽もない、星よりも頼りない光だけが灯火のここでは、希望を見出すことなんてできない。

心臓の鼓動が速くなって幾を体の内側から感じる。

自分の足音が反響して、鬼ごっこのように逃げていく。

かぐやはレンリルに話しかけた。すこしでも寂しさを紛らわせればいいと思った。

「……レンリル」

「なんです？」

「お前は どうして騎士団に入ったのだ」

感じの悪い質問だとはわかっていたが、ほかに話題が見当たらなかった。石上でも大伴でもなく、レンリルを話し相手として選んだのは、なんとなくとしか説明しようがない。

この男のことをもっと知りたいと思ったのかもしれない。

「そりゃ、どこかで働かなくちゃいけませんからね。幸い、剣の腕

も立つし、戦うことは嫌いじゃなかったんで、騎士団もいいかなって」

「理由はそれだけか？」

「そんなとこです」

「親の職業を継ごうとは考えなかったのか」

一瞬、レンリルの表情に陰りがさしたような気がした。

トンネル内の照明の関係による錯覚かもしれないが、かぐやの眼にはそう映った。

「オレの父さんはなんの変哲もない商人でしたからね。あんな委屈そうなものを継ぐつもりもなかったし。それにオレがまだ子どものころに死んでしまったからは、店もたたんであったし」

「――悪いことを聞いたな」

レンリルの見せた寂しげな表情の理由はおそらくこれだろう。自分の親が死んだことなんて間違っても面白い話題ではない。

かぐやは軽率なことを口走ってしまったことを後悔しながらも、続けた。

「同じ立場だというつもりはないが、わたしの父親も死んだ。ついこの前のことだ」

「――国王様の訃報はオレもショックでした」

「だからおまえの辛さも、すこしだけかもしれないが理解できる。

悲しいとはまた違う感情かも知れないな、これは。喪失感というほうが正しいか」

「ルア様は母親も亡くしてるんですよね」

レンリルがつぶやくようにいう。

かぐやの母親は、娘を生むと成長を見届けることなく死んでしまった。もともと体が強かったわけではないが、出産を経て体調を崩したのが原因だった。

王妃の死は、ラングネ国の国民ならばだれでも知っていることだ。だからレンリルがそのことを口にしてもなんの不思議もなかった。

「あまり記憶はないがな。綺麗な人だったとは覚えている」

「ルア様は、母親のことを愛していますか？」

レンリルが発したのは直接的な質問だった。

かぐやはすぐさま首肯する。

「ともにすごした時間は短くとも母親だからな。きつとわたしを愛してしてくれたにちがいない。だからわたしも母のことを大切に思っている」

「もし、その母親が自分の子どもを嫌っていたとしても、ルア様は母親を愛せますか？」

かぐやはレンリルの瞳を見つめ返した。そこにあるのは冗談でもなんでもなく真剣なまなざしだった。

うす暗い通路では、小さな声でもよく響く。

かぐやの返事は、すこし時間が経ってからだった。

「難しいが、きつとわたしはその人を愛するだろうな。子どもを愛さない親などいない。わたしは地球でそのことを教えられた。血はつながっていないが、わたしを本当の子どものように可愛がってくれた人だった」

「……そうですか」

レンリルはほっとしたような声でいった。

「ルア様はオレといっしょなんですネ」

「——お前も両親がいないのか」

「厳密に言えば、母親がどっかへ行っちゃってるんですわ。父親が死んでから数年後のことだったけど」

行方不明ということだろう。

母子家庭は経済的に苦しく、母親が自分の子供を虐待してしまうことも珍しくないと聞く。レンリルもおそらくその一人だったのだろう。いまのラングネにはそういった家庭を支援する制度もなく、親を失った子どもが生きていく術はほとんどない。

「それまではひどい生活でした。殴られる、蹴られるという体罰は当たり前、ご飯もろくろく食べさせてもらえなくて。オレは家に引きこもってボードゲームばかりやってましたね。たった一人で。」

それしか精神的に生きていく方法がなかったから」

「辛い思い出だったのだな」

「まあ、それもまだマシな方でしたよ。母親がどこかの男と一緒になったのか、オレの前から失踪してからというもの、死に物狂いでいろんなことをやりました。俗にいう悪いことってやつもたくさん人に悪く思われなかったための行動なんかも覚えました。気にいられなきや生きていけなかったから」

きつとかぐやの想像も及ばぬ世界で生きてきたのだ。

王城のなかで家庭教師をつけられ、次期王女として期待されていたかぐやと、死の瀬戸際で生活してきたレンリルとは、あまりに環境が違いすぎる。

「ある時、騎士団があるって話を聞きました。あそこなら寮もあるし、食べるものに困ることもないって。その時のおれは痩せっぽちだったし、戦いといえbaseいぜい急所を守ることくらいしか出来ない弱虫だったから、どうにか鍛えないと入団できないって思っただんです。それからは通りで拾った木の棒を片手に、いろんなやつらに喧嘩を売りに行きました。最初の方は力だけじゃ勝てないことも多かった。だから考えた。どうしたら効果的に勝てるのか」

せきを切ったように喋るレンリルの声は淡々としていて、どこか懐かしむような音色さえあった。

「奇襲でもなんでもかまわない。どうしても勝てないときにはグループを作って襲いに行きました。喧嘩に明け暮れるやつらなんて探せばはいて捨てるほどうありますから、敵には困らなかった。そのうち気付けば大きな集団ができて、オレはそのリーダーになっていた。個人的にもオレに勝てるやつはいなかったし、集団戦になればもはや無敵といってもよかった。そのくらいになれば食う物なんかに困りはしないんだけど、オレは騎士団に入ることしか頭になかったから。とにかく強くなるしかないと思ってた」

かぐやは静かにレンリルの話す言葉を聞いていた。

両親を失った境遇が似ているというだけでない、壮絶な人生を歩

んできた男が目の前的人物と重ならないような気がしていたからだ。いくつかの死線をくぐりぬけてきたとは想像もできなかったが、ときおり見せる彼の鋭い瞳が、人生を物語っていた。それを無理やり心の奥にしまいこんで、笑っていられるレンリルがすごいと思った。

「入団試験ってやつには困った。筆記試験があったから。オレは字を読むことはできたけど、喧嘩ばかりしてきたから常識なんてものはなくて、勘で答えるくらいしかできなかった。それでも実技試験じゃダントツだったし、現役のやつらにだって負けてなかった」

入団試験は筆記と実技のふたつによって行われる。

片方の成績が悪ければ、採用されることは少ないというのが慣例だった。どちらも騎士に必要な要素だと考えられているからだ。

「まあ、当然のことながら筆記試験はぼろぼろだったんだが、あまりに実技試験の成績がいいってことで面接があったんだ。そのときの試験官がサント副隊長で、そのころはまだ副隊長じゃなかったけど。とにかくオレは愛想よく接したわけだ。で、運よく入団はできたんだけど、副隊長にしばかれるわ、言葉遣いは注意されるわで、なかなか昇進できなかったんだ」

能力があっても上にいけない人間はいくらでもいる。

それは上司に気に入られていなかったり、運が悪かったり、本人の性格に問題があったりするのだが、レンリルの場合はおそらくサントのせいであろう。

周りの地盤をすべて固めてから行動を開始するサントは、レンリルがぼんぼんと出世していけばどこかで反感を買うにちがいないと思ったのだろう。それを危ぶんでレンリルを引きとめたのだ。

「そうしてグズグズしてたら戦争が起こって、オレが行くまでもなく終わってしまった、というわけだ」

「――ずいぶんと運命に翻弄された人生だな」

どのようなことがきっかけで人生が変わるかなんてだれにも分からないが、レンリルのそれは常人よりもずっと波乱にまみれている。

かぐやは素直な感想を述べた。

「ずっと苦しかったのだろうな」

「――いまもまだ、苦しいですけどね」

「え？」

「いや、気にしないでくださいな。オレは今日も元気ですから」

から笑いをして誤魔化そうとするが、かぐやはレンリルがぼそりと漏らした本音こそが、率直な気持ちなのではないかと思った。いまもまだ、苦しい。

笑いながらもレンリルはそれ以上質問するなというニュアンスをまとわせている。

「ところでルア様は、あのお二人の勇者のどっちが好みなんですか」
話題をかえてレンリルが口元を寄せてささやく。

どうやら石上と大伴御行が月に来た動機は、サントをはじめとした人々に広まってしまっているらしい。かぐやは気苦労の乗ったため息をはきだす。

「いまはそんなことを考えている場合ではない。ラングネの復興が終わってから、ゆくりと検討するさ」

「でも、ここまですっしょに旅をして来たわけでしょう。ふたり同時にめとるという手段もないわけじゃありませんが、ルア様のことから本命に絞りそうなもんです」

「わたしの性格を邪推するでない。どちらにも長所があり、欠点もある。どちらか片方などと絞れるわけではないし、そもそも恋愛対象でもないからな」

「いまは戦友ってことですか。男女ってやつは危険な場面をともにくぐりぬけると、より深い愛情で結ばれるものらしいですけどね。ほっと一息ついたときには、惚れていたみたいなのもあるかもしれませんよ」

「知ったことか。レンリルこそ想い人のひとりやふたりはいるだろう」

「いませんよお、そんなもの」

「恋人や婚約者もか？」

「もちろん」

意外だった。

レンリルほどの男ならばいくらでも女性が寄って来ることだろう。それに加えて騎士団ならばなおさらだ。社会的地位も給料も約束されている騎士団は、それだけで結婚できるといわれているほど有望な職業なのだ。

そのため騎士の多くは家庭を持ち、戦っている。これまでは大きな戦争もなく実戦で命を落とすようなこともなかったため、騎士団はラングネ国内でもっとも人気の高い職のひとつだ。

「オレなんかじゃちっともモテませんからね。向こうから願い下げってわけですよ」

「嘘をつけ。なにか女を避ける理由でもあるのだろうか」

「――じつは」とレンリルは声をひそめる。「オレ同性愛者なんですよ」

「くだらん冗談はよせ」

「本当ですってば。サント副隊長とも恋仲で――」

自分で言ってるうちに可笑しくなってしまうらしくレンリルは途中で吹きだした。かぐやもつられて笑い声をもらす。想像しただけで気色悪い光景だったが、それだけに面白い。

ほかの兵士たちが何事かと不審げな視線を向けるが、かぐやとレンリルは屈託なく笑った。

暗いトンネルのなかで、見えない何かをはじき飛ばそうとするかのように。

かぐや姫の帰還

「総員、陣を構えよ！ 第一部隊は右翼へ、第二部隊は左翼へ。第三部隊は中央、第四部隊は予備隊として後方に控えろ。作戦は伝えている通りだ——敵が出てきたら撤退すると見せかけつつ、退いて間延びしたところを逆襲する。こちらにはルア様と勇者様がいらっしやるのだ、我々の敗北はない！」

サントが声を張り上げて陽動部隊を鼓舞する。

かぐやと勇者に影武者を立てているのは、兵士たちには秘密にされていた。

「敵をだますにはまず味方からってね」

というレンリルの方針に従ったものだが、幸いなことにまだ誰も疑ってはいないようだった。作戦にしてもそうだ。本当は深刻な被害の出るまえに撤退するのがレンリルとの打ち合わせだった。それでは士気が下がるだろうということで、適当な反撃を予定に組みこんであるのだ。

兵士たちをだますことには抵抗があったが、それも国のためだと言い訳する。

嘘も方便だ。

馬鹿正直に物事を進めて、それでうまくいかなければ本末転倒というものだろう。サントにはなかなかできない発想だが、レンリルはいとも簡単にアイデアをひねり出してくる。

こればかりは素直に感心せざるを得ない。

「——これでもかというほどアリストスのやつらを挑発してやるのだ。城のなかが空っぽになればなるだけルア様たちの負担が減る——。おとり役という泥にまみれた仕事でも、必ず成し遂げてみせよう」

ひとり決意する。

手筈通りにことが進んでいれば、あと数時間もすればかぐやとレ

ンリルたちが城内に突入し、敵将を討ちとっているはずだ。

いまの自分にできることは少しでも敵の注意を引きつけること。

攻めるのが苦手なのは自覚している。それは死んだ軍部隊長が得意としていたことだ。釣り合いのとれるようにと副隊長に任命されたが、彼の背中を見ていて気付いたことがある。

しょせん、必要なものは勇気だ。

敵に向かっていく勇敢さと、誰かのために命をかけたいという信念と、死を恐れない度胸こそが攻撃の肝なのだ。臆病な小動物のように、巢にこもってばかりでは、勝てない戦もある。

「やるしかない、か」

一世一代の芝居を演じきれるか。

サントの長い生涯で、もっとも緊張した戦いの幕が切って下ろされようとしていた。

「こちらです」

兵士のひとりが指し示す先には、重厚なドアが取り付けられている。古代人のつくったものにしてはシンプルな、暗号認証もなにもないふつうのドアだ。

耳をすませると沈黙がナイフのように突き刺さる。

いまにもドアの向こう側で息をひそめていたアリストス軍の伏兵が飛び出してくるのではないかという不安がつきまとう。最悪の妄想はとどまることを知らない。

もし、この作戦が読まれていたら。

もし、サントの部隊と呼吸が合っていなかったら。

もし、城内で全滅したら。

もし、もし、もし。

「大丈夫ですって、オレの作戦を信じてくださいな」

かくやの陰った表情を察したのか、レンリルが朗らかな声をかける。

その一言だけで、まるで父親の胸に抱きしめられているような安心感が満ちてくる。大伴御行や石上るときと同じ、信頼感。

かぐやは深呼吸をして、ひとつ身を震わせた。

視線が鋭くなる。

「いくぞ」

少数精鋭の別働隊は、しずかにラングネ城へ舞い戻った。

地下室はいままで通ってきた廊下とさほど変わらない明るさをしていた。

うす暗いランプの下に、大小様々の荷物や備品が乱雑に散らかっている。おそらく城を制圧したあとにアリストス軍が目ぼしいものはないかと荷物をあさったのだろう。

地下通路の入口が発見されなくてよかった。

物音をたてないように足場には気をつけなければならない。一歩踏み出すのにも細心の注意を払いながら、大伴御行が先頭に立って敵の気配を探知する。

「――この階層にはすくなくとも十五人、というところでしょうか。いまいる場所からは離れていますますが固まっているので、一人ずつ倒していくというのは無理かと」

「しゃらくせえな、さっさと殴りに行こうぜ」

と意気込む石上をかぐやが制止する。

「おまえの役割は後方だ。もうしばし待っておれ」

石上は親に怒られたような悲しげな顔をして、部隊の最後列へと歩いていく。

倉庫のなかは物影も多く、敵の姿を直接視認することはできなかった。

「おそらく入り口で談笑しているものと思われませんが……しとめ損なえば上階に報告するのは簡単でしょう。どうしますか」

「ここはオレの出番ってわけだ」

レンリルが腕まくりをして、あごに手をあてながら考える。

ここでグズグズしているようではサントの陽動作戦が無駄になってしまう。しかし、地下二階ごときで敵に見つかれば敵将を討つことはほとんど不可能になる。

「急がば回れてやつですよ——こういう時こそ慎重に行動しなくちゃならない」

「時間はあまりないぞ」

「わかってますって」

レンリルは余裕そうな態度をくずさず、涼しい表情をしている。いまにもなにかアツと驚くような奇策を思いつきそうなくつろぎ具合だった。

「ちよつと気が乗りませんが」

とレンリルはつぶやいた。

「御行さん、そのへんの荷物をすこしだけ燃やしてください。見張り番に焦げ臭いにおいが届くくらいに。そうしたら何人かがやってくるでしょうから、まずはそこを仕留めます」

いうが早いや、適当な雑用品を集めてきて、倉庫のすみにまとめた。

大伴御行を促しながら指示を出す。

「みなさんは角に隠れていてください。御行さんはやってくる敵の人数をきっちり把握して、オレに伝えて。その人数だけ、刺客を送ります」

「わかった」

大伴御行が小さな炎を出現させると、周囲の兵士たちからさやき声の歓声が起こった。勇者の力を間近で見るのはこれがはじめての機会なのである。

洞窟のように暗い倉庫のなかに、夕日のような赤が灯る。同時に黒い煙が、鼻につく匂いを運んで行った。

「口はおさえていてください、吸い込むとあとで動けなくなりますよ」

レンリルが小声で忠告する。

数分も経たないうちに、地下一階へとつながる階段の方角から話し声が聞こえてきた。どうやら異変を察知したらしい。いくつかの足音が近づいてくる。

「何人です？」

レンリルがほとんど口だけを動かして尋ねる。大伴御行の鋭敏な聴覚にはそれでも充分だった。

「三人だ」

「了解。オレと御行さんと、もうひとり来てくれ」

かぐやが出ていこうとしたのを遮って兵士のひとりが進みでた。誰を選んでもそれなりに腕は立つ。不意打ちで一刀のもとに切り捨てるくらいならば、かぐやの手を汚すまでもないという判断だった。なんだどうしたと話しながらアリストス兵が近付いてくる。

火に映る長い影を隠し、レンリルたちは息をひそめる。呼吸音でさえも相手に気づかれてしまうような不安。心臓の鼓動がやけにうるさかった。

「ぼやだな、こりゃ」

という誰かの声がかくつきりと聞こえた。

その瞬間、大伴御行が腕を上げる。それが合図だった。

腕利きの三人がいつせいに物影から飛び出ると、アリストス兵の首を切り落とした。声を立てられないようにするにはそれしかなかったのだ。

力なく倒れこんでくる身体を抱きかかえ、ゆっくりと地面におろす。

これで三人。

「この調子でいきましょう。なかなかお見事です」

「……ええ」

レンリルが声色をかえて「おい、誰か水を持って来てくれ」と呼んだ。

入口付近から返事が戻ってくる。

かぐやの心に一つの疑問が浮かんだ。

「火事など起こったら報告するのではないか？」

「だれだって自分の持ち場で落ち度があつたことを認めたくはないもんです。隠せることなら黙っておいた方が得ってやつですよ。だから大事にならないかぎり、バレはしません」

よく考えられている。

敵の心理を読むのも戦術のうちだというが、レンリルはまるで当人であるかのように成りきって見せる。この腕前は竹取の翁を超えているかもしれないと、かぐやは思った。

大伴御行がふたたび人数を確認する。今度は四人。

血痕を見られないように、より近づいた場所で敵を待ち伏せする。先ほどと同じように鮮やかな手際で、アリストス軍は喋らぬ人形と化した。

「おっと！」

レンリルが、敵の持っていたバケツをあわててつかむ。

落ちていれば勘づかれたかもしれない。間一髪のところだった。

「こいつで火を消してきて下さい。万が一火事にでもなったら面倒ですから」

兵士の一人にいつけて消火する。

ふたたびうす暗くなった倉庫には、すでに七つの亡骸がおかれている。残りは八人。レンリルは大伴御行だけを呼んだ。

なにやらふたりだけで打ち合わせをし、忍び足で大伴御行はどこかへ向かった。

今度は少人数でなく、炎使い以外の全員を物影に待機させる。

「オレが合図したらいつせいに飛び込んでください。狙う個所は気にしないでいいです。とにかくこの階層を制圧します」

レンリルが説明する。

数秒後、見張り番をはさんで反対側に火の玉が上がった。矮小な太陽のように光り輝く球をながめる暇もなく、レンリルが合図を送る。

「いんです」

大伴御行の光球に気を取られ、背を向けているアリストス兵たちを背中から切り捨てる。あつ、という小さい悲鳴はしたが、階段をのぼっていくことはないだろう。

力なく倒れこんだ遺体を気にかける様子もなく、レンリルは地下一階へと続く階段を見上げた。

「さて、次に行きましょうか」

地下一階

サントはアリストス軍との間に、絶妙な距離を保っていた。これ以上近づけば敵に追いつかれ、遠ければ警戒されてしまう距離だ。

本来ならば敵を出るだけ城から遠ざけなければいけないのだが、アリストス軍はなかなか足を進めようとしなない。おそらくレーザー砲の準備を待っているのだろうとサントは推測した。

あれをどうにかしなければ。

逃げる以前に、軍が混乱してせん滅される可能性がある。一発で戦況をかえてしまえるほどにレーザー砲は危険な存在であり、それをどう攻略するかがこの戦いの肝要であった。

いままでラングネ軍は有効な攻略法を見つけることができずに連戦連敗を喫してきた。

しかしレンリルは一度このレーザー砲を追いかえし、地下基地を救っている。

そう、懷に潜り込んでしまえさえすればレーザー砲を無力化できるのだ。

しかし今度はそういう種類の戦いではない。なるべく敵から逃げ、戦力を温存しながらかぐやたちの勝どきを待つ。それまでは反撃も許されないのだ。

「……難しいな」

はやいところアリストス軍が手を出してくれば、それを口実に逃げることができる。結果としてレーザー砲の射程外まで軍を移動させられるのだが、こうして膠着状態になっているとどうしようもない。

レーザー砲による被害を少なくするためには軍を散開させ、密集地帯をつくらないうにすればいいが、それにも欠点がある。

いざ逃げる段階になったとき、部隊が広がっていると伝令が追いつかないのだ。

そして固まっていけない兵は弱い。アリストス軍に追いつかれたら各個撃破されるのは明らかだった。

「……ルア様」

一秒でも早く、ラングネ城を奪還しなくてはならない。

レンリルの想定以上に、戦況は思わしくなかった。

地下一階は半分が倉庫の役割を果たし、もう半分は災害時に大人数を収容できるようなただっぴろいスペースがある。地下二階よりもずっと広いのは、古代人がなにかの大きな兵器を収容するために使っていたからだろう。

その大部分は砂漠に廃棄され、いまも砂の下に埋まっている。

アリストスとラングネのあいだには砂漠地帯の発掘を禁止する条約が取り交わされている。レーザー砲のような危険すぎる兵器が埋まっているからだ。

だが、おそらくレーザー砲は砂漠以外の場所で発見されたのだろう。

砂漠の一带はおたがいに監視の目が厳しく、自由に行動できないよう束縛されている。

「——ここはもっと人数が多いです。おそらく五十ほど」

大伴御行が報告する。

面積のわりに見張りが少ないのは、地下だということに油断しているためだろう。そういう意味では助かったといえるが、先ほどのように物影の多い倉庫とは違って、途中で見つからずに接近するのは容易でない。

「さて、どうしましょうかね」

城の見取り図はすでに地下基地でじゅうぶんに確認してきている。あとは敵兵の位置を把握して作戦を立てるだけだ。

レンリルは少し悩んだあと、数人の兵士とともに再び地下二階へと戻っていった。

どうやら作戦を思いつくと説明は後回しにしたくなる性格らしい。行動できることはすませてしまってから、余裕があるときに開設したいということだろう。

すこしの時間があったて、レンリルたちはアリストス兵の恰好をして帰ってきた。

赤いマークの付いた兵装には、よく見ると転々と血がこびり付いていた。さきほど倒した兵士たちから剥ぎとってきたものなのだろう。

死体の装備を奪うなどという行為は、あまり気分のいいものではない。

ためらいもなくそれを決行したレンリルは平然とした様子で、兵士たちに命令を出している。かぐやは胸の奥でもやもやした感情が生まれるのを覚えた。

「さすがに全員の顔を覚えているってことはないでしょう。オレたちかうまく地上階への入口をふさがじますから、頃合いを見て突撃してください。――途中で正体がバレたら、その時はさっさと頼みます」

レンリルはそう伝えると、单身さっさとアリストス兵の群衆へ混じっていった。

「……すごいですね」

大伴御行がつぶやく。

「なにがだ」

かぐやが訊いた。

「あつという間に気配が消えてなくなりました。私でも注意していなければ感じ取れないくらい完ぺきに、殺気も気配も失せています」「ふつうの人間には難しいことなのか」

「目の前にある物体を、なんの前触れもなしに消失させるようなものです。気付けばいなくなっていたといえますか――なにか特殊な訓練でもしたのなら別でしょうが」

きつと生きていくために必要な技能だったのだろう、とかぐやは

思う。

レンリルは喧嘩に明け暮れ、生活してきたといていた。ならば強者に目をつけられないよう身をひそめておかなければならない時期も多かったはずだ。

彼の言葉ほど、彼の人生は簡単なものではない。

きつと辛酸を舐めるような時代を過ごしてきたのだ。平凡な暮らしをしていれば決して身につくことのなかった技能を手にながら。

「かぐや様」

大伴御行が小声で呼びかける。なにかためらったような口調だった。

「こんな時に伝えるべきことかどうか私には分かりませぬが、かぐや様はレンリル殿をどう思っていますか」

「この窮地を救えるのはあやつだけだろう。おまえたちと同じくらいに頼れる男だとわたしは思っている」

「――たしかに、そうかもしれませぬ」と大伴御行はいった。「ですが私にはなにやら裏があるように感じられて仕方がないのです。

ラングネ国を救済するためというよりは、もっとほかの目的があるような。得体のしれぬ不気味さを覚えずにはいられません」

「……レンリルが裏切るとでもいうのか」

「少なくともこの戦いが終わるまでは、かぐや様を失望させるようなことはしないでしょう。問題はその後かと」

「ならばいま思案することではないだろう。おまえの心配もわかるが、ラングネを救うつもりでなければ反乱軍を率いてわたしたちを助けにくることもなかったはずだ。それに――」

とかぐやは大伴御行の肩を叩く。

「いざというときにはお前たちが守ってくれるのであろう？」

「――はい」

力強く大伴御行がうなずき返す。

かぐやは微笑すると、レンリルの次にアリストス兵の集まりへ紛れこもうとする兵士の行方を見守った。問題なくその場の空気に解

け込んでくれればいいのだが。

敵の恰好をしたラングネ兵士は、すこしぎこちない動きをしていたが、なんとか勘づかれることもなく潜入に成功した。続いてひとり、ふたり。

作戦はゆつくりと進行していた。

待っているあいだにサントのことを考える。いまはどうなっているのだろうか。城内の兵が少ないところをみると無事に敵をおびき寄せることには成功したようだが、そのあとまで保障されているわけではない。

判断を間違えればサントといえど無事ではいられないかもしれない。

少しでも早くラングネ城を制圧しなければならぬのだ。しかし、レンリルは慎重を期した作戦を選んだ。それがもどかしかった。

「……まだかよ」

後方に控えている石上が苛立ちながら歩きまわる。

あくまで物音を立てないように動きまわっているが、ときどき我慢できなくなつて階下へ赴いて叫んでいた。焦りは全軍に共通した認識だった。

「落ち着け。ここで失敗したら元も子もないのだぞ」

「わかつてるけどよ。悠長に構えすぎなんじゃねえのか。ばつとやつてばつと倒しちまえばいいだろうが」

「それで事が片付くなら誰も苦勞はしない。レンリルを信じるしかないまい」

「けっ」

舌打ちをして石上は地面に座り込んだ。

「おれはもう寝るぞ。終わったら起こしてくれ」

「わかった」

それは我儘でもなんでもなく、石上なりの対処法なのだろう。不器用ながらも心を整えようとしているのである。かぐやもそれを理解していたから、あえて文句をつけることはなかった。

大伴御行とともに物影からレンリルの様子をうかがう。

遠すぎてレンリルはどこにいるのか判別がつかない。たとえ近くにいたとしても、完全に雰囲気と同化させているので、感知できるかどうか怪しいものだ。

「――かぐや様」

「どうした」

「レンリル殿の気配がわかるようになりました。おそらく、これが合図なのではないかと」

「あやつめ、なかなか考えたものだな」

自分の特徴をよくわかっていうことだろう。

それと同時に大伴御行の能力も把握している。戦術眼はやはり目を見張るものがある。

「みなに攻撃を準備するよう伝えてくれ。なるべく近くまで忍び寄るぞ」

突入隊は身体が大きすぎる石上を残して、そろそろと倉庫となにもないスペースの境界線にまで移動した。剣を抜く。青い刀身が姿を現した。

「――いまだ」

いっせいにラングネの兵士たちが走りだす。

すぐさまアリストス兵がそれに気づいて、上階へと報告しに行こうとするが、入り口を封鎖していたレンリル達が一刀のもとに切り捨てた。

これが効果的だった。

アリストス兵たちはだれが自分の味方なのか判別がつかず、右往左往しているうちに、ラングネ兵の波が押し寄せてきてしまった。

背後と全面から挟撃されては成す術もない。ひとり残らずアリストス兵を打ち倒すまでに、そう時間はかからなかった。

「ご苦労さまです」

レンリルがかぐやの元へ駆け寄ってくる。

おそらくいまの戦いで一番多くのアリストス兵を斬ったのはレン

リルだっただろう。乱戦はお手のものというような立ち居振る舞いで、流れるように剣を振るっていた。

「次はいよいよ一階だな」

「ええ。おそらく今のようにはうまくはいかないでしょう。敵を全滅させるのではなく、やり過ぎすことも視野に入れながら進軍しなくては」

レンリルはあたりをきろきろと見まわした。

「力自慢の勇者様はどうしました」

「あちらで眠っている。いま起こしに行かせているところだ」

「らしいやり方ですね」

声をあげて笑うレンリルを見ると、先ほどまで抱いていた掴みどころのない気持ちですうっと引いて行くのがわかった。レンリルは信頼できる人間だ。

サントだってレンリルを信用していたではないか。

それに、悪意のある人間がこれほどまでに人を惹きつける力を持っているはずがない。かぐやは自分を納得させると、大きく息を吸い込んだ。

血なまぐさい、鉄の匂いがした。

地上階

膠着した戦況は、夜が朝に代わるときのようにとめどなく動きはじめた。

敵の陣営のなかに、ひととき大きな物体が運搬されていくのを確認する。間違いない。ラングネ軍を崩壊へと導いたレーザー砲だ。白い砲身は煙突のように突き出し、その下には家を何件も並べたような土台部分がどっしりと構えている。照準はまだ上空を向いていた。

アリストス軍はこの巨大な兵器を幾台ものジープで引っ張り、移動させている。

そのため速度こそ巨人があるくように遅々としているが、ひとたび牙をむけば何千という命を瞬時に奪うことができる。

あの視線が地上に降ろされる前に、なにか対策を講じなくては。レーザー砲の射程は極めて長い。

いくら遠くにいても動かなければ狙い撃ちされるだけだ。その点では城壁や砦といった建造物はレーザー砲の格好の餌食だった。

早く軍を動かさなければ。

壊滅的な被害を免れるためにも退避行動をとらなければいけないのはわかっていいる。だが、かぐやたちの事を考えればまだ逃げることはできない。

最初の一撃をどういなすか。

サントは思案したあげく、軍をいくつかに分けることにした。

アリストス軍がレーザー砲を使わずに進軍してくれば、たちまち敗走することになるだろう。だが指揮系統さえしっかりしていれば小回りも利くし、なによりレーザー砲の威力を半減させることができる。

こんなときに欲しいのは優秀な部下だ。

レンリルがいてくれれば、という無駄な願望はもう捨てよう。

いまは自分が総隊長なのだ。責任は一手に引き受けなければなら
ない。

サントは自ら散開した一部隊をひきいて、戦場を駆けるのだった。

地上階には警備兵だけでなく、一般人のような格好をした雑用兵
もたくさん行き交っていた。城内の掃除や荷物の運搬をまかされて
いるのだろう彼らのなかには、ラングネ人の姿もある。

おそらく城に残っていた侍女や兵士が捕虜となり、なかば奴隷の
ような扱いで働かされているのだろう。

その証拠に服はぼろぼろで、身体のアちこちにあざを作っていた。
かぐやは哀れにも捕虜となった自国民の姿を見ると、顔が青ざめ
るほどこぶしを握りしめた。

「……アリストスめ」

「ルア様、これが戦争ってやつです。生きるか死ぬか、征服するか
されるか。力のある方が絶対的に有利な世界なんです」

レンリルがかぐやをなだめる。

彼の態度はラングネの惨状を目の当たりにしてもさほど変化しな
かった。

「怒るのはあとにしましょう。それよりも、捕まっている人たちに
うまく誘導できれば、戦力を増やすことができます。戦えそうな人
間がいたら目星をつけといてください」

「ほとんどは戦う気力もないだろうな」

「自分を虐げた相手に復習できるとなったら、どんな人でも力が湧
いてくるってもんですよ。憎しみの力は、時として強大ですから」

レンリルは影からこっそりと顔を出すと、城内の様子を観察した。
兵士の数はさきほどと比べ物にならないが、身を隠せそうな場所
もおおい。レンリルをはじめとした何名かは、まだアリストス兵の
恰好をしており、うまく紛れ込むことも無理ではなさそうだった。

中央には上階へと続く大きな階段があり、その両脇に鋭い眼つき

をした兵士たちが威嚇するように立っている。監視の目はおもに敵兵ではなく、自分たちに奉仕するべき立場の人々に向けられていた。階段の両脇からのびる通路は食堂や、その他の小部屋へとつながっているが、どこを通っても二階へと進むことはできない。

防犯上もそのほうが都合がいいのだ。

王族たちが生活するのは主に城内であり、そのなかでも二階部分と三階部分は重要な部屋が多い。不審者が侵入しないよう、警備の目を光らせる個所は、一階の階段だけで十分ということだ。

「ここからは声が良く響きますからね。いままでみたいに囲んでせん滅、という方法は使えないです。見つかることはそろそろ覚悟してください」

「ということは、ようやくおれの出番だな」

石上が腕を組んでニヤリと笑う。

いままで後方で待機していたため、うつぶんがたまっているのが良くわかった。

「ええ。行くとなったら先陣を切ってもらいますよ」

「任しとけ。あんな雑魚どもにおくれをとるような石上様ではないからな」

「頼もしいですね。オレが声をかけるまで、もうすこし待っていてください。見つかるのは少しでも遅い方がいい」

「おうよ」

身をかめながら石上は部隊の後方へと消えていく。

かぐやたちの潜伏している地下への階段と、上へ通じる階段との距離はさほど離れていない。

広間をひとつ横切れば、すぐ目の前に駆けあがるべき段差が待ちかまえている。その間には少なく見積もっても三十人の兵士がおり、その倍の雑用兵がせわしなく労働させられていた。

たとえアリストス兵を倒したところで、あちこちにある監視の目をくぐり抜けることはできない。

どこかで強行突破をしなければならないのだ。

「さっきの手をもう一度使うのはあんまり得策じゃありませんね」

とレンリルがかぐやの顔色をうかがいながらいった。

「さっきの？」

「なにかを燃やして敵の気を逸らしているうちに突入する方法です」

「……悪いが、それはやめてくれ」

かぐやは申し訳ないといった様子で断る。

「地下ならともかく、さすがにこの城を燃やすわけにはいかないのだ。ここにはわたしの大切なものがたくさんある。それにラングネにとって大事なものも」

「そういうと思ってましたよ」

レンリルはうんうんと頷き、ふたたび城内の様子を視認した。

突撃隊の兵士たちも憤りを隠せていないようだった。自分の守るべきものが蹂躪されている。それだけで理性のネジが飛んでしまいそうなほど、憤慨していた。

兵士のひとりがレンリルをせかす。

「ちょっと待ってろって」

「レンリル殿は悔しくないのですか。こんな有様を見せつけられて

……」

「歯ぎしりするほど憎いさ。だけど――」

その時、身を隠していたはずの兵士のひとりが、みすばらしいなりをした女性のもとへ走りだしていった。あっと声を上げる間もなく、兵士はその女性に抱きつき、アリストス兵を睨みつけた。

「あの馬鹿」

舌打ちするとレンリルがすぐさま飛び出していく。

かぐやもひとつ遅れて突入する。

「俺の女房になんてことしやがるんだ！ おまえらアリストスの人間は許しちゃおけねえ、ここで殺してやる！」

思わぬ形で先陣を切ることになった件の兵士が叫んだ。

どうやら捕虜となった自分の妻を見つけてしまい、激昂にかられてのことだったようだ。同情する余地はあったが、とにかくこれで

隠密行動はできなくなった。

細君を片手に抱いて、兵士は剣を抜く。

すぐさま近くにいたアリストス兵が斬りかかってきた。だが、兵士はそれに気づかない。死角である背後からの攻撃だった。

「くそつたれが！」

アリストスの赤い剣が命を断つまえに、レンリルの腕が動いた。斬りかかろうとしていた兵士を両断すると、さきほど失態をさらした兵士を怒鳴りつける。

「守りたいものがあるなら敵を倒せ！　よそ見なんかしてんじゃねえよ！　ここにいるやつらを一人残らず殺すくらいの気概がなきゃ、家族なんて守れねえぞ！」

てっきり作戦を台無しにしたことを叱責されるものだと思っていたが、予想外のレンリルの言葉に呆然とする。

だが、数秒後には自分の腕に抱いている妻をがっしりつかむと、雄々しく剣を構えた。

「それでいい、頑張れよ」

ぽんぽんと肩を叩いて、レンリルは広間を突っ切っていく。

別の場所から飛び出した石上が、獣のように叫びながらアリストス兵を軽々とはじき飛ばしていった。身体に迫る剣は左手にまとった防具で受け止め、右の拳に装着した力で敵をなぎたおす。

大伴御行はすつとかぐやのそばに寄って来ると、警戒した様子で話しかけた。

「戦闘は石上にお任せください。そのうしろについて行きましょう。余計な敵は無視して、ほかの兵士にあたらせるのがいいかと」

「おまえはどうするのだ」

「敵将はかぐや様の手で討つのがよろしいかと思えます。ですから、私はそれまでのお手伝いをさせてもらうつもりです」

「頼むぞ」

自分自身の手で、敵将を討つ。

大伴御行に諭されるまではその決心がついていなかった。レンリ

ルでも石上でも、誰かがやればいいことだと思っていた。それはそれでひとつの解決法だろう。

しかし、それでは駄目なのだ。

はじめは自分でつけなければならない。

ラングネを救う大きな一歩になるとともに、かぐや自身のためにも、その手で切り捨てなければならぬのだ。かぐやは剣の柄を握り直すと、石上の巨体を追いかける。

石上のうしろにはかまいたちが通った後のように空白の道が出来上がっている。

かぐやと大伴御行は左右にはじき飛ばされる敵兵の姿を横目に、二階へと急いだ。

分断

サントの眼前で、レーザー砲がゆつくりと牙をむきはじめていた。天にまで伸びる巨大な砲身が、徐々に下方にむかつてうつむき、散開しているラングネ兵に照準をつける。獣が小動物を捕食するときのような鋭い視線。サントは呼吸が荒くなるのを感じていた。

地下基地で戦っているときさえこんな感覚を覚えることはなかった。

圧倒的な力の差をまえにした無力感のようなものがサントの全身を駆け巡っていた。

あれは、どうすることもできない。

全身が震え出す。

国王や隊長は化け物を相手に戦っていたのだ。逃げ出したくなる衝動を必死に抑えるだけでも手一杯だったのに、あの殺人兵器に立ち向かっていくなんて不可能だ。

地下基地の防衛線を突破されたときは不思議と落ち着いていた。

徐々に死が近づいてくるという確信があったからかもしれない。

しかしレーザー砲はほんの一瞬で何百という命を刈り取ってしまう。

その目に睨まれただけで、走馬灯を見る間もなく消しクズに化すというのがレーザー砲の光線に直撃した人間の運命だった。

もし、自分の方を狙ってきたら？

最悪の場合を想定してサントは必要最低限の兵数だけを付近に控えさせていた。敵が指揮官をまっさきに始末しようとするのはごく自然な考えだろう。

反乱軍などというものは指揮官がいなくなれば、片手ですくった水のようにあっけなく瓦解してしまうものだ。たとえレンリルやかぐやが残っていても、戦場にいなければ兵士たちは士気をなくし、敗走するだろう。

強いようでもろい絆。

それが軍隊の正体だ。

「……サント様」

側近のひとりが震える声でサントに話しかけた。

「……なんだ」

「敵のレーザー砲が稼働するまえに、軍を動かした方がよろしいかと。いまのままでは不十分です」

個人的な恐怖を別としても、レーザー砲から逃れるためには距離をとる必要があった。いくら砲身が巨大とはいえ、砲撃の精度までが抜群というわけではない。

遠くに離れれば離れるほど、当然命中率は低下する。

「それは、ならぬ」

サントがレンリルから授かった作戦は、あくまで敵軍を首都から引き離すことだった。

レーザー砲の脅威から背を向けて逃げるだけでは、敵は追って来ることをしないだろう。軍の半分でも引きつけられれば上出来な方だ。

しかし、それでは全体としては不十分だった。

「兵は怯えています。このままではレーザー砲が一撃発射されただけで、逃げ出すものもいますでしょう。ひとりが逃げ出せば、それを見た他のふたりが逃げ出します。それがやがて軍全体の勢いとなつて、我々の手には負えなくなるのです」

「わかっている」

「では、なぜ」

詰問するように側近が問いつめる。

はたから見ればサントが意固地になってその場を動かこうとしないように映るだろう。敵に背を見せるなどということはプライドが許さないはずだ。

だがサントの思惑は違っていた。

この窮地を脱するための秘策が、たつとひとつだけ浮かんでいた。

「問いたいことがある。おまえはなんのために戦っているのだ？」
唐突に質問を受けた側近は面食らったような顔をしていたが、すぐに

「ラングネ国の復興と、ルア様のために戦っております」

という模範的な回答を示した。

サントは二、三度うなずいて

「ならば命を捨てる覚悟はあるか」

「もちろんです」

「……時として、命を落とすよりも恐ろしいことがある。おまえにそれをやり遂げるだけの勇気があるか」

「――それは」

いったい、どういうことでしょうか。

その言葉を飲み込んで、側近はサントの顔を凝視した。サントの視線の先にあるものは、まるで焦らすように砲身を動かしているレーザー砲だけだった。

「死よりも恐ろしいもの。それは死に立ち向かっていくことだ。その勇気があるものだけを集めて来い。それとありったけの車を」とサントはいった。「――敵の懷に潜り込むぞ」

ふたたび、あの赤いアラームが泣き叫んでいた。

敵のだれかが警報のスイッチを入れたのだろう。城内を赤く染める警戒音が、甲高い悲鳴のようにかぐやの鼓膜へと突き刺さっている。

かぐやは自分がありもしない煙の匂いを嗅いでいることに気づいた。

ラングネ城が制圧されたあの日の光景が次々と襲いかかるようにフラッシュバックしてくる。

――怒声。走り回る人々。泣き叫ぶ女の人の声。砲声。そして、耳をつんざくアラーム。

どれが本物で、どれが記憶の奥からよみがえってきたものなのか判別がつかない。

頭の中が混乱する。

思わず足がもつれて転びそうになるのを、大伴御行が支えた。

「――大丈夫ですか」

「……」

返事することさえ億劫だった。

耳元で絶叫するかのようなアラームの音が脳を破壊するみたい走りまわっていた。大伴御行の声がどこか遠くから聞こえてくる。

それよりも大きな、父の声。

もう死んでしまった父は苦痛に顔をゆがめて、うつぶせに倒れている。その上でほほ笑んでいるのは狂人ジアド。吐き気がした。

「かぐや様！」

不意に耳元で大きな声がした。

大伴御行が心配するようにのぞきこんでいる。どうやら知らないうちに床に寝かされていたらしい。

「こんな――ことをしている場合では」

「無理はしないでください。歩くのが困難なようなら、私が背負って運びましょう。気を確かに」

「心配するな、これしきのこと」

立ち上がろうとすると強烈な目眩が襲ってきて、足元をふらつかせる。

まだ呼吸が荒い。

なにかを吐き出すように呼吸をくりかえす。

「……赤い警報が頭のなかで鳴り響いているのだ。これがわたしをおかしくさせる」

かぐやが絞り出すような声でいった。

「それならば、なおさら立ち上がってください。いま目を背けてしまえば一生逃げられない足かせとなってしまうです。この場で克服するからこそ、前に進むことができるのです――辛いことを申すよ

うですが」

「いや、いい」

かぐやは大伴御行の肩に体重をかけながらよろよろと立ち上がると、自分の頬をぴしゃりと叩いた。

警報は相変わらず鳴り響いている。

「いつまでも過去に縛られていてはわたしではない——だから、未来はこの剣で切り開く」

「……それでこそ、我らが姫君です」

大伴御行が優しく微笑すると、ふたりはまた走りだした。

先行する石上はすでに通路のかなり先にまで到達していた。巨体の通った後には無数の人々が、うめきながら転がっている。石上はいちいち命を奪うような戦い方はしていないのだ。

——レンリルとは違うのだな。

どこかほっとする自分がいるのを感じる。

人を殺すことには、まだためらいがあった。アリストス兵とはいえどなるべく殺したくはない。憎しみはたしかに大きかったが、まだ自分の手で命を奪うというのには抵抗がある。

わがままな良心なのかもしれない。

周りの人間には戦いを強いておきながら、自分の手を汚すのは嫌だなんて。

敵将はこの手で討つ。

それは自分のなかで決めたことで、揺るがない事実だった。けれども途中の兵士たちはなにも殺さなくてもいいのではないだろうか。そんなかぐやの甘い期待を打ち砕くようにレンリルは石上が戦闘不能にしたアリストス兵たちを一人ひとり丹念に殺していった。道ばたに落ちている石を拾うように淡々と、剣をふるっては命を奪う。かぐやの非難がましい視線に気づいたのか、レンリルは涼しい顔で弁明する。

「背後をとられると厄介ですからね。やれることはやっておかないと」

「だが、彼らはもう動くこともできあかったはずだろう。なにを殺すことはないのではないか」

「なにを生易しいことを言ってるんですか」レンリルは少しだけ語気を荒らげた。「相手もこちらを殺しにかかっているんです。命は奪われる前に対処しなければ、すべてが水泡に帰します。命あってこそその人生なんですよ」

「……それは、そうだが」

生きることの大切さは嫌というほどに学んだ。

レンリルのいうことはもっともらしいが、かぐやはどこか納得できないでいた。

「敵も兵士ならば自分がいつ殺されてもいい準備はしているはずです。その覚悟さえないようなやつが戦場においていいはずがない」

まるで自分が非難されているような錯覚。

甘すぎるのだろうか。国を救うということは想像よりもはるかに苦しい道のりが待っているのかもしれない。いままでも自分の身を守るのに必死だった。だが敵よりも有利な状況に立たされ、いままで見えていなかった醜い側面までも知ってしまった。

かぐやは唇を固く噛みしめたままにも反論しなかった。

それを了解の意味だと感じ取ったわけではないだろうがレンリルは身をひるがえすと、瀕死のアリストス兵にとどめを刺す作業へ戻っていった。

「なあ、大伴」

「人を殺すのはどういふことか、と聞きたいのですか」

予見したように大伴御行がいった。

「わたしはこの手で敵将を討つと決めた。ラングネを救うためにもわたしのためにもそれが必要だからだ。しかしこの場で無害なアリストス兵を殺してまわってなんになる。もとはといえば交友のあった月の民なのだぞ、同じ人間なのだぞ」

「あなたが血を見たくないのなら、そのほうがいいでしょう」

「卑怯者だと思うか？」

「いいえ。命を奪うというのは重大な責任をともなった行為です。かぐや様はすでに一国を背負っているのですから、これ以上の重荷を抱え込むのはよくありません。汚れ仕事は私たちにお任せください、そのほうが敵にとっても良いというものです」

「……わたしはアリストスが憎い。父上を殺し、じいを殺し、クレアを連れ去ったやつらが憎い。なのに、どうして剣が振れないのだろうな」

「本当は人を殺すのなんて善行であるはずがないのです。戦争という狂った状態だからこそ人を殺して英雄になることができます。平和な時代ならば、ジアードのような男が現れても、人々は彼を称賛したりしません。人が人を殺してもいい世の中から、正しい世界に修正するのがかぐや様の役割なのです」

「大伴はそれでいいのか。他人の重圧を押し付けられて」

「私はかぐや様の喜ぶ声が聞ければ、それでいいのです」と大伴御行は石上の方向を見つめた。「なにせ勇者ですからね。勇者は戦いが必要ればただの凡人です」

「――ありがとう」

「さ、行きましょう。石上が待ってますよ」

復活した石上は以前よりもパワーが増しているように見えた。

暴れ牛のように突撃しては、圧倒的な体格差でアリストス兵をはじき飛ばしている。地球にいたころ、三山村で農耕牛として使われていた一匹が暴れ回ったのを見たことがある。

石上はその様子によく似ていた。

長い廊下の先で立ち往生している石上に追いつく。

「なにを立ち止まっているのだ、はやく先に行かぬか」

「どっちに進めばいいか分かんねえんだよ。右か、左か？」

「迷ったら右だ。ラングネの基本だぞ」

「知らねえよそんなこと」

ぶつぶつと文句をたれながら一直線にかけだしていく石上。

かぐやたちのうしろには突撃隊の八割ほどの人数がつき従ってい

た。レンリルの姿はない。まだ後方でアリストス兵を斬っているのだろう。

その他のものも手間取っているためか、もしくは負傷したためか、戦列を離れている。

「三階へはあのどのくらいですか」

「敵の数にもよるが、石上があのだらば調子ならば問題ないだろう。じきにたどり着く」

と、その時だった。

廊下の右側の部屋から――たしかそこは客間として用意されていたわりと大きな部屋だった――アリストス兵が湧いてきたのだ。

不意をつかれた。

これでは後方の人たちと連絡をとることができない。

まさか伏兵がいるとは思ってもみなかった。おそらく兵士たちの詰所になっていたのだろうが、レンリルの想定外の出来事だった。

「かぐや様」

混乱しかけたかぐやの腕を大伴御行がつかむ。

「先へ急ぎましょう」

「レンリルたちと分断されることになるぞ。下手をすれば挟撃になる」

もともと人数が少ないため、背後をとられれば圧倒的に不利な状況へと追いやられる。その前に敵のトップをつぶしてしまおうというのがレンリルの作戦だったが、伏兵の登場によって予想外に早く追いつかれてしまった。

それにレンリルを含めた少人数は、敵兵を隔てて向こう側にいる。

このままでは彼らのほうが危険だ。

「ここで救出に向かってしまつては石上が孤立します。敵の大將を討ちとれば必然的に敵も退却することでしょう。援軍を出すよりも、攻撃した方が得策というものです」

かぐやは逡巡したように、うしろと前をきよろきよろと交互に見やっただが、

「レンリルを信じよう。ここにいるものの半数は残って敵を迎撃しろ、残りの半分はわたしと一緒についてこい」

素早く的確な命令を飛ばす。

ラングネ兵たちは戸惑った表情を一変させると、かぐやのあとをついていった。石上のうなり声はるか前方から聞こえていた。

最上階

「サント様、これだけの兵が集まりました——予想外に少数で、申し訳ない限りでございます」

「気にするな。誰だって怖いものはある。恐怖は人間の根本的な感情なのだからな。それを乗り越えられるものは多くない」

「ジープはありったけの数を用意してまいりました。これならば全員を搬送することができます」

サントの眼前には青色のジープが数十台と、自ら志願して特攻隊を希望した兵士たちが綺麗に整列していた。

これだけ集めても敵の本隊と比べることはできない。

サントは自分の部下にほかの部隊の士気を委任するとみずから剣をとって立ち上がった。

「これより敵に奇襲をかける。まさかアリストスもこちらが突撃してくるとは思っていないだろう。レーザー砲の脅威をかくぐるには、敵の手元に飛び込むしか方法はない。そして退却の際に敵をおびき寄せ、本隊と合流後、途中で反転して逆襲する。レーザー砲は混戦では使えないため、交戦していれば恐れることはない」

そのためには機動力が欠かせない。敵の反撃が来るまえに素早く逃げだすため、何台ものジープを用意させたのだ。

しかし、この作戦は後半が嘘であった。

もし反撃が成功したとしても、敵が陣を立てなおそうと退却してしまっただけなんの意味もない。かぐやたちの潜伏する王城から敵の本隊を引き離すのがサントの使命だ。

そろそろ時間もなくなってきた。

敵がかぐやたちの急襲を知って、援軍を呼ぶのもそう先のことではないだろう。はやいところ軍事行動を起こさなければ、敵に感づかれてしまう。

「——失礼ですが」

と側近のひとりがかしこまっていった。

「サント様らしからぬ作戦でございますね。いつもなら腰を据えて敵を迎え撃たれるのに」

「立場が逆だったらそうしただろうな。だが、いまはこちらが挑戦者だ。攻めなければ勝てないのなら、ありったけの勇気を振り絞る他はない——そうだろう」

「はい、その通りです」

「では、参ろうか」

生き残る術は、死地をくぐり抜けるほかにはないのだから。

後ろにレンリルはいない。

けれども、かぐやのすぐそばにはふたりの勇者がいた。

「四階ってやつは遠いなあ、おい。構造に問題があるんじゃないやねえのか」

「わたしに文句を垂れるな。この城は古代人が造ったものなのだぞ。もとはといえば攻め込まれにくいように設計されているのだから、面倒くさいのは当然だ」

「それにうかうかしてたら迷子になりそうなくらい入り組んでやがる。この床を突き破っていけねえのか？」

石上が走りながら天井を指さす。

敵は王城に奇襲をかけられることをまったく想定していないようだった。地下室と一階、二階には警備の兵士が駐在していたが、三階には数えるほどの人影しか見えない。

そのため奇妙なほどスムーズに先を急ぐことができていた。

「あとで修理するのが大変だろう。いざというときの最終手段にしておいてくれ」

「まったく、金持ちがケチケチしてんじゃねえよ」

「馬鹿者。上に行きたいからといって天井を破壊するなどという無茶なことをするやつがどこにあるか」

「まったくです。意識のなかった間に、知識もいっしょに眠ってしまったのかもしれませんが」

大伴御行が並走しながら口をはさんだ。

いままでの戦場とは違って、傷もほとんど負っていない。本来なら大伴御行が負傷するような状況にしてはならないのだ。敵の攻撃を受けるのは石上の役割なのだから。

「うるせえ。こうなったら無礼講だ、地球じゃねえから容赦はしねえぞ」

「どこであろうと私の方が位の高いことには変わりありません。第一、親のすねをかじって役職に就いたあなたと違って私は実力で選ばれたのですから、雲泥の差があります」

「いい度胸じゃねえの、いまならおれのほうが格段に強いぜ。なんならここで決着をつけようか」

石上が服の袖をまくる。

小岩のような筋肉が盛り上がり、肌の表面には太い血管が浮き出ている。

「思春期の子どもみたいなことをするでない。石上の知性がたりないのは事実なのだ、素直に認めたらどうだ」

「いくらかぐや様でも馬鹿にしてくれちゃ困るぜ。こう見えても頭の出来には自信があるんだ」

「確かめてみるまでもなく結果はわかっているからな、それ以上は喋らなくていいぞ」

かぐやは走りながら石上の脛を蹴りつけるという器用なことをやってのけてから、廊下の角をさして声を上げた。

「あそこを曲がるぞ」

「――敵の気配がします。注意してください」

「なにがいようと関係ねえよ。おれの前を遮るやつがいるなら、押しのけて通るだけだ」

石上はペースを速めると、一番乗りに廊下の角を曲がった。

いくつかのうめき声が聞こえてくる。どうやら待ち伏せをしている

たようだが、無意味に終わったのだろう。

「大伴の能力は大したものだな。残っている敵の数はどのくらいだ」
「この階層にはもう誰もいません。あとは四階に集結しているようです」

「兵力を一ヶ所に集めてきたというわけか、敵将も馬鹿ではないようだな」

一般的に軍勢というものは集団で活用したほうが効果を発揮することができる。同じ数がいたとしても、バラバラになっているのと、集合しているのでは、まるで勢いが違うのだ。

ならば兵を小出しにせず、最後に迎え撃とうと考えるのは自明の理だろう。

「ですが、数はこちらと同じくらいでしょう。石上と私がいるのなら、優勢は間違いないかと」

「油断はできないが――光は見えてきたな。このままなら、わたしたちの勝利だ」

赤いじゅうたんの続く廊下を疾駆する。

最後の階段に一番乗りした石上が上階へと姿を消す。次の瞬間、悲鳴にも似た声が聞こえてきた。

敵将

ジープを運転しているのはサントの部下で、サント自身は荷台に身を乗せていた。車に乗っているだけでは剣で攻撃できないので、こうして荷台に身体をさらしているしなければならないのだ。

それはもちろん、敵からも攻撃を受けるということと同義だ。

サントのほかにも数名のラングネ兵たちが緊張した面持ちで、進行方向を見つめていた。敵の陣地に到着するまではあと五分とかわからないだろう。

サントたちの攻撃はすぐさまアリストス軍に感知され、レーザー砲の周囲を中心に防衛網が敷かれはじめている。これを突破しないことには勝機はない。

ジープの連隊はますます速度を上げていく。

背後に大きな土煙が巻きあがっていった。アリストス軍はすこしでもレーザー砲から遠い場所で交戦しようと、こちら側に近づいて来ている。

そこまではサントの思惑通りだった。

レンリルでなくても作戦くらいは立てることができる。問題はそれが成功するかどうかだ。

「あまり緊張しすぎると、いざという時に手が動かなくなるぞ」

新米兵士なのだろう若者が、あからさまに身体を硬直させていたので声をかける。

「は、はい！」

そうとう舞い上がってしまったのだろう。

新兵は車上だというのに直立不動で敬礼した。

「危ないから座ったほうがいい。風圧で転げ落ちたら一生の笑い者だぞ」

「も、申し訳ありません」

赤面しながら正座する新兵。

サントはくすくすと笑いを漏らした。

「おまえはこの部隊に所属しているんだ？」

「だ、第一隊です！」

「驚いたな、第一隊に籍を置いてるのか。ということは、よほど優秀なのだろう？ あそこにはエリートが集められているからな。軍部隊長も第一隊の出身だった」

「そんなことはありません。レンリル殿のほうが、私などよりもよほど有能でございます」

「レンリルの連れてきた軍隊にいたのか。あいつは特別だからな、あまり参考にしない方がいい」

「ですが、レンリル殿がいなければ反乱軍をまとめ上げることは不可能だったでしょう。私も彼の人柄に憧れて反乱軍に加わったのです」

「――軍人に必要なのは、才能だけではない」

サントは若者を諭すように、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「上官に対して正しい言葉づかいも出来ない、年功など関係なくスキンシップをとりに行く、そして年齢にふさわしくない能力。こんな人間がぽんぽんと出世していったら反感を買うのは間違いない。結果として能力があっても、軍全体が不和になってしまっただけの意味がないのだ。いまのような、実力がなければのたれ死ぬ世の中にならなければ、あいつを担ぎあげることなどなかっただろうな」

「……ですが、レンリル殿は素晴らしい人です。彼なら他人のひんしゆくを買うようなこともないと思います」

新兵が反論する。

自分の尊敬する人が否定されれば、自分を否定されたのと同じ気分になる。サントは続けた。

「たしかにそうかもしれないな。あいつならば上手く収めそうな気がする。だが、レンリルを昇進させないようにしたのは、別の理由があるのだ。ほかの、もっと重大な理由が」

「それは――」

なんですか、と新兵は恐るおそる尋ねた。

「この機会だから忠告しておくが、レンリルを完全に信用しきつてはならないぞ。あいつは一步間違えれば危険な人物になりかねない。表の顔と裏の顔を、ああまで器用に使い分けてることのできる人間はほかにいないだろうな。おまえが見ているのはレンリルの表側――あいつが他人に見せている顔だ」

「……サント様は、レンリル殿の裏側を知っているのですか」

「ある程度は」とサントは答えた。「だが、すべてを知るのは不可能だろう」

「教えてはくさいませんか、その裏側を」

サントは逡巡してから、その新兵の肩を優しく叩いた。

「いまはレンリルの力なくしてラングネの復興はありえぬ。問題はそのあとだ。――この戦いに勝利したら、訪ねてくるといい。レンリルのことを離して聞かせよう」

新兵は緊張したまなざしでサントを見つめ返した。

ジープは、もうすぐアリストス軍に接触しようとしていた。

石上の悲鳴のような声が聞こえてきた方角に向かって、全力で駆けつける。なにか良くないことが起こっているのだという、確信にも似た不安がかぐやの胸をざわつかせていた。

後ろからはラングネの兵士たちがついてきてはいるが、かぐやと大伴御行のほうが早く階段のふもとに到着した。

玉座のある四階を見上げる。

「石上！」

その瞬間、巨体がものすごい勢いで落下してきた。

押し潰されないように身体をひるがえすと、轟音を立てて石上が尻もちをつく。どこかを怪我した様子はなかった。

「いってえ！」

「なにがあったのだ、石上」

かぐやが叫ぶように声をかける。

「どうやら命に別条はなさそうだった。」

「縄に足を引っ掛けられて、思いつきり突き落とされたんだよ。びつくりしてヘンな声を出しちゃったぜ」

「それだけか？」

「あとは兵士がうじゃうじゃいやがったな。ここまでとは比べ物にならねえ」

玉座の周りの守備は堅固にしてあるということか。

時間稼ぎよりも、こちらをせん滅することを考えているのかもしれない。だが、かぐやたちにとってそれはむしろ都合だった。

「よし、一気に突入するぞ。大伴、先に縄を焼き切れるか」

「もちろんです」

大伴御行は渦巻く炎を召喚すると、階段の段差にそって這わせていく。蛇のように動く炎は頂上に到達すると、さきほど石上の足をとらえた縄を焼きつくした。

「……階段付近に敵が集まっているようです。このまま私が威嚇攻撃をするので、その隙に駆けあがってください」

「わかった」

腰をおさえながら立ちあがった石上とかぐやはひと息に四階へと疾駆する。急勾配の階段を上りきった先には赤い炎が道をふさぐように展開していた。

かぐやたちが速度を緩めず、足を踏み入れようとすると、まるではじめから存在していなかったかのように炎が消えた。

「ようし、さっきの仕返しだ」

石上が気合いを入れて暴れ回る。

身長が倍ほども違いのあるアリストス兵との戦いでは、見ているまゝで負ける気がしなかった。次々と兵士を殴りつけては地べたに打ち倒していく光景は清々しいほどだった。

大伴御行がうしろから追いついてくる。

「大伴は下がっていてくれ、ここはわたしと石上で何とかしよう」

大伴御行の能力は乱戦向きではない。

後方の安全な場所で援護するからこそ真価を発揮するものだ。

炎使いの勇者はしかし、ニヤリと不敵に笑った。

「ご心配なさらず。私もだてに訓練をしていたわけではないのですよ——それよりも、私どもが道を切り開きますので、かぐや様は敵将と戦う準備をなさってください」

大伴御行は両手の先から、刀のようにするどくとがらせたふたつの炎柱を具現すると、さらに自分の周囲へ火の玉をいくつも浮かべた。

その明るさといったら、まるで松明を掲げているようだった。

「……それは？」

見たこともない大伴御行の戦闘スタイルに驚きながらかぐやが問う。

「九尾の狐というものを模した構えです——これならば接近戦だろうとなんだろうと引けは取りません」

地下基地でかぐやがレンリルと剣を交えていたところ、大伴御行は別な場所でひとり鍛錬を重ねていた。それはこの新しい技術を習得するためだったのだろう。

かぐやは大伴御行の周囲を旋回するいくつもの火球を見やった。

「こんなものを浮かべていては、意識が散ってしまうのではないか」「よく観察すれば、その球が規則的に動いているのがわかりますでしょう。私はこれをあやつるのに何も意識は使っておりません。ほとんど呼吸をするような感覚で、自動的に私を守るように訓練していたのです」

「それに——その刀は？」

大伴御行は護身用にラングネ軍の剣を持っていたはずだが、柄だけのそれは腰につりさげられたままだ。それに彼の両手に生えた刀身は炎そのもので、青白く輝いていた。

「炎を凝縮することによって、威力を高めた剣です。これならば触れるだけで相手を斬ることができます。それに」といって、大伴御

行はかぐやの持っている剣に自分の刀を触れさせた。

かぐやの腕が押し返される。

「相手がなんであろうと防御することも出来ます。おそらく構造が同じだからでしょうが、上手い具合に適応してくれました。あとはこの火球が、私の絶対領域をつくりだします」

遠距離だけでなく、攻防が一体となった大伴御行は、自信に充ち溢れているように見えた。

勇者は進化する。

かぐやは自分のなかに心強さが生まれて、すくすくと芽を伸ばしていくのを感じていた。

これなら、いける。

「それでこそ勇者というものだな」

「私はかぐや様のためならば、どんなことでもいたしますよ」

「ならばわたしと一緒に来い。石上に遅れるなよ」

玉座のある方向へ、氷を割るように突き進んでいく。

いつの間にか見慣れてしまった人の壁。相手はいつだって大軍だった。後方ではアリストス兵とラングネ兵が入り混じって戦い合っている。どうやらこちらの援護は見込めそうになかった。

レンリルたちを含めた戦力が裂かれたのが大きな要因だろう。

「おら、どうした、このままじゃ敵将にたどり着いちゃうぜ」

石上が豪快にこぶしを振り上げながら敵を挑発する。アリストス兵は勝ち目がないと思ったのか、距離をとって無暗に攻撃しないようにしていた。

しかし石上はそれにも構わず足を進め、男たちをはじき飛ばしていく。

さらに大伴御行も敵を寄せ付けない強さで、かぐやの近辺を護衛している。神々しいまでの青白い双剣は、舞うように敵を切り裂いていた。

「楽勝だな、こりゃ」

「油断はしないほうがいいですよ。とくにあなたは」

「へ、こんな腰ぬけどもが相手じゃ話になんねえよ」

石上がせせら笑った鼻先を、一筋の光がかすめていった。それと同時に大伴御行が身をかめる。彼の頭上にも同じように光の軌跡が流れていた。

光はアリストス兵の人込みへ消えていくと、ふたたび襲いかかってきた。こんどは石上をふたりがかりで翻弄する。思い切り両拳をふりまわすと、小虫のように姿を消した。

「……気をつけてください。怖ろしく素早いなにかがいます」

「わかってらあ。今度はたたきつぶしてやるぜ」

次の瞬間、かぐやは目の前に光が瞬いたのを見た。

来る、と直感したときには剣を構えていた。

「おいおい、こっちががら空きになってるじゃねえかよ」

石上の声がしたのはかぐやの背後からだった。

だが、目の前にはたしかに剣がある。大伴御行がよこから、かぐやの前にいた剣をなぎ払うと、アリストス兵のなかに消えていった。「かくれんぼはこのくらいにして、そろそろ本番と行こうじゃねえか。おれはただの鬼じゃすまないぜ」

石上がどすの利いた声で脅す。

対面しているのは、月の民の平均身長よりを半分にしたくらいの、小さな大人だった。

「もう一人いるんだろ、早くしないと仲間がやられちまうぜ？」

石上の言葉に引き寄せられるようにしてもう一本の光が襲来する。だが、今度は大伴御行が素早く反応して剣を受け止めた。

ふたつの影のような光は、またもやアリストス兵のなかに姿をかくす。

背があまりにも低すぎるため、隠れられると見つけることは困難だった。それに加え、動きが早い。目で追いきれないほどのスピードをふたりともが有していた。

「よく気がつきましたね、石上にしては」

「おれの膝丈ほどもないやつらに負けてたまるかよ。あんなチッコ

イ身体じゃまともに戦うのも無理じゃねえのか」

石上を二筋の光が襲った。だが見切ったように鋭いけりを繰り出すと、途中で軌道を修正して逃げていった。

「敵の狙いはかぐや様でしょう。こうして私たちの注意を引いておいて、かぐや様の守りが薄くなった時を狙って来る作戦だと思えます。さきほどもそうでした。どちらか片方が警護にまわるか、もしくは」

「おれらふたりで足止めをしておくか、だろ」

「やけに物わかりがいいですね。本当に石上ですか」

「地頭がいいんだよ、おれは。なんならご主人様に決めてもらおうぜ、どっちの作戦を採用するか」

石上がかぐやのほうを振り返る。

月の姫君は、剣を握りしめると、ふたりの勇者に向かって言い放った。

「足止めは頼んだぞ。わたしが敵将のもとへ行くまで、援護をたのむ」

「あいわかった！」

石上が威勢よく返事をして、一目散に飛び出していく。箒ではいたように石上のうしろへ道が出来上がっていった。どうやらかぐやの護衛は一時的に大伴御行へ任せたということだろう。

人のいなくなった空間をかぐやと大伴御行が走る。

その間にも両側から絶え間なく閃光が横切り、かぐやたちを牽制したが、すべて大伴御行が素早く反応して防御していた。

「最後はわたしひとりの手でやる——だが、そちらが片付いたら援護に来てくれて構わないぞ。わたし個人の都合などというものにはこだわってはい、ラングネの復興が失敗に終わらないからな」

「それでしたら、即効で勝負をつけてもらうことになりますが」

大伴御行が冗談をとばした。

「それでもいい、大事なのは目標を達成することだ」

「かぐや様ならきっと成功します。私が保証しますゆえ、ご自分を

信じて立ち向かってください」

「ああ」

実際のところ、剣を握る手が少し震えていた。

緊張はもちろんあるが、それ以上に雑多な感情がかぐやのなかで渦巻いていた。目的は明確だ、と己に向かって言い聞かせる。

敵将を討って、ラングネ城を取り戻すのだ。

そうしなければレンリルもサントも、クレアさえも尽くしてくれ
たことが水泡と帰してしまふ。

石上と大伴御行の圧倒的な強さのまえにひるんだアリストス兵たちは、かぐやたちの後方にいるラングネ兵の部隊に標的をかえたようだった。ふたりの小人のような剣士を有利に戦わせるために数は残っているが、戦う気配は見せていない。

実質、かぐやと敵将の一騎打ちということになるだろう。

ようやく玉座が視界に入ってきた。

金と朱で彩られたその豪壮な椅子には、体格のいい男が頬づえをついて座っていた。顔にびっしりと生えた髭と、腰につけられた何本もの剣がかぐやの眼を引いた。

鎧はアリストスのもので、赤を基調としたまがましい色をしている。

かぶとはつけておらず、鎧もあくまで飾りに過ぎないようだった。なかみはほとんど空洞なのだろう。鎧のパーツがぶつかり合うたびに、乾いた音を立てていた。

「――貴様がここの総大将か」

かぐやはゆっくりとその男に近づいていく。

残虐な光をたたえた瞳が、かぐやの端正な顔をなめまわすように見つめ返した。

「そうだ」

低い、耳の奥に響くような声をしている。

この男は生粋の軍人ではない、とかぐやは確信した。国を守るためではなく力を手に入れるために軍人となったにちがいない。

その証拠に、男は戦場をまるで楽しんでいるかのようにうすら笑っていた。狂人ジアドと同じ種類の匂いがする。

「悪いが、これよりその命もらいうけるぞ。なにかいい残したいことがあるならひとつだけ聞いてやる。ラングネの民に対して謝罪の言葉を述べるか、自分のしたことを悔いるか、好きな方を選ぶ」

「あんたこそノコノコとよく顔を出せたもんだな。自分の国民が殺されてるっていうのに、ひとりで呑気に国外逃亡ときやがった。そのくせ寂しくなって帰ってきちまうんだから、逃がしたやつらも浮かばねえってやつだよな」

「貴様にとやかく文句を言われる筋合いはない。さっさとその首を差し出せ」

「まあ、そう焦るなって」

男は片手をあげて、上下にゆすった。

よほど自分の腕に自信があるのだろう。隙だらけのようにもみえるが、剣を抜いて飛び込めば返り討ちになるだろうと、かぐやはどこかで確信していた。

いまは話をつながながら隙ができるのを待つしかない。

「勇者なんてものを連れてきたところで、あのモンスターがなくなるわけじゃねえんだ。あんたらがいくら防備を固めたって、一瞬で碎くっていうんだから笑えねえよな。もし仮に俺たちが負けたとしても、あんたらがこれから負けないって保証はどこにもないんだぜ」
あざけるような口調。

かぐやは身体が火照っているのを感じた。

「ほう、ならばすぐにでも城を明け渡してくれとありがたいのだから。貴様の目が黒いうちに、あの怪物を叩き壊すところを見せてやれるというものだ」

「おもしろいことをいうじゃねえか。もし仮に本当なら、ぜひとも拝ませてもらいたいところなんだが、あいにくと俺も負ける気はないんでな。俺は敗北ってやつがなによりも嫌いなんだよ。胃がムカムカするし、手当たり次第なんでも壊したくなっちまう。お姫さん、ど

うだよ負け犬の気分は。さぞかしイラつくことだろう」

「たしかにいい気分ではないな――わたしが手放して喜べるようになるのは、この戦争が終結してから何年後になるかもわかったものではない。だが貴様は心配しなくともいいのだぞ。この場でわたしが貴様を殺すのだから」

「人を殺すのに躊躇いがあっちゃいけねえ。そんなことも理解できてないような小娘が俺をやりあえると思ってるのか？　せいぜい勇者様の力を借りるくらいが精いっぱいだろ。その勇者様もいまは手が離せないときてる」

「わたしが望んで命令したことだ。貴様をこの手で倒さなければ先に進めないものでな」

かぐやは剣を真正面に構えた。

「さあ、立つがいい。いつまでも逃げているばかりでは勝負にならないぞ」

「時間を稼がれてこまるのはあんたたちだろう。うまいこと陽動作戦をやったようだが、援軍がもどってくりゃあんたたちは袋のネズミだ。もう一度地下基地に逃げ込もうなんて手は通用しねえぜ」

「無論そんなつもりはない。それに、この場で追い詰められているのは貴様のほうだ。石上と大伴が敵を仕留めれば、すぐこちらに加勢しにくる。三対一ならば貴様とて手も足も出まい」

「そりゃ、たしかにそうかもしれないねえな」

男はゆっくりと玉座から立ち上がった。

腰につりさげられた剣の柄が揺れていた。

「俺があんたを殺すのに何秒もかからねえ。だからこうして勇者様とやらがやって来るのを待ってるんだよ。駆けつけてきた目の前で、自分の主君が殺される様はさぞかし痛快だろうな」

「悪趣味だな」

かぐやが吐き捨てるようにいった。

「絶望する顔ってのは見えて楽しいもんだ。人間はな、誰かを虐げること喜びを感じるもんなんだぜ。誰かが苦しんでいる姿こそ

真の幸福ってやつなんだよ。だから俺はいま、最高にハッピーな気分だ。なんせ何百万って数のやろうが俺の足元にはつくばってるんだからな」

「アリストス王もうろくしたものだな。貴様のように下衆な部下を送り込んでくるとは」

「たしかにそうかもしれねえな」
男が嘲笑する。

剣を構えようという気はまったくなかった。

「国王としちゃ最悪の部類になるだろうよ。だが俺には最高の国王様だぜ。いくら暴政をつくそうと、ラングネ国内ならなにも問題はねえからな。まったく、天国みたいな所だぜここは」

「下で労働をさせていたのも貴様の指示か」

かぐやの手は震えていた。

先ほどまでの感情は、赤一色に塗りつぶされていた。

「そうよ。本当はもっと多くの奴隷がいたんだが、あっさり死んじゃうもんだから困ってんだよ。いい感じに新鮮な兵隊が来てくれたから、またすこしは楽しめそうだけだな」

「……貴様は墓の下から、頭上を多くの人々が笑いながら生活しているのを見ることになるだろうな」

「そりゃこっちのセリフってもんだ。自国民が家畜みたいに扱われてんのを見てるくらいしか出来ないようにしてやるよ。なんなら生け捕りでもいいんだ、生まれてきたことを後悔するほど悲惨なことになるだろうけどな」

「ならば、そろそろ決着をつけたらどうだ。剣を構えぬのなら、こちらからいくぞ」

「怖がってんのはそっちだろ、違うのか」

たしかに、男の言うとおりだった。

下手に飛び込めばかぐやの剣は軽くないなされ、返り討ちにあうことだろう。ここはあえて攻撃せず、石上と大伴が加勢にくるのを待つべきなのかもしれない。

剣道は基本的に先手をとったほうが勝つ。

だがそれは実力が拮抗している場合だ。もしレンリルと手合わせをしたときのように圧倒的な実力差があれば、無暗に突っこんでいくのは得策ではなかった。

「……相手を見る目はあるようだが、それでも甘ったるいぜ。俺はさっぱり殺すのが嫌いなんだ。死にたいと自分から願いたくなるほど痛めつけてからじゃねえと、どうにも面白くねえ。あんたはどうだ」

「貴様と違って殺し方には興味もない。誰が、誰をやるのか。それだけが問題だろう」

かぐやはじりじりと後ずさっていく。

下手に近い距離にいてはいざという時に間に合わない。男は追って来るそぶりも見せず、玉座の前に立ち尽くしていた。

「そういや、ジアードのやつが勇者にやられたって騒いでたな。残念ながら死ななかったみたいだが、あいつは俺と同種の人間だ。またそのうちあんたを殺しにやって来るだろうよ。ま、その前に俺がやるから関係はないがな」

「ジアードめ、生き残ったのか」

逃走用のジープを確保するためにアリストス軍の一隊へ急襲をかけたとき、石上の拳がジアードの脚を砕いたはずだった。それだけでは致命傷にはならなかったのだろう。

やはり時間をかけてでもとどめを刺すべきだったか、と少し後悔する。

いずれ戦わなくてはならない敵だ。その前に、この男からラングネを取り戻さなければならないが。

「あの野郎は他人を殺すのは大好きなくせに、自分が痛いのは大嫌いっていう我儘な坊ちゃんだな。いまは本国で療養中だよ。ま、国としてははいとこあんたを処分してあいつを監獄にぶち込みたいみたいだけどな。せっそうもなく人殺しをするんだからいけねえんだ。するなら戦場じゃねえとな」

「――いくつか質問がある」

かぐやは正面から男を見据える。

男は肩をすくめた。

「好きにしてくれ」

「貴様の名前はなんだ、どうしてラングネにいる」

「自己紹介ってのはあんまり趣味じゃねえんだが、いまから自分が殺される相手の名前も知らないようじゃ浮かばねえよな。それにあんたはラングネの腰ぬけ姫様だ。たとえ時間稼ぎであっても、知りたい情報だよなあ」

「前置きはいらぬ、さっさと喋れ」

「そう睨むなって。会話ってのは愉しむもんだぜ」

男は玉座に座り直すと、のんびりと足を組んだ。

「俺の名前はガイザーってんだ、いい名前だろ。俺のくそつたれな親父がつけた名前もあつたんだが、そんなものはとっくの昔に忘れちまったからな。自分で新しく名付けたんだ。誰もが畏怖することにあるであろう名前をな」

「貴様の親は嘆き悲しんでるだろうな」

かぐやは感情をこめない声であざけた。

「どうか。俺に殺されたもんだから恨んではいるだろうが、悲しんじゃないだろうな。呪うなら自分自身を呪えっていう話だ。ろくに教育もしねえで殴るか酒を飲むか女にたかってるかしか出来ないクズだったからよ。俺は13のときにあのクズを殺して、家を出た。そんなときは半端じゃない快感だったな」

「どのような親であろうと殺す理由にはなるまい。それに貴様がしていることの弁解にもならん」

「だれも親父のせいにしようってわけじゃない。だがあいつがもつとしっかりした男だったら、俺に殺されることもなかっただろうな。少なくとも酒に酔って寝ているところを縄で縛られ、手足を切断されたあげくに、自力では動けなくなったところを見計らって水のはいった桶に顔を突っ込んで、なんども死にそうになって結局は餓死

するなんて最期にはならなかっただろうよ」

「……想像するだけで虫唾が走るな」

「そうか？ 俺はいまでもあのときのゾクゾクした快感が忘れられねえんだ。強者だった親父が俺のなかで命乞いをしている。みじめなもんだったぜ。人間としての威厳も誇りも残っちゃいねえ。俺の遊び道具でしかなかったんだからよ」

ガイザーはさも愉快そうに高笑いを上げた。

「餓死してもんがあつたのを失念してたのは失敗だった。殺さず生かさずってな状態をずっと保ってるつもりだったんだが、家には俺の分しか食べ物がなかったんだ。もうすこし裕福だったなら、あのクズを一生いたぶって暮らせたんだけどな。あいにくその頃は残飯をあさるような生活だったんだ」

「いまの地位になって満足か」

「俺は地位も身分も富もいらねえんだ。ただ俺にひざまずく人間がほしい。親父のときみたいに強烈な快感がほしい。あんたならそれかなえてくれるかもしれないねえな。なんせ一国の姫様だ。靴を舐める屈辱には耐えられねえよな」

「貴様の奴隷になるくらいなら舌を噛み切って死んでやるだろうな。そのほうがずっとマシだ」

「俺はな、大好きなおもちゃを壊したくはないんだ。この城で働いているやつらは面白くねえ。従順すぎるんだよ。もっと恥辱にまみれた表情を求めているっていうのに、黙々と無表情で働きやがる」

「それは希望が残っているからだ。わたしという、希望が」

かぐやは胸をどんと叩いた。

声がかすかにふるえていた。

「……ますますいたぶりたくなって来たじゃねえか。あんたを服従させれば、幾万という数の人間が希望を打ち碎かれるんだろ？ 個人としてもたまらねえが、そっちも十二分に魅力的だよなあ。考えるだけでむずむずしてきやがる」

ガイザーは目を大きく見開いて、心臓に両手をあてた。

「こんなに心が浮きだつてんのはラングネの統治をまかされたとき以来だぜ。あんときは親父を殺したのと同じくらい気持ちが悪かった。決めた、俺はあんたを玩具にする。まずは舌を引っこ抜いて、自決できないようにしてから、好きなだけ遊んでやるよ」

「――だが、貴様はもうすぐ死ぬ運命なのだぞ」

「正直にいわせてもらうが、あんたじゃ俺に勝つなんて不可能なんだよ。箱入りで育てられてきたあんたと違って俺は人を殺すために生きて来たんだ。どっちが強いかは考えなくてもわかるだろ」

「背負うものが違う。わたしの双肩にはラングネ国民全員の人生がかかっているのだ」

「そんなものは重荷にしかならねえよ」

男は腰のひもを引きちぎって剣の柄を手にとった。

赤い光が一筋伸びているのは他のアリストス兵と同じだったが、ガイザーの持っている剣は両端から赤い光線が放たれていた。

「なんだ、その武器は」

「驚いたか？ こいつはレーザー砲と同時期に発掘されたもんだが、誰も使いこなせなかったんで俺のところにまわって来たんだよ。単純にいつて戦力が倍になるってもんだ」

「――自分自身の首を搔っ切りそうだがな」

「ちよつと興奮しすぎてるからな。そうなっちまうかも知んねえが、俺はそんなこと気にしねえぜ」

ガイザーが棒を振り回すように剣を旋回させると、風を切る音がいくつもかぐやの耳に届いた。

どのように戦おうとしているのか想像がつかない。かぐやは距離をとるために、すこしずつ後退しながら男へ言葉を投げかけた。

「貴様がどうしてもこの地位に就いているのか、まだ聞いていなかったな。教えてもらおうか」

「上官を片っ端から殺していったらいつの間にか上がいなくなつてたんだよ。単純な理由だな。俺はジハードと違ってドジを踏むような真似はしねえ。証拠なんて残さねえよう巧妙にやるんだ」

「……ひよつとすると、ジアドよりも性質の悪い人間なのかもしれないな、貴様は」

かぐやの背筋を冷たい汗が伝っていく。手がじっとり湿っていた。

うしろではまだ石上と大伴御行が小さな伏兵相手に苦戦しているようだった。援護を期待するのは難しいかもしれない。

「勘のいい人間は俺の正体に気づいていたみたいだが、そういうやつも事故に見せかけてたくさん殺した。俺は自分の敷地に死体専用のスペースがあるんでな、面倒くさいときには失踪したことにしてそこへぶち込んでいったもんだ」

「だが、殺すのは目的ではないのだろう？」

「ただ殺すだけじゃ何にも面白くねえからな。自分よりも上の人間をいたぶって服従せて自尊心を粉々にしてから殺すんだよ。それが最高に楽しいんだ」

「戦いはどこで覚えた」

「覚えてねえな。生きるためには自然と強くなければいけなかった」

「貴様に似ている人間を、わたしはひとり知っている」

「へえ、そいつは愉快だな。ジアドのことか？」

「違う。貴様と同じように、生きるために強くならなければいけなかった男だ。だが決定的に異なることがある――」

かぐやは覚悟を決めると、大きく息を吸い込んで剣を構えた。

手の震えはおさまっていた。

「その男には人の心がある。貴様は人の皮をかぶった殺人鬼だ」

「その人でなしにいたぶられる気分ってやつを今から身体に教え込んでやるよ」

剣が交錯する。

相手の手数は多いが、二刀流と違って軌道是一直線だ。

かぐやは迫りくる死線を感じながらがむしやらの腕をふるった。

サント、奇襲する

土煙がこうこうと巻き起こっている。

ラングネ城の付近は整備が行き届いているためジープが激しく揺れることもなく、ただ砂を後方に巻きあげながらアリストス軍へ向かって疾走していた。

両側を走るのは数台のジープのみ。

荷台にはそれぞれ何名かの兵士が乗り込んでいる。サントもそのなかのひとりであった。

「無理な戦いはしなくていい。あくまでこれは敵をおびき出すことが目的だからな」

サントが細かい指示を出す。

アリストス軍は防御網を形成し、サントたちを迎え撃とうとすでに陣形を整えていた。まともに立ち向かえば数分と持たずに全滅するだろう。

「逃げるのも戦法のうちだ。友軍と合流後、全力で後退するぞ」

「ジープは大丈夫でしょうか」

さきほどレンリルについて語り合った新兵が不安そうな表情でサントを見る。

剣を持つ手が小刻みに揺れていた。

サントはジープの荷台のはしにもたれかかりながら車体をぼんぼんと叩いた。

「車は便利な道具だ。もし古代人の予言が成就するのなら、このジープも壊れることはないだろう。ルア様の運命が生と死のどちらにつながっているのか——結局はわからないのだからな」

「ルア様は本陣にいらっしゃるのですよね、わざわざこんな危険な作戦をとらなくてもいいのに……」

「これはルア様やレンリルの考えた作戦ではない。完全な独断だ」「え?。」

「驚くことはない。ルア様は我々などよりもずっと危険な場所で戦っておられるということだ。レンリルや勇者様たちといっしょにな」新兵はしばらく啞然として言葉を発しなかった。ジープの走る音だけが荷台の上を通り抜けていく。

「それは、囧という意味ですか」

「もっといえば囧の囧だ。すべてはラングネの勝利と復興のため、そのためならどんな無茶で危険な作戦もやってのけなければならぬ。それが軍人としての務めというものだ」

「ルア様はどこにいらっしゃるのですか」と新兵は絞り出すような声で尋ねた。「どこで戦っていらっしゃるのですか」

サントはアリストス軍が待ちかまえている方角を指さし、

「ラングネ城だ」

「――本当でございますか」

「嘘はついていない。だから我々の働きがルア様の生死をきめるといっても過言ではないのだ。いいな」

新兵はあんぐりと開いていた口を閉じると、しっかりとサントの瞳を見つめ返しながらうなずいた。

ジープのエンジン音がひときわ大きくなる。

スピードが上がり顔にあたる風が強さを増した。痛いほどの風を切る音が次々と襲いかかってくる。

風圧に負けないように両手で剣を握ると、サントは荷台から身を乗り出した。

赤い鎧の群れが近づいてくる。サントたちの乗ったジープの進路をたしかめると、そこを避けるように両側へまわりこんできた。

ジープの戦闘が通過すると同時に何本もの光がまじりあった。車にはねとばされないよう側面にまわったアリストス兵たちがジープ本体を狙って繰り出した剣を、サントたちがはじいたのだ。

あまりにも一瞬の出来事で、結果をたしかめる暇もなかった。

「気を緩めるな！　ここから勝負だぞ」

サントが声を張り上げ、周囲の兵士たちを鼓舞する。

敵は規則正しく隊列を組んで並んでおり、どこかに隙があるという感じではなかった。ジープはがむしゃらにアリストス軍の真つただ中を走り抜けていく。

車をかわけきれなかった何人かの敵兵が衝突する鈍い音が前方から聞こえてくる。猛スピードで直進しているため手加減することはできない。

サントの視界に剣を振りかぶっている兵士の姿がうつる。

まずい、という直感が身体をつらぬいた。

「避ける！」

同じように荷台から身を乗り出していた新兵の首根っこをつかむと、思い切り身をよじった。いままで胴体があった場所を熱線が通過した。

「油断するなよ」

眼前に起こった光景を見て青ざめている新兵に声をかけると、サントは反対側のふちへと移動した。さきほどの攻撃に脆くなっている壁に寄りかかっているのは、いつ崩れてもおかしくはない。

怒声と風の轟音が叫ぶようにこだまするなかでジープは着実にレーザー砲へと近づいて行く。

これを破壊できれば勝利は間違いない。が、アリストス兵もこちら側の狙いを察して防御をさらに手厚くしていた。

ジープを立ての代わりにならべて、レーザー砲の側面を守っている。

「サント様！」

隣にいた兵士がすっとんきょうな声を上げた。

「どうした」

「敵の追撃部隊が迫ってきております。レーザー砲の付近以外にもジープを隠し持っていた模様です」

「まったくアリストスはいったいどれほどジープを有しているのだ」サントは呆れたようにつぶやくと荷台の隅に積んでおいた発煙筒の束を投げ込んだ。これが撤退の合図になっている。

もくもくと煙が立ち上っていく。

それと同時にラングネのジープがいつせいにハンドルを反対方向へ切った。

身体が投げ出されそうな負荷がおそってくるのをどうにかこらえて、敵に背を向けながら逃走をはじめた。自分たちの背後からジープが向かって来るとは想定していなかったのか、前方にいたアリストス兵たちは総崩れになった。

逃げ惑う人の後方から、ジープの部隊が追いかけてくる。

サントはニヤリと微笑みを浮かべると、はるか向こうに見えるラングネ城へ視線をやった。

ガイザー

かぐやはガイザーの剣を受けるのに精いっぱい反撃の糸口をつかめないでいた。

「おら、どうしたよ。さっきから逃げてばかりじゃねえか。すこしは抗ってくれねえと燃えねえんだよ」

「機をうかがっているだけだ。貴様こそ無駄口を叩いていると痛い目を見るぞ」

「いいねえ、そういうプライドが大好きなんだよ俺は。どこから碎いてやろうかねえ」

ガイザーは舌舐めずりしながらかぐやの首元を払った。長い髪の毛本かがはらりと落ちていく。反応が一瞬遅れていたら危なかった。

「殺しちゃいけねえからな、生かさず殺さず、楽しまなきゃ」

「こちらは容赦せぬぞ」

「手加減して捕まってくれば簡単な話なんだが、それじゃつまんねえもんな」

ガイザーが二度三度と剣をふるうたびに、かぐやの服の一部が刈り取られていく。肌までは紙一重というところだ。狙ってやっているのならば怖ろしい腕前だった。

心臓の鼓動が荒くなる。

圧倒的な実力差。

真正面から戦っているのは万に一つも勝機はないだろう。頼みの綱と大伴御行と石上はまだ小さな敵にてこずっているようだった。相性が悪いのかもしれないが誰かしらの援護が必要だった。

「よそ見しているとあっという間に終わっちまうぜ？」

ガイザーの声に反射的に身を伏せると、腕をたたき落とそうとしていた剣筋が空を切った。

すぐさまひと続きになった剣から二撃目が襲いかかってくる。

「助けが来た瞬間には、あんたは俺の手の中にいることだろうよ。」

ほんの一秒あればあんたを倒すことくらいはできるんだ。姫様を人質に取られちゃ、手も足も出ないだろうからな」

「あやつらはわたしごとき簡単に捨てるぞ」
はったりだった。

レンリルはまだしも、大伴御行と石上がのうのうと見捨てるはずはない。おそらく激昂して攻撃してくるか、おとなしくガイザーの命令に従うかのどちらかだろう。そしておそらく、後者を選ぶだろう。

「それでもいいぜ。あんたは仲間を信頼している。その仲間裏切られて絶望しているあんたを見るのも楽しそうだからな」

言葉で牽制するのは限界のようだった。

ガイザーの剣は鞭のようにかくやを追い詰めていく。

このままでは逃げ場がなくなると思い、ガイザーの足元を回転しながら通り抜けようとするが、その瞬間わき腹に激痛が走った。

悲鳴を上げることもできず地面にたたきつけられる。

呼吸ができなかった。

「考えが甘すぎんだよ。窮地にやられた敵がどんなことをして来るのか、俺が知らないはずもねえだろ。さあ、そろそろ遊びの時間はおしまいだ」

ガイザーはゆっくりとした足取りでかくやに近づくと、彼女の長い黒髪をつかんだ。

肝心の剣は蹴られた拍子にどこかへ落としてしまった。こぶしを振り上げようにも力が入らない。それだけガイザーの一撃は急所をとらえていた。

内臓がどこかやられているのかもしれない。

だが、いまとなってはどこかを怪我していようと同じことだった。

「あんたを殺しはしない。安心しな」

ガイザーが笑うと、悪趣味な金歯が口の中から顔を出した。ぞっとするような笑みだった。

「……貴様は地獄に落ちることになるだろうな」

「それならそれで楽しそうだが、あんたが先に地獄を見ることになるぜ」

乱暴にかぐやの髪を放す。

鈍い音を立てて大理石の床にあごをしたたかに打ちつけた。

部屋のどこかで騒然とした声が響いているのが聞こえる。ガイザーは恍惚とした表情でいまま手に入れたばかりの玩具をながめまわしており、その異常さに気づいていないようだった。

氣力を振り絞って立ち上がろうとする。

半分ほど起き上がっていた体をガイザーの無慈悲な足払いによって崩される。それでもかぐやはめげずにガイザーをにらみつけた。

「いいねえ、その瞳。俺の好物だ」

ガイザーの両目は子どものように無邪気な悪意に満ちていた。視線がぶつかるだけでも心が折れてしまいそうな圧迫感。黒目がぎょろりと動く。

「もっと足掻けよ。それだけ絶望も深くなる」

「負けて……たまるか……」

アリストスとの戦争が起こる前は怪我などしたこともなかった。じいとの訓練は本気でやっていたけれども、その時でさえ相手を痛めつけるための苦痛というものを味わうことはなかった。

生きているのでさえこんなに苦しいのだから、死ぬという感触はいったいどれだけ怖ろしいのだろう。

無理に忘れようとしていた恐怖がよみがえってくる。

だが、希望は一筋だけつながっていた。

「ほらほら、くじけるのはまだ早いぜ」

容赦ないガイザーの足蹴から頭をかばうのがやっとだった。むきだしになっている胴体は蹴られるたびに失神しそうな激痛が走るが、ガイザーはそのあたりの加減をきちんと心得ているらしく、気絶することも出来ない。

もっとも、氣を失いたいだなんて微塵も思わなかった。意識がなくなればすべてがゲームオーバーだ。

「死ぬよりも大きな絶望ってのは、どんな表情になるんだろうな。あんたはどうやったたらそれだけ絶望できる？ プライドをへし折られることか、肉体的な苦痛か、ラングネが滅茶苦茶にされることか？」

「……………」

返事など出来るはずがなかった。

嗚咽を漏らさないようにするので精一杯だった。

「答えられちゃ面白くねえよな。あんたの最悪の想像よりもっとどん底を見せてやらなきゃ。ラングネの姫様が奴隷以下におとしめられるだなんて、最高じゃねえの」

「……クズが」

挑戦的な言葉を吐き捨てる。

ガイザーはこんな見え透いた挑発には乗ってくるはずもない。むしろつけ上がらせることになるだろうとは簡単に想像がついた。

ぼんやりとしか働かない思考回路を懸命に活用する。

「その意気がどれだけ続くかな、ためしにあんたの勇者とやらを斬ってみるのも悪くない考えだ」

ガイザーが身をひるがえそうとするのを必死に制止する。

「いいのか、わたしはまだ貴様の背後を狙っているのだぞ」

「——活きのいい人間はいつまでたっても快感だねえ。めげねえところが素晴らしい。普通の人間なら涙を流して助けてくれって懇願するところなのによ」

「……それこそ、死んだ方がマシというものだ……」

「んじゃ、こういうのはどうかね」

ガイザーはふたたびかぐやの長髪をむんずと掴むと、赤い剣でざっくりと頭髮の束を切り落とした。焦げ臭いにおいが周りに立ち込める。

もはや自分の一部ではなくなった髪を見つめながら、かぐやはなぜだか目頭が熱くなっているのを感じていた。髪ごときになにを動揺しているのかと滑稽に思えるほど、感情が混乱していた。

目の前が白くなっていく。

ガイザーの笑い声が頭上から聞こえてきた。

「女ってのは髪を切ってやると面白いくらいにとり乱れるんだよ。べつにこんなものはまた生えてくるのにな。俺にはよくわかんねえが、とにかく大切なんだろ。あんたが姫様なら、とりわけ」

「……あ」

いままで流さなかった涙があっけないほど簡単に頬を伝い落ちていく。

父からも母からも、じいからも褒められて自慢だった黒髪。小さいころからちゃんと手入れをして、なにか祭典があるたびに綺麗に結ってもらって、みんなから賛辞の声をかけてもらった。

夜、寝る前に髪をとかしながら目をつぶるのが好きだった。

さらさらとした感触が手のひらを流れていくのが気持ち良くて、なんだか安心できた。

それが、いまはもう無くなってしまった。

いろんな思い出とともにガイザーに剥ぎとられてしまったような気がして無性に悲しかった。怒りは不思議と湧いてこなかった。ただただ涙がこぼれていた。

「効果抜群みてえだな、おい。あんだけ気丈だったお姫様が赤ん坊みたいに泣いてやがる。これだからやめられないんだよ」

脳震とうを起こしたみたいに頭の中がこんがらがっている。

そんななかでも信じつづけてきた姿が、徐々に大きくなってくる。かぐやは力ない手つきで涙をぬぐった。

「……貴様の気は済んだか？」

「まだ喋れるっていうのかい。とんでもない精神力だな」

「答えろ。この世に未練はあるか」

「まだまだあんたで遊び足りねえからな、楽しくなるのはこれからだぜ」

「……そうか、残念だったな」

「あん？　――」

ガイザーの背後から胸へかけて一直線に刃が貫いていた。

なにが起こっているのか分からないといったようにガイザーは自分の胸に手をやると、おそろおそろ後ろを顧みた。

「――おまえは……」

「レンリルだ、一生覚えておけ」

吐き捨てるように胸につきたてた刃を引き抜く。

ガイザーは気の抜けた人形のように床へ崩れ落ちると、そのままピクリとも動かなくなった。レンリルがガイザーの手から特殊な形状をした剣を取り上げた。

「大変遅くなって申し訳ありません、ルア様。敵をせん滅するのに時間がかかってしまいました」

「……あれだけの数を、すべて倒してきたのか……」

階下でレンリルの進路を遮ったアリストス兵の数は少なくなかったはずだ。

それをあの少数の手勢で打ち破ってくる事態が難しいことなのに、わざわざ全滅させてきたという。かぐやは背筋が凍りついた。

いったいどれほどの憎しみをこめて戦えばそんなことが可能になるのだろう。

「そのせいで時間がかかってしまいました。おふたりの勇者様のほうもちょうど片がついたようです」

レンリルの言うとおり、石上と大伴御行が息せき切って倒れているかぐやの元へ駆けつけてきた。

ふたりとも息が上がっている。

よほど強敵だったのだろう。

「大丈夫か、おい！」

「申し訳ありません。私どもが不甲斐ないばかりにこんな怪我を」

「かまわない、気にするな」

「ですが――」

盲目といえど大伴御行はすでに気づいているのだろう。かぐやの髪がばつさりと短くなってしまうていることに。

ガイザーによって切り離された毛髪は、無造作に散らばっていた。大伴御行はそれらをかき集めてくるとうなだれながら拳を握りしめた。

「……こんなことを」

「わたしなら大丈夫だ。それよりも戦いはまだ終わっていないのだろー」

傷跡がひどく痛んできた。

ガイザーは死に至らせないまでも徹底的にかぐやの肉体を破壊しようとしていた。こうして細々と喋っているのさえ苦しかった。

「我々の勝利ですよ、ルア様」

「――本当か？」

「ええ」

レンリルが優しくほほえんでいる。

石上は突如として雄たけびを上げるとアリストス兵のなかへと突進して行った。敵は指揮官を失って色めき立っており、茫然自失としていた。

ガイザーは死んだ。

その事実は同時に、かぐやたちの勝利を示していた。

ようやくそのことを理解するとラングネの姫は静かに片手を突き上げていった。

「――わたしたちの、勝ちだ」

宣戦布告

サントはジープに乗ったまま逃走を続けていた。

アリストス軍は目論見通り、前線へとひっぱりだされてきている。ラングネ城の異変を察知しても帰還するにはそれなりの時間がかかることだろう。

追いつかれて戦力を減らすのはあまり好ましい事態ではなかったため、サントは四の部隊と本隊とをうまく移動させながら、絶妙な間合いを保っていた。

敵の移動速度とぴったり同じになるよう軍を動かし、ひたすら逃げ続ける。

兵士たちには士気を保つため、どこかで反撃に転じる予定だと伝えてあったが、サントにその予定はまったくなかった。あるとすればラングネ城を奪還し、レンリルたちが城内から打って出て来た時のみだ。

かぐやとともにラングネ城へ突入した部隊は少数精鋭で、敵の部隊を制圧できるだけの戦力はない。

どうあがいたところで戦争とはやはり数なのだ。

敵将を倒したあとで追撃をかけるにはサントの軍隊が必要不可欠であり、軍部副隊長は狡猾にその機会をうかがっていた。

「――サント様」

兵士のひとりが声をかけてくる。

「どうした」

「ラングネ城の様子がおかしいようです」

そういつて手にしていた双眼鏡を渡してくる。サントが両目をレンズに押し当てると、拡大されたラングネ城の尖塔で、見慣れた旗印がひるがえっていた。

青い文様に、緑の布地。

地球と美しい大地をかたどった国旗が、アリストスの赤い旗に代

わって立てられていた。

「――ルア様がおやりになったのだ」

独り言を漏らす。

腹の奥から笑いがこみあげてくるのと同時に、すうつと思考が冷静になっていくのを感じた。

やらなければならないことはいくらでもある。

勝利の美酒に酔うのはそれが終わってからでも遅くはない。

「いますぐ部隊をまとめ、反撃の準備にかかるぞ。ラングネは再び我らの手にもどったのだ！」

サントの歓喜の叫びは、疾走するジープの上からでもよく響いた。

ラングネ城の大広間では盛大な祝勝会が行われていた。

ガイザーから取り戻した玉座には、全身をギプスで固定したかぐやが身なりを整えて座っている。切られてしまった髪は戻っていないが、短いなりにも気品漂う風に飾り付けられており、いくつものアクセサリーがきらめく。

かぐやの両脇にはふたりの勇者とレンリルやサントなど、軍の関係者がずらりと整列している。

誰もがラングネ軍の制服を身にとっており毅然とした態度で祝勝会に臨んでいた。

石上と大伴御行だけは落ち着かないということで、地球からきていた着物を繕って、この場に参加している。

血なまぐさい戦闘の形跡はきれいに掃除され、磨きあげられた大理石の床上には幾人ものラングネ国民が押し合いながらおさまっている。そうはいってもラングネ城に招かれたのはごく一部の有力者のみで、一般の人々はラングネ城のそとでかぐやの登場を今か今かと待ちわびているところだった。

「内裏でのことを思い出すな」

石上がとなりにいる大伴御行へそつとささやく。

たとえ消え入るような声でも盲目の勇者の聴力を持ってすればふつうに会話しているのと変わらなかった。

「あそこも相当のものだったからな。私たちもよく参加したものだ」「陛下がいらっしゃると、しーんと静まり返って気味が悪いくらいだったな。おれはよく居眠りして、いびきがうるさいと怒られたもんだ」

「あの場で眠るなどどういう感性をしているのかと危ぶんだが、あなたを見てわかりました。どこまでも凶太いやつだけが睡眠できるのでしょうか」

「へん、おれのほうが繊細な和歌を詠めるってもんだぜ。腕前ならあんたにも負けてねえからな」

鼻息を荒くしながら胸を張る石上。

大伴御行は小さくため息をついた。

「どうせ代筆でしょう」

「失礼なことを言うやつだな。おれはちゃんと自分の手で書いてるつっの」

「何度か石上の作を見かけたことがあります、どれもあなたからは考えられないような美しい詩歌でした。おそらく才能のある——かぐや様のように美しいかたが詠んだものでしょうけど」

「だからおれだったの。間接的に愛の言葉をのべているつもりか？」

「だれがそんな悪趣味なことを」

大伴御行がせせら笑う。石上は鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまった。

待機していた楽器隊が演奏を高らかに始めると、城内に反響して四方八方から音が飛んできた。耳が痛くなりそうなくらいの大量だがあまり気にならなかった。

やがて演奏がぴたりと止まると、静寂が広間を支配した。

息をする音さえ聞こえてこない。

壮麗なドレスをまとったかぐやはゆっくりと立ち上がると、つか

つかと赤い絨毯の上を歩く。そのまま中央にのびた絨毯の道を歩きますと、かぐやは周囲の人間を見渡した。

ほとんどが見知った顔ぶれだった。

しかし、なかにはいるはずの人間が欠けている。

アリストス軍に反抗したため投獄されそのまま死んでいったものや、処刑されたものなど理由は様々だが、二度とここへ戻ってくることはないという事実だけは共通だった。

大きく深呼吸をしてから、かぐやは言葉を紡ぎはじめた。

「――わたしは、ここへふたたび帰ってきた」

帰ってきた、と反響した声が遅れて聞こえてくる。

「父上を失い、じいを失い、クレアは囚われた。それでもわたしはここへ帰ってきた。すべてはラングネを再興するために。アリストスの暴挙から祖国を救わなければならないと、わたしはそのためだけに行動していた」

ゆっくりと回転する。

こうしないとまんべんなく話しかけることができないからだ。

「アリストスがこの城を制圧したとき、わたしはじいに逃がされ地球へ旅立った。そのときは孤独になるのが辛くてたまらなかった。どうしてわたしだけ死ぬことができなかったんだろうと、悲しくて何度も泣いた。飛行船が地球に降り立って、わたしが最初に出会った人は竹取を生業とする老人だった」

すっかりただの農民になっていたはずの老人。

三山村でのどかに暮らしていた。

「彼はわたしにとてもよくしてくれた。ただの迷惑ものでしかないわたしを快く受け入れ、それどころか地球の王からもわたしを守ってくれた。彼はここにいる勇者たちをさがし出すのにも尽力してくれた。あの智謀がなければいまでもわたしは地球でさ迷っていたことだろう」

それから、とかぐやは続けた。

「クレアという侍女がはるばる月からわたしを迎えに来た。サント

たちの抵抗軍が一縷の望みをかけて送り出した飛行船は、間一髪というところでわたしを救いだしてくれた。だがクレアは、月にもどってからアリストスの手に落ちた。わたしはクレアがまだ生きていると信じている」

誰も言葉を発しようとしなかった。

太陽の光だけがさしこんでいた。

「それからサントと再会し、レンリルという素晴らしい男に出会った。ふたりとも第一級の働きをしてくれたことはみなも知っておろう。彼らがいなくてラングネ城の奪還はおろか、わたしは勇者とともにアリストスに見つかり囚われていたかもしれない」

サントとレンリルが小さく会釈をした。

ふたりとも真剣な表情だった。

「だれがひとり欠けていてもわたしがここへ帰ってくることはありえなかった。これは軌跡なのかもしれない。必然なのかもしれない。それはどちらでもいいことだ。わたしはラングネをすくわなければならないし、そうするために生まれてきたのだから」

かぐやは背筋をぴんと伸ばすと、よく通る声で宣言した。

「ラングネを救うためには、城を取り戻しただけでは不十分だ。この戦争を引き起こした諸悪の根源を取り除かねばならぬ。――これよりラングネはアリストスへ攻め入り、この惨劇を招いた人間を特定する。それがたとえ、向こうの王だったとしても」

どよめきが津波のように伝播していった。

誰もかれもが驚いた表情をしている。

「さあ、準備はいいか。わたしたちは勝利した、だがそれはマイナスがゼロにもどっただけの話だ。これからは傾いた天秤を、是正しなければならぬ。真の戦いはこれからだぞ！」

ラングネ城の大広間は、歓声と喝さいとにつつまこまれた。まるで狂人がけたたましく笑っているかのように、その拍手はなりやむことを知らなかった。

作戦会議

かぐやを筆頭としてふたたび国として回復したラングネは、早々にアリストスへ宣戦布告を行った。対するアリストスはこれを見做し、ラングネ国内に散らばっていた残存兵力を国境付近の砦へと集結させ、逆襲をはかっているとの情報が入ってきた。

それでもひと月ほどは国境付近でにらみ合いの状態が続き、軍隊同士による戦闘は一度も行われなかったため、つかの間の平和がとおずれていた。

「――敵の防備が強すぎます。これを切り崩すにはどうな準備が必要かと。ならばいまはアリストスと休戦協定を結び、国力の回復に努めるべきではないでしょうか」

かぐや、サント、レンリル、そしてふたりの勇者が額を合わせて軍議を行っている。

ラングネ城内のとある一室、中央に丸テーブルのおかれた小部屋には様々な調度品がおかれていたのだが、そのほとんどがアリストス兵によって略奪されていた。

城内の目ぼしい品目はあらかた破壊されるか、盗まれるかして残っていない。

かぐやは当初それを目にしたときひどく心を痛めていたが、いまは仕方のないことだと割り切って部屋をつかっていた。無くなってしまうものを惜しんでも先には進めない。

「そんな悠長なことをしていたら氣勢がそがれます。アリストスを駆逐したいまこそ時を移さず反撃に転じるべきです。休戦などという甘い政策をとっていても、あのレーザー砲は消えるわけじゃない」レンリルがテーブルを叩いて力説する。

軍部の参謀に任命された彼はアリストスとの戦いが小康状態に入っているあいだにも、せわしなく諜報活動を行っていた。

それだけでなく前線の指揮に顔を出したり、軍隊の編成にも関わ

ったりするなど、寝る時間を惜しんで働いているのだ。顔にはつかれたあとが浮かんではいたが、それでも精力的に意見を述べる。

「しかしラングネ軍が不利な戦況に立たされているのは事実、無理をして攻撃に転じれば取り返しのない損害を受けることになりかねない。幸いなことにレーザー砲はまだ投入されていないのだから、いまのうちに休戦協定を結んでおけば、アリストス側も無理に攻め入って来ることはあるまい」

サントが反論した。

「あいつらはなんの予告もなしにラングネへ侵攻してきたんです、そんなやつらとの約束を信じることはできません。副隊長だってわかってるでしょ」

「――いまは隊長だ」

「ああもう、肩書なんかにかたわってちゃだめです。隊長になったからって消極的になるなんて」

「そういうわけではない」とサントはレンリルをにらんだ。「ただラングネ全体のことを考えての判断だ」

「ルア様がああ宣言した以上、我々には攻撃しか手段は残されていないんです。ここで怯んで足踏みをするようなことがあったらルア様の支持にも関わってくる。ふく――隊長はそれでもいいんですか」
「なにをそんなに焦っているのだ、時期を見誤るようなことはすべきでない」

議論は平行線をたどっていた。

石上はうつむいたままずっと黙ったまま、大伴御行も同じように押し黙っていた。

ただし巨体は波が砂浜に打ち寄せるように前後に揺れていた。

「居眠りをするでない、馬鹿者」

かぐやが小声で注意するが、いっこうに起きる気配がない。

「――やってくれ」

ささやくようにつぶやくと、鋭い聴覚でかぐやの声を拾った大伴御行が石上の足をふんづけた。すこしだけ動きが止まるが、目をさ

ましそうになかったので、火の球を石上の顔に近づける。

あやうく飛び火するのではないかと思えるほどの距離になってようやく石上があわてて飛び起きた。はあ、とかぐやが嘆息する。

石上を軍議に呼ぶのは無駄だろうとわかつてはいたが、名目上参加させないわけにはいかなかったのだ。

「――だから、戦いには機運つてやつがあるんです。同じ作戦でも時期が違えば失敗するかもしれないし、運が良ければ成功するかもしれない。いまこそ攻めるべき時なんですよ」

「いや、防御の時間だ」

「頑固者」

レンリルがサントに顔を近づける。

負けじと老將軍もぐいと顔面を突き出した。

「若造が」

「意気地なし」

「青二才が」

「わからずやのもうろくジジイ」

「鼻たれ小僧の大馬鹿野郎」

「やめんか、見苦しい」

いまにも殴り合いそうな勢いで罵り合うふたりをかぐやがいさめた。

サントは顔を赤らめてしずしずと席に戻ったが、レンリルはしばらく鼻息を荒くしたままだった。

「攻めるか攻めないか、どちらにせよ問題なのは国境を破れるかということだ。あそこを突破できれば我らの勝利、出来なければ敗北ということになるだろう」

腕に包帯をまいたままつり下げているかぐやが、テーブルに置かれた地図を顎でしゃくった。

ガイザーに受けた傷はまだ完治していなかったが、ようやく最近になって動けるようになっていた。玉座の間で宣戦を布告したときにも、かなり無理をしていたのである。あのあとほとんど気絶する

ように倒れこんでしまい、二日間ベッドで寝込んでしまったほどだ。
「そこだけだ。いけるか？」

「……正直なところ、決め手にかけます」

レンリルがめずらしく弱音を吐いた。

「レーザー砲でもないことには分厚い防壁を突破するのは不可能でしょう。なにかひとつ、強力なきっかけがあればいいんですけど」

「これでなんとかならぬか」

かぐやが石上に視線を送る。

白羽の矢が立った大柄な勇者は誇らしげに胸を張った。

「個人の力でこうなるものでもありません。一撃であの防壁を吹っ飛ばせるというのなら別ですが、勇者の力が古代人の道具によるものなら、同じ古代人のつくった要塞を破壊するのは無理というものです」

「では、大伴ならどうだ」

「――炎を自分から離れた場所に出現させることができるという話は別ですが、手から放つ以上、限界があります。ちょっと炎を放ったくらいで火事になるような甘っちょろい設備じゃありません」

「……ならば、レンリルはどうやって攻撃しようと考えていたのだ」
かぐやが質問すると、レンリルは視線を伏せてしまった。なにも良案がないままに攻撃の意見を出していたということだろう。

「おまえにしては珍しいな、なにも策が浮かんでこないというのか」
「敵がアリストス軍だけならば困ることはありません。問題はあの砦です。レーザー砲が出てくるまでながいこと国境を守り続けてきただけあって、難攻不落ってやつですね。取り囲んで食料がなくなるまで待つっていう作戦をとりたいたいものですが、敵地に進入することができないんじゃないでしょうか。お手上げですよ」

「ならば、やはり休戦すべきだろう」

ここぞとばかりにサントが語調を強めた。

「それだけは最悪の行動です。まだ全軍突撃して全滅した方がいくらかマシっていうもんですよ」

「だが、レンリルにもどうしようもないというなら、無駄な命をなくすこともあるまい。兵士だつてものではないのだぞ」

「わかつてますよ、そのくらい」

ふてくされたようにそっぽを向くレンリル。

まるで親に怒られている子供みたいだな、とかぐやは思った。

「休戦して戦力をととのえた場合、アリストス軍の再侵攻を防ぐことができるか？ それとも時間をかけて軍備を拡大すれば国境を突破できるというのか」

かぐやがサントに向かって聞いた。

サントもレンリルと同じように表情を陰らせると、

「……砂漠地域の発掘を行えば、あるいはレーザー砲のように強力な武器が見つかるかもしれません」

「その保証はどこにもないんですよ」とレンリルが口をはさんだ。

「それにあつちだつて馬鹿じゃないんだ、砂漠に軍隊くらい派遣してくるでしょう。その時レーザー砲をつかわれたらひとたまりもない。砂漠なんて足場の悪いところじゃ、機動力は使えないから、各個撃破されるだけです」

「だが、やらないよりはいいだろう」

「そんな当たつて砕けろみたいなことをやっている余裕はないんですってば」

レンリルとサントが激しく意見を対立させる横で、かぐやが難しい表情をして考えこむ。

また議論がもとに戻つてしまった。問題なのは決定的な決め手がないということだ。

なにかしらきつかえさえあれば、行動をとることができるのだが。「――レンリルのいうことにも一理ある」

たしかに今を逃せばアリストスを攻撃するのは難しくなるだろう。ラングネ国民の感情が高揚しているうちにアリストスに攻め込まなければならぬ。

「だが現時点ではどうしようもないというのもまた事実だ」

サントとレンリルがうなずく。

かぐやは大伴御行に意見を求めた。

「大伴はどう考える」

「――私は、攻撃すべきだと思います」

「ふむ」とかぐやは身を乗り出した。「それはどうしてだ」

「地球のことわざに、鉄は熱いうちに叩けというものがあります。人間は過去を忘れていく生き物ですから、時間が経てばどんなに苦しかった経験でも、どんなに屈辱的な言葉でも、すっかり忘れてしまふものです。なかにはそうでない人もいますが、一般大衆においてはそうだと考えて問題ないでしょう」

「それはその通りだが」

かぐやは眉間にしわを寄せた。端正な顔立ちは、多少のことではくずれない。

「攻め手が無いのは大伴もよくわかっていることだろう。まさか石上を放り込むなどという荒技が使えるわけでもあるまい」

「あの馬鹿力なら出来ないこともなさそうですが――」と大伴御行は苦笑しながらつづけた。「ここはやはり内通者を送り込むのがよろしいのではないかと」

「スパイか」

大伴御行の提案をまとめると、このようになる。

何名かのラングネ兵をアリストス人として送り込み、内部から組織を崩壊させるというものだ。その間、ラングネ側は牽制程度の偽攻撃を仕掛ける。

防戦の対応をしなくてはならないアリストス側は足元にまで気が回らず、知らないうちに内側からじわじわと蝕まれることになる。折を見て一斉攻撃を仕掛け、内部から防御網に穴をつくっておくことによって、一気に打ち破るという作戦だ。

「大伴にしては豪快なプランだな」

かぐやが晴れない表情をして感想を述べた。

「相手の守備が強固である以上、針でつつくようなことをしていて

はらちが明きませんので」

「スパイを上手く送り込めるものか、レンリル」

諜報担当の参謀にたずねる。レンリルは首を横に振った。

「無理ですね。あっちも警戒しているはずです。女子を送り込むっていうならまた別かもしれないけど、そんなことをしても無意味ってやつです。どうせ軍の中枢には関与できませんから」

「ならば、どうする」

「この頭がね」レンリルは自分の頭をこつこつと叩いた。「いまの話聞いてうまいこと考えついちゃったんですよ」

「聞かせてもらえるか、その名案とやらを」

「もちろんです」

そういつてレンリルはにやりとほほ笑んだ。

クレアとかぐや

かぐやは長い軍議を終えると、自室に戻るなりベッドへうつぶせに倒れ込んだ。白いレースで仕立て上げられたベッドの生地は、触っているとても心地よい。幸いなことにアリストス軍もこの部屋には興味がなかったのか、あまり荒らされずにすんでいた。

おそらくガイザーのあくどい趣味のためだろう、とかぐやは思った。

この部屋を残しておいて破壊する様を見せつけることに喜びを見出そうとしたのに違いない。悪趣味なやつだ。

「……クレア」

この部屋にクレアとの思い出を物語るようなものは何も残っていない。

侍女は呼べばいくらでもそばにいたし、クレアが辞める予定もなかったから、というっかりしていた。いまになってみるとどうしてクレアの証となるようなものをもらっておかなかったのだろうと悔やまれる。

大伴御行が聞いたところによるとクレアは国境付近の収容所へと運ばれていったらしい。

あそこへ連れていかれたならば殺されることはないだろう。アリストスとしても交渉の切り札になる人質を、むやみに減らしていくようなことは考えにくい。

しかし一抹の不安がちらついて消えないのだ。

ジアドやガイザーのように殺人を好む人間があああの収容所の監督だったとしたら。そんな想像が毎夜のように夢のなかで浮かんできては、かぐやを悩ませていた。

朝の光で起床するよりも早く悪夢によって目覚めてしまう。

そのためかぐやの眼の下には大きなくまが出来ていたが、化粧でどうにか誤魔化していた。

怪我人なのだからといってサントやレンリルはかぐやを休養させようとする。だがそうはいっても一国の女王に反抗できることはできず、かぐやの無理が通っているのだった。

「どう転んでも運次第、ということか」

クレアとの出会いはそう特殊なものではなかった。

彼女が侍女としてラングネ城に勤めはじめたのはかぐやがまだ十才とすこしの頃だった。月の国ではまだ少女と呼べるような年齢のときから奉公にだされることは珍しくない。

とはいえ王城に勤務できるような侍女はエリートであり、クレアも侍女としての能力に関しては申し分がなかった。

どこかの貴族の家で数年ほど鍛錬を積んできたのだという。

年齢が近いということもあってクレアはすぐさまかぐやの世話役に抜擢された。もちろん先輩メイドの指導を受けながらだったが、クレアが明るい性格だったこともあって、かぐやによく絡んできた。そのたびにこっぴどくおしかりを受けたらしいが、かぐやがその現場を見たことは一度もない。

どこか裏方の方で済ませていたのだろう。

そのあたりはさすがにプロである。だが、いじめがなかったかということだけ、クレアに聞いてみたことがあった。

クレアはいつもと変わらぬ屈託のない笑顔で、

「ありませんよ、そんなこと。みんなあたしのことを思って怒ってくれてるんですから」

と説明した。

「あたし」という一人称も本来ならば侍女としてふさわしくないのだが、クレアは一向になおそうという努力をしなかった。

加えてかぐやがべつに「あたし」でもいいという許可を出してしまったので、先輩メイドたちも口を出せなかったのである。

かぐやの世話役になったクレアとの仲が深まっていくのに長い時間がかからなかった。

年齢の近いふたりの少女であるから、大人たちの監視の目をかい

くぐって城内のいろいろな場所を探検したり、厨房に忍び入ってつまみ食いをしたりした。

あの頃はとても楽しかった。

じい以外に友達と呼べるような人間がいなかったかぐやにとって、クレアは初めての友達だった。貴族の子女たちとは交流があったものの城のなかで遊べるわけでもなく、いつでも遊べる相手がいたという事実は心の支えになった。

国王もクレアをかぐやの遊び相手になってくれればという期待半面に送り出したらしく、ふたりで遊んでいても怒られるようなことはなかった。

本当ならば説教だけで済まないような侍女にあるまじき行為なのだが、城内のだれもがあたたかい視線を送っていた。ただイタズラだけは許してもらえず、ばれるたびにかぐやとクレアは別々の部屋でしかられたものだ。

かぐやを叱りつけるのは決まってじいの役割で、成長してからはあまり叱責されるようなこともなかったが、小さい頃はとにかくよく怒られた。

「ルア様には好きな人とかいないんですかー？」

ふたりでいつものように遊んでいたあるとき、クレアがこう質問をしてきた。

かぐやは少し考えこんだあと、

「いないな」と答えた。

「えー、つままないですね」

クレアは敬語を使うことが多かったが、ときどきは対等な関係のような口調でしゃべることもあった。そういう場面は目撃されるとお説教をされるので、必ずふたりきりのときだけだった。

「つまらない男ばかりだからな。誰もかれも口先ばかりの意気地無しだ」

「ふーん、クレア様の周りにいるのってあたしだったら喜んで結婚しちゃうような人ばかりなんだけどな」

「そういうクレアはどうなのだ、貴族とはいかなくとも、奉公人にもいくらでも男はいるだろう」

「あたしはダメですよ、ルア様のお嫁さんになるんだから。それまでは好きな人なんて作りません」

自分で話題を振っておいて、都合のいいはぐらかし方だと思う。

「好みのタイプくらいは教えてくれてもいいのではないか」

「――そうですね」クレアは天井を見上げながらいった。「優しい人がいいかな、って思います」

「ならば、はやくそういう人間を見つけることだな。わたしはクレアと結婚するつもりなど毛頭ないぞ」

「ひどいですよー」

クレアがべそをかいた。

かぐやは頬を膨らませている侍女を一瞥すると、大きく深呼吸をした。恋愛の話は嫌いじゃないけれど、自分のことになるとさっぱり興味がわかなかった。

どうせそのうち良家のお坊ちゃまと結婚させられることになるのだろう。それは父親が決めることになるが、かぐやに反対する権利があるものかも怪しい。

国家のためなら結婚くらいで騒いではいけないのだ。

思えば母親もとある有力貴族の令嬢だった。それが二十にも満たないころに結婚し、かぐやを生むと間もなく死んでしまった。

母親の顔はあまり覚えていない。

彼女ははたして幸せだったのだろうか。そんなことを考えてみても悲しいだけだ。自分の親が不幸だったなんて、どうやってもプラスにはならない。

「クレア」

「なんですか」

「……好きな男ができたらわたしに報告するのだぞ。おまえにふさわしい馬の骨か、見極めてやる」

「だからあたしには関係のないことですってば」

ヒラヒラと手を振ってやんわり否定する。

かぐやは軽いため息をつく、クレアのそばを離れた。

「……わたしを好いてくれる人間はできた。だがわたしの好きだった人はみんなどこか遠くへ行ってしまう。クレア、おまえも」

天井に向かってつぶやいた言葉に返事はなかった。

古代人に手によってつくられたラングネ城は何度か改修が施されたが、どれも上辺の塗装を直したり、小さな傷を補修するばかりで、建物の根幹ははるか昔から変わらずに残っている。

白く塗られた部屋の壁は、かぐやが子どもの頃は黒だった。

子どもながらに陰気臭い色はいやだと主張して、白に変更させたのだ。その手伝いをしてくれたのもクレアだった。

「必ず助けに行く。だからそれまで生きていてくれよ——」

祈りはどこへ向かっていくこともなく、寂しい部屋のなかでこだまして消えた。

奪還作戦

「捕虜の奪還作戦？」

かぐやが眉間にしわを寄せながら聞き直す。

先の軍議でレンリルの口から飛びでた自称「名案」はその場にいた全員を驚かせた。お互いに顔を見合わせ、怪訝そうな表情をあらわにする。

「あの砦のそばにはラングネ軍の兵士や住民の捕えられた捕虜の収容所があります。そこを襲撃し、なかにいる人々を助けだした勢いで内部から攻め込めば、きっとあの砦も陥落することでしょう」

「しかし、どうやって国境を破るのだ。収容所はアリストス国側におかれていたはずだぞ」

「そこでオレの名案が炸裂するわけですよ」

「もったいぶってないではやく発表しろ」

「ラングネ城に攻め入ったときと同じ方法を使います」とレンリル。「敵さんもさすがにあの砦の背後をつかれるとは予想してないでしょうから」

「囮作戦か」とかぐやはつぶやいた。

「さすがルア様、話が早くて助かります」

「陽動部隊を用意するのはいいとしてどちらにせよ国境を突破せねばなるまい。いくら少人数でもあの砦には子どもひとり忍び入る隙間もないのだぞ」

「だったら道をつくりゃいいんです」レンリルはにやりと笑った。

「オレたちの手で新たに進入経路をつくりだしちまえばアリストス側も意表をつかれる」

「その方法は？」

「地下に穴を掘って、そこから兵を送り込みます。収容所を狙うのは騒ぎを大きくするためと、現地で兵数を確保するためです。トンネルでもない穴からじゃあんまり多くの兵士は輸送できませんから」

「たしかレンリルは急戦派だったな。穴はもう用意してあるのか」
「そりゃ無茶つてもんですルア様。いまさっき考えついたばかりの出来立てほやほやなんですから」

「いまから穴を掘るならば時間がかかりすぎるだろう。この作戦は却下だ」

かぐやがため息まじりにレンリルを見ると、当の本人はすつくと立ち上がって石上の肩を叩いた。居眠りをしていた勇者が半目をひらいて何事かと確認した。

「ここに百人力の勇者様がいらっしゃるんですから、そのお力をちよつとばかり拝借すれば楽勝つてもんですよ。ね？」

「あ、ああ……」

寝ぼけ半分に石上が返事をよこすと、レンリルは上機嫌に席へ戻った。

サントがすぐさま参謀につめ寄る。

「レンリル、機械も使わずに素手で穴を掘ろうというのか」

「石上様の怪力なら地面を掘り返すことくらい簡単でしょう。たとえ固い岩石が邪魔をしていても破壊するなり、大伴様の炎で溶かすなりして対処すればいいだけの話です」

「……たしかにそうだが」

「残った兵士はかきだした土を運搬するために働かせましょう。突貫工事で頑張れば、三日もかからずに穴が完成すると思いますよ」

満面の笑みで昔の上官と肩を組む。サントは迷惑そうにレンリルの手を振り払うと、かぐやの指示を仰いだ。

「どういたしましょうか」

「――石上、やれるか」

「あつたりめえよ。このおれ様に出来ないことなんて世の中に一つだってありゃしないんだからよ」

「そうか。それは助かる」

かぐやは無感動な口調でそういうと、石上の首根っこをつかんだ。新調されたばかりの洋服の襟が音を立てて裂けていく。

「おい、破れてるぞ」

「この男はいままで眠って体力を蓄えていたからな、休みなしで働かせても構わんぞ。大伴、石上が怠けないように監視をたのめるか」
「もちろんです」

炎使いの勇者が慇懃に頭を下げる。

石上はまだ事情が呑み込めないといったふうで、キョロキョロと助けを求めるようにあたりを見まわしていた。

「ど、こういうことだよ休みなしって。おれはまだ怪我が治りきってなくて……」

「貴様は全快したと医者から報告を受けている。寝て起きて食べるの生活はもうお終いだぞ。すこしは世間の役に立て」

「この前の戦いでたくさん働いたじゃねえか」

「あれはあれ、これはこれだ。つべこべ言わずに労働して来い」

かぐやが大伴御行に目で合図を送ると、小さな火の玉が石上にまとわりついて熱を発しはじめた。悲鳴を上げながら石上が逃げ出していく。一礼をしてから大伴御行もあとを追って退室した。

遠くの方から怒鳴り声が聞こえてくる。

かぐやはあくびをしながらそれを聞き流すと、

「サントに現場の指揮を一任しよう。レンリルは作戦に集中してくれ。一刻も早く捕虜たちを助けだすのだ」

「任しといてください」

「すぐ、向こうへ赴きましょう」

サントとレンリルが胸を張ってこたえる。

かぐやは拳を固く握りしめた。心臓の鼓動が高鳴っている。きっと自分が戦場へ顔を出すことはないだろうが、いまの緊張感を実際に剣を片手に戦ったときと同じだった。

「多くのラングネ国民の命がかかっている。絶対に成功させるのだぞ」

軍人たちは力強くうなずき返すと駆け足で部屋を後にした。

ひとり取り残された会議室でかぐやは「クレア」と侍女の名をち

いさく漏らした。

老人の円卓

レンリル達が国境の突破に向けて動き出した翌日には、すでに大きなイベントが待ち受けていた。かぐやはいつもよりすこし早い時間に目覚めると、すぐに侍女を呼んで化粧を施させた。

昔からあまり化粧というものは好きじゃない。

自分自身を美しく見せることに抵抗があるのではなく、単に面倒くさいという理由からだった。

何時間もかけたあげくに一日でなかったことにしてしまうのだから、これ以上に非効率なことはない。できればすっぴんで公の儀式にも出たいほどだったが、さすがにそれは許してもらえそうになかった。

貴族の奥方などはもはや元の面影がないほどに濃い化粧をしてやってくる。

それに対してかぐやがなにもしないままであれば、反感を買うことは間違いないだろう。

まだ若いため、化粧をしなくても大丈夫な顔立ちはしているのだが。

女の嫉妬は怖いというから、気を付けなければならない。実際、その通りなのだから。

「もうすこしお眠りになったほうがよろしいのではないですか」

白い粉をぽんぽんと肌にまぶしながら侍女が声をかけた。

かぐやの眼の下には黒々としたクマが浮かんでいる。端正な面立ちには似つかない疲労の痕跡だった。

「いまは緊急事態なのだ。この時期に休んでどうする」

「ですが、このままではいつかお身体を壊してしまいます」

「壊れたら休む。それでいいだろう」

「はあ……」

クレアならばこんなときでも遠慮せずに意見をぶつけてくるもの

だが、いまそばにいるのは一介の侍女に過ぎない。すこし強気に出るとすぐ黙り込んでしまう。

物足りなさを感じてしまうのは仕方ないことだろうが、それでもクレアの声を懐かしむ自分がいた。

「わたしのことは気にかけてくれなくていい。心配するな」

「わかりました」

目をつぶって、まぶたの上書きこまれる筆の感触を追う。

そうでもしていないと眠ってしまいそうだった。今日だって夢も見ないほどにぐっすり眠っていたのを、無理矢理叩き起こしたのだ。「今日は重役のみなさまと面会される日ですから、すこしきつめのお化粧にしております」

「小娘だと舐められないように、か？」

「いえ、そういうわけでは……」

「冗談だ。こんなやつれた顔をしていては面目が立たないからな、あやつらは気を抜くとすぐに噛みついてくる」

国を治めるものとして最も重要なことは国民の目線に立つことよりも、権力者の機嫌を損ねないことかもしれない、といまさらながらに知った。

父親が貴族たちの前ですこし腰が低くなっていたのを目にとると、いいようのない嫌悪感を覚えたものだ。どうして国王である父が氣を使わなければならないのだろう、と。

しかし、権力者たちと信頼関係を結べなければ国はなり立っていない。

国民は実質、彼らの支配下にあるといっても過言ではないからだ。その彼らに裏切られれば国民にまで負担が及んでしまう。

身内同士の争いだけは絶対に避けなければならない。

そのためにも上手く貴族たちのあいだで牽制させ、誰かしら突出した人物が出てこないように配慮する必要がある。王様はひとりだけいいのだ。

「父があやって髭を伸ばしていたのも威厳を見せつけたかったから

なのかもしれないな」

「そうかもしれませんね」

「貴族たちに効果があったのかわからないが、すくなくともわたしには怖く感じられたものだ」

腰にまでのびた白髪まじりの顎鬚は、一度しか触らせてもらった記憶がない。もともと父と触れ合う時間は少なかったのだ。じいが本当の父親のような役割を背負っていたから、なおさら他人行儀だったのかもしれない。

おそろおそろ、厳めしい髭に手を伸ばしてみると意外なことに指どおりが滑らかだった。

おそらく髪の毛と同じようにきちんとした手入れがなされていたのだろう。つややかな感触が面白くていつまでも梳いて遊んでいたら「その程度にしておけ」と注意されてしまった。

「……髪の手入れがずいぶんと楽になったものだな」

自嘲気味に笑いながら、鏡のなかにうつる短髪の自分を見つめる。素肌の覆いかくされた女性が疲れた表情で座っていた。

「――残念なことでした」

「なに、髪くらいなんともなる。命と違ってこれは後からいくらでも生えてくるのだからな。それに短いほうがすつきりしている」

ガイザーに切り取られた黒髪は、形を整えるためさらにショートカットにされていた。

うなじが見えるほどまでに揃えられた毛先がちくちくと首筋を刺激する。あでやかな花をかたどった銀の髪かざりが添えられていた。

「これから伸ばされるのですか」

侍女が尋ねる。

かぐやは化粧の邪魔にならないよう、唇をなるべく動かさずに答えた。

「この戦争が終わってからにしよう。この国とともにわたしの髪も育っていく。どうだ、素敵な考えだろう」

「本当にそうでございますね」

「いつかわたしが結婚するようなことがあったら、その時には綺麗に長くなった髪を結いあげて、豪勢にパレードを開いてやることにしよう。そのくらいの贅沢は構うまい」

「いまから待ち遠しいですわ」

くすくすと笑いながら手を進めていく。

仕上げに香水を吹きかけると強い匂いが鼻をついた。ラングネ国内でわずかにしかとれない希少な植物の花をつかった香水だと聞いている。

かぐやは鏡を確認するようにのぞきこんでから、朝食をとるため食堂へ向かった。

エネルギーを摂取しなければ長丁場は越えられない。

ラングネ城の一階奥、老人の間と呼ばれる部屋には物々しい表情をした貴族たちが集まっていた。誰もみな険しい顔つきで、年齢以上刻まれた皺を寄せている。

円卓の一角にかぐやが座り、取り囲むように老人たちが話す。

なかにはまだ中年と呼ぶべき年齢の人々もいるが、それでもかぐやよりはずっと年を喰っている。

彼らはみな夫婦で会議に臨む。

それがラングネの慣習であり、本来ならばかぐやもパートナーを連れていなければならないのだ。

「今日はお集まりいただき、ありがとうございます」

かぐやの挨拶が部屋のなかに反響する。

ホールの構造上、小さな声でもよく聞こえるように設計されているのだ。古代人もおそらく同じ用途で使っていたのだろう。

「先代の国王に代わりあらたに女王となったばかりで恐縮ですが、さっそく報告をはじめさせてもらいたいと思います」

テーブルに置かれたグラスの水を一気におおると、かぐやは唇を

なめた。

報告しなければならぬことはたくさんあった。アリストス軍との戦闘状況、兵士の徴収について、そして何よりも大切な税金のことについてなどだ。

それらをよどみない口調で述べているあいだ、貴族たちは関心がうすそうに頬づえをついたり、目をつぶっていたりした。

夫人のひとりは露骨にあくびをしながら、眠たげに頭を上下させていた。

かぐやはゆっくりと丁寧に説明をしていき、ときおり心配げに参加者たちへ視線をやる。そのたびいくつもの瞳がかぐやを捕えた。

「――そこで提案なのですが、皆様方の協力が必要不可欠なのです」

「なんだ、それは？」

最長老の貴族が片目をあけて問う。

かぐやは大きく息を吸い込んだ。

「私財の半分を国へ納めてもらいたいのです」

「ふざけるな！」

すぐさま怒号が返ってきた。

覚悟していたこととはいえ精神的にこたえる。

「そんな要求が通ると思っっているのか！ 馬鹿にするにも程がある！」

「しかし――」

「我々になんの見返りもなく財産の半分を差し出せなどという横暴な政策をとるのであれば、あなたを信用することはできない」

「やはり若すぎたのだろうか、まだ小娘だ」

「現実感がまるでない」

矢継ぎ早に批判が襲いかかってくる。そのどれもが怒りをふくんだとげのような言葉だった。

やむことのない辛辣な言の葉を、かぐやが一喝した。

「静かにしてください！」

かぐやが怒鳴ると、水を打ったように静まり返った。

しかし彼らの目はまだ何か言いたげに獐犢な光をたたえたまま、かぐやを見据えている。

「アリストスに侵略されたとき、あなたたちはなにも感じなかったんですか。ラングネの人々が殺され、蹂躪され、好き放題に荒らされるのが悔しくなかったんですか」

「我々だって被害を受けたのだ。アリストスの連中に屋敷を荒らされ、従者たちを盗られ、尋常ではないほどだった」

「しかし、あなたたちはしたたかに財産を隠していたことでしょう」

「スパイを放ったのか！」

血相を変えて老人が立ちあがる。

かぐやは首をたてに振った。

「皆様の被害状況がどれほどのものか秘密裏に調査をさせていただきました。その結果、多くの方々がいまだに莫大な財産を保有しているという報告が上がってきたのです」

「信頼を裏切る行為だ！ 我々は断固として許さんぞ！」

「どっちが裏切りですか！」とかぐやは睨みつけた。「私腹を肥やすことばかりに関心に向け、統治者としての目的を見失っているのはあなたたちの方ではないですか。あなたたちの守りたいものはなんですか、お金ですか、権力ですか。そのどちらも国民あってこそものだとどうして理解できないんですか」「そんなことはわかってる」

「――わたしはラングネという国を失って、初めてその大切さに気付かされました。あなたたちも色々と気付かされることがあったのではないですか」

「そんなことは言われるまでもない」

最長老の老人が代表して口を開いた。

年功序列というわけではない。その老人こそがもつともラングネで大きな領地を治めている貴族なのだ。

つまり、かぐやに次ぐ権力者なのである。

「我々としてアリストスに対する恨みがないわけではない。自国の領

地を荒らされ、屋敷を破壊されて嬉しい者などいるはずがないだろう。いままで隣国として友好関係を結んでいた状況からの、突然の侵攻だ。困惑するのも無理はない」

「ならばどうしてラングネのために尽くそうという気持ちにならないのですか！」

「ラングネの象徴とはなんだ」

かぐやが二の句に詰まる。

老人はゆつくりと続けた。

「それは国の王であろう。それはいわばその国自身でもある。我々が下につきたいと思うのは国王のカリスマ性があつてこそなのだよ。先代の王にはそれがあつた」

「違う、国民があつてこそその国ではないか。王は飾り物にすぎぬ！」

「だったらなぜ国民があなたを旗印に立ちあがったと思うのです。反乱軍があなたに協力したのも、ラングネ城を奪還できたのも、あなたに信頼を寄せてのことです。だが、その関係が、我々のあいだにはまだ出来ていない」

かぐやが唇を固く噛みしめる。血の鉄くさい味がした。

反論ができなかった。思考が回らない。恐れていたことが現実となつてしまった。

「スパイなどは最悪の行為だとわかっていただこう。信頼関係は、あなたが我々を信じることから始まるのですから」

老人が席を立つと、貴族たちはずらずらとあとを追って老人の間を出ていった。

かぐやはただ、うなだれたまま彼らを見送ることしか出来なかった。誰もいなくなったとき、気付けば一筋の涙が、厚く塗った化粧を洗い流していた。

白く濁ったしずくがぽたりとテーブルの上にこぼれ落ちた。

トンネルとレンリル

「どうしておればっかりこんな重労働をさせられなきゃいけないんだよ。掘っても掘っても土ばかりでつまんねえぜ」

「ほら、つべこべ文句を垂れずに手を動かすのです。かぐや様はいまかいまかと石上の帰還を待ちわびていることでしょうね」

「なんであんたは呑気に椅子に腰かけておれを見張ってるんだよ。自分でも働いたらどうだ」

「私はほら、こんな風に穴の中を照らすという大役を請け負っているのです。明かりがなければあなたも作業が出来ないでしょう」

「できなくてもいいよ、こんなもの」

石上が土砂をかきだしながら愚痴る。

地上からスタートしたトンネルの内部はちょうど石上よりも一回り大きいくらいの幅で、ラングネ兵士たちがせっせとかき出された土砂をそとへ運びだしている。

最先端では全身を土まみれにした石上が大伴御行の監視を受けながら黙々と作業を遂行しているところだ。素のままの両手をパドルのように動かし、次々と背後へ土の山を築く。

そのとなりでは大伴御行が涼しい顔をして座っている。

彼の手には青白い火の玉があり、陽の光の届かないトンネル内部を照らしていた。

「かぐや様の失望を買うような浅ましい考えはやめたほうがいいですよ」

「あんたにも働けって言ってたんじゃねえのか」

「私には石上が逃げ出さないように厳しく目を光らせておけと命じられました。というわけで、私は地道に職務を全うしているのです。身体を動かせるあなたがうらやましいですよ」

石上が穴を掘り進めた分だけ、大伴御行が椅子を持って移動する。さきほどからしきりに前進しているのだが、それでもやはり国境

を破るには長い距離を行かなければならない。

「けどよ、もう三日目だぜ。こっちは寝る間も惜しんで穴を掘ってるっていうのによ。いったいいつになったらアリストスにたどり着くんだ」

「あと四日というところでしょうね」

大伴御行がにべもなく答えた。

かごを持ったラングネ兵士が次々と規則正しくやってきては、石上の労働の成果を運び去っていく。

地上では四部隊が敵の注意をトンネルから逸らしているところだろう。とはいえ普段通りに膠着状態の戦闘を継続させているだけだが。

その役目はサントがになっている。

被害を最大限に減らすことに関しては、サントの右に出る者はそういない。レンリルは攻撃に長けるが、防御面に限っていえばサントの方が優れているのだ。

「だとしたら、その前におれがぶっ倒れることになるぜ」

「脅迫は通用しませんよ。決戦の前夜にはしっかり休息を与える予定ですから、倒れるまで働いてもらって結構です」

「――なあ」

石上が手を休めずに尋ねる。

「なんですか」と大伴御行。

「あんたって地球にいたころはもっと良い人柄をしていたんじゃないかって。陛下にも気に入られていたはずだろ」

「あれは表向きの体面というやつです。石上と違って私には自由奔放に生きるというやり方は肌に合わなかったもので」

「おれが馬鹿だっていいたいのかよ」

石上が唇をとんがらせる。

「そうではありません。のびのびとしてうらやましいということですよ」

「結局馬鹿にしてんじゃないか」

「私には真似のできないことですからね。こういう力仕事も含めて」
「まったく、どうしたって言いくるめられるんだ」

「人それぞれに役割があるということです。ほら、はやく働きなさい」

「都にいたところはすくなくとも顎でこき使われるようなことはなかったはずなんだけどな。どうしてこうなったんだか」

「惚れた弱みってやつだろうな。まさか和歌の下手な女性を好きになるとは思わなかった」

「おれもだ」

ふたりは笑い合うと、仄暗いトンネルのなかで昔話に花を咲かせた。

小山のような土砂が石上の掘ったトンネルのそばに盛り上げられた。それは四日後のことだった。

かぐやは自室のベッドに向かって突っ伏していた。

こんなことをしている場合ではないのはわかっている。けれども全身がだるく、いつまでもベッドから起き上がることができないでいた。

「……はあ」

さっきから何度目のため息になるだろう。

毛布の柔らかさは、まるで母親のように優しく包み込んでくれた。まぶたが重たくなり、気付けば眠ってしまったようだった。

その間に夢を見ることはなかった。

自分が寝てしまっていたと気付いても慌てるようなこともなく、ただぼんやりした頭で事実を受け入れただけだった。

他人に拒絶されるということが、これほどまでに心をえぐるとは思っていなかった。シーツを強く握りしめる。頭のなかでは老人の間で繰り広げられたやり取りが際限なく再生していた。

大きく息を吐き出す。

吐息が震えていた。

「こんなことでめげるなどとはな……わたしも弱いものだ」

自嘲気味につぶやく。

公務の予定は適当な嘘をついてすべてキャンセルしてしまった。

空虚な時間が目の前に横たわっていた。

石上の掘った穴が着実に長くなっているという報告が毎日届けられるのに、政務の方はまったく進んでいない。

各自がやるべきことをやってこそ国が無事に運営されていくのだ。たとえば侍女が掃除をし、軍人が戦うというように。

「……レンリル」

どうして彼の名をつぶやいたのだろう。

ほんの意識しない言葉が漏れただけだったのに。

「レンリル」

もう一度口にだしてみる。

その響きは消えなかった。

長い一日

「ルア様が落ち込んでいらっしやる？」

サントが怪訝そうに聞き返した。

場所はラングネ軍の本陣、国境の砦からかなり離れたところであり、その中心にサントがいた。

警戒は怠っていないがアリストス軍が戦いを仕掛けてくる可能性は薄かったため、比較的のんびりと構えることができた。

そのため空いた時間はすべて情報収集にあてているのである。

諜報方面はおもにレンリルの仕事であり、そちら側からも多くの新事実を得ることができていたが、かぐやの動向を調査することも忘れていなかった。

「どうにも貴族の方々との折り合いが上手くつかなかったようでして、部屋にこもってふさぎこんでいらっしやいます」

「良くない傾向だな……」

かぐやのことだからそこまで心配はしていなかったが、政治に関しては経験の差が物を言う。

軍人が政治に関して口をはさむことは、国の法律で厳しく禁じられているためサントやレンリルが助言をすることはできない。

戦争時でなければ王と個人的な面会をすることさえ許可が必要なほどだ。

過去に軍部がクーデターを企てたという経緯があったため、国に対する権力を弱めようという狙いがあるのだ。

その背景には長らく戦争がなかったことがあるのだが、この制度に文句を言ってもはじまらない。

「ルア様のそばにはだれがいるのだ」

「一人にしてくれというご要望でしたので、誰も近くにはいらっしやいません。警備のものが部屋の入り口で待機しているのみです」

「まずいな」とサントはいった。「ルア様は優秀なお方だとはいえ、まだ若い。心情が不安定な時には頼りになる存在が近くにいないければならないが、それが無いとなると、自力で立ち直るほかない」

「それではいけないのですか？」

「時間がかかりすぎるのだ。それに、それだけあとでルア様にしわ寄せがある。公務を休んでいるとはいえなくなったわけではない。いったん取りやめにしたとしても、こなさなくてはならない義務だ」

「それでは、どういたしましょう」

「――勇者様を動かすわけにはいかない。だが、軍がどうにかすることも出来ない。となれば、出来ることはただ一つだ」

一刻も早く捕虜を解放し、クレアを救いだす。

サントは報告の使いをラングネ城へ返すと、自分は石上の掘ったトンネルへと足を運んだ。

その日は朝からいやに冷え込む日だった。

月の気候は寒暖の差が激しい。地球のように四季こそないが、朝夕の気温差をふくめて、日によってだいぶ気候が変わってくる。

汗ばむくらいの陽気だったかと思えば、次の日にはかじかむほどの寒さということも多々あった。

月の環境に不慣れなふたりの勇者たちはその変化に戸惑いながらも、自分たちの作り上げたトンネルの前で待機していた。

彼らのそばには少数精鋭のアリストス兵が整列している。

その光景はラングネ城へ突撃したときのことを思い起こさせた。

自然と鼓動が高ぶってくる。

「久しぶりの戦いだからな、気合いが入るってもんだぜ」

石上が小刻みに身体を揺らしながら拳を繰り出す。

大柄な勇者の首には子安貝のネックレスがかけており、いつも通りの強じんな肉体を披露していた。

「相手の防御が堅過ぎてまともな戦闘になりませんでしたからね。」

まったく古代人の技術力というのはおそろしいものです」

小さな火の玉を召喚して暖を取りながらつぶやく大伴御行の体調はすこぶる良さそうだった。

この一週間というもの、ほとんど座って石上の作業を監督していたので疲労感などはまったくない。その石上も一晩ぐっすり休めば回復し、トンネル掘りをはじめの前と同じくらい元気だ。

「今回はクレアのやつを奪還するのが目的だったっけか。穴の向こう側の地理がわかってりやもう少し楽なだけだな」

「それはついでというものです。真の目的は捕虜を解放し、その戦力と合わせて国境砦を攻略することですから。そのためにはギリギリまで敵に感づかれないことが必要です。ヘンに大暴れしないでくださいよ」

「わかってるって。おれはこう見えても隠密行動が大得意なんだぜ」
「派手に暴れ回るしか能のない怪力がなにをぬかしているんですか」
トンネルはまだ貫通していない。

穴を完全に開けてしまっただけで、すぐに敵に気づかれてしまうからだ。そのため石上が最後の一撃を加えトンネルを完成させてから突入する予定だった。

敵の状況を知ることができなければ、穴の出る場所も分からない。最悪なケースでは待ち伏せに会うことも充分にありえた。

「あんたこそ燃やすことしかできねえじゃねえかよ。向こうが水浸しだったらどうするんだ」

「その時はそのときです。臨機応変に対応すればいいだけの話ですよ」

「適当だな、おい」と石上はあきれた。「嫌いじゃねえけどよ、レンリルや竹取の爺さんと比べると繊細さが足りないような気がするんだよな」

「あのふたりにはどうやっても敵いませんよ。それに今回の作戦はレンリルの提案だということです。彼に任せておけば、大丈夫でしょう」

「――なあ、あんたはレンリルを信用するか」

「なんですかいきなり」

「おれはあいつが胡散臭いような気がする」

石上はいっぴくなく真剣な表情で、トンネルのなかを見つめていた。その先は真っ暗でなにもうかがうことはできなかった。

「現にラングネ国を奪還できたのは彼のおかげでしょう」と大伴御行。

「それはたしかにそうだけどよ、あいつはなにか大事なことを隠している気がするんだ。この国の命運を左右しかねない、でっけえ秘密を」

「考え過ぎですよ」大伴御行は首を振った。「かぐや様も信頼を置いていることです。味方どうして疑っている場合ではないでしょう」

「勘の鋭いあんたのことだからとつくにわかってんだろ。あいつが本性をあらわすまで油断しちゃいけねえ。この穴のつながる先に、敵がたくさん待ちかまえてるって覚悟で行かなきゃな」

「……ええ、そうですね」

大伴御行は冷える足元を浮遊していた火の玉を穴に放り込むと、紅い両目をあらわにした。竜王と契約して授かった、力の源。

「そのときは私がレンリルを切って捨てるまでです」

「おれも混ぜてくれよな」

石上が思い切り笑いながら大伴御行の肩を叩く。

痛そうに顔をしかめながら、彼は大きな手を振り払った。

作戦決行の時刻はもうすぐに迫っており、兵士たちはすでに準備を整え神妙な面持ちで構えている。先頭に行くのは石上と大伴御行の役割になっていた。

行動手順はすでに何度も確認をしてある。

兵士たちは直接の部下ではないため顔は知らなかったが、だれもが屈強そうな体つきをしており、頼もしかった。今日は捕虜に渡す分も含めて三つずつ剣を携帯している。

捕虜収容所にどれだけ即戦力がいるかは見当がつかないが、トン

ネルからは常時援軍を送る手筈になっている。

もしも予想外に捕虜が少なかったとしても、なんとかなるだろうというのがレンリルの予想だった。

「今日はじつに寒いすな」

本陣で指揮を執っているはずのサントが白い息を吐きながら近づいてきたのを見て、ふたりの勇者は小さく頭を下げた。

サントは護衛を一人だけ連れているので、正式な面会ではないようだった。

「本隊のほうを指揮してなくてもいいのかよ」石上があいさつ代わりに突っかかる。

「敵が攻めてくるならやることもあるでしょうが、ただ対峙しているだけなら赤ん坊にだって指揮官が務まるというものです。あちらは平和ですよ」

「これからすこしばかり忙しくなるでしょうね」と大伴御行。

「ええ、そのようになることを願っております。――そこで、作戦に際してひとつお願いがあるのですが」

「なんだ？」

「クレアを見つけたら最優先で保護してほしいのです。もちろん捕虜の護送にも人数を裂きますが、彼女だけはなるべく勇者様のどちらかに守っていただきたい」

「サント殿が私事を戦場に持ち込むとも思えませんね、どうしたのですか」

石上に対するよりもずっと丁寧な口調で大伴御行が質問する。

サントは乾燥した唇を濡らしてから口を開いた。

「こんなときにお伝えするのもどうかとは思いますが、ルア様は現在あまり芳しくない状態です」

「どういことですか」

大伴御行が語調を強めた。

「政務のほうがうまくいかないようで、ひどく落ち込んでいらっしやいます。このままではラングネ国にも、ルア様自身にとっても悪

影響です。だからクレアを助け出し、おそばにおいてやれば良き話し相手になってくれると考えております」

「おい、今すぐ帰った方がいいんじゃないかねえのか」

石上がせわしなく足を動かしはじめる。

サントは兵士たちに聞こえないよう小声で続けた。

「その心配はございません。この国境を突破する作戦が首尾よく運べば、ルア様にとってもやりやすいように世論が好転することでしょう。反アリストスという形で国内が団結するのです」

「つまり、おれたちはおれたちの仕事をするのが一番ってことか」

「その通りです。ですが、ルア様のよき理解者となれるのは、いまとなってはクレアしかないのです。ですからぜひとも――」

「わかりました」

大伴御行は力強く了承した。

石上も大きくうなずき返している。

「ありがとうございます。もしも戦闘が激しいようでしたら、一度こちらへクレアを運んでくださっても構いません。そのほうが戦いやすいでしょうから」

「大丈夫ですよ」と大伴御行は言った。「私たちは守ることに慣れていますから。今回はそれがかぐや様からクレアに変わったただけのことです」

「そうそう、心配いらねえって」

豪快に笑い飛ばすと石上は、足元にあるトンネルへ滑り込んでいった。どうやら勢い余って飛び出していったようだと理解すると、大伴御行も苦笑しながらあとにつづく。

蟻の行列のようにトンネルのなかへ吸い込まれていくラングネ兵たちを見送りながら、サントは冷たくなった指先をあたためていた。いつだって実際に戦うのは彼らなのだ。

サントはただ人形師の操る人形のように、囿となって敵を欺く駒となることしかできなかった。

裏切り

轟音とともに大穴が穿たれると、暗かったトンネルに日の光が差し込み、石上のすすけた顔を照らしだした。冷たい空気が開けたばかりの入り口を通って流れ込んでくる。

「もう少し静かに行動できないんですか」

なかば呆れた口調で大伴御行がたしなめる。

穴の外に出ると、後方に大きな壁がそびえたっているのが感じられた。砦の背後、かなりの距離を掘っていたらしい。どうやら長くつくりすぎたな、と反省する。

「うるせえな。戦の始まりはこのくらい派手なのがいいんだよ」

石上がトンネルを這いあがって地上に降り立った。

そして大伴御行のむいている方角に目をやると、額に手をあてて天を仰いだ。

「こりやすげえ、道理でサントのおっさんがいつまでも突破できないわけだ」

「ええ、まったくですね」

盲目の大伴御行が同意する。

彼らの注意の先には、まるで大地の裂け目が反転したかのように高い城壁がそびえたっていた。古代人の手によって建設された外壁は黒く染められており、その中腹でアリストス兵が右往左往とせわしなく動き回っている。

漆黒の城壁の中心には巨大な門があったが、いまはアリストス軍によって閉鎖されている。

門の両側にかけて果てしなく続く壁がどこまで続いているのか確認することはできなかったが、それはラングネ側にいたところから見知っている。

両端は険峻ながけに面しており、渡ることは不可能なのだ。

「幸いなことにまだ気づかれてはいないようです。こちらの存在を

気取られる前に急ぎましょう」

「おうよ」

トンネルのなかから出てくるラングネ兵たちに隊列を組ませ、すこしでも発見されにくいようにとかがみ腰になりながら行進する。どうやら敵は前方にばかり注意を向けているらしく、後方にはほとんど警備を置いていなかった。

それに加えて敷地内をうろついている兵士の姿もほとんど見当たらず、行軍にはほとんど支障がなさそうだった。

「――殺気をまとっていない気配を大勢感じます。こちらが捕虜収容所でしょう」

大伴御行の鋭敏な感覚が遠くの人々の行方を察知し、周囲を警戒しながらゆっくり歩を進めていく。

大柄な石上は常人よりもさらに身をかめなければならなかったが、本人はあまり気にしていないようだった。むしろ上機嫌に鼻歌を口ずさんでいるほどである。

「いったいどうしたのですか、気味が悪い」

「いや、なんでもねえって。そんなことより収容所はまだなのかよ。もう身体がうずうずして止まんねえぜ」

「仕事熱心なものも怪しいものです。裏があるならさっさと話してしまったほうがいいですよ」

「な、なんにもねえって」

顔をそっぽに向けると石上はそそくさと後方へ下がっていった。

これはなにかあるな、と勘繰りながらも大伴御行はあたりの環境を感知する。盲目でありながらも自分の周りになにが置いてあるのかはほとんどわかる。

クレアのいるであろう捕虜収容所からは青い気配が漂ってきている。

今日の空気と同じ、冷たい色だ。

「――はやく助けだしてやらなければな」

通常の間人は緑や黄色など、極端な色は発していない。

反対に戦場などにあつて興奮状態であれば強い赤色をまとうるので、すぐにそれと判別することができる。

青色は生氣のない人間だ。

負傷した兵士たちがたくさん運びこまれて来た病室は、まるで青空に染まったかのように真つ青だった。そして、死ねば黒となり、無機質と同じように鼓動を感じなくなる。

クレアと最初に出会ったとき、彼女は黄色い衣を着ているかのようにはつらつとしていた。いまはその予兆すらもない。

大勢のなかで一人だけの気配を感じ取るのは難しい。だが、クレアだけが捕虜のなかで元気だと推測するのは楽観的過ぎるというものだろう。

「――石上には知らせなくともいい、か」

一人つぶやき、納得したようにかぶりを振った。

収容所は砦の後方、歩いて数十分ほどの距離に位置していた。おそらくジープで走ればものの数分とかからないくらいであろう。

黒い城壁の畏怖さえ覚えさせる豪壮な外観とはうってかわって、こちらは質素な建物だった。

四角い形をした広大な平屋がでんと構えているだけだ。表面の白い石は長年の劣化のためかあちらこちらがひび割れ、灰色に荒んでいた。

「人の住むところじゃねえな、こりゃ」

いつの間にやら最前線へと戻ってきていた石上が悪態をつく。

収容所を取り囲むように金網が設置されており、どうやらそれに触れると電流が走って痛みを与える仕組みになっているようだった。脱走兵を見つけやすくするためかあたりに建物の影はなく、植物のない荒れ地が嘲笑するように横たわっている。風に砂埃が巻き上げられ、渦を巻いて運ばれていった。

「どこから突入するんだ」

「こう平坦な地形では姿を隠しながらというわけにもいかないでしょう。そろそろ本気で激突する時間です」

「おうよ。任しておけ」

石上が白い歯を見せる。

ラングネ兵たちは一斉に光の剣を構えると、いつでも走りだせるように姿勢を低くした。これまでの移動の疲れは微塵も感じさせない。

彼らの目には仲間を助けだすという使命感がみなぎっていた。選抜された多くは志願兵であるとサントから聞いている。

「頃合いだな。行くぞ」

「ええ」

石上がうなりをあげて先陣を突っ走る。

ほぼ同時に大伴御行が業火の龍を召喚し、石上と並走させていく。収容所の入り口で眠たげに眼をこすっていた若いアリストスの兵士はアツと声を上げると、どこかへ逃げていつてしまった。

この際、敵の戦力をけずることにあまり意義はない。

大切なのは捕虜の奪還であり、国境の突破だ。それ以外は二次でいい。

石上が子安貝の首飾りに触れると、たちまち両腕に貝の装備があらわれ、勇者の身体をおおった。片方は攻撃のための拳であり、片方は防御のための小手だ。

「うおりゃ！」

気合いのかけ声とともに収容所の壁が破壊される。

白いセメント材質の石が腐った木のように崩れ落ち、内部の様子があらわになった。

「……おい、なんだよ、これ」

薬品の強い匂いが鼻をつく。

次の瞬間、あがったのはラングネ国民たちの歓喜の声ではなく、アリストス国民の悲鳴の声だった。白衣を着た看護士たちが、石上の姿を見て凍りついている。

勢い勇んで建物に突入しようとしたラングネ兵のひとりを片手で遮って、大伴御行がぼそりと呟いた。

「どうやら罠にはまったようですね。はやいところ引き返さねば、大変なことになります」

トンネルはすでに制圧され、退路を断たれていることだろうと大伴御行は素早く判断し、着物をひるがえして収容所をあとにしようとした。

石上はいまだに事実が飲み込めないといったふうに大きく目を見開いたまま仁王立ちになっている。

「こちらの作戦が読まれていたということです。ここは収容所ではなく病院、おそらく捕虜はどこか別の場所へ移送されていることでしょう――袋のねずみというやつです」

「――レンリルの野郎がしくじったのか」

「ええ、それならばまだマシでしょうね」

大伴御行が冷たく言い切った。

そのあとの言葉は継がなかったが、石上は相棒がなにを伝えたがっているのかよくわかっていた。

レンリルが裏切ったのではないか。

答えのない問いがぐるぐると頭の中を暴れ回っているあいだにも、背後からは悲鳴といくつもの足音が聞こえてくる。無性にその騒音を黙らせたくなった。思い切り壁を殴りつけると、破片が散り散りになって粉碎した。

「いまは目の前の敵に集中しましょう。私たちを内側に引き入れてしまったことを後悔させるしか活路はありません」

「窮鼠、猫をかむってやつだな。仕方ねえ」

石上が砦の方を睨みつけると、すでに黒い人だかりが動きだしているのが見えた。アリストス軍の漆黒の鎧がうごめいているのだから。

その数は圧倒的で、ラングネ兵がいくら精鋭だとはいえ羽虫をつぶすようにあっさりと蹂躪されてしまうほどだった。手にはすでに武器を構えており、臨戦態勢は整っているようだ。

収容所にカモフラージュした病院に収容されていたのは何も知ら

されていない一般市民だった。

彼らは引きつった表情で、まるでこの世の終わりがそこに迫っているかのように逃げ惑っている。白衣の医師たちが懸命になだめようとしていたが、彼らも形相にあらわれた恐怖を隠し切れていなかった。

頭上を走る雲の行方が怪しくなってくる。

雪でも降りそうだな、と大伴御行は風の行方を追いながらうつつら思った。

「で、どうすんだ。策ならあんたのほう得意だろ」

「私は軍師でもなんでもありませんが、ここで一戦交えるのが得策でないくらいはわかります。少数精鋭で突撃するのは大将を狙ったときのみ、あとはただの愚劣な行動です」

「つまんねえな、こっち側から敵陣を壊滅させるんじゃないのかよ」

「——もちろん最終目標はそれですが」

といって、大伴御行は城壁と城壁のはざままで閉じられている巨大な門に視線をやった。

赤子の爪先が入る隙間もなくぴたりとくっついている。

「あれを開けてしまえば向こう側で待機しているサント殿を引き入れることができます。そうなれば分はこちらにあり、勢いを持ってアリストス軍を駆逐できるでしょう」

「で、どうやって開けるんだ、あれ」

「私が知るはずもないでしょう。石上が破壊できるというのなら別ですが」

「いくらおれの怪力でも古代人の建造物はぶっ壊せねえんだよ。こいつ自体が古代人のつくったものらしいからな」

右腕に装着した子安貝のバックルをなでる。

ざらざらした感触が直に伝わってきた。長いこと地球に逗留していた古代人の所有物は、はたしてどのくらいの力を秘めているのだろうか。

「それがだめならもう一回穴を掘るっていうのはどうだ」

「やりたいんですか？」

「……いや、やめておく」

石上の額を、いやな汗が流れ落ちていった。

「彼等を殺させるわけにはいきません。私たちの身だけならなんとか助かるでしょうが、兵士たちを守りながら戦わなければいけませんから、すこし考えたほうがいいですね」

「こいつらも兵隊なんだろう、だったらいつだって死ぬ覚悟はあるはずだぜ」

「人はそう単純に生きられるものではありません」と大伴御行はため息をつきながらいった。「彼等にも守らなければならぬ家族がいるはずです。それに捕虜を解放しに来て、敵の罠にはまって戦死したなどという理由では、浮かばれないでしょう」

いまひきつれているのは百にも満たない少人数だが、それと同じだけの命を預かっていることになる。対するアリストス軍は縦横から無尽蔵に兵士が湧きだしてきている。

これらと交戦するよりは、どうにかして遭遇しない方法を考えるのが先決だった。

「穴の入口を奪還しに行くのがいちばん手っ取り早いんじゃないか。あそこさえ制圧できれば、帰還もできるし援軍を送ってもらうこともできる」

石上は苛立った口調でいった。

城壁で待機していたアリストス軍はすでに隊列を整え、こちらへ向かっている。逃げなければ接触するまで十分とわからないだろう。「私だったら真っ先にあの穴を埋めるでしょうね。すでに使い物にならなくなっているはずです」

「じゃあ、ここから離れるっていうのはどうだ」石上は早口でまくしたてた。「アリストス国内に攻め込みまえばいいんじゃないの」「結局のところこの城門が封鎖されていては希望ありません。座して死を待つようなものです」

「だったら――」

「ひとまずここを離れましょう」と大伴御行は病院の砕けた壁を叩いた。

すでに患者たちは避難をほとんど終えている。

この場所は完全にかかしとしての役割を担っていたようだ。自国民とはいえ犠牲者を出さないよう配慮したのだろう。

石上は大きく舌打ちをすると、地面を踏みつけながら兵たちへ伝令をしに行ってしまった。気を紛らわしたかったのだろうが、彼の通ったあとには深い足跡が刻み込まれていた。

大伴御行は伏兵が隠されていないかどうかを探知し、南西の方角に逃走経路があるのを発見していた。砦から遠ざかるように逃げていく道だ。

「……レンリル」

生きるにせよ、死ぬにせよ、レンリルの采配がこうもあっさり読まれていたとは思えなかった。

敵にそうとうな軍師がついたのか、それともレンリルが裏切ったのか。希望がある方に賭けなければやっていけそうにない。

そもそも裏切るならばもったいい時期があつたはずだ。

かぐやをわざわざ助ける必要もない。勇者という存在が邪魔だったにしても、まだ戦力を失うわけにはいかないはずだった。

この戦いで負ければラングネが再び侵攻される恐れがあるばかりか、かぐやを含めた責任者たちが非難を浴びるのは間違いない。レンリルだって無地では済まないだろう。

楽観的な推測かもしれないが、それ以外に助かる手段はない。つまりレンリルが何らかの対策をうってあるという可能性だけが一筋の希望だった。

「ふたたびかぐや様に会うまでは、この命散らすわけにはいかないな」

一人つぶやくと、大伴御行は脱兎のごとく駆けだした。

作戦失敗

どうやら旗色は良くなっていないようだと言はれていた。ふたりの勇者がトンネルに潜ってからすでに数時間が経過していたが、いまだに壁の向こう側が騒然となっている気配はない。

本来の予定ならばとくに捕虜収容所を襲撃して、解放した戦力とともに内側から砦を攻め立てているはずなのだが、怒鳴り声ひとつ聞こえてこない。

寒い風ばかりが身体に吹きつけてくる。

サントはくしゃみをひとつすると、黒くそびえたった城壁を見上げた。

壁面からはアリストス兵の見張りが顔をのぞかせている。彼の下にはとりつくこともできないほど滑らかな表面をした城壁が続いており、米粒ほどの大きさになった人間が見えていることだろう。

この国境が難攻不落といわれているのには月の世界で最高峰の防御力を誇るこの壁によるところが大きかった。城門さえ閉じてしまえば寡兵をもってしても大軍をしのぐことができる。

唯一この砦を破れたのはレーザー砲の強力すぎる熱戦のみで、その際に開けられた巨大な穴はすでに修復されている。

古代人の手で作られているわけではないためその修理したばかりの壁を狙えば突破の可能性もなくはなかったが、当然アリストス側もそれを承知しているため、戦力のほとんどをそこへ集中させている。

弱点とはいえほかの部分と比較すれば、の話であり、補修された箇所も十分な防御力を誇っている。そこへ兵力を一点集中させられれば、攻撃するのは実質不可能だった。

「……まずいな」

援軍を送る予定だったトンネルが破壊されてしまったという報告はすでに受けた。

勇者たちの退路が立たれるだけでなく、こちらの作戦がうまくいかなかったということを示しているのは、痛いほどにわかっていた。

しかし、例のトンネルこそがラングネ側の編みだした苦肉の策であり、それが通用しなかった以上、下手に軍を動かすわけにもいかなかった。

勇者たちを失うのは大きな痛手だが、ここで無理に攻め込んで多大な損害を出すほうがずっと問題だ。

軍の総大将としては、兵を動かすわけにはいかなかった。

「勇者がもう一人でもいればよかったのだが」

予備軍がいればもうすこし戦況が変わったかもしれない。

しかししないものを嘆いてもどうしようもなかった。

「レンリルへの連絡はついたのか」

近くにいる兵士に叱りつけるような口調で尋ねる。

困ったような表情をして返答がない。つまりレンリルも頼りにできないということだ。

レンリルにもレンリルなりの仕事がある。この戦場で失敗が起こればそれはむしろサントの責任であり、参謀がいなかったからといって責めることはできなかった。

「――しかし、アリストスにレンリルの策を見破れるような人材がいたのか？」

自問自答する。

レンリルの才能が突出しているのはだれもが認めるところだ。その彼が考えだした作戦をいとも簡単に打ち破れる人間がいるとすれば、驚異のほか何者でもない。

それだけの能力を有した配下がいるのなら先の戦いで出てきていてもおかしくはないはずなのだが。

「レンリル様は朝から姿をくらましているそうです！」

耳を覆いたくなるようなニュースを伝令兵が運んできた。

「詳しく話せ」

「はい。なんでも消えたかのようにふらりといなくなってしまう、

朝から搜索を続けているのですがまったく見あたらないとのことです。大事になるということで隠そうとしていたようですが、とうとう露呈したようで……」

「事情はどうでもいい。見当は付いていないのか」

「何名かの部下もいっしょに失踪しているようです。いずれもレンリル様の腹心ですから、参謀指揮所では大混乱になっていると」

「――まいったな」

サントが作戦を考えたことがあるのは一度つきりだった。

もちろん座学で軍略や戦術を学ばされたりもしたが、実戦で使ったのはかぐやを包囲網から救いだしたあのときのみだ。

結果としてうまくいったのには間違いないが、あんな危ない橋を渡るつもりは二度となかった。

奇策とは兵数上の不利をひっくり返すための非常手段でしかなく、本来なら相手よりも多い数をそろえて戦場に臨むべきなのだ。

「レンリルの行方がつかめたらすぐに伝えろ。それまではこの軍を動かさない」

「了解しました」

きびきびと返事をする伝令兵は小走りで去っていった。

いくら兵士の数を誇っていたところで、敵と刃をまじわすことができれば無力だ。孤立した部隊を助けようとして大軍が犠牲になるのは確かに得策ではなかったが、勇者ふたりを失ってはラングネが戦局を有利に進められるとも思えなかった。

「……すべてが裏目に出るな」

勇者ふたりだけだったらどうにでもなっただろう。

しかし百にも満たない兵をつけてしまったために、かえって足手まといになってしまった。正義感の強い彼等のことだから、きっと兵士たちを守るために行動するだろう。

しかし、それでは勝機がない。

「トンネルを掘り続けろ。あそこしかつながる道はないのだ」

無茶な命令だとは理解していたが、それ以外にやるべきことが分

からなかった。

トンネルはすでに大量の土砂と水によって埋められており、現在もアリストス側から封鎖が続いている。

それは破るのには尋常でない労力があるだろう。

さらにトンネルの通路はせまく、戦えるのは多くて同時に二人か三人だ。圧倒的に不利な状況だと認めないわけにはいかなかった。

「ほかのトンネルをつくるというのはいかがでしょうか」

とひとりの側近が口出しをしたが、サントは力なく首を横に振った。

「勇者様の力を持ってしても一週間を要したのだ。それでは遅すぎる。アリストス側も同じ作戦に二度も三度も引かかってくれるような馬鹿ではあるまい」

「しかし、このままでは――」

「わかっている！」

苛立ちの募った口調で怒鳴りつける。

側近はしずしずと黙り込むと、体を小さくしてサントの目から逃れるようにかくれた。

「せめて勇者様からの連絡があればどうにか策が練れるかもしれないが……それすらもないとなると……」

「報告！ 上空に勇者様からのメッセージが浮かんでおります！」

「どういことだ」

サントが身を乗り出して聞きかえす。

報告にきた若い兵士は息せき切ってこたえた。

「岩のはるか上空で大伴様の炎が文字を描いていらっしやいます」

「その内容は」

「伝令は絵でありますが、おそらく『至急、援軍求ム』というもので間違いないかと」

「そんなこと――」 わかっている、といいかけてやめた。「ほかにはないのか」

「捕虜の解放には失敗した模様。それから……」

「それから？」

若い兵士はその先の言葉をなかなか継ぐとはしなかった。サントが視線で催促すると、しばらく逡巡した後、重たげな口を開いた。

「レンリル様に気をつけろ、と」

「……そうか」

石上と大伴御行がなにを思ってそのようなメッセージを残したのかはわからないが、とにかく現在レンリルが失踪していることと無関係ではなさそうだった。

この奇襲作戦を考えついたのはレンリルだ。なにか裏があると思えば、彼が勝敗の行方をあやつることなど簡単だろう。

不安要素はいくらでも湧きでてくるのに解決策は一向に浮かんできそうになかった。

「私はいったいどうしたらいいでしょうか」

不吉な報告を携えてきた兵士が恐縮しながら命令を求める。サントは睨みつけるように地面を注視し、それから静かに目線を上げた。

「このことはみなが知っているのか」

「レンリル様の件についてはすぐに消えてしまったため、全員が知っているわけではありません」

「ならばかん口令を敷く。このことは最大級の極秘事項だと伝えておけ。必要ならばサントの名前を出しても構わない」

「――はい」

深々と頭を下げる。

存外に深刻な事態になってしまったため緊張したのか、声がふるえていた。

サントはすぐさま軍の重役たちに招集をかけると、レンリルのことに関しては心配の必要がないと告げた。何名かは疑わしげな表情をしていたがサントが一喝するとしぶしぶ納得したようだった。

「レンリルはこの国を救ってくれた男だ。それがこんな中途半端な状況で任務を投げ捨て、裏切るようなことがあるはずがない。それ

でもなお疑うというならこの軍を追放することになる。軍の要は内部の結束だ、それを乱すようならば首都に帰って客観的にこの状況を見つめてもらおう」

強硬な態度に出ると、誰も反論する者はいなかった。

これでひとまずレンリルのことで内部分裂が起こることはなくなつただろう。すくなくとも、直近のあいだは。

「これ以上はかばいようがないぞ、レンリル」

彼がまだ見習いの頃からしきりに世話を焼いてやっていたのも、こういう危なっかしさをはらんでいたからだ。世渡りは上手だがあまりに才能がありすぎるために嫉妬や反感を買いやすい。

雨でぬかるんだような地盤でレンリルが少しでも体勢を崩せば、たちまち足を取られて地面に引きずり倒されてしまう。

サントは寒い空気のなかを歩きまわりながら、乾いた空をながめた。

大伴御行は生きている。それだけでもわかったのは朗報だったが、事態は思ったよりも芳しくない方向に動いているようだった。

「ルア様——」

自分は頼られるべき存在でありながら、年下の少女に助けを求めてしまっている。こんなことでは軍人としても、老人としても失格だと嘆いても、どうすることもできなかった。

白い吐息がはかなく生まれて、すぐに消えた。

別れ

「レンリルの野郎に気をつけろ、か。いい狼煙じゃねえか」

走りながら石上が同伴御行の打ち上げた炎の感想を述べる。

炎使いの手元からひよろひよろと蛇のように伸びた細い線は、はるか上空で鮮やかな絵を描き出していた。レンリルの似顔絵に矢印が向けられた標識だ。

「それにしてもあいつの顔はそっくりだな。まるで眼が見えているみたいだぜ」

「顔に触れればだいたいの輪郭がわかりますから。いつかかぐや様のお顔もそうして撫でてみたいものです」

「この変態が。あんたには視力なんていらなかったみたいだな」

「不便なこともありますが、代償にいろいろな手に入りましたからね」

石上たちのすぐ背後にはラングネの精鋭たちが小走りについて来ている。いまはひたすらアリストス軍と交戦しないよう、脱出経路をさがしながら城壁沿いに逃走しているところだった。

その途中で同伴御行が壁の向こう側にいるサントへ情報を伝えようと試みたのである。

「にしてもあのおっさんが『レンリルに気をつけろ』なんて胡散臭い情報を鵜呑みにするかね。レンリルはおっさんの手塩にかけた家臣なんだろ」

「判断するのは彼の自由です。しかし、警戒しないわけにはいいかないでしょう。その結果としてレンリルの行動が——もしも裏切っているのなら、ですが——すこしでも制約されるなら上出来です。もつとも、そうでない方がずっといいのですけれど」

「あんたは甘いんだよ。どうせならレンリルが裏切っています、くらい過激にやってもよかったのに」

「まだ確定したわけではありませんからね」と同伴御行はいった。

「あなたもあまり先入観を持ちすぎるのはよくないですよ。目の前
にある落とし穴にも気がつかないようになる」

「盲目のあんたよりはずっと見えてるつもりだぜ」

石上が冗談を返した。だが、目は笑っていないかった。

後ろに連なる兵士の群れはさすがに鍛えられているだけあって息
ひとつ乱していない。腰にくくりつけた剣の柄がしきりに揺れるば
かりで、それ以外は平静となんのかわりもなかった。

「それにしても、気がかりなことがあります」

「レンリルか？」

「いえ、そのことではなく。なぜ私の特性が読まれていたのか、と
いうことです」

「どういう意味だ」

「捕虜収容所を発見するためには私の感覚を頼りに、気配をたどっ
ていくという手法を使うつもりでいました。それを知っていなけれ
ばあの作戦は考えつかなかったはずです」

大伴御行はちらりとアリストス軍の方角へ顔を向けると、進路を
右へと変更した。

前方から挟み込むように敵の一隊が迫ってきていた。

「なんでだよ」と石上。

「捕虜収容所を奇襲するという思惑が読まれていただけでなく、私が
捕虜の気配と錯覚するように病人を収容していたという点がおかし
いのです。こちらの裏をかくだけなら兵隊でもなんでも伏せていれ
ばいい。それをあえて、青色の同系色の人間を集めていたというこ
とは、こちらの情報が漏れている可能性があるのです」

「やっぱりレンリルじゃねえか」

「いえ、それが……」大伴御行は自分のまぶたに指をあてた。「私
はこの視界の話を一度もしたことがなかったのでえすよ」

「——ってことは」

「ええ」と大伴御行は紅の瞳を開いた。「レンリルでさえ知ってい
るはずのないことなのです」

「どういふことだよ!」

動揺したように石上は語調を荒げると、大伴御行の肩を掴んで揺さぶった。怪力には抗えずぐらぐらと炎使いの頭が揺り動く。

「可能性は二つあります。私が敵に内通している場合、もうひとつは」

敵に同じ能力を有した人間がいる場合です。

あなたはどちらの可能性を信じますか、と尋ねた。

「そんなこと――だって、あんたは裏切る理由がないじゃねえか」

「ならば選択肢は一つですね。敵にも私たちと同じ境遇の人間がいる。――おそらくは地球からやって来た人間が」

「あっち側の勇者様ってわけかよ」

石上が悪態をついた。

自分たち以外にも地球から招かれた人がいるとすれば、その人物もまた同じように強力な能力を有している可能性が高い。それがアリストス側についたならば戦況が一変するのは明らかであり、ただでさえ硬直状態の戦線はバランスを失うだろう。

それだけでなくかくやの覚えている予言が別の意味を持っているということにもなりかねない。

「サントのおっさんに伝えなきゃいけないな。さっきのやつをもう一度やったらどうだ」

炎をつかった伝令を推奨する。

しかし、大伴御行は刺青の彫られた腕を動かそうとはしなかった。「私たちがいなければレーザー砲を打ち破ることさえ困難でしょう。それが敵側に勇者までいるとなればラングネ軍の士気は大幅に下がってしまいます。サント殿に直接告げられるならまだしも、大勢に知らせることになるのは歓迎しませんね」

「じゃあ、秘密のままにしておくのかよ。敵の切り札を押さえてるんだぜ」

「ですから」と大伴御行はいった。「あなたが伝えてください」「は?」

「この戦場から離脱し、壁をどうにか突破してサント殿のところまで行ってください。丈夫なあなたならばさほど難しいことではないでしょう」

「ちよつとまてよ」

石上は走りながら、目の前に隕石でも降ってきたかのように血相を変えた。並走する大伴御行は静かに続ける。

「私には敵の大軍を突破するだけの力はありません。それにここにいる兵士たちの命を守るという使命もありますから」

「ちよつと待てつつってんだろ！」

石上が足をとめたので、うしろにつき従っていたラングネ兵士たちも何事かというふうに怪訝そうな表情をしながら立ち止まった。足元の乾いた大地から土煙が巻き起こっていた。

青筋を浮かべながら石上は思い切り大伴御行の肩をどついた。

「おれにだけ逃げろってか？ そんなことできるとでも思ってたのかよ」

「逃げるのではありません」大伴御行が反駁する。「ここよりもさらに、ずっと危険な戦場へと赴くのです。それは私にはできない。あなただからこそ頼んでいるのです」

「ふざけんなよ。あんたを置いて行くなんてできるもんか」

「我儘をいえる事態ではありません」

「知るかよ、そんなこと」石上はすねたようにそっぽを向き、地面がへこむほど強く蹴りつけた。「おれはやりたくねえ」

「死にますよ」

大伴御行が静かに、波紋ひとつない池に石を投げ込むようにして告げた。

「上等じゃねえか」

「あなたはなんのために地球を捨ててわざわざ月にまで来たと思っているのですか。かぐや様をお守りし、支えていくためではないのですか。ここで敗北すればかぐや様の地位はおろか、命さえも危うくなる。そうなれば私たちの存在意義さえなくなってしまう——私

「私たちは、かぐや様があつてこそその勇者なのですよ」

「……くそっ」

「守りたいものも満足に守れないで、かぐや様に認めてもらおうなんておこがましいことを望まないでください。私たちの選んだ道は、そういうもののなのです」

「――ひとつだけ約束しろ」と石上は吐き捨てた。

「なんなりと」

「これが終わったら捕虜奪還作戦を必ず成功させろ。いいな」

「ええ」大伴御行が首をかしげる。「あなたにしてはらしくない約束ですね」

「うるせえ。黙ってろ」

大柄な勇者はその巨体を動かしかけたが、思いとどまったように大伴御行の方を振り返ると、すつと右の拳を突き出した。

国境を抜けるためのトンネルを掘りつづけた大きな手はあちこちに傷があつたが、力強かった。

「地球じゃこんなとき、御武運をっていうんだったっけか」

「ええ、たしかそうだったはずです」

大伴御行がこつんと石上の拳に自分の拳をぶつける。

固い感触が伝わってきた。これならば分厚い壁だって卵を砕くようなあっけなさで叩き割れるにちがいない。

石上は拳をつきあわせると、ひとりアリストス兵の密集する城壁へ向かって疾走し出した。彼ひとりならば赤子の手をひねるように城兵たちをはねとばし、サントへ大切な情報を届けてくれるにちがいない。

それまではラングネ兵たちを率いるのはひとりだ。

援軍の期待はできないかもしれないが、最悪石上だけでも助かくてくれればラングネはどうにか持ちこたえることができる。

調子のいい嘘をついた唇を舐めながら、大伴御行は武者ぶりをした。

ここからが粘りどきだ。

「――ですが」

敵の勇者は石上と大伴御行、どちらを狙って来るだろう。そうせざるを得なかったとはいえお互いに孤立してしまった以上、格好の標的になってしまったのは間違いない。

各個撃破されるのだけは避けたいが相打ちでも悪くはないだろう。道連れにできるなら上等だと考えている自分に気がついてなんとなくおかしくなった。

気がふれたように高らかに笑いながら、大伴御行は石上の走り去っていったほうをながめた。大きな気配は、どんどん小さくなっていった。

かぐや姫の憂鬱

「――レンリルが失踪した？」

「はい。懸命に搜索を行っておりますが、いぜんとして行方がつかめず……」

「ばか者。あやつにはあやつなりの考えがあって行動しているのだろう。ならば無理に探す必要性もあるまい」

「ですが、レンリル様がいらっしやらないと何事もうまく働かないので……」

「そんなことでわたしに報告をするな。気ぜわしいだけだ」

「失礼いたしました」

老け顔の拾者が静かに部屋を引きさがっていくのを見送ってから、かぐやは最近ずっと癖になっているベッドに顔をうずめながら、深呼吸をした。

こうするといろんな匂いが感じられる。

香水の匂い、シーツの香り、そして自分自身。どれもが染みついて離れないかのようにだった。きつと舐めてみたらしょっぱいだろう。涙の味がいやというほどにじんでいるはずだった。

天井を見上げていると、自然に涙がこぼれ落ちてきてしまいそうで、下ばかり見つめていた。真っ暗な視界はなにも与えてはくれなかったけれど、自分の涙を見なくてすむのがありがたかった。

「……レンリルか」

いまごろどこでなにをしているのだろう。

自分のために働いてくれているのはわかっていたが、その主君がこの有様では示しがつかない。むしろなにもしないでのんびりサボっていてほしいくらいだ。

サントもレンリルも、石上も大伴御行も頑張って仕事をしていることだろう。

そういえば今日はレンリルの考えだした作戦を決行する日だった。

彼の提案した作戦ならきつとうまくいくだろう。

「……わたしはいったい何をしているのだろうか」

ぼんやりと呟く。

背負いきれないくらいの責務がのしかかってきているせいではなかった。あの失敗がいまだに尾を引きずっているのだ。自分でも馬鹿みたいだとは思うが、動き出そうとすると頭がやんわりとそれを拒絶して、ふたたびベッドに突っ伏してしまう。

そうして一日があつという間に過ぎていくたび、さらに重たくなつた背中が邪魔をした。

このままズルズルと月日だけが経過していくのかもしれないと考えると、それだけで憂鬱になる。まだ若すぎたのだ、そう言い訳をしながら逃げるのには辟易していたけれど、現実には真正面から立ち向かっていくだけの勇氣はなかった。

結局、なにもしないという選択肢を決断したわけではなく、だからと選択をあと伸ばしにしているだけなのだ。

「レンリルも逃げ出したのかな」

子どものようなところもある男だから、束縛されるのが嫌で仕事から逃走したのかもしれない。そうして脱け出してきて、わたしをさらってどこか遠くへ連れて行ってくれたらどれほど楽だろう。

この、広いくせに窮屈な王城から、地球でもどこでも、レンリルと逃避行が出来るなら、それは楽しいことにちがいない。

かぐやは部屋の隅にかけられた時計を見上げると、時間を確認したときいつもそうするように、深々とため息をついた。そろそろ侍女がドアをノックしにくる時間だ。

そしてわたしは決まっそう答えるのだ。「あとにしてくれ」と。あとがいつになるのかはわからない。しようと思えば今だっていいのに。

秒針がゼロを指すと同時に、律儀な音がドアを伝って響いてきた。分厚い材質で作られたドアはちよつとやそつとのノックでは音が貫通しない。金属の輪で、ドアを叩きつけるのだ。

かぐやはのそのそと冬眠を間近に控えた亀のように緩慢な動きで毛布をはぐと、億劫そうな声を出した。

「あとにしてくれ」

しかし、その陳腐な声が硬質のドアをくぐり抜けられるわけではなく、かぐやは仕方なくベッドから下りてノブを握った。冷え切った感触が伝わってくる。そういえば今日は朝からやけに冷え込んでいた。

隙間が少しだけになるよう、慎重に腕を引くと、心配そうな顔をした侍女がのぞいていた。

「ルア様、おそれながら公務のお時間でございます……」

いまにも消え入りそうな声だった。

かぐやにいつ怒鳴り散らされるものと怖がっているのだろう。しかし、彼女の予想に反して月の姫君はただ一言「あとにしてくれ」とつぶやくように告げた。

ほっとしたのか、いくらか明るくなった声で

「失礼します」

と一礼して侍女は深々と頭を下げたまま硬直した。きっとこのままドアを閉めなければ、下げた頭の裏でほくそ笑んでいる表情がびったり張り付いたまま保存されるだろうな、と邪推する。

かぐやは一瞬、ドアを開け放して侍女の顔をのぞきこみたい衝動にかられた。

しかし悪戯心とは裏腹に、部屋と廊下をつなぐ扉は閉じられた。

「――クレアだったらなんというかな」

ふかふかのベッドのふちに腰かけ、絨毯の毛並みをながめながら妄想する。

きっと厳しく叱られていたことだろう。国王のように。

その時、先ほどふさがれたばかりの入口が、勢いよく開かれた。見たことのない顔をした男が、息せき切って部屋に走りこんできた。

「なんだ、貴様は」

かぐやがぶつきらばうに尋ねる。

男の服装はラングネの黒い軍服で、どうやらかぐやの命を狙いに来た刺客ではないようだった。それに男の顔立ちはどこか幼く、殺気もまるで感じられなかった。

「さ、サント様からの伝令でございます」

「サントの？ 作戦はまだ始まったばかりだろう」

「それが、失敗したのでございます」

「どういうことだ説明しろ」

かぐやの表情が一気に厳しいものへ変わる。

「お二人の勇者様は一隊を率いて、作戦通りトンネルへと入っていかれましたが、その後すぐにアリストス軍による封鎖が行われ、敵地にて孤立している状況です。連絡はとれず苦戦しているとのことでした」

「トンネルの状態は」

「アリストス側から大量の土砂と水が投入され、ともに進めるものではありません。現在、懸命に掘削作業を行っていますが、いかんせんはかどらず……」

「石上と大伴は無事なのか」まくしたてるように訊く。「彼等を失えばラングネの反撃は成立せぬぞ」

「大伴御行様の炎が上空に打ち上げられていたとの報告が入っておりますので、いまのところは無事かと」

「そうか……よかった」

かぐやは肩の力を抜いて、伝令の男を上から下まで観察した。

黒い軍服はどこにも汚れた様子はなく、どうやら新品同然のようだった。それに若い。まだ新任というものだろう。

「ところで、君はどここの所属だ」

「連絡部であります」

「それなら城の地下で働いているのだな、見かけたことはなかったが」

連絡部はその名の通り、各隊の連絡を受け持つ機関のことである。古代人の残した機械の扱いに特化している者が選抜され、一秒たり

とも連絡が途切れないようローテーションでモニターの前に座っている。

以前は城の最上階にあったものだが、かぐやの提案によって地下へと移されていた。

そのほうが広大なスペースを確保できるためだ。アリストス軍の動静を逐一監視するためには、情報の伝達施設が欠かせなかった。

「はい、先日配属されたばかりでございます」

「そうか。さぞかし優秀なのだろうな」

「いえ、それほどでも」

照れくさそうに鼻の下をかいている。

かぐやはその男がレンリルと同じくらいの年であるのに気がついた。

「また報告があったらすぐに伝えてくれ」

「はい」

「ルア様！」

顔を青ざめさせた中年の男が大声をあげて飛び込んできた。こんどはなんの知らせかとかぐやが腰を浮かせると、中年は若者の頭を思いきりはたいた。

「なにをしているのだ」

「申し訳ございません」

若い男の襟首をつかんでいっしょに平伏する。

黒いくたびれた軍服はお揃いで、おそらくは彼の上司なのだろうとかぐやは思った。

「この者が大変なご無礼を働きました……」

「どういことだ」

「なにか失礼をいたさなかったでしょうか」

その後もくどくどと言いつつ訳をならべる男の話を要約すると、つまるところ手違いでかぐやのところへ届くはずのない情報を運んでしまったらしい。

本来ならばかぐやに報告する予定ではなかったのだが、新米の男

がはやとちりをしてかぐやの部屋へ飛び込んで来てしまったのだ。

それに気づいて慌てて謝りに来たのだという。

「なんとも滑稽な話だな」かぐやが笑いながらいった。「――だが、なぜわたしに隠しておく必要がある」

「それは……」

中年が言いよどむ。

「ルア様の御機嫌がよろしくないとのことでしたので」

「馬鹿者」

小声で怒鳴りつけるが、隠し切れていなかった。

かぐやは中年の兵士へ目を向けると、口を開いた。

「まあ、許してやれ。わたしに免じてだ」

「は、はい。申し訳ございません」

「いい。むしろ褒美をやりたくらいだ」

「……どういうことでございましょう」

「いい機会になった」かぐやはベッドから立ち上がると、腕を勢い良く伸ばした。「わたしの復活の頃あいだ。あやつらばかりに苦しい想いをさせるわけにはいかぬからな」

ふたりの黒服を着た兵士たちは不思議そうにお互いの顔を見合わせ、首をひねったのだった。

捕縛

「……レンリルの野郎、見つけたらただじゃおかねえぞ」

城壁へ向かって石上が牛馬のように巨体を揺らしながら突進していた。寒い空気にやられ、耳のふちが痛い。呼吸のたびに吐き出す息もだんだんとほの白さを増していた。

徐々にアリストス兵の姿が大きくなってくる。

遠くからでは分からなかったが城壁の表面には無数の通路がのびていて、そのどれもに紅い軍服をまとったアリストス兵たちが詰めこめられていた。

この通路のうちの一本をたどればより防御の薄い場所から壁を破壊できるかもしれないが、それでは時間がかかり過ぎてしまう。アリの巣に手を入れて、一匹ずつ駆除していくような作業だ。

それよりは城門を開くスイッチをさがし出すなりして内側から開いたほうがいいだろう。殴って壁に大穴を空けるほうが楽でいいのだが。

「最強の盾と最強の矛じゃ、勝負はつかねえはずなんだけどな」

そういえば京都でさんざん漢文の本を読まされたもどだと思いかえす。つまらない内容を覚えるつもりはさらさらなかったが、幼心におもしろいと感じた話はいくつか頭に残っているものだ。

「――新たな勇者、か」

どうして月にやってきたのだろう。

大伴御行のいったことは本当に正しいのだろうか。一人になると新たな疑問がいくつも生まれてきたが、それにこたえてくれる相棒の姿はどこにもない。

「案外、おれの知ってるやつだったりしてな」

少なくとも話の通じる相手であればいいのだが。噂に聞く唐の超人などが来ていたら面倒だ。ただでさえ奇妙奇天烈な技をつかって来るといふ話であるし、それが勇者の力を手にしたらどんな絶技に

昇華するかわかったものではない。

石上が城壁に近づくに従って、敵の動きが目に見えて騒々しくなった。

おそらくこちらから向かって来るとは予想していなかったのだろう。慌ただしい間は攻撃を受ける心配もない。その前に敵の弱点を見つけ出さなくては。

石上はいったん足を止めると、はるか上空にまでそびえたっている城壁の先端を見上げた。

ここを乗り越えるのは鳥でもない限り不可能だろう。

「ためしに一つ、やってみるか」

右手に意識を集中させると、首飾りが変形して拳にまとう武器になった。軽く握ったり、離したりして感触を確かめる。

問題なさそうだ。

石上はあらん限りの声を出しながら右の拳を城壁にたたきつけた。表面に付着していた白い土煙が巻き上げられたあとで確認すると、ほんのわずかに手形が食い込んでいるだけで、亀裂も傷も残っていなかった。

「こいつは——千年かかっても通り抜けられそうにねえや」

それに腕がしびれた。

いくら子安貝の首飾りで強化されているとはいえ、石上の肉体にも限界はある。

「こいつを動かすスイッチがあるはずなんだけどな」

スイッチという単語は月に来てから覚えた言葉だ。月でも普通に言葉は通じたが、ときどき知らない単語が混じっていたので、そのたびに覚えなければならなかった。この作業は石上にとっては一苦勞で、暇な時間は武芸の練習よりも勉強に励んだほどだ。

隣国の唐でさえ言語が違うというのに、月ではなんの不思議もなく話を通じるといえるのは奇妙なことだったが、かぐやに聞いてみたところ、

「おそらく都人たちはお前たちと同じ国に着陸したのだろうな。そ

れなら、宝物がすぐに見つかったのもうなずける」

という返事だった。

地球と月とは思っていた以上に密接な結びつきがあるらしく、石上にはよくわからなかったがどうやら大きな力が働いているようだった。

「城門を開けるスイッチがあるとするりゃ、このなかだろうな……」
アリストス兵が密集している城壁の内部を見やる。

ようやく戦闘態勢が整ったらしく、数人一組で陣形を組んで向かって来るところだった。この人込みを一人でかきわけ、奥にもぐってスイッチをさがすのは骨がおれそうだ。

石上の脳裏にひとつの案が浮かんだ。

「――卑怯な手はあんまり好きじゃねえんだがな」

ひそかにつぶやくと腹を決めたように腰を据え、向かって来る軍団のなかから隊長とおぼしき人物をさがしはじめた。毒々しい赤色の服をまとった男たちのなかでも、数名だけは黒い縞模様のはいた帽子をかぶり、軍服も一般兵とは違っていた。

あれが隊長格で相違ないだろう。見失わないよう慎重に狙いを定める。

いまにも切れてしまいそうな弓の弦から放たれた矢の速さで突進すると、隊長らしき男の首根っこをつかんで素早く剣をはたき落とした。

「動くな」

なにか喋ろうとする前にどすの利いた声で黙らせる。不穏なことをすれば首の骨を折られると覚悟したのか、男はぐったりとして抵抗をやめた。

「お前らも動いたら、こいつを殺す」

すぐそばであっけにとられていたアリストス兵たちを睨みつけると、地蔵のように動かなくなった。石上はゆっくりと後ずさって安全な距離を確保すると男の喉元に手をかけながら尋ねた。

「スイッチはどこだ」

「な、なんのスイッチ——」

「城門を開けるスイッチだ」すこしだけ右手に力を込める。「どこにある」

「そんなの、教えられる、ぐあ」

三秒ほど、呼吸が完全にできないよう締め上げる。男の瞳が恐怖の色に溺れていくのがありありとわかった。

「おれはあんたをいつでも殺すことができる。生まれたばかりの赤ん坊を殺すのと同じくらい簡単にな。本当なら戦場で遭遇したら生かしておいてやる義理はねえんだが、スイッチの場所を教えてください。なら命だけは助けてやる。どうだ、悪くない取引だろ」

「ほ、ほんとうに殺さないんだな。約束しろ、よ」

「おれも男だ、一度かわした約束は破んねえ。わかったらさっさと在りかを吐け」

「——その通路を直線に進んでいけ。横に脇道がいろいろあるが真直ぐだ。その途中、二枚の扉があって、パスワードが要求される」「パスワード……」はたして、どんな意味だったか。石上はすこしのあいだ考えこんでいたが、男はお構いなく続けた。

「だが、そいつはフェイクで、本当はこいつを使わなきゃなんねえ」男は首からかけたカードをあごでしゃくって見せた。

手のひらにすっぽりと収まりそうな大きさの、銀色の表面に黒で印字された簡素なカードの端からひもがのびている。失くさないよう首からさげているのだろう。

「これを使えばパスワードなしで扉を開けることができる。スイッチの場所はこのまんまなんだ、だけど詳しいことは分からねえ。開け方も知らねえ、だからもう放してくれよ」

「そうだ、合言葉だったな」

「は？」

「こっちの事情だ、気にするな」石上は咳払いした。「で、どうしたんだ」

「もう放してくれよ」男は涙声になっていた。石上は道ばたで拾っ

た小石に興味がなくなつたとしてもいうように男を投げ捨てると、腕を何回転かさせ気合いを入れた。

小さなうめき声をあげて男が気絶する。

「……連れて行ったほうがいいか」

木の枝でも拾うように、気を失った男の身体を担ぎあげると石上は悠々とアリストス軍のなかを歩きだした。誰一人として手を出してこようとしないう。恐れているのか、雰囲気のにまれているのか、どちらにせよ簡単に突っかかって来ることはなさそうだった。

ひよつとしたらたいそう偉い人間をつかまえてしまったのかもしれないな、と石上は思いながら、城門を開けるスイッチを指して進んだ。

三人目の勇者

荒野の向こうからひとり足取り重く向かって来る人影を感じたのは、大伴御行が最初だった。先頭に立ってラングネ兵たちを死地から救いだそうという試みの希望は薄く、石上が運よく壁の向こう側へ逃げてくれれば降伏しても構わないとさえ考えていた。

ここで無下に命を散らすことには何の価値もない。

少なくとも兵士たちの命だけは守ることができるだろう。自分の身は交渉の材料に使われるか、はたまた見せしめとして殺されるか、どちらにせよ助かることはない。

かぐやとともに月へ戦いに来てからいつ死んでもいいような覚悟はしてきた。天皇との死闘でも、反乱軍のアジトで絶体絶命の籠城戦を行ったときも、ラングネ城に潜入したときも、死は隣合わせだった。さらにさかのばれば、竜王と出会って紅の瞳を手に入れるときでさえ、最期を感じずにはいらなかった。

そうして蜘蛛の糸をつなぐように保ってきた命だが、かぐやのために捨てるのならばなんの躊躇もなかった。

このまま死ねばラングネの復興が危うくなるのが残念だが、石上だけでもいればどうにかなるだろう。それならば、せめて兵士たちの命と家族は救ってやりたい。

「……来たか」

病人のような青い気配でもなく、血の気に走った赤い気配でもなく、黄金に輝く気配は石上のものとまったく同じだった。大伴御行とさほど変わらぬ身長の方がゆっくりと歩み寄ってきていた。

視力を失う前に好きだった、かがり火の炎とよく似ている。

次から次へと、弾けるように黄金の火が身体から立ちのぼっているのだ。大伴御行は後ろにつき従っているラングネ兵士たちをその場にとどめると、単身その男のほうへ歩を進めた。

「……………」

「……………」

両者とも、言葉を発しようとしなない。

お互いの気配を探り合うように沈黙の時間が流れていき、風がふたりの間をからかうように滑った。先に口を開いたのは大伴御行のほうだった。

「あなたは、何者ですか。私たちと敵対する存在ですか」

「……それは貴殿がいちばん知っていることでしょう」

聞きなれた都訛りのねっとりとした発音。

間違いない。この男は地球、それも京都からやってきている。

「あなたはいつ月にやって来られたのですか。——なぜ、アリストスに組するのですか」

「そちらの事情も把握しているつもりです。一方的な侵略に大義名分はなく、こちら側に非があるのは認めましょう。しかしそれもせんなきこと。僕には関係ありません」

「あなたは都の人間——それも、かなりの身分の方だとお見受けします」

「そんなもんじゃありませんよ」と男は自嘲気味に笑った。「あなたみたいな人の下っ端ですから」

「貴族ではないのですね」

「ほとんどそのようなものですが、違います」

「——なるほど、察しがつきました」

大伴御行が数度うなずく。

「陛下の警護兵というところでしょう。それならば訛りがあるのにも納得できる」

「さすがですね。噂にたがわず聡明なお方だ」

「すでにご存じのようですが、ここはあえて名乗らせていただきますしょう。私は大納言大伴御行、いまはラングネ国の勇者です」

「僕は、しがない衛兵ですから——田村、とてもお呼びください」

「では田村、あなたはどのようにして月に来たのですか。陛下の側近ならば待遇に不満はなかったでしょう」

「ええ。僕はなにひとつ不自由のない満足な生活を送っていました」
田村と名乗った男は、寂しげに地面の小石を蹴った。「こんなところ、来たくはなかった」

田村はどこか悟ったような雰囲気をもっていて、風に吹かれれば消えてしまいそうなくらい覇気が感じられなかった。長年のきびしい修行を乗り越えてきた坊さんが、仏などいないと気付いたときのような生気のない表情だった。彼のまもっているオーラとはまるで正反対なのが不思議に感じられる。

服装はアリストスでもらったものなのだろう、赤を基調とした動きやすい軽い着物をまもっている。こころなしか地球の衣服と似ているようだった。

貴族がまとうような高級なものではなく、その従者が来ているような安っぽい服だ。

「理由を聞いてもいいですか」

なんだか少し申し訳ないような感じがして、大伴御行は質問するのをためらった。しかしそれは避けては通れない話題だとふたりともが気付いているようだった。

田村は誰かに見張られていないか確認するように周囲をうかがうと、ひっそりと事情を話しはじめた。

「僕はあなたたちと陛下の戦いに参戦し、三山の頂上、陛下のおそばで一隻の船が空へと消え去っていくのを見ておりました。陛下はかぐや様を逃したことをたいそう悔しがり、しばらくはまるで御乱心なさったかのように奇行をくりかえしては、結局ふさぎこんで誰とも口を利かなくなってしまう様になりました。都では様々なうわさが飛び交いました。あることないこと、人の口にはとが立てられぬと申します。なにせ大納言様と中納言様が失踪し、陛下は狐にでも憑かれたかのように奇怪なことばかりなさっておりますたゆえ。京の都は大混乱でございました」

「……そうか、それは悪いことをしたな」

大伴御行がつぶやく。

京都に残された人々がどんな処遇を受けているのか、そんなことを考えている余裕は今までなかった。天皇に弓を向けた一族が、ふつうの暮らしを送れるはずもなかった。

追放されどこかへき地へ飛ばされたか、それとも一族皆殺しにされたか。いずれにせよ無事ではいられまい。朝敵という汚名を晴らすのは不可能だ。

それに加えて罪のない都の一般人にまで迷惑をかけてしまったのだから、大伴御行と石上は世間の邪魔もの以外の何でもない。大伴御行は胃の奥がしずむような罪悪感を覚えた。

「あなた様の家族はまっさきに陛下の怒りの矛先を向けられました。――詳しくお話ししましょうか？」

田村が大伴御行の顔をさぐるように訊いた。

その口調には敵意も悪意もなく、井戸端で出会った友人同士が世間話をしているような気楽さばかりが目立った。そのなかにどこか浮かない響きがあるのを大伴御行は敏感に感じ取っていた。

「いや、遠慮しておきます。いまはそのことを聞くべき時ではないでしょうから」

「誰にだって耳をふさぎたい事実があります、あまり気になさらないでください」田村はそこになにか大切なものが隠されているかのように後ろを振り返ったが、とくに目ばしい発見はなかったようだった。

彼には秘密がある、と大伴御行は確信した。それとも策略か、どちらにせよ注意を払わなければなるまい。

「陛下はその後、思い立ったように兵を集めると、富士の山に陣を張り、盛大にかがり火をたきました。僕もそれについて行きました。僕が狂気がかった命令でございました。何人かは頂上へと登ったきり帰ってきませんでした。冬にあの山へ昇ること自体が間違っていたのです」

「なにか目的があったのですか」

「『月に一番近いところへ行きたい』とのご要望でした。どれだけ

高い山に足を運んだところで、月に届くすべはないと知ったのはもう少し後のことになりましたが」

「あなたも見たのですね、あの光景を」

地球が徐々に小さくなっていくのを目の当たりにしたのはたった一度きりだったが、その時の絶景を生涯忘れることはできないだろう。

田が、川が、山が、村が、米粒のように小さくなっていくのだ。

天を飛ぶ鳥でさえ到達できないだろう高みから見下ろす地上はまるで異質なもので、いままでそこに生活の場を設けていたとさえ信じられなくなるほど雄大だった。

同時に感じた、自分の無力感。

人ひとりができることなど、あの広大な大地に比べればほんのちっぽけなものだ。かぐやが月を離れたときも同じように心細かったことだろう。宇宙とはそれだけ圧倒的であり、人は矮小な存在だった。

「ええ、できればもう一度見るできればいいのですが」田村は諦めたような乾いた笑い声をあげた。

「地球に帰りたいのですか」

「あなたたちは愛するものを追って月にまで来たのでございましょう。それがどんなに幸福なことか」

「苦労は多いですけどね」と大伴御行はいった。「いまみたいに死地に立つことばかりです」

「うらやましい限りでございます」

「……あなたはいいたい」

「家族を人質に取られています」と田村はつぶやいた。「僕の妻と、二人の子どもがアリストスにとらえられております。それさえなければこんな場所へ来たりはしません。こんな冷たい、荒れ果てたところには」

「やつらは地球にまで来たのですか？」

大伴御行が驚きをともなった声で聞いた。

「得体のしれない刀を持って僕の家を訪れてきました。彼らは手当たり次第にその刀を見せつけては、その力を最大限に引き出せる者をさがしていたようです。残念なことにそれは僕でしたが」

「古代人の作りだした宝は、使用者を選びます。あなたもその適合者だったのでしょうか」

「彼らは僕に、月へ来いといいました。僕はもちろん断りました。そのときに家族を理由に挙げてしまったのがすべての間違いでした。彼らはすぐさま家族を人質にとり、僕を脅しつけました。一緒に来なければ、殺すと」

「それで……」

「大伴様は天女伝説というのを耳にしたことがございますか」

突然、田村が話題を変えて質問した。

「たしか羽衣をまとった天女が、天へと帰っていくという噂だったと思いますが。都にいたころ聞いた覚えがあります」

「その正体はアリストスです」田村の視線が鋭くなった。「彼らが以前、僕と同じように強引に勇者を連れて行こうとしたとき、それは女性だったそうです。結局彼女はこちら側に絶望して死んでしまったそうですか」

「それが天女伝説の真相ですか……。悲しいものですね」

「羽衣のように美しい着物が、彼女の力の源だったそうです。許嫁がいたのを無理やり連れて来られたので、たいそう地球を恋しがって空高く舞い上がり、亡骸となって落ちてきたと聞いております。

僕の場合はその時の教訓を生かしたのでしょね」

「アリストスは地球の人間をなんだと思っているのですか、まるで武器かなにかのように扱って、死んだら次を運んでくる。まるで奴隷です」

「実際その通りなのですよ」田村はため息をついた。「僕がこの戦いで功績を上げなければ子供のうち一人が殺されます。僕はただの駒にすぎません、子供は釣りの餌です」

「……戦うほかに手段はないのですか」

「正確に言えば、勝つ以外には、です。僕はただ家族が助かればいい。僕が死ねば用済みとなった家族はすぐさま廃棄されることでしょうね、わざわざ地球まで送り届けてくれるような親切な連中ではありませんから」

「ラングネで保護することもできます。もしあなたが望むならばですが」大伴御行が身を乗り出して提案した。「あなたの家族さえ逃がせれば、平気なのでしょう」

「僕の家族はいまアリストスの首都に軟禁されています。僕がここで負けるようなことがあったら、彼らは間違いなく子供を殺すでしょう。もう後がないことを示すためならどんな非道な手段でもためらわないはずです、とくにあの国王は」

「アリストス国王……」

以前かぐやからアリストス国王とはどのような人物なのか話してもらったことがある。

ラングネとアリストスは現在こそ交戦状態で険悪な関係に陥っているが、それまでは交流も盛んでしきりに両国王が対談の場を設けていたのだという。かぐやも何度かその会に同席し、アリストス国王を目にしていた。

そのときの印象は温厚な老人で侵略戦争など引き起こすような人柄とは思えなかった、かぐやはいった。日だまりでのんびり昼寝をしていそうな穏やかな人物だと。

「彼になにがあったのか、田村殿はなにか聞いていませんか。かぐや様のいうところによれば極悪非道な行為をくりかえすような人物とはとても思えないのですが」

「見た目通りの凶悪な人間ですよ」と田村は吐き捨てた。「鬼か閻魔の使いか、どちらにせよ人ではないなにかです」

大伴御行はあるひとつの可能性に行きあたっていた。

ひょっとしたら重大な事実を知ろうとしているのかもしれない。

この戦争を根幹から揺るがすような、決定的な真実を。

乾いた唇を舌で濡らしてから、大伴御行は田村に向かって言葉を

投げかけた。

「彼は――国王は、老人ですか？」

「若い男ですよ。僕よりも若い、冷たい瞳をした青年です」

田村が嘘をついているようには感じられなかった。

アリストス国王は誰も気づかぬうちに変わっていたのだ。この情報ですぐにでもラングネの本部に伝達しなければならぬ。ここへ来て初めて、大伴御行は石上を行かせてしまったことを後悔した。

城壁のなか

石上は気絶したアリストス兵の身体を軽々と背負いながら、まるで我が家があるくような余裕をもって砦の内部を闊歩していた。肩に乗せた男は目をさます気配がない。いざというときにはすこし頬をはたいてやれば起きるだろう。

砦のなかは薄暗い電灯によって明かりを取り入れていたが、外に比べるとずっと陰険で狭苦しかった。さほど広くない廊下を進む石上を避けるようにアリストス兵たちが左右の端に体を寄せている。

ぎらつく眼を光らせながら石上は教えられた通りにパスワードを入力しドアを開くと、なにやらモニターのたくさんある指令室のようなところへ到着した。

画面の前には事情をさとした二人の兵士がすでに両手を上げた状態で降参の意を示していた。

「おい、城門を開けろ。さもなければこいつの命はないぞ」

もう十分威圧感があったが、石上は声を低くして脅しかけた。

二人の若い兵士たちは雪山で遭難したみたいに身を小さくすると、いそいそとパネルにあるスイッチを操作しはじめた。警戒をうながすアラームが鳴りだし、数分後に城門が開くというアナウンスが流れる。

石上は一連の様子をしげしげと観察すると、肩に乗った男に目をやった。

ここまですんなり事が運ぶと逆に怪しくなってくる。それほどまでに捕えたアリストス兵の身分が高かったのだろうか。

「やい、ひとつ答えろ」

横暴に質問する。恐るおそるといった様子で一人の兵士が振り向いた。

「な、なんでございましょう」

「こいつは誰だ」

気絶している男をあごで示す。兵士は緊張と恐怖のため二度もりながら返答した。

「ちゅ、中将閣下です」

「ちゅうじょう？　なんだそれは」

また新しい言葉かとうんざりする。月と地球とでは文化が違いすぎるのだからがそれにしてもヘンな単語があふれかえている。少々多すぎるくらいだ。

「たたた、大将の次に偉い身分でございます」

「……なるほど」

つまりは副大将というところか。ラングネで例えるならレンリルくらいの立場ということになる。それほど重役ならば一般兵が無暗に手出しをして来ないのにもうなずける。

彼に万が一のことがあっては自分の首が危ないからだ。

「で、どうしてそんなお偉いさんがこんなあつさり捕まっちゃったんだ」

「国王陛下はここを最重要拠点だと確信しておられるようで、何名もの高官を派遣していたのでございます。このような奇襲を受けるとは想定しておりませんでした。まさか勇者様の留守を狙われるとは……」

恐怖のためか聞いていないことまでペラペラしゃべってくれる。

石上は城門が完全に開くまでのあいだ情報収集に興じてみるのも悪くないと思った。手土産は多いほうがいい。それに、いまの話も聞き逃せなかった。

「やっぱり勇者がいやがったのか、くそつたれ」

「ご存知なかったのですか？」

「そうじゃねえかとは思ってたんだけどよ、それじゃ大納言の方へ行きやがったってことか。上手くやってくれるといいんだけどな」

「そう簡単にはいかないと思います」

「んだと？」石上がぎろりと睨みつけると若い兵士は血の気が引いたように顔を青ざめさせた。さながら着物を藍で染めたときのよ

うな鮮やかさだった。

「し、し、失礼しましたっ！　どうかお命だけは――」

「そんなことしねえよ。ったく。で、その勇者ってやつはどんな野郎なんだ」

兵士は石上のうながすまま知っている限りの田村の情報を吐露した。おかげで彼が京都からやってきていることや、家族が人質に取られていることなどをつぶさに知ることができた。

どうやら一癖も二癖もありそんな事情を抱えているようだ、と石上は思った。大伴御行がどうにかそのことを発見して利用できればいいのだが。

モニターを見ると城門はすでに半分ほど口をあけていた。

人ひとりが通行するには十分すぎるほどの大きさだったが、その後ラングネの援軍を率いることを考えれば完全に開かれるまで見張っていたほうがいいだろう。一度開ききってしまった元に戻すにも時間がかかるにちがいない。

「そういやこいつと同じ格好をしたやつがもう一人いたな。あいつはなんなんだ」

「おそらくは少将閣下かと思われます」

「……つまり、中將だったっけか、よりも下なんだな」

「はい」

「おれは当たりを引いたってわけだ。運がいいな」

石上は上機嫌そうに何度かうなずくと人形のように動かない中將を見やった。それにしても情けない人間が軍人をやっているものだ。ちよっと脅かされたくらいで気絶してしまうなんて。

小さな指令室をうかがうように大量の兵士が廊下に張り込んでいたが、石上が器用に入り口から最も離れた場所で目を光らせているため突入することができないでいた。

部下のほうがよほど勇敢というものだ。しかし少将の方はとつくに逃げ帰って、安全なところで震えていた。

「もう一人くらい捕虜にしてもいいんだけどよ、お前らのうちどっ

ちかラングネに行きてえ野郎はいるか」

ぐいと髭の多い顔を近づけると、喉元に刀を突き付けられているみたいに緊張した面持ちで二人の兵士は首を振った。

石上は哄笑した。

「ま、そうだな。おれも鬼じゃねえ、お前らを取って喰おうていう魂胆はねえんだよ。ちよつとばかしラングネのために情報を提供してくれりゃある程度の暮らしは保障してやるっていうことだ。ホントだぜ、このおれ様がいうんだから間違いないええよ」

「……し、しかし」

「おれ様はこの中将っていう腰抜けを捕まえてるからよ、これ以上の手柄なんかこれっぽちも欲しくはねえんだ。必要なのはアリストスの機密を話してくれる人間だ、おまえたちみたいにな。こんなちっぽけなところでセコセコ仕事してねえでラングネで小金持ちの生活をしてみるのも悪くはねえよな」

ふたりの若い兵士たちは予想だにしていなかった勧誘を受けて困惑しているようだった。

石上の口調には先ほどまでと違って脅迫するような響きはどこにもない。ほんの軽い気分で、散歩がてらに話しかけたような口調だった。

「お前らの王様ってのはどんなやつなんだ。こっちの姫様はな、それはそれは美しいお方でしかも健気なやつなんだよ。おれはそんなところに惚れこんでわざわざ月までやって来たくらいなんだから信じてくれるよな」

「それは、まあ……」

「よぼよぼの爺さんよりも、若くてきれいな生娘のほうが好きだろ。自分に正直になっちまえて、ほら」

石上がぐいぐいと肘を押し付ける。

兵士たちは酔っ払った上官がよくそうやって絡んできては部下を困らしていたことを思い出した。素面の石上ではあったが、調子は酔っ払いとそう変わらない。

「国王陛下は賢明な方です、最近あまり姿を見かけておりません」

「きつと病氣かなんかで寝込んでるんだよ。ほら、先のない国王よりも将来が楽しみなかくや様のほうが魅力的に思えてきただろ。おれについて来いよ」

「……本当に、悪いようにはなさらないのですか」

片割れが真剣な表情で聞いた。

目を大きく見開き、緊張したように右手が服のボタンをしきりにいじっている。外してはしめるといふ動作の繰り返しをながめながら石上は優しくほえんだ。

「おうよ。個人的に聞きたいこともあるしな」

「でしたらひとつだけ条件がございます」とその兵士は小声でささやいた。「私を連れ去る前に、中将閣下と同じように気絶させてほしいのです。もしも意識を持ったまま裏切ったとなれば一家の恥さらしとなってしまいます。ですが閣下と一緒にさらわれたとなれば、それもやわらぎましょう。そのためにも私を殴ってほしいのです」

「おーけーだ」石上は月に来てから覚えた言葉で了承した。「朝飯前だぜ」

ラングネに行くことを決意したその兵士は覚悟したように目を閉じると、椅子の背にもたれかかった。彼の肩を石上のごつい手が叩いた。

「個人的に聞いておきたいことがあるんだが、もちろん答えてくれるよな」

「なんなりと、どうぞ。勇者様」

「ラングネの捕虜収容所っていうのはどこにあるんだ。おれたちの予定ではこの砦のすぐ近くにあったはずなんだけどよ、それがふたを開けてみたら病院になっているから驚いたもんだぜ。ありゃ、誰の作戦なんだ」

「田村様の発案だと聞いております。どうして病人を収容したのかはわかりかねますが」

「それはたいして重要なことじゃねえんだ」石上は肩をつかむ指に力を込めた。「肝心なのは捕虜がどこにやられたかってことだ」

「ラングネの捕虜はアリストス首都——ザリアに移送されました」

「何日前だ」

「二週間ほど前のことでございます。いくらか時間はかかりましたが」

「囚人はみな生きているのか」

「こちらでは手荒なことをするのは禁じられていましたので。ザリアに送られてからはわかりませんが」

「そのなかにクレアって女がいたのを知らねえか。かぐや様の侍女なんだけどよ、こんなにかつて、口の減らねえ野郎なんだ」

「さあ」と首をひねる。「そこまでは担当ではありませんから存じかねます」

「そうか」

石上はふさぎこんだように口を閉じるとそれっきり言葉を発しやうとしなかった。どうしたのかと兵士が問いかけようとしたとき首筋に鈍い痛みが走ったのを感じた。それが石上の手刀によるものと気がついたのは視界が暗転する寸前のことだった。

怪力の勇者は眉間にしわを寄せ、深刻そうな表情をしていた。

交渉

国王がかぐやの知っているような温厚な性格をした老人ではなく、まったく別な人物におきかわっていると知れたはいいものの大伴御行にそれを伝える手段はなかった。

頼みの石上は砦の内部で奮戦している途中だし、炎を打ち上げようとすれば間違いなく目の前の男に刺されて死ぬだろう。もとより死はいとわないつもりでいたが一縷の望みがあるのを察知してからは無下に命を捨てる必要性を感じなくなっていた。

天から伸びる一筋の糸にすぎるように、大伴御行は生きる術を手繰り寄せる。

「田村、あなたは前代の国王がどのような人であったか聞いていますか」

「まったくにも。王は僕に見聞の自由を与えてはくれませんでしたから、アリストスのことといえどあまり詳しくは存じないのです。必要最低限のことだけ一方的に教えられました」

「では、いつ頃からいまの国王になったかということとは」

「この戦争が始まる半年ほど前のことだと言っておりました。僕の手に入れている数少ない情報のひとつです」

「……なぜアリストス国王は首都から出てこようとしないのでですか。ラングネの統治だって部下に任せていた、敵国に足を踏み入れるのが領主の常というものでしょう」

大伴御行は質問しながらも、同時に様々な事実を線でつなぎ、背後にある大きな真実を見透かそうと躍起になっていた。いまは情報を整理しなければならぬ時間だ。そのためには会話も少しでも引きのばさなければ。

田村のほうも戦闘をはじめるともりはないらしく、大伴御行の思惑を組みとっているのかそうでないのか、話をやめようとはしなかった。

「あの人は冷酷ですが、とても臆病な人間なのです。天皇陛下は同じように冷酷なお方でしたが臆病ではなかった。だれも彼に逆らう者はいないと確信していたからです——あなたたちを除いては」

「いったい何を恐れているというのですか。私たちの力ですか、それとも身内の人間ですか」

「僕にはわかりません。ただ彼はあらゆるものを怖がっているように感じられました。たとえ僕でさえも、まったく信用していないようでした。それはたぶん彼のやり方がいけなかったのでしょう」

「人を騙し、脅迫し、利用するやり口ではどんな仲間も信頼も築くことは不可能ですからね」

「ええ。いまでも僕に監視がついているはずです。いざとなればすぐさま首都へ連絡し、僕の家族を抹殺しろと伝えるための憎い人間がこちらの世界ではどうやら僕らのあずかり知れない奇術が発達しているようでございますね」

「こちらでも根本的な感情は変わっていません」大伴御行は語調を強めた。「あなたが家族を救いたいという気持ちも、私は痛いほど理解できます」

「わかるだけでは、なんの慰めにもなりませんよ」

「——あなたの能力を教えてくださいませんか。それ次第では解決の糸口が見えるかもしれない」

田村は驚いたように眉を上げたが、腰に下げた日本刀の切っ先を愛撫するように指を這わせた。

黒いひもの巻きつけられた柄に白銀色をした刀身が美しく映えている。どこにあったものかは知れぬが当代一の刀匠が製造したものに間違いないだろう。

いや、古代人の技術ならばあれくらいの刀などたやすく作れてしまふのかもしれない。

「僕は本当は槍のほうが得意だったんですけどね」田村はかすれた声でつぶやきながら切っ先を地面に突き刺した。その瞬間、まるで雷でも落ちたかのような突風が巻き起こり、大伴御行の小柄な体を

吹き飛ばそうとした。

不意の衝撃に体勢を崩されながらもとっさに膝をついてなんとかこらえると、砂塵の止んだ向こうには田村が平然と立っていた。

突き刺した剣の先端から地面がひび割れている。

田村の足元から続く地割れは大伴御行のすぐそばにまで迫っていた。

「これが僕の忌々しい能力ですよ、あなたに比べたら大したことはありませんが」

「――あなた自身の力なのですか、それとも……」

「大伴様もご存知でしょう。この道具がなければ僕らはほんの無力な人間だ。勇者でもなんでもない。結局は古代人とやらの都合につきあわされ思うがままに操られているだけなんですよ」

「彼らはこの星を守るために自らの故郷を捨て、技術を放棄したと聞きました。すべてを失ってもなお、私たちを縛りつけるのでしょいか――そうは思いませんが」

「あなたと僕とでは決定的に立場が違いますよ」田村は苛立ったように地面から剣を引き抜いた。ほんの軽い力で振るっただけでも冬の海風のような強い勢いがおそってくる。

大伴御行の背後にいる兵士たちはそれぞれに身構えてはいたが、顔には恐怖の色が浮かんでいた。剣をつかんだまま微動だにできないでいる。いまにも叫んで逃げ出してしまいたいといったような表情だった。

田村の剣の威力を見せ付けられながらも懸命に顔をそむけず、ふたりの勇者たちの行方を見守ろうとする姿は健気だったが、同時に頼もしく感じられた。

「僕の何がいけないっていうんですか。あなたたちは己の目的に向かって突き進んでいるというのに僕は手足を縛られ、首元に剣をつきつけられながら戦わなければならない。こんなの、あんまりだ」

田村の悲痛な叫びを聞きつつも大伴御行は注意をほかの場所へ向けていた。

敵の伏兵はいないか、うしろにいる兵士たちは無事か、そして田村の周囲を念入りに感知する。その様子に気づくことなく田村は剣をまっすぐにつきだした。

途端に砂嵐が巻き上げられ、大伴御行の伸びた髪をさらっていうとする。

土臭い匂いが鼻をついた。

「身分の違いならいくらでも我慢がついた。でも、これはあんまりに不公平です」

「ええ、どうかしなければいけません。あなたに責任はひとつもない」

「どうしようもないんですよ」田村は今にも泣きそうな声だった。

「あなたと戦うのはこれで二度目になります。そういう定めだったと覚悟してください」

大伴御行は答えない。

それを見て田村は諦めたように剣を構えると、ゆっくり距離をつめはじめた。一部の隙もない構え。なんでもないように足を運びながらも、いつでも非常事態に対応できるよう重心を低くしているのが感じ取れた。

さすがは天皇の親衛隊だな、と大伴御行はひそかに感心する。京都一の武芸ものには違いないだろう。本人は槍のほうが得意だといっていたが、剣でも充分すぎるほどの脅威となっていた。

田村の足が踏み出されるのに合わせて引きさがりたところだが、それをぐっとこらえる。

その代りに、弧を描くようにして位置関係を調整する。自然になるように、怪しまれないように。

「田村、ひとつだけ聞いてもいいですか」

「辞世の句を考える時間くらいは猶予しますよ」

田村の目にはなまくら刀のような殺気がこもっていた。わずかに剣が揺れるたび新たな風が生まれた。

「あなたの見張りが解けたら、私たちの仲間になってくれませんか」

「……それはどういうことです」

「約束してください。あなたを束縛する鉄鎖を焼き切れれば、私たちに協力すると。私も約束します。あなたが力を貸してくれるなら、あなたとあなたの家族を必ず守り抜くと」

田村はじつと大伴御行の紅の両目を見つめていた。

まるで光を失った眼球から、わずかでも感情を読み取ろうというふうに。

「……信じても？」

「私は嘘をつくのは嫌いですからね」

その瞬間、大伴御行が小岩程度の青白い火球をつくりだすと間髪いれずに田村の身体に向かって射出した。不意をつかれとっさに横つとびで攻撃を避けると田村は鋭い睨みを送る。

爆発音が田村のはるか後方でとどろいた。青白い火柱がこうこうと直立しているのが見えた。

「なにをするか！」

怒鳴りつける田村。彼の額には青筋がくつきりと浮き出ていた。

「この卑怯者め！ そんなことをせずに堂々と戦ったらどうだ！」

「すみませんね。騙すほかに方法がなかったものですから」

「こうなればもはや加減するつもりはない、一刀のもとに叩ききつてくれる」

「地球のことわざに曰く、敵を騙すにはまず味方からってね」

その言葉で真相を悟った田村は驚いたように、大伴御行が先ほど炎を放った場所をかえりみた。焦げて黒ずんだ地面の上に人影が倒れている。

距離が離れているために生死までは判別できなかったが、すくなくともその背中に背負っている通信機器は破壊されたようだった。風に乗って煙の匂いが運ばれてくる。田村は構えかけた剣をおろした。

「――まったく気付きませんでしたよ」

「いったでしょう、私は嘘をつくのが嫌いだと。あなたの見張りは

これで偶然戦闘不能になってしまった。いまならあなたを監視する人はいません」

大伴御行は「偶然」という言葉を強調していった。

田村は剣をおさめたが、それでもなにか踏ん切りがつかないようにせわしなく喉元をなでていた。周囲にアリストス兵の姿はなく、横手にゆっくりと巨大な城門が開いてのが感じられた。

「ひとまずゆっくり話せる状況になりましたね」

「……ええ」

「まだ私を信用できませんか」

大伴御行が冗談半分といった口調で探りを入れた。

すでに臨戦態勢をといているので肩の力は抜けていたが、それでも警戒は怠っていなかった。

「いえ、そういうわけではなく」

「それでは？」

「見張りがいなくなったのは幸いなのですが僕がしくじったとなれば人質に取られている家族がひどい目にあうのではないかと思います、それで、それで」

「いまのアリストス国王の言動から推測するに、おそらくそうするでしょう」

「では――」

「私を倒してください。それなら、問題ないでしょう」

大伴御行は、にっこりと恋人に向けるような笑顔を見せた。

開ききった城門を我がもの顔でぐぐり抜けていく石上の両肩には気絶してぐったりと脱力したふたりの男が載せられている。片方は若い技術者で、もう片方は小太りの高官だ。それぞれアリストスの黒い軍服を着ていたが、動く気配はなく、石上の歩調に合わせて上下に揺れていた。

全開の城門は再起動に時間がかかるため、ラングネ軍が突入する

までの時間は充分にあるだろう。

それまでにサントのいる場所へと戻り、いまあったことをすべて話してしまわなければいけない。敵方にも勇者がいるということ、そして大伴御行が取り残されているということ。

「急がねえとな――」

境界線をまたぐとともに石上はペースを変え、一直線にラングネの本陣へ向かって駆けだした。

荒野ばかりで見晴らしのいい地形のかなり離れた場所にサントはいるはずだ。そして連絡がしつかり行きとどいていれば、今ごろは異常事態を聞きつけ軍を移動させているかもしれない。

サントのことだ、きっと適切な処置をとっているにちがいない。来るか来ないか賭けてみようぜ、といいかけて勝負の相手がいないことに今更気がついた。あるべき姿がそこにはなかった。

苦しき反撃

レンリルの行方は依然としてつかめていなかった。

どこへ行ったのかだれにも見当がつかなかったし、周囲に搜索部隊を派遣しても痕跡ひとつ見つけることは出来なかった。鳥になつて飛んでいってしまったかのようにレンリルは忽然と姿を消していた。

定期的にかぐやの元を訪れてくる兵士たちはみなそろって同じ報告をした。

すなわちレンリルは発見できていない、と。かぐやは代わり映えない報告を聞いたびに顔色を陰らせたが、それもじきに慣れてきたようで、十回もすると挨拶をするような気楽さで相槌をうっていた。

それまでふさぎこんでいたのが嘘のようにかぐやは精力的な活動を再開していた。

溜まりにたまっていた公務を次々と捌いていくと、軽い休憩をはさんでさまざま書類の整理に取りかかる。山のように積まれていた紙束にうんざりしつつも黙々と判子を押していく機械のような作業を続け、そのかたわらで指示を出していく。

いままで充電していたエネルギーをすべて発散させようとしているみたいに働くかぐやを見て、何事かと驚いた城のものがたちが興味半分のぞきに来ることもあったが、かぐやはまったく気にしなかった。

そんなことよりも重要なものがあったのだ。

レンリルや石上や大伴御行がいまも戦っているのだから、自分がこんなところでくすぶっているわけにはいかないのだ。

「――それにしても、レンリルのやつはどこへ消えたというのだ」
その日何度目かわからないレンリル失踪の報告を受けて、かぐやがひとりつぶやいた。

どうも行方のくらし方が徹底的過ぎる。手掛かりすらつかめない念の入れようだ。なにか意図があつて身を隠しているのだろうが、相変わらずレンリルの行動パターンは読むことができない。

そうでなければ敵を欺くこともできないのだろうか。

「置き手紙のひとつでもしていつてくれればすこしは探す手間が省けるというのに」

愚痴ったところで当の本人がいなければ仕方ないのはわかっていたが、大量にたまつた書類を右から左へ流していく作業をしていると、なんだか紙に向かって喋りかけたい気分になる。

サントの作戦は最後の報告以来、なにも状況が伝わってこない。誰かの戦いを後ろから見守っているくらいなら、自分が前線に出て剣をふるっている方がずっと楽だ。しかし、いまはもうその時期でないことも重々承知している。

「わたしは、わたしのやるべきことを黙々とこなしておればいいのだ、なあ」

白い紙が視界をさえぎるように積み上げられたそばで問いかけてみるが、無機質なそれらが返事をよこすことはついぞなかった。かぐやは肩をすくめると判子を押す右手の動きを速めた。

「よお、おっさん。ちっと不味いことになった」

開口一番、石上はサントに向かってこう告げた。

石上の推測通りサントは城門の異変を嗅ぎつけラングネ軍を移動させてきていた。本陣とちょうど半分ほどの距離で、石上とサントは再会した。

「どういうことだ」

「敵にも勇者がいる」

「それは確定事項か」

「ああ、詳しくはこいつらから聞きだしてくれ」石上は両肩に担いでいた捕虜を地面におろすと、ポンポンと軽く頭を叩いた。「若い

ほうは手荒なまねをしないでやれ。それから偉そうなほうは締めつけていい」

「大伴様はどうした」

「あいつは戦っている。だから今すぐ助けに行かなきゃならねえ」

石上はぶっきらぼうな口調で言い捨てると、すぐさま身をひるがえそうとした。

「待て。残りの兵士はどこだ」

「あいつが率いてるよ。おれは約束したんだ、あいつを助けに戻るって。そのために単身で逃げ帰って来たんだよ。もう時間がねえ。わかったらさっさと総攻撃の指示を出してくれ」

「もうひとつだけいいか」サントがいった。「城門はどうやって開けたのだ」

「そこにいるチョビ髭を人質に取ったら、運よく偉い奴だったみたいで道が開けたんだよ。そんだけの話だ」

「わかった」

手短に返事をよこすとサントはすぐさまジープを走らせ、城門に向かって一斉攻撃の指示を出した。

アリストス軍も石上が去ってからのわずかな間に陣形を整えようとしているようで、城門を閉めはじめるのと同じタイミングで打って出ていき、時間を稼ぐ作戦のようだった。

防御のために隙のない陣を敷こうとはしていたが、それでも圧倒的に時間が足りていなかった。

一方のラングネ軍も隊列を整える暇なく突撃の命が出たため、すぐさまお互いに乱戦状態に陥った。喧騒と流血のさなかでゆっくりと可動式の城門が口を閉じ出し、錆びついた巨体が身をよじろうとする耳障りな音が聞こえていた。

石上は幾度となくかいくぐってきた戦場のど真ん中を突き抜けると、さきほど大伴御行と別れた場所に向かおうとしたが、その先には分厚い人の壁が形成されていた。

城壁から、泉がわき出すように滲みでてくる敵兵は次々と防衛線

の後衛に補充されていくため、倒しても倒してもきりが無い。川の水を飲み干そうとするかのような無力感。石上が足をとめている間にもアリストス軍の防壁はますます幅を広げていく。

減らす数よりも、増える数が多すぎる。

頼みの綱のラングネ軍も突撃の勢いが次第に殺がれはじめ、膠着した戦線はしばらく動きそうになかった。

「くそ……」

大伴御行の救出に行かなければならないという焦燥感が砂時計のようにつのつていく。石上はがむしゃらに前へ進もうとしたが、またたく間にアリストス兵士に包囲されてしまい、その圧倒的な手数のまえに防戦一方となった。

ありとあらゆる方向から腕がのび、わずかでも身体に触れば致命傷になりかねない光の剣を刺し込んでくる。両腕にまとった防具のおかげでその部分だけは安全だが、アリストス軍は石上のつま先から頭頂部まであらゆるところを狙って来るため、そのすべてをしのぐには莫大な集中力を要した。

石上は強引な突破が不可能だと悟ると、いったん後方へ退いた。

背後から敵兵が追いかけて来ようとするのをラングネ兵が割って入り、そこでまた戦闘が勃発する。幾人もの悲鳴が聞こえてきたが石上は振り返らなかった。

「おっさん、もっと攻め込まねえといつまでたってもここで足止めくらったまんまだぞ。城門が閉じ切る前にここを押し切らなきゃ、せっかくの好機を逃すどころか大納言だって助けられねえ」

「わかってる。しかし、ここが敵にとっての最重要拠点であることも確かなのだ。そうやすやすと打ち破れるものではない」

「だったらなんか作戦を立ててくれよ。このままじゃ時間切れでおれたちの負けだ」

「勘違いはしないでくれ」とサントは厳しい口調でいった。「本来、戦いというのは奇策を用いて敵の裏をかくというものではない。どれだけ開戦前に兵力を集中させ、自分に有利なタイミングで攻撃を

仕掛けることができるかが重要なのだ。レンリルのように奇抜なプランを立てられるのは一種の天性だと思ってほしい」

「つまり、あんたにはどうしようもないってことかよ」石上が吐き捨てる。「能なしが」

「いまは仲間内で争っている場合ではない」

サントは石上の辛辣な言葉を避けるように顔をそむけると、すたすたと後方へ歩いていってしまった。盛大に舌打ちをしてから石上は再び前線へと赴いた。

途中、左右で負傷した兵士が引きずられるようにして後方に運搬されていくのを目にした。

次々と負傷者が退場していく。アリストス、ラングネ両軍ともに甚大な被害が出ているようだった。お互いの総力戦になっているためか、部隊は軍の体をなしておらず、秩序なく戦闘が行われている。「ちくしょう、やっぱりサントのおっさんじゃ大軍の長は務まんねえんだよ、レンリルじゃなきゃ——」

そのレンリルが裏切っているのかもしれない。

つまらない考えだが、いまこの場にレンリルがいればと思ってしまふ。

彼がいてくれるだけでどんな苦しい戦況でもひっくりかえせるような、根拠のない確信を抱くことができる。有能な武将につかえる兵士たちの気持ちと同じ——本能的な感情だった。

「大納言もいない、レンリルもない、かぐや姫もない、サントのおっさんも役に立たねえ」

気付けば、まるで味方がいなくなっていた。

石上はその事実を唇が切れるほどに噛みしめながら、人の海に穴を穿とうと、再度無謀な攻撃を開始したのだった。

城門が閉まりきるまではあと三十分も残されてはいないだろう。サントは苦渋の表情を浮かべながら、本国との連絡用の無線を抱え

た兵士のほうをしきりに気にしていた。

レンリルが発見されたという報告はまだきていない。

それどころか以前として行方不明だという代わり映えのしない情報ばかりが耳に入ってきて、サントの気分をはずませた。

もとはといえばレンリルの作戦が失敗したことから始まった一連の軍事行動は、いま佳境に突入していた。サントはそれを痛いほど感じとってはいたが優秀すぎる部下のようにホイホイと良案が浮かんでくるわけでもなく、ただ黙って戦況を見守ることしかできなかった。

石上の放った針のような悪態のまえにサントは顔をそむけるほかに選択肢を持っていなかったのだ。

「おい、レンリルの行方はどうなっている」

この日何度目かわからない催促に対して、無線を預かる兵士はうんざりしきった表情で首を横に振った。

「まだつかめておりません」

「はやく探せと伝えておけ」

「承知しました」

「……八方ふさがりか」

事態はあまりにも急変していた。

大伴御行と石上がトンネルをくぐって姿を消してから様々なことが起こった。アリストス軍によるトンネルの閉鎖にはじまり、大伴御行による炎のメッセージがあり、石上が城門をこじ開けて帰還した。

朝からずっと続いている寒さは、昼を過ぎてもやわらぐことはなく、むしろ強まっているようだった。

ため息の白く染まるのをながめながらサントはジープの荷台にのぼり、他人よりも一段高くなった視線から戦況を確認した。

手前側に砂を敷き詰めたように密集しているのは味方のラングネ軍で、黒いなりをした不気味な集団がアリストス軍である。両者は堅牢な城門のわずかにこちら側で激しくしのぎを削っていた。

このまま城門が閉じていけばラングネ軍は締め出され、二度と国境の突破の機会を得ることはなくなるだろう。それどころか、兵力が減ってしまったのにもなってアリストス軍の攻撃にも備えなくてはならなくなる。

かぐやの立場も悪くなる一方だ。国内の戦争論をうまくかきたててやらなくては支持の基盤が揺るぎかねない。反アリストスという意味のもとに団結している人々は、負けがかさめば心が離れていく。この一戦は単なる局地的な戦いではなく、様々な思惑を背負った戦いになると、サントは知っていた。

「報告します」と一人の兵士が紙を片手に駆け込んできた。「わが軍の被害は大きく、全体の二パーセントが戦闘不能の状況になっております。敵兵の数はおよそ三千、周囲からの援軍によってその数はさらに増すものと思われます」

「そのほかには」

「城門のスピードから計算しましたところ残された時間はおよそ二十五分ほど、撤退時間も考慮しますと十五分が限界かと」

「――少なすぎる」

サントが歯ぎしりしながら机を叩いた。

報告に来た兵士は申し訳なさそうに目を伏せると、一礼してサントのもとを去っていった。レンリルの再来を告げる連絡は、まだなかった。

終局

レンリルの居場所はラングネ国内ではなく、サントたちが激戦を繰り広げている国境付近でもなく、アリストスのさらに奥深く、首都ザリアからジープで一時間ほどかかる距離の小高い丘にいた。

ざらついた砂地の丘陵からはザリアの街並みを一望することができる。

古代人の残した超技術が色濃く残っている都市こそがザリアだった。ラングネ城と同じように巨大な城を中心として同心円状に建物が広がっている。

ガラス張りを基調とした目にも鮮やかなビル群が町の中心近くに乱立し、遠ざかるほど住宅のような小さいものへと変わっていく。太陽の光を反射して眩しいほどにきらめいている街並みはまるでひとつの芸術作品のような美しさを有しているように思えた。

規模はラングネのものよりも一回りほど小さいが、街をめぐるだけでも一週間はかかりそうなほどだった。喧騒からかけ離れた静寂のなかにたたずむ建物の森のなかに人影は見えなかったが、おそらく直轄の兵士がまだ十分に残っているはずだ。

「ここにアリストス国王がいる——間違いないな？」

レンリルが質問する先には、手足を縄で拘束されたひとりの少女が涙目になりながら地面に崩れ落ちていた。長い髪は埃にまみれ、縄でつながれた手首と足首には痛々しい擦過傷が赤くにじんでいる。

健康な状態であれば美しいであろう顔は土気色になり生氣は感じられない。黒い瞳に浮かんでいるのは恐怖と苦痛ばかりだった。

「まさかあのもうろく爺が代替わりしているとは思っていなかったが——そのおかげで好都合になったってもんだ。正々堂々こうしてアリストスに攻め込むことができるんだからな」

レンリルは少女の黒髪をぐいと根元からつかむと、痛みにゆがんだ顔を思いきり引き寄せた。軽い悲鳴が漏れる。口元をいびつにゆ

がめながらレンリルが訊いた。

「おい、あそこに勇者の家族が囚われているって話は本当なんだろうな」

さるぐつわをされているために喋ることのできない少女は懸命に頭を上下させた。そのたびに髪が引き抜かれる感触がレンリルの手に伝わった。

レンリルは乱暴に少女を突き離すと、満足げな笑みを浮かべて首都ザリアに光の剣の先端を向けた。彼の周りには数十人の部下がつき従っていたが、誰も少女の様子に疑問を抱いている風ではなかった。

平穏なザリアの街をしばらく睨むように凝視した後、レンリルは身をひるがえして、アリストスの首都に背を向けた。

「あんたに個人的な恨みがあるわけじゃないんだ。生まれた国が悪かった、そう思ってくれよ」

少女の耳にそつとささやくと、レンリルは悪魔のような高笑いをあげた。

彼の周りにいた男たちも笑い声を発し、その音は矢のように広大な大地をかけ下って行った。

「――あなたを倒すとはどういう意味でしょうか」

田村はいぶかしむように質問を投げかけた。

彼らの周りにアリストスから派遣された監視役はおらず、城壁にはりついていたり兵士たちも城門の戦場へと向かってしまったせい、一人の姿もない。

どうやら石上の作戦がうまく功を奏したらしいと、大伴御行は内心胸をなでおろしていた。

「また騙されるのは御免ですから、教えていただけると嬉しいのですが」

「そんなに難しい話ではありません。私はやられたふりをしますか

ら、あなたは一度アリストス首都へと戻ってもらいたいのです。いずれ私たちが総攻撃を仕掛けるときに内応していただきたい、それだけで十分です」

「この場で倒されたような偽装をする、ということですか」と、田村は確認するようにつぶやいた。「しかし大伴様がここに留まったままではラングネに戻ることはできませんまい。アリストス兵に発見され、投獄されるのがいいところです」

「この計略が失敗すればあなたの家族が危ない、それはもちろん承知しています」

大伴御行は足元を指さし、それから田村の腰にさしている長刀を見やった。月の兵士たちと違って柄に収まった日本刀はその凶悪な刃をうまく隠していた。

「ですから、私をこっぴどくみじんにしてください」
軽い口調で語りかける。

「バラバラに切り刻んでよろしいということでしょうか」

田村が抜刀しかけるのを大伴御行があわてて止める。命の危機を真剣に感じた額にはいやな汗が浮かんでいた。

「冗談です、冗談」

「こちらは真剣のつもりですが」

「真剣を持ちながら真剣になる、なんちゃって」

今度は本当に細切れにされかねない殺気を田村が出していたので大伴御行は急いで咳払いを一つして、空気を和やかにしようと努めた。

「私の足元を狙って盛大に攻撃を仕掛けてください。私は衝撃波で視界の遮られた間に素早く身を隠しますから、あなたはザリアへと悠々帰還していただきたい。ここにいる兵士たちは見逃してもらいたいものです」

「僕の狙いは大伴様ですから彼らの命まではとらなくとも罪に問われはしないでしょう——そのあとは？」

「少将殿しいかもしれませんが、兵たちには今から敵軍の背後を突

いてもらいます。あなたと私は目にも鮮やかな激戦を演じたあと、私の敗北で幕を閉じるというとりとめのない寸劇を演じましょう」

「彼らは大丈夫でしょうか」

「その点は心配ありません」大伴御行は自信を持って答えた。「いまや城壁は手薄の状態です。そこへ攻撃を仕掛け、城門をふたたび開けさせることができれば敵軍は混乱しわが軍は活気づくことでしょう。貨幣を持って大軍を破るのは私たちの得意技でしてね」

大伴御行が片目をつぶってみせる。なにか親しげな合図を示すものだと月へ来てから知ったので、一度使ってみたいと思っていたのである。田村はあまり気にとめた様子もなく、軽く笑いながら、

「よく存じておりますよ」

といった。

つられたように口元をゆがめながら大伴御行は後ろにいる兵士たちへ細かい指示を出しはじめた。田村の見張りはいなくなったとはいえ、どこでだれが見ているかわからない。あくまで前を向いて対峙しているふりをしながら、後ろを向かず精鋭の兵士たちに命令を下す。

アリストス中の舞台から選りすぐられた選抜隊の五十名は、さまざま命令を理解すると、全員で敬礼をしてから駆け足で城門のほうへ走り去っていった。

いままで逃げてばかりの行軍だったがようやく攻勢に転じれるとあって、士気は高いようだ。大伴御行は感じた。

「都にいたころからあなたのことは聞き及んでおりましたが――噂通りのしたたかさですね」

「はて？　どんな噂だったやら」と大伴御行はとぼけた。「私はまっとうに生きてきたつもりですが」

「のらりくらりと貴族の世を風靡し、大納言にまで上りつめたお方がどうしてひとりの女性にそこまで惹きつけられたのか、不思議に思っております。あなた様ならいくらでも高貴なお相手がいらっしやっただでしょうに」

「それだけ我らが姫は魅力的だということですよ——和歌がすこしばかり苦手なのを除けば、平安のどんな女よりも素晴らしい人ですからね」

「なにがそんなにあなた様をとらえて離さないのですか、僕にはよく理解ができません。地球を捨て、わざわざ月にまで来るだけの価値が？」

「聞くは見るに及ばずといえます。田村、あなたもこの戦争が終わったらかぐや様にお会いするといい。きっとあの人の美しさに胸をうたれることでしょうから」

「でも、あなたは盲目になった」と田村は申し訳なさそうにいった。「もうその姿を見ることはかなわないのでは」

「たしかに私はかぐや様の優雅で気品あふれる容姿に心酔し、この瞳を視力の代償として得ることに迷いなく決断ができるほどに惚れこみました。その美しさたるや、仲秋の名月にも劣らぬほどであった。しかし今はかぐや様のお心こそが本当に綺麗なのだ、そう確信しています。かぐや様は姫と呼ぶにふさわしい、澄んだ心の持ち主です。目など見えなくとも、その心遣いに触れることさえできれば、私は満足なのです」

大伴御行が静かに、けれども力強い口調で語った。冷え込んだ空気に染められて冷たくなっていた手足に血がもどってくるような熱い感覚があった。頬も火照っている。すこし熱くなりすぎたか、と大伴御行は思った。

田村はまっすぐに炎の勇者を見つめ返していたが、やがてひとときわ表情を引き締めると、腰に収めていた日本刀をゆっくり抜いた。微風が地表をないでいった。

「では、参ります」

「——ええ」

お互いに慣れ親しんだ構えをとる。

わかりきった勝負だとはわかっていたが、それでも真剣勝負に似た緊迫感が張りつめているのがよく感じられた。田村が目にもとま

らぬ速さで抜刀するのと、大伴御行が体勢を低くするのはほぼ同時だった。

巨大な爆発音とともに瀑布が逆流するかのような砂塵が巻き上げられる。

冷たい風が塵埃を徐々にろ過していく間、田村はじつと円柱状に立ちのぼった砂を見つめていた。しばしの時間が経ち、大きな穴がぽっかりと開いているのが視界に入るようになったとき、大伴御行の姿はどこにもなかった。

しかし、彼の痕跡が残っているのを田村はしっかりと目にした。はるか上空に、大伴御行のはなった炎が煌々と光を放ち、まるで太陽のように輝いている。田村は背中を向けると、アリストスの首都ザリアの方角に足を進めた。城門の付近では、あらたな戦いが起こっているようだった。

「城門が開いている……」

真っ先に異変を感じとったのは最前線で拳を振るっている石上だった。龍がすべてを飲み込むような威圧感で迫ってきていた二つの壁が、後退をはじめたのである。その動きはゆっくりだったが、たしかに逆の方向へ口を開いていた。

「大納言が上手くやったのか……」

そうつぶやくそばから、アリストス軍の後方に特大の火球が浮かんでいるのが見えた。間違いなく大伴御行の炎だ、と確信する。それがどんな意味を持っているのか石上にはすぐ判別がついた。

「無事ってことだろ、やってくれるぜ」

助けに行くまでもなく自力で苦難を乗り越えてしまうあたり、やはりただ者ではないと感じる。

運や家柄だけでなく実力をともなって大納言という地位にいた大伴御行は、目下のところ最大のライバルだ。この言葉はかぐやから習ったものだった。かぐやを取り合う敵同士なのだと、とき

どき忘れてしまいそうになる。

だが、いまは恋敵といっている場合ではない。

戦場にいる兵士たちもようやく異変に気付きはじめたのか、あちこちからざわめきだった声が聞こえてくる。石上は近くにいた敵兵を蹴散らして仁王立ちになると、あらん限りの大声をあげた。

「よく聞きやがれ！　アリストスの城門はラングネの勇士が占拠した、これで門が閉じることはない！　ラングネの兵士たちよ、今こそ果敢に攻めたてろ！　敵をはるか後ろまで追いもどしてやれ！」

「おおう！」

雄たけびのような悲鳴のような、意思をもった声がこだまのように帰ってくる。目に見えて戦線が活気づくのが感じられた。明確な指針があるわけではなかったが戦場の空気が変わったのがわかったのだ。

雰囲気、怒声、剣の向き、どれが要因となっているのかはわからない。

しかし、石上はここで仕掛けなければ押しきれないと本能的に感じ取っていた。両手の装備をぐっと握りしめる。

「大納言、感謝するぜ」

ひと言礼を述べてから、勢いづいた味方の軍勢とともに殴りこむ。さきほどまで鉄壁を誇っていた敵の守備は、あっけないほど簡単に崩れた。逃げ出そうとして体勢を崩し、足元に転がっている敵を飛び越えながら大声を上げて追いかける。

まるで鷹狩りみたいだ、と大伴御行は思った。

「やれ！　やれ！　どこまでも突っ走れ！」

いまや旗色は完全にラングネになびいていた。戦闘は、さほど時間をおかずに、終局を迎えた。

終局（後書き）

あけましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いします。

レンリルの帰還

「レンリルが見つかった、いまさらか」

サントが嘆きながら報告を受けたのは、さきほどまでアリストス軍がひしめき合っていた城門のコントロールームで、いまやそこはラングネの兵士たちによって完全に占領されていた。

城門付近を突破したラングネ軍は決壊した堤防を乗り越えていく鉄砲水のように敵軍を駆逐し、アリストスは甚大な被害を受けて撤退した。

地平線の彼方まで続くかと思われる城壁も、ラングネ軍が一気に兵力を投入したため持ちこたえることができず、ほどなくもぬけの殻となった。サントは楽々とコントロールームに入ると、そこで戦後処理を行っていた。

「どこへ行っていたのだ」

「それが、極秘事項らしく、隊長に直接連絡がしたいと……」

「無線をよこせ」

サントが耳をあてると、発信器から聞きなれた男の声が鼓膜を揺らした。

「どうも、ご無沙汰してます副隊長」

「いままでどこをほつつき歩いていたのだ、この馬鹿ものが。おまえの作戦がうまくいかなかったせいでこちらもかなりの損害を受けたのだぞ」

「敵軍にも勇者がいたって話ですからね、そりゃ計算がいですよ。オレだって神さまじゃないんだ、副隊長が指揮をとってくれたっていいじゃないですか——なんでも、また勇者様たちに助けられたとか。すこしは自分でもはたかなきやだめですおY、いつまでも副隊長の地位に甘んじているようじゃ」

「口を慎め、レンリル。おまえこそ職務を投げうってどこかで油を売っていたのだろう、それこそ大問題というものだ」

「人聞きが悪いなあ。オレほど仕事熱心な男はラングネ中を探しても見つかりませんよ」

「よくもまあ、そんな冗談がいえるものだ」

「ホントですって」レンリルの口調がいきなり真面目なものに変わった。「アリストス攻略の糸口を見つけました——といっても、今回の作戦の予備として考えていたものなんですけどね」

「なんだ、それは」

サントが表情を硬くして尋ねる。

あたりに聞き耳を立てている人間がいなかったか確かめた様な間があつて、レンリルは口を開いた。

「首都ザリアの警備は手薄です。あそこを急襲すれば首都陥落はほぼ間違いない、戦力の大半を国境付近に投入しているみたいだった。それに忌々しいレーザー砲も見あたらなかった」

「ザリアへ行ったのか、どうやって」

サントが驚愕の声を上げる。レンリルの落着きはらった声が返ってきた。

「ネタばらしは後にしましょう。とにかく、今度は二方向から攻め立てる必要があります。首都にこもられると厄介だ。あそここの防御は副隊長のいる国境沿いに負けず劣らず堅い。そこに大軍とレーザー砲が加わった日には手がつけられなくなる」

「敵軍を分断するということか」

「幸いなことに今現在がちょうど都合のいい状況だ。敵は二手に分かれている。レーザー砲はおそらくそっちに向かったことでしよう。城壁を乗り越えて発射することができなかったから使わなかっただけで、野戦になればすぐさま投入してくるはずですよ。そいつを、どうにかしなくちゃいけない」

「また仕事が増えるな」とサントはため息をつきながらいった。「あのモンスターにはいつも手こずらされる」

「ザリアの方はオレに任してください。あつという間に陥落させてみせますよ」

早口でまくしたてる、自信にみなぎった口調。サントはその声の裏に、レンリルにしては珍しくむき出しの感情が隠れているのを感じとった。いますぐにでも剣を片手に襲いかかってきそうな殺気さえ醸し出している。

部屋の大部分を占めるいくつものモニターに目をやりながら、サントは無線に向かって話しかけた。

「焦り過ぎるなよ。急いては事をし損じる」

「オレを信用して下さいってば。副隊長の期待を裏切るようなことはしませんから――しかし、ちょっと不吉な噂を耳にしたんですけどね」

「大伴様のことか」

「行方不明なんですって？」

「レンリルといい、勇者様といい、書きおきもなく消えてしまうから困りものだ。石上様はきつと大丈夫だと言っていたがそれもどこまであてになるやら……もしも敵方の勇者に敗北したのなら、わが軍にとって大きな損害になる。それだけでない。ラングネ国の存亡に関わる危機だ」

「だったら大伴様失踪の事実を隠ぺいしておきましょう」こともなげにレンリルがいった。「公表するのはアリストスを滅ぼしてからでいい。名誉の戦死ならば士気が下がることもない。同じ人が死ぬのにも、タイミングってもんがあります」

「冷たいもの言いだな」

「勇者様はラングネを救うためにいるんです。そのために利用されるならば、本望ってもんでしょう」

「ルア様はそう思わないだろうな」

「姫様はもう戦場にはいないんです。ここはオレたちの仕事場、裁量はこっちで決められます」

「レンリル、おまえすこし性格が変わったのではないか」

「オレはオレですよ」

レンリルは静かに笑った。無線の向こうでは騒がしく人の声が聞

こえていた。どうやら役所仕事ではなく、もっと物騒な準備をしているらしかった。

「石上様もふくめて大伴様の搜索隊を出している。大伴様に従っていた兵士たちによると、アリストスの背後を奇襲するように指示された後、轟音がしたらしい。その場を見聞してみたが、巨大な穴と地割れが見つかった。――敵の勇者は、ひよっとすると」

「こっちよりも強いってわけですか。勝負なんて地の利、時の利で簡単に変わるもんですよ。あまり気にしなさんな」

レンリルが電話を切りそうな口調だったので、サントはあわててラングネの軍師を呼びとめた。

「ザリアへはどうやって行ったのだ」

「副隊長はご存知ないかもしれませんが、ラングネには簡単に穴を掘っていける機械があるんですよ。例の砂漠で発見された古代人の落し物なんですけどね、こいつを使うとザリアでもなんでも車でいけるようなトンネルを掘削できる」

「あの砂漠は閉鎖されているのではなかったのか」

アリストス軍がモンスターと呼ばれているレーザー砲を発掘したのもその砂漠だった。古代人の技術が圧縮された機械の墓場からは今でも大量の兵器や道具が掘り出される。

ラングネ、アリストス両軍が装備している光の剣の大半はここに埋まっていたものだし、そのほかにも使い方はわからないが便利そうなものが数多く掘り起こされ、保管されている。

レーザー砲の登場によってその危険性が見直された広大な砂漠は両国の嚴重な警備下におかれ、現在は封鎖されている。レンリルが使った掘削機もそのうちのひとつだった。

「昔に見つかって、使い方が分からずに放置されていたものをちょっといじってみたら動いたもんで、試しに穴を掘らせてみたら思いのほかうまくいったんですよ。オレが今回の作戦を思いついたのもこいつのことを思い出したからですし」

「――こちらを函に使ったというわけか、おまえの得意技だな」

「できれば気付いてほしくなかったんですけどね。知らない方が幸せなこともたくさんあるんですよ」

「知ったことか。陽動作戦をするならそうと伝えてくれればよかったものを」

「どこにアリストスのスパイがいるかわかりませんからね」レンリルは声を低くした。「副隊長も気をつけて」

「ここへ来てまだ身内を疑うのか」

「さあ？ あくまでも可能性の話ですから」

「作戦の期日はどうする」

「それは――」

サントとレンリルは綿密に作戦日程を話し合った。数時間にも及ぶ通話の間にも大伴御行の搜索は続けられていたが新たに見つかったのは無線機を背負った黒焦げの死体だけで、どこにも勇者の姿はなかった。

強く冷え込んだその日の地球は、黒い空のなかによく映えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4141v/>

かぐや姫の月戦争

2012年1月2日16時51分発行